
Magic Heart

JUN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c H e a r t

【Nコード】

N 9 4 0 2 E

【作者名】

J U N

【あらすじ】

学校の帰り道、妹の我が儘で訪れた本屋。そこで少年は黒い本を手にとった。すると眩い光が辺りを包み込み、目の前の光景は本棚から木々が生い茂る森に変わっていた。

第一部 第二話 召喚の日（前書き）

さ、始めました。以前書いていたハピネスマジックの改良版です。ハピマよりは読みやすくなってると思うので、楽しんでいただけると光栄です。

第一部 第一話 召喚の日

暗い、暗い暗黒の中。灯りなど一切存在せず、むしろ光を拒絶するかのような漆黒の暗闇。

その中でも一際異様な雰囲気醸し出す一人の人物が静かに佇んでいる。

頭の先から爪先に至るまで、全てを黒いローブで包み、手にはおとぎ話に出てくる魔法使いのような細長い杖が握られていた。

「くくくつ……いよいよ、我が願いが叶う……」

低くおぞましいほど笑い声をあげながら、杖でコツコツと床を突いた。

すると直径十メートルほどの黒く輝く魔方陣が現れた。
フードの隙間からニヤリと 不気味な笑みがこぼれた。

閑散としている大通り。俗に言う裏通りというやつだ。
表通りにも華やかなデパートや本屋、コンビニも数多くある。
だが、どうにも人通りが多く、目当ての物が品切だったりすることも多い。

そんな時利用するのが裏通りというわけだ。

そういった理由で、裏通りに来た少年一人と少女二人。三人とも学校帰りなのか制服を着込んでいる。

「しかし、相変わらず廃れてんなあ」

「私はこれはこれで味があつていいと思うなあ。古風で」

「古風……か……？」

目の前の本屋は屋根もボロボロ、扉はなんとも滑りが悪そうなき戸、看板には文字が錆び付いているが真野書房と書かれている。

「いいか？ 愛華^{あいが}。古風というのはだな」

「そんなのどうでもいいから早く行こうよ！」

枯葉色の髪の少年が愛華と呼ばれた黒髪の少女に古風とはなんぞや、という事を教えようとすると、少年と同じ枯葉色の髪の少女がしびれを切らしたように二人を急かした。

よく動く目と表情、そして動く度にピョコピョコ揺れる右に結ったサイドポニーが少女の活発さを表している。

「まあまあそう焦るな、優音^{ゆうおん}。どうせマンガは逃げやしない」

「逃げるよ！ 売り切れちゃうから急いでるんでしょーが！」

そう言つと、優音と呼ばれた少女は力任せに引き戸を開け中に入つていった。

「やれやれ。我が妹ながら気性が荒い」

「あの元気は私も見習いたいけどなあ」

「止めてくれ。あんなの一人で十分だ」

「また優君はそういう事言つて」

しょうがないなあ、と愛華は苦笑する。
そんな話をしながら二人は中へ入っていった。
本屋の中は狭いくせに本棚が敷き詰められるように並んでいた。
人一人がやつと通れるくらいの幅だ。入り口の横に会計場所がある。

「んじゃ愛華。俺その辺見てくつから終わったら呼んでくれ」
「うん、わかった」

愛華と別れ、そのまま適当にうろつく事にした。
ここの本屋は狭いわりに様々な本が置いてあった。
マンガ、雑誌、小説、その中には大きな声で言えないような、まあぶつちやけエロ本なんかも置いてあった。
ちよつと手に取りたい衝動が走るが、異性の幼なじみと妹が近くにいるので無理矢理反対方向に首を向けた。

「あれ？」
「優君？ どうしたの？」
「なんか面白い本でもあった？」

目当ての本があったのか、ホクホク顔の優音と愛華がいつのまにか隣にいた。

まずい、さっきの行動見られたかもしれん。
だが、二人は気付いてなかったのか特に何も言っていない。

「いや、これ何の本かなーっと思って」

マンガばかりある本棚に一冊だけ表紙は真っ黒で題名も書いてない本があった。

周りが華やかな表紙ばかりなのでどうにも浮いて見える。

見たところ包装もされていない。試しに中を読もうと手に取ってみると

「な、なんだっ!？」

「きゃっ!？」

「わっ!？」

突然本がまぶしくて目も開けられないほどの輝かしい光を発し始めた。最後に見たのはそんな光景だった。

数瞬後、その場には優音が買おうと持っていたマンガだけが取り残されていた。

第二話 異世界の生活の始まり

霧谷優真。きりたにゆうま 十八歳。高校三年生。

大半の事は流されやすく、まあいいか、で済ませてしまう。

だが、これだと思った事は最期までやり抜き通さなければ気が済まない頑固な面もある。

幼なじみの鳴海愛華なるみあいかが言うには

「優君は優しいからちよつとくらいそんなところがあつた方がいいよ」との事。

妹の霧谷優音いわく

「もつとしつかりして欲しい」らしい。

とまあ、こんな性格の優真だからこそ

「ううどう?」

いきなり本屋から全く知らない森の中にいてもそれほど取り乱さずに済んだ。

待て。ちよつと待て。俺確か今まで本屋にいたよな? OK。整理しよう。まず本屋にあつた真つ黒い本を開けたらむっちゃまぶしい光が出てきて……ああダメだ。そこまでしか覚えてねえ。

「さて、どうしたもんかねえ」

ポツリとそう呟いても誰も答えてくれる人は 誰も?

「愛華? 優音?」

さっきまで隣にいたはずの幼なじみと妹の姿がない。
まずい、ヤバい。じわじわと優真の心が不安と焦りに侵食されて

いく。

こんなアマゾンのジャングルみたいなところにいてトラとかヘビとかに出くわしたりしたら

「グルル……」

「……………」

あれ？　なんだか今思い浮かべた二匹と現在進行形で見つめ合っちゃってるんですけど……。

いや、二匹というか一匹というか……。トラというかライオンなんだけど、ヘビというか……。

まあアレだ。ゲームとかに出てくるキマイラとかいうやつだ。

「とか言ってる場合じゃねえ！！！」

「グルアアアアアアアア！！！」

「のわあああああああ！！！！？」

優真は叫び声をあげながら全速力で逃げる逃げる逃げる。

全神経を目と足に集中。どこまで行けばいいのか、安全地帯はあるのか、そんな事は今は考えず逃げ続ける。

木を避け、枝をかわし、木の根を飛び越える。その間も後ろから獣の駆ける音が聞こえてくる。

やがて、少しばかり開けた場所に出た。

「ハア、ハア、ハア……………」

ちよつとだけちらり。

「グオオオオオオオ！！！！！」

「でえええええええ！！！！？」

キマイラはまさに今飛びかかって来ていた。

とっさにしゃがんだお陰でなんとかキマイラの突進を避けられた。

あ、あぶねー。今見なかったら食い干切られてたぞ、俺…………。

と言つてもこのままではそれも時間の問題である。

優真は自分が取れる最善の方法を模索し始める。

即座に考えられたのは三つ。

（一つ目、死んだ振り。無理。超今さらじゃん。二つ目、また逃げる。却下。もう体力限界。三つ目、無謀にも戦う）

「…………俺の人生短かったなあ…………」

その言葉と同時に優真は走り出す。キマイラの真正面へと。

ああ、こんな事なら冷蔵庫に入ってるプリン、優音の分まで食い占めときゃよかった…………。

何気にしよばい未練を残しながら優真はキマイラに中断蹴りを放てなかった。

「がああああああっ……！！！！」

優真が蹴りを繰り出す前にキマイラはその巨体でタックルをかましてきた。

そのまま五メートルほど吹き飛ばされる優真。

あ、ヤバい。走馬灯が。

せめて愛華と優音は安全な場所にいると願いたい。

朦朧とする意識の中で優真が最後に見た光景は、赤髪の少年と、ゆっくり倒れるキマイラの姿だった。

「ん……………」

赤く染まった夕日の光が窓から差し込む中、優真はゆっくりと目を覚ました。

まず最初に見えたのは白い天井、白い壁。どうやらどこかの家の一室のようだ。

「……………いつつ……。俺……………生きてる……………」
なんだかいまだに生が実感できない。あまりに非現実だったからだろうか。

優真は腹の痛みを我慢して起き上がり、窓の近くまで歩み寄った。
窓から見える景色は鮮やかな夕日と明らかに日本風ではない街。
いわゆる中世ヨーロッパ風。そして何より巨大な　城。

「城？　シロ？　SHIRO？」

あ、パニックしてきた。ここは日本じゃないーのですかー？
と、優真が目回して混乱していると

「……………！……………？」

「んあ？」

ドアを開けて青い髪の美少女が顔を出した。歳は優音と同じくらいだろうか。だが、その言葉は理解できない。

言語の違いに、優真はここが日本じゃないという可能性がより強くなったと感じた。

「な、なんてこったい……」

「……………」

頭を抱えてうずくまる優真の顔を心配そうに覗き込んでくる青髪美少女。

言葉は分からなくても人の親切が身に染みる……。

「ま、命があっただけよかったか」

「……………！」

速攻で立ち直った優真。順応性が高いのは長所なのか短所なのか。

「しかし、言葉が通じないのは厄介だよなあ」

「？」

優真の呟きに青髪美少女も困ったように首をかしげる。
そうしていると、また入り口のドアが開かれた。

「……………。……………」

間延びした声をあげながら赤髪の少年が部屋に入ってきた。歳は優真と同じくらい。

あれ？ こいつ確かジャングルで会った気が……。

優真が思い出している間に赤髪の少年と青髪の少女が何事か話し合っている。

二、三話すと、赤髪の少年はずんずんと優真に歩み寄ってきた。

「な、なんだおい。何する気だコラ」
「……………」

ヘラヘラ顔で赤髪の少年はむんずと優真の頭を鷲掴みにした。
そして手が何故か青く光りだした。

「うぎゃー！！？ キサマ！！ 何やつとるんじゃー！！！」

なんとかして手を払い除けようとするが万力の如き力で離せない。
むしろ痛い。

「いででででで！！！！ 離さんかアホー！！！！！」

「はい、これで終わり。全くうるさい奴だ」

「お前が馬鹿力なんだろうがつ！！！！ …… ってあれ？」

何故か普通に会話できている。なんで？ どうして？ WHY？
再び優真の中で疑問の嵐が巻き起こる。そんな様子を見ながら赤
髪の少年は得意気にしていた。

「意志疎通の魔法を掛けた。とりあえずこれで普通にしゃべれるぞ」
「へー、魔法。…… って信じられるかいっ！！ 何が魔法だ！ 頭
沸いてんじゃねーよ！！！」

さすがの優真も順応できず毒を撒き散らす。言われた本人はいぶ
かしげな顔をしていた。

「なあ、れっちゃん。この世の中魔法信じない奴なんていると思う
？」

「んーよっぱどの山奥で生活してれば魔法なんて使わないかなー…
…」

「お前生まれは？」

何度も魔法なんて単語が出ているくせに、目の前の二人はそれが当たり前といった表情だ。

え？ なに？ 俺がおかしいのか？ とか思いながら優真は問いに答えた。

「日本だ。ちなみにむっちゃ都会」

どうせ言っても分からないだろう、と優真は地名までは言わなかった。

だが二人はそれすらも分からないといった感じで首をかしげている。

なんで分かんなんだよ。ジャパーンとか言った方がいいのか？

「あー、一つ聞くが、この世界の名前は？」

「世界？ 地球って事か？」

「……」

赤髪の少年は無駄に驚いたような顔をしている。その後ろで青髪の少女はポカンと口を開けている。

「れっちゃん。どうやら俺は異世界の人を連れてきてしまったようだ」

「ええっ！？ ちょっとジユン君どうするの！？」

異世界？ いやもはや地球ですらない？ あははーなんてこったい……。

「ああ！！ だ、大丈夫ですか？」

「ふふふ、夢だ。これは夢なんだ。目覚めよ俺」
「信じられないのは分かるけどな。これは現実だ」

とん、と赤髪の少年が優真の額に指を当てた。
すると

ジジジジジジジ！！！！！

「＃\$％&mp;；¥@*＃*@&mp;；¥！！！！？」

優真の身体中を電気のような衝撃が駆け巡った。実際には数秒なのだが、優真にとっては数時間にも思える地獄のような時間だった。

「ハハハ、どーだー。これで夢ではないと分かったかー」
「ち、ちよつとジュン君！ やり過ぎやり過ぎー！！」
「む」

その言葉で赤髪の少年は指を離れた。ようやく電撃が止み、どすつと優真は倒れた。

「あが……ががが……」
「だらしな……だらしなぞおー！ それでは世界を目指せない
！！ 俺は……俺は悲しいー！！」

なんだこの変なノリのバカは……と優真は薄れゆく意識の中で思った。

ぱちり、と優真はスツキリ目が覚めた。
起き上がるとさつきと同じ見慣れない部屋。

「いや、もうさつきじゃねえか」

窓の外を見ると、朝日がすでに昇っている。どうやら次の日になってしまったようだ。
しかしえらく体の調子がいい。タックルをもらった腹も今ではもう痛くない。

それもあの電気ショックのお陰か。電気マッサージみたいな効果でもあったのだろうか。
だが優真にとってはありがた迷惑だった。

「あの赤頭。次会ったら殴ってやる……」

優真が密かに赤髪の少年に復讐を誓っていると

「あ、起きましたか？」

昨日の青髪美少女が顔を出した。持ってきたかこの中にはパンやらミルクやら。どうやら朝食のようだ。

「昨日はすみませんでした。ジユン君のせいでろくに挨拶もできなくて……」

「いやいや、俺も突然の事で驚いてたし」

「朝ごはん、ここに置いときますから食べてください」

ありがとう、と礼を言い優真は朝食を眺めてみる。パンやミルク、目玉焼きなんかもあり、ごく普通の朝食だった。

異世界でも食べ物は特に変わらないらしい。実に安心である。

だが、今はそんな事よりも聞きたい事がある。

「あ、そういえば自己紹介がまだでしたね。私はレン・グラッドと言います」

「俺は霧谷優真。よろしく。なあレン、俺がいたジャングルにあともう二人女の子がいなかったか？」

「いえ、ユウマさんだけだったと聞いてます」

そうか、と優真は安心半分不安半分といった複雑な心境だった。もしかしたらこっちに来たのは俺だけかもしれない。だが、まだまだ分からない事が多すぎる。色々聞く必要があるようだ。

「レンは、えーっと魔法は詳しいのか？」

自分で言ってる俺何言ってるだか思っていたが、レンにとってはバカらしいものではなかったらしい。

「一応人並には使えますけど、それだったらジユン君の方が詳しいですよ」

「……あの赤頭か……」

赤頭と聞いてレンは困ったように苦笑した。言葉の中に悪いニユアンスしか入ってなかったからだろうか。

だがあんな事されて嫌いになるなという方が無理がある。

「ホントにごめんなさい……。ジュン君も悪気はなかったんです……。根はすごく優しいんですよ。ちよつと悪ふざけが過ぎるところがありますけど」

「いや、レンが謝る事じゃないよ。とりあえず落ち着いたし、怒ってない」

ジャングルで助けてくれたようだし、案外悪い奴じゃなさそうだ。バカっぽいが。

第一印象は最悪だが、一方的に嫌うのは止すでしょう。

「で、その赤頭はどうしたんだ？」

「あ、赤頭じゃなくて……」

「ジュード・ローゼンクロイツだ」

「うおわっ！！？」

当の本人がベッドの後ろから突然現れた。だが驚いたのは優真のみで、レンは呆れているだけで特に驚いていない。

「ジュン君……気配消して突然出てくるのやめてって言ってるですよ」

「ふふん、趣味なので無理です」

ジュードは不敵な笑みを浮かべている。と、その笑みのまま優真をじろじろ眺め始めた。

「な、なんだ？」

「ふむふむ、電磁整体は上手くいったっぽいな」

まさかコイツ、俺の怪我治すために……？

優真の中で最悪だったジュードの株が急上昇し始めた。

「血行促進、肩こり解消などなど、多分できる。ま、いいデータが取れた。ありがとう、実験体第一号」

『実験体だったのかよ！！！！』

優真とレンのツツコミが部屋中にこだました。

「で、ユウマだったか？　これからどうするんだ？」

「通り優真にどつかれたジュードは気を取り直してこれからの事を聞いてきた。」

「俺がこっちに来る前、幼なじみと妹も一緒だったんだ。もしかしたら二人も来てるかもしれない。だから俺は探しに行きたい」
「なるほどな。で、行く宛はあるのか？」

「そう言われてもあるわけがない。そもそも来てないかもしれない。」

というより、この世界を全く知らないのに探しに行くというのは無理がある。

優真が黙っていると、ジュードは指をあごに添えてふむ、と呟いた。

「まあ、どちらにしろ今は世界を練り歩くのは無理だぞ」

「……何でだ？」

「今、この国は戦争状態なんです。下手に国から出たりすると気付いたら戦場って事にもなりかねません」

優真の問いにはレンが答えた。何か思うところがあるのかその顔に陰りが差している。

レンが言うには今優真がいる国　リーザリスは戦時中で、敵国はリングサーク神王国というらしい。

事の発端はリーザリス内では位の高い貴族が、リングサークと軍事及び関税同盟を結ぶ為の調印式の最中、何者かに暗殺されたからだそうだ。

犯人は特定出来なかったそうだが、その時ある噂が立った。

これはリングサークがリーザリスを攻め落とす為の策略ではないかと。

実際、暗殺されたリーザリスの貴族はこれまで軍事面での多大な功績を残していて、いざ戦争になれば指揮系統の質はこれまでとは比べ物にならないほど落ちるらしい。

この事件が元でリーザリスは疑惑の目をリングサークに向けるようになり、調印式は持ち越しになったという。

「でも、これだけではなくてですね。引き金になる事件が起こったんです」

同時期にリーザリス内を観光に来ていたリングサークの第三王子

が謎の失踪を遂げてしまったらしい。

王子はリーザリスの手によって搜索されたが未だに手がかりは掴めないという。

だが、リングサークはそれを真実だとは捉えなかった。

「なるほど。人質を取ったと考えたわけか」

「そうなんです。それで戦争が起こっちゃって。今はまだ大規模な戦闘は行われていないようですけど」

「全く迷惑な話だ。お陰で町はピリピリしてて気楽に出歩けねえし」

ジュードはやれやれと両手を上げた。だが特に不都合は感じていない様子だ。だがそんな事よりも、優真はこれからどうしようと考えていた。

旅立つにしても残るにしてもまずは先立つものは必要だろうし、魔法なんてファンタジーなものが絡んできたら危険もたくさんあるかもしれない。

唸る優真。だがそれを見透かしたようにジュードはニヤリと笑みを浮かべた。

「なあユウマ。魔法学んでみる気はないか？ 三食寝床付で」

この非常識男が優真にとって、それほどいい提案を無条件でしてくるはずがないと思った。

会って間もないが、直感的に感じた。

「……何が望みだ？」

「話が早いねえ。条件はこれから毎日料理をする事だ」

優真の目が丸くなった。意外と簡単な事だ。優真にとってはそれは毎日している事だからだ。

優真の両親は幼い頃に事故で亡くなった。それからは祖父が身元保証人となったが、祖父もガンで亡くなってしまった。

それからは兄妹二人三脚でずっと生活してきた。

だが残念ながら妹は全くと云っていいほど家事が出来ない。結局家事全般は優真が一人で請け負っている。

「それくらいなら容易い事だが、二人の両親はどうしたんだ？」

優真がそう聞くと、ジュードはため息をつき、レンは顔を伏せた。
まずい、なんか余計な事だったか……？

「れっちゃんのパパさんママさんは医者をやっている。今は戦争中だからずっと負傷者の看護していている。俺んところは……いるにはいるが、何してんだかずっと帰ってきてない。
れっちゃんちは隣にあるんだが、一人じゃ寂しいってんで俺んちに転がり込んできた」

「ち、ちよつとそんな事言っていないでしょ！ ジュン君がうちに来て無理矢理連れてきたんでしょー！！」

「あれー？ 案外嬉しそうにしてなかったか？」

「む、むう~~~~~！！！」

そこは否定しないんだ……、と半ば呆れる優真。

ジュードはレンをからかうのが至極の喜び、といった表情をしている。

「ずいぶんと仲いいんだな、二人とも」

「そ、そんな事ないですよ！」

「ふふん、何を隠そう……」

ジュードはバツと後ろを振り向き、左手を腰に当て、右の人差し指をズビシツと上に突き出した。

「俺は！！ れっちゃんの！！ 全てを知り尽くしている！！！！」
「な、何て事言ってるの！？ ユウマさん、違いますからね！ いつものジユン君の悪ふざけですからね！」

所々に力を入れながら宣言するジュードの手を下ろそうと必死になりながらも優真に弁解するレン。

優真はこのノリに乗るか、レンを助けるか迷ったが

「そうか、レンはもうジュード色に染まってしまったのか……」

結局乗る事にした。

「うわーん！！ ユウマさんまでー！！！！」

レンは全てを諦めたように部屋から出ていってしまった。
後に残ったのはニヤニヤ顔のジュードと、やりすぎたか、と頭をぼりぼりかいている優真。

「なかなかノリがいいなユウマ。気に入ったぜ」
「いやー、ちょっとかわいそうだったかなと思ってるんだが……」
「大丈夫だ。いつもの事だから」

という事は毎度毎度レンをいじめてるわけだなお前は、と優真は呆れたようにため息をついた。

こうして、魔法を習得するまでの間、優真は二人の魔法使いと共同生活する事になったのだった。

第三話 魔導具

優真が異世界で初めにする事、それは料理。

幸いにも材料は元の世界と変わらず、普段通りの料理を作ればいだけだった。

コンロは魔法がある世界だけに特殊だった。なんでもジュードが言うには、火の魔法使いが魔法を使う為の燃料である『魔力』を込める箱があり、その箱の中央に円形の鉄板が埋め込まれている。

それ自体一種の魔法みたいなもので、鉄板を熱くするにはその魔法を発動させる言葉がある。

ジュードいわく、言葉に魔力を乗せ、『点け』と唱えるらしい。

もはやその時点で優真は出来ないので発動させるのはジュードがレンの役目だ。

まあそんなこんなで優真が初めて作った料理はオムライスだった。

ジュードは

「激ウマ!!」と叫び、レンは

「女として悔しいです……」と落ち込んでいた。

ジュードはともかくレンが料理出来ないのは意外、と優真が言ったらレンはさらに落ち込み、ジュードが

「一回食ってみたらわかる」とだけ言ってきた。とてもお呼ばれされたくないな、と優真は感じた。

昼食を済ませた三人はさっそく魔法の修行を始める事にした。

「さて、んじゃあ何からやっかな」

「まず魔法とは何か、という事から説明していけばいいんじゃないかな？」

確かに原理を知っていればイメージしやすいかもしれない。
優真はしっかり話を聞こうと椅子に深く座り直した。

遙か昔、この世界がまだ存在しなかった頃、二柱の神がいた。
創成神ヴァンと創造神アースである。
創世神ヴァンは世界を、創造神アースは人間を造り出した。
その後、二神は世界と人間の管理者として二つの精霊を作り上げた。

光の精霊ヴァルナ、そして闇の精霊アガレス。

やがて、世界を構成する四大元素　火、水、風、土を司る四つの精霊が生まれた。

火の精霊サラマンドラ。

水の精霊ウンディーネ。

風の精霊シルフ。

土の精霊グノーム。

六つの精霊は人々に時には力を、時には知恵を与え、そして新たに風の精霊と水の精霊の倦族、雷の精霊ツールと氷の精霊セラシスが生まれた。

この二つの精霊以外にも新たに生まれた精霊も数多くいるのだが、雷や氷のように別性質となる精霊は生まれず、現時点での源精霊はそれら八つの精霊だと言われている。

精霊に力や知恵を授けられた人間は畏怖や尊敬の念を込めて八つの源精霊を精霊神と呼び称えた。

精霊神が人間に授けた力に、自然界の力を借り不思議な現象を引き起こす魔法というものがある。

魔法はそれまで白黒だった世界に、光の三原色と呼ばれる赤、緑、青、さらに闇の三原色と呼ばれる蒼、紫、黄の色素をもたらした。

魔法にはそれらの色と対応した属性があり、それぞれ八柱の精霊神と同じ数だけ存在する。

サラムンドラの紅炎。

ウンディーネの青水。

シルフの緑風。

グノームの黄土。

トールの紫雷。

セラシスの蒼氷。

ヴァルナの白光。

アガレスの黒闇。

初めはこれら八つの属性しか存在していなかったが、文明が進むにつれ人間自ら交配、開発し、多くの色と属性の組み合わせが判明しているが、まだ全て解明されたわけではない。

魔法は組み合わせ次第で性質が変化し、遙か昔から文明発展に貢献してきたが、次第にその力は文明のためではなく今や戦争のための力となってしまった。

「というのがこの世界の歴史ですけど……分かりましたか？」

「まあ大体は分かった。けどなレン。教科書棒読みはちよつといただけないと思うぞ」

「うっ……」

今までこの世界の歴史をレンに教えてもらっていたわけだが、学校の教科書をただ読んでるだけだった。

「てゆうかレン、学校行ってたんだな」

「はい、ジュン君も行ってますよ。本当はそこで魔法を学ぶんですけど私とジュン君はちよつと特殊で、ちっちゃい頃から魔法を勉強してました」

「ふふん、超天才なのだー」

ジュードは腰に手を当て尊大な態度でそう言った。

と言っても生活能力皆無な魔法の天才というのもなんだか締まらない気がする。

「ユウマの幼なじみと妹を無事見つけられたら入学してみるのもありだな」

「あ、それいいかも。とっても楽しくなりそう」

レンはそんな未来に思いを馳せているが、ずいぶんと遠い未来になりそうだ。

「かなり話が逸れたな。ま、簡単に言えば慣れだな」

本当に簡単に言ってくれるが、優真にとってはどうやればいいのか全く分からない。

「とりあえず魔法に属性があるのは分かった。で、魔法ってのはどの属性でも使えんのか？」

「いや、属性は基本的には一人につき一つ。たまに二つ持ってる人もいるがな」

「ジューン君は二つ持ってるんだよね」

そうなのか？　と優真が聞くと、すごいだろーという言葉が帰ってきた。聞かなきゃよかった。

「よし、まずは見せてやろう。魔法というものを」

ジュードはそう言うと、右手を前に突き出し、得意気に笑みを浮かべた。

『来たれ』

すると突然ジュードの右手が紫に放電し始め、バチバチと火花を散らした。

ジュードの右手に纏っていた電気が形を成していき、細長い棒状の形になった。

ジュードがそれを一振りすると尖端が鋭く尖った槍が姿を現した。時折紫の電気が槍の中からジジジッと火花を散らしている。

「これは魔法を使う為の道具、『魔導具』と呼ばれるてるもんだ。さつき教科書にも出てきた自然界の力、別名『マナ』と自分の魔力を合わせて初めて魔法が発現する。これはそのマナと魔力を繋ぐパイプみたいなもんだと考えてくれ」

「なるほどー。ならその魔導具を出せば俺にも魔法が使えるという事か」

「まー、有り体に言えばそういう事だな。だが、その前にやる事がある」

ジュードは人差し指をビツと上げると、それをそのまま町の方に向けた。

「まずは『魔導具精製の儀』を受けるべし！」

魔導具精製の儀。それは魔導具を得る為の重要な儀式である。ある特殊な魔法を使う為、町に一軒はある魔法屋に向かなければならない。

ジュードは何か別の用があるらしく、優真の道案内はレンがする事になった。
なったのはいいのだが

「ここがお肉屋さんで、あっちがお魚屋さんです。あ、もう少し行けば服屋さんとか雑貨屋さんともあります」

レンは町の観光案内もしてくれているのだが、肝心の魔法屋にはまだたどり着かず、あっちへふらふら、こっちへふらふらと忙しく歩き回っていた。

「あ、ちょっと待ってください」

一通り案内を終えると、今度は自分の買い物を始めてしまっていた。
た。

実はこの言葉、今ので三回目。まさかジュードはこれが嫌で逃げたのだろうか？

「くそう、ジュードの奴……」

「あ、ユウマさん！ あれ可愛くないですか!？」

「……誰か助けて……」

若干半泣きになりながらも優真はレンに連れ回されるがままだった。

優真とレンが魔法屋へとたどり着いたのはジュードの家から出て二時間後の事だった。

実は魔法屋。ジュードの家から歩いて十分ほどの場所にあった。ここまで来るのになんだか異様に疲れた。

「す、すみません」

「まあ、もういいよ。慣れてるし」

優真、幼なじみと妹に荷物持ちとして拉致される事数知れず。

気を取り直して魔法屋を見上げてみる。

一見すると優真の世界の喫茶店風な建物。屋根にはでかかど看板が掲げられているが優真には読めなかった。

「こんにちは」

カランコロンというドアのベルを鳴らしながら入るレンに続く優真。

中は外装と同じようにまんま喫茶店。イメージとしては、暗い店で怪しげな薬や杖が立て掛けられていると思っていた優真は面食らった。

店番していたのはひげ面マスター　ではなく、思わずおお、と呟いてしまうほどの金髪美人。

その美人はレンの顔を見ると外見とは裏腹に子供っぽい笑顔を見せた。

「レンちゃん。久しぶりね」

「はい、お久しぶりです、ソフィア先生。今日は魔導具精製の儀をしてもらいに来ました」

ソフィア先生と呼ばれた美人はレンの後ろにいた優真に目を向けると、あらあらまあと楽しげな声を上げた。

「レンちゃん、ジュード君だけじゃ物足りなくなるなんて小悪魔ね」

何を考えたのか分からないが、どうやらろくでもない事を考えたらしい。

レンはへっ？　と呆けていたがやがて理解するとブンブンと激しく首を横に振った。

「いやいやいやいや！！　違います！！　違いますよ！！！！」

「あはは、レンちゃん可愛い」

どうやらレンは生粋のいじられ体質らしい。レンには悪いがとても微笑ましい。

一通りレンをいじると満足したのか、ソフィア先生と呼ばれた美人は優真に向き直った。

「さて、改めて自己紹介するわね。私はソフィア・グレイス。レンちゃんやジュード君が通ってるリーザリス魔法学園の教師ね」

「あ、俺は優真と言います。でも、教師なのになんで店番してんですか？」

ソフィアはその問いに苦笑で答えた。

「今は戦争中ですから。学園も休みなんです」

ぼそつと言ったレンの呟きに、ああ、と優真は納得した。仕事がないのに金が入るわけないわな。実に切実な理由だ。

「はあ、まあ仕方ないんだけどね。さて、魔導具作るんだったね。奥へどうぞ」

ソフィアが手を向けた方に扉があった。どうやら店の奥で作るらしい。

店の奥の通路を行った先には何もない空間があるだけだった。何かを作るような工房も、道具を保管する倉庫もない。

「じゃあユウマ君は部屋の真ん中辺りにいてね」

こんなところでどうやって魔導具作るんだか、と思いながら言われた通りにした。

ソフィアは優真に手をかざし、なにやらぶつぶつ呟き始めた。

『八柱の神の規則に従い、我は魔を司る力を彼の者に授ける』

薄暗い部屋の中に優真を中心にして巨大な魔方陣が現れた。

その魔方陣から八つの光　白、黒、紅、青、緑、黄、蒼、紫、それぞれ色の光が優真の周りを漂っている。

無意識に優真は手を伸ばしていた。するとそれに呼応するかのようになんかの光が優真の手に収まった。

その光は優真の手の中でキラキラと白く輝いていた。

「うわあゝ！　ユウマさんは『白光』の属性に選ばれたみたいですね！」

レンが魔方陣の外で感嘆の声を上げている。

優真はその光から自分の中に何かが入り込んでくるのを感じていた。

決してそれは不快な感覚ではなく、とても自然にすんなり受け入れられる事が出来た。

これで儀式は終わりか、と優真は魔方陣から出ようとしたが、今度は黒い光が優真の目の前に現れた。

「うおっ！？ 何だ何だ！！？」

「すごいですユウマさん！！ 二つ目の属性に選ばれました！！！」

「そ、そうなのか？」

だったらもう一度手を、とその黒い光に手をかざすと光がもやに変わり

「ぐっ！！！！？」

さっきのすんなり入った属性とは逆に、今度のは無理矢理ねじ込んできた感じだ。体が引き裂かれるように痛い。

「ゆ、ユウマさん！？ 大丈夫ですか！？」

「頑張つてユウマ君。二つ目の属性が体に入る時って属性同士がけんかしちゃうからすっごく痛いらしいんだけど、耐えてね」

それ先に言えよっ！！！！ と、全力でツツコミたかったが、あまりの痛みに声が出ない。

優真は地面に膝をつき、歯を食い縛って顔を上に向けた。

「ああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「ハアー、ハアー、……死ぬかと思った……………」

「だ、大丈夫ですか？」

「おめでとうユウマ君。無事に魔導具精製の儀は終了して、めでたくユウマ君は『白光』と『黒闇』に選ばれました」

白光と黒闇……？

優真は息も絶え絶え死にそうになりながらソフィアに向き直る。
だが、属性を得たはいいが、肝心なのを忘れている。

「ま、魔導具は……？」

「あれ？ けっこう一般常識だと思っけど、まあいいわ。魔導具はね、人から与えられる物ではないの。自分で創造するのよ」

そう言われて優真は手をにぎにぎして杖っぽい物をイメージしてみるのが、何も変化は起きない。

そんな簡単な事じゃないよ、とソフィアに笑われた。

「ゆっくり練習していきましょう。私もジュン君も手伝いますから」
「ああ、よろしく頼む」

ようやく痛みが引いてきて優真は大きく伸びをした。

自分の中で二つの属性が漂い、混ざり合っているのを感じる。
まだまだ使いこなすには時間が掛かりそうだ。
優真は愛華と優音の無事を願いながら部屋の外に出た。

ブオン！！！ と、ジュードの槍櫓が激しく優真に襲いかかる。

「ほらほらイメージよイメージ。さっさと魔導具出さないと死ぬわよ！……！」

「うわっ！！ 危なっ！？ ぐほっ！！？」

ジュードの槍の柄の部分が優真の腹にドスツと突き刺さった。
優真は地面を転がって悶絶。ジュードはオカマの様に手の甲を頬に当てて高笑いしていた。

「ぐおおおお……」

「おーほっほっほー！！ 出直してきなさー……いでっ！！？」

オネエ言葉を放ち続けるジュードにレンのツッコミが入った。

「気持ち悪いからやめなさい」

「ちつ……これからが面白かったのに……」

優真は咳き込みながら立ち上がり、やっぱ無理があるだろうこれ、とジュードを睨み付けた。

「んなこたねえぞ。身の危険を感じた時とかのすげー必死な気持ちが一番魔導具出しやすいんだ。なあ、れっちゃん」

「うーん、まあそうかな」

頼みの綱はレン、とか思っていた優真は、裏切られた！ とシヨックを受けていた。

「はあ……何をモチーフにするかはイメージ出来ただけだなあ……」

小さい頃一緒に住んでいた祖父の唯一の趣味が刀や拳銃集めだった。と言っても大半は模擬刀やモデルガンだったが、中には本物もあってよく自慢されたものだった。というか、本物の銃を子供に見せびらかさないで欲しい。

優真にとってイメージしやすいのは、どっちかというと刀。だがこれがなかなか上手くないかない。

「ま、気長にやろつや。よし飯飯。ユウマ、飯の準備は？」

「あ、悪い。買ってきてなかった」

な、なんだって……！ と大袈裟に地面に両手をつくジュード。

「いやー、はっはっは。どうやって魔導具出すのか考えてたら忘れてたわ」

「私が材料買いに行きましょうか？」

死ぬゝ死ぬゝ、とジュードは地面を転がり回っている。

「いや、だいたい道も覚えたし一人で行けるよ」

「そうですか。気をつけてください」

ああゝ、ああゝ、とゾンビのように下から唸り声が

「ああもう！　うるさい！！」

「げはあつ！！！！？」

レンが思いつきり転がるジュードの背中を踏みつけた。カエルが潰されたような声を出してジュードは動かなくなった。

「……レン……意外とバイオレンスなんだな……」

「はっ！　ち、違うんですよ！！　ジューン君があまりにふざけた事すると体が勝手に……」

「しくしく……そうやってれっちゃんは俺を傷物にぐえ！？」

レンは足に力を入れ、またふざけた事を言おうとしたジュードの背中を踏みつけた。

「ジューン君ちよつとこつち来なさい」

「助けてユウマー、れっちゃんに陵辱されるー」

「し・ま・せ・ん！！！！」

ジュードの首根っこをつかみ、鬼の形相を浮かべながらレンは家の中に入っていった。

「……レンも大変だな」

しみじみとそう感じながら優真は再び町へと足を向けた。

「さて、今日の献立は何にするか」

今が旬の食材、と言っても季節がよく分からない。あっちでは秋だったが、こっちでも同じなんだろうか。

少し肌寒いし、長袖で十分なくらいだからまあ同じなのだろうか。

「長袖と言えば、俺制服のままだな」

こつこつ格好は周りから見るとけっこつ浮いている。レンに頼んで服買ってもらうか。

「いや、これ以上世話になるわけにはいかないな。それにこの格好の方が、二人を見つけるのにいいな」

とりあえず現状維持のままで、と結論付けて肉屋の前にたどり着いた。

「あ……そういえば俺文字読めないんだった」

これじゃ値段がいくらだか分からない。レンから金はもらっているが……。

「足りっかな……」

と、様々な肉類を眺めながら悩んでいると

「あっ！！？」

「じふっ！？」

ドゴツ、と先ほど痛めた腹に誰かがタツクルしてきた。不意討ち過ぎてモロに受けてしまった。

「お、おおお……」

「す、すみません！ あ……大丈夫ですか……？」

とても大丈夫ではなかったのだが、声からして若い女の子。そこは大丈夫と見栄を張って言ってしまうのはバカな男の悲しい性か。

痛みを我慢してその少女（多分）を見てみると、優真より頭一つ分小さいが、全身真っ黒なローブを着込み顔もフードを被っていてよく分からなかった。

「あの……お詫びは後で必ずします！ 失礼致します！」

「あ……」

その少女は言うだけ言っというてすぐに立ち去ってしまった。と思つたら、今度は似たような格好（背丈からして男）の五、六

人の集団が少女を追いかけていった。
そして優真は腕を組んで考える。

「これは俗に言う、あの子大ピンチ？」

考えついたら献立は何にするかは忘れて、黒ローブ集団の後を追いかけていった。

「やっべ、どこ行っただ？」

あの黒ローブ集団を追っかけて行き、やがて狭い路地裏に入っ
ていたら見失ってしまった。

奥にはまだ道が続いているが、何本か道が別れている。

「いったいどっちに……？」

「……い！……な……っ！！」

どこからか声が聞こえてくる。さっきの少女の声だ。

「あっちか……！」

優真がその声のする方へ駆けていくと、少女と黒ローブ集団が対峙しているのが見えた。

幸いにも横から見えているので誰にも気付かれていない。

「下がりなさい！！ 私を誰だと心得ているのですかっ！！！」

さっきのおどしたような声ではなく、凜としたよく透き通る声で少女は言い放った。

だが黒ローブ集団が怯んだ様子はなく、その中の一人が恭しく一礼をした。

「全て、承知の上です。大人しく我々に従ってもらいたい」
「お断りします！ 私はあなた方に従う気はありません！」

男はため息を一つつき

「では、少々痛い目を見てもらいます」
「っ！？」

男は少女に歩み寄り、その手に緑の風を纏った細身の剣を出現させた。魔導具である。

男は魔導具を振り上げ

「とうっ」
「ぐあっ！？」

魔導具が振り下ろされる前に優真は男に飛び蹴りを放った。
その場の全員が突然の乱入者に目を丸くしている間に優真は少女の手を取った。

「こつちへ！」

「え？ あ、あの……」

少女は突如現れた優真に戸惑いを見せるが、優真の走る速さに合わせてくる。

優真は黒ローブ集団を撒く為に路地裏を右へ左へ走り回る。

ちらりと後ろを振り返ってみると、全員ではないが何人か追いかけてきている。

それを見たらなんだか笑いが込み上げてきた。

「こつちに来てから逃げてばっかだな、俺」

そこで気付いた。全員じゃない？

「やばい！ 回り込まれてる！」

だが気付くのが遅かった。右の通路から何人かの黒ローブの人物が出てきた。

咄嗟に左の通路に飛び込むが、そこは行き止まりだった。

「全く、手こずらせないで欲しいものだ」

再び男が優真と少女の前に出てきた。その声色は不機嫌を露にしている。

助けに入って逆に追い詰められるとは情けない。

「さあ、その方を渡してもらおうか」

「うつせえ！！ そんな陰気な格好しやがって！ 似合ってねえんだよ！！！」

後ろで同じような格好をしている少女が少しばかりへこんだ。
男は特に意に介す事もなく、再び魔導具を出現させた。

「ならば、死んでもらうしかない」

男の魔導具に纏っている風がより激しくなり、周りの風も引き寄せられるように集まってくる。

『シルフの倦族たる風の精霊よ。その深緑なる風で我が敵を切り刻め』

魔導具から風が吐き出された。風は男の服をはためかせ、周りの家の壁を抉り、まさにそれは鎌鼬^{かまいたち}。

魔導具は、イメージ

優真は襲い来る鎌鼬を避けもせず、迎え撃つように腰を落とした。
この子は渡さない。こんな怪しげな奴等には絶対に。俺が必ず、
守る。

思えば簡単な事だった。二つの属性を持つのなら魔導具も二つに
すればいい。

優真の手に光が宿る。

『来たれ!!』

優真は力を込めて手を振り抜く。
すると既に目の前に迫っていた荒れ狂う鎌鼬が一瞬にして消え去った。

「なにっ!？」

驚く男を見据えて、静かに息を吐く優真。
優真の手には光り輝く純白の刀が握られていた。

第四話 導力

自分の攻撃を打ち消された事で、男も臨戦態勢に入った。

他の黒ローブ集団も各々の魔導具を出現させてくる。槍であったり、斧であったり、弓であったり。

対する優真は剣先から柄に至るまで真っ白な刀一本。さっきの鎌鼬を打ち消したのも実際どうやったのか自分でも分かっていなかった。

ただ分かるのは、大ピンチのままだという事。いやむしろ悪化させている。

優真は刀を黒ローブ集団に向けて不敵に笑いながら牽制しているが、内心ヒヤヒヤものだった。

「我々を敵に回した事を後悔するがいい」

優真の動きを制限する為か、集団の中の一人が炎の玉を放ってきた。

優真は咄嗟に魔導具を振るうと、炎の玉は切り裂かれ消えていった。

「魔法は使っな！ 接近戦で息の根を止めるぞ！」

男達は優真と少女を取り囲み、その中の剣型の魔導具を持った男が斬りかかってきた。

「うわっ!？」

その斬撃を受け止めようと、優真は魔導具を構えた。剣と刀が激突しようとするその瞬間

「なっ!？」

優真の魔導具に触れただけで男の魔導具が消え去ってしまった。
その光景を見た黒ローブ集団は優真との距離を取った。

あの魔導具は何だ!？ 奴の属性は!？ と、ずいぶんと動揺を与えたようだ。

やれる。これなら戦える。これなら、勝てる!

「さあ! 今度はこっちからいくぞ?」

魔導具を構え、反撃開始とばかりに走り出そうとした矢先、突然魔導具が光となって消えていってしまった。

「な、なんで……?」

「今だ! 全員攻撃を開始しろ!」

魔導具が消えたショックで優真が呆けている間に、黒ローブ集団は一斉に攻撃を仕掛けてきた。

炎の玉、風の刃、氷の槍といった様々な魔法が優真に襲いかかる。

「危ないっ!？」

背に隠した少女の叫びが聞こえたが、避けるような事はせず優真はこれまでかと目を閉じた。

「まあ、第一段階は合格だわな」

そんな声の後にズガアアアン！！　　という何かを破壊したような音が響き渡った。

ゆつくりと目を開いていくと、目の前に一本の槍が電撃を纏いながら突き刺さっていた。

「ふふん、お助けマンとーじょー」

「ジュード！？」

屋根の上からジュードがニヤニヤ顔で優真と少女を見下ろしている。

どっこいしょ、とおっさん臭い声を上げながら降り立った。

ジュードは地面に突き刺さっている魔導具を抜きながら黒ローブ集団を見据える。

「おーおー、まだいたんだ。大の大人が寄ってたかって女の子いじめるなんてダッセエ」

「き、貴様は何者だ！　我々の邪魔をするなら容赦は　」

バタツと話途中で男が倒れた。何が起きたのか全く分からない。ただジュードの手から何かが一瞬で飛び出し男に命中したのは見えた。

「下らねえ前口上は聞きたくないな」

そう言っている間に次々と倒れていく男達。五、六人いた黒ロブ集団は瞬く間に全滅した。

一仕事終えたぜえ、と晴れやかな笑顔を浮かべながらジュードが振り向いた。

ビクツと優真の後ろに隠れていた少女が怯えていた。なんだかジュードがショックを受けていた。

「大丈夫。こいつはバカだけど安全だから」

「は、はい」

「くっそー、いいないいな！ 優真ばかり！！ 俺もこういうイベントやりたい！！」

今までのシリアスはどこへやら、既にジュードはいつものおバカに戻っていた。

そんな事より今はこの少女を安全な場所へ連れていかなければ。

優真は悔しがりながらあーだこーだ言っているジュードを尻目に少女を路地裏から連れ出した。

「助けていただき、ありがとうございました。このご恩は一生忘れ

ません」

路地裏から出ると、少女の第一声はそんな感謝だった。

「いや、結局役に立たなかったし、そんな気にしなくても」

「いいえ！ そんな事ありません！ あの、それでお名前を伺いたいのですが……」

そういえばお互い名乗っていなかった。逃げるのに必死でそこまで考え付かなかったようだ。

「俺は霧谷優真。優真と呼んでくれればいいよ」

「はい、ユウマ様ですね。承知致しました」

「いやいやいや様はいいよ、様は」

がこの貴族だ俺は、とか思いながら呼び捨てでいいからと言ったが

「いいえ！ 命の恩人と呼び捨てにするなど私には出来ません！」

「そ、そうなんだ……。まあいいけど……」

少女の気迫に若干気圧されてそのまま納得してしまう優真。

とりあえず今度は少女の名前を聞いてみると、少女は少し咳払いをしてフードを取った。

思わず見とれてしまった。その髪と眼に。

長い銀髪を三つ編みにし、瞳の色も髪と同じ。

雰囲気は可憐で凛々しく、とても整った容姿をしていた。

「私の事は、リルとお呼びください。ユウマ様、もしよければ、仲良くしていただけますか？」

「あ、ああ。もちろん」

リル、ねえ……、と後ろでジュードの呆れのような呟きが聞こえたが、優真はそれ所ではなかった。

銀髪の少女　リルの笑顔は花が咲くように美しかった。

それでまた見とれてしまう優真。リルは優真の後ろにいるジュードにも、名前を聞いていた。

「あー、俺はジュード・ローゼンクロイツって名前」

「ローゼンクロイツ……？　という事は八賢者の？」

「あー、まあそーかねー」

なんとも歯切れの悪い言い方である。というか、ジュードはこんな綺麗な女の子見たらテンション上がると思っていたのだが。

そう優真が考えていると、通りの向こうからおよそ十人はいる騎士連れながら、豪華な馬車が現れた。

「あ、どうやら迎えが来たようです。ではユウマ様、ジュード様、ごきげんよう」

「あ、うん。ごきげんよう……」

リルはまっすぐ馬車の方に向かい、騎士と何言か話した後馬車に乗り込んだ。

なんというVIP待遇。やはりリルはいいとこのお嬢様なのだろうか。

「はー、すつげえなあ。この世界の貴族っていうのはみんなあんなのか？」

「いや、まああの人だからだろ。みんながみんなじゃねえ」

なんだかりルを知っているかのような言葉に優真は眉を潜めるが、ジュードはさて、と言うと話を切り替えた。

「んじゃあ、さっさと帰って飯食って、ユウマがさっき使った力について説明してやるよ」

「そう！ そうだよ！ 肝心な事忘れてた！ 魔導具出せたのにすぐ消えたのはなんでなんだよ！？」

後でじっくり説明してやるから、と適当に手を振るジュード。
不服そうにしながらも優真は食材を買いに肉屋へ

「あ、そうだ。俺文字読めねえんだ。ジュードも一緒に来い」

ジュードと共に走った。

優真の作った夕食に舌鼓を打ったジュードは、早速先ほどの優真の使った力についての説明しに、中庭に出た。

「さて、ユウマ。その前にまずさっきの魔導具出せるか？」

「あ、ああ、一応」

先ほどと同じように意識を集中。イメージするのは真っ白な刀。刀身も白く輝きを放つ

「出来た」

優真の手の中に光が生まれ、それがだんだん刀の形に変わっていき、イメージ通りの光輝く刀が出現していた。

「よし、ちよつと俺の攻撃受けてみる」

そう言っただけでジュードは突然魔導具を出現させ、まっすぐ突いてきた。

「わ、ちよつ、まっ!？」

唐突な攻撃を優真は咄嗟に受け止めた。すると、黒ローブの男と同じようにジュードの魔導具も消え去った。

「ふむ」

ジュードが再び手に意識を集中させると、何の問題もなく魔導具を出現させられた。

「『白光』の属性。話には聞いた事があったが魔導具まで打ち消せるのか」

「おい、コラ。やるんなら前もって言え!」

こいつの行動は突拍子が無さすぎる! と、優真は憤慨した。だが、魔法も魔導具も打ち消せるのならこれほど心強いものはな

い。

「うーん、ユウマ。ちょっと刺してみ」

と、ジュードは手のひらを広げて魔導具で刺してみると言ってきた。何を考えているのか、この男。

「ちょっとジユン君！ 何を危ない事しようとしてるの！？」

そこで、今まで夕食の皿洗いをしていたレンが、中庭に出てきた。だが、ジュードは相変わらずのヘラヘラ顔だ。

「だーいじょうぶだって。ホレホレ、一思いに」

「……怪我しても知らんぞ」

優真はジュードの手のひらに向かって思い切り突きを放った。レンの小さな悲鳴が聞こえた。

すると、そこには手が血まみれのジュード ではなく、全く無傷のジュードだった。

魔導具はちゃんと刺さっている。いや、すり抜けている。

「ど、どういう事……？」

「ま、つまり、その魔導具は人体とか物理的な物は斬れないが、魔法とかの特殊なエネルギー体しか斬れないって事だな」

「それって、すごいのか……？」

ジュードは何やら腕組みして唸り始めた。どうやら微妙らしい。

「うーん、奇襲には使えるか……後は対魔法使いでは有効そうだ」

別に殺し合いをしたいわけじゃない。愛華と優音を探しに行ける

だけの力がほしいだけ。だが、この能力の魔導具じゃ……。

「でも、ユウマさん後一つ属性持ってますよね」

「おお、そうか！ ユウマ、ちよいとやってみ」

簡単に言ってくれるがこれがかなり難しい。一つの属性を維持したまま、もう一つの属性の感覚をつかむのは並大抵の事じゃない。まるで、右目と左目を別々に動かす努力をしているかのような。必死にもう一つの魔導具を出そうと、左手に意識を集中してみ

「無理」

やはり出来なかった。とりあえず白い魔導具を消して集中してみても同じだった。

もう一つの属性の存在は感じているのだが、上手く感覚がつかめない。

「やっぱりまだユウマさんには無理だよ。それでなくても、こんな短期間で魔導具出せるのってすごい事だよ？」

レンの話によると、大抵魔導具精製の儀を行ってから魔法学校に入り、何カ月も費やして習得するらしい。

それに対して優真は、きっかけがあつたとは言え、一日やそこらで魔導具を出現させたのだから才能があると言える。

「やっぱり一から説明するかね」

ジュードには珍しくやれやれと両手を上げてため息をついた。

魔導具とは自分の中の魔力と世界に流れるマナを繋ぐパイプの役割を担っている。

その形状は武器であったり、防具であったり、中には日常にあるような物まで様々である。

しかし、魔導具はただの道具として使うだけではない。

自分の属性によってある能力が付与される。

俗にそれは属性の力、魔導具の特性などと言われている。

主にこの能力は戦闘用に特化しているものが多く、基本的に争いに使われるのが日常になっている。

「最近ではこの能力を『導力』とか呼ばれてるらしい」

「この導力を使いこなした次の段階が魔法というわけなんです」

ジュードとレンによる魔導具説明のオンパレード。ジュードは大雑把な説明、レンは丁寧だが教科書棒読み。この二人、教師には向いていない。

「じゃあ、俺のもう一つの『黒闇』の導力ってなんなんだ？」

「それは分からん。そもそも、光と闇の属性は数が少ないのだ。その分強力といえは強力なんだが、魔力の消費がべらぼうに激しい。さっきのユウマの魔導具が途中で消えたのはそのせいだ」

確かにそんな燃費が悪い魔導具では魔法初心者のお真では使いこなせないだろう。

なんとかならんものか、とお真は悩み始めた。

「それよりもジューン君。よくユウマさん見つけれられたね。路地裏にいたんでしょ？」

「そうだな。つーかジュード、なんで外に出てきてたんだ？」

ふふん、とジュードはいつもの小賢しい笑みを浮かべている。

「ユウマがあんまり遅いもんだから探しに出たんだが、途中であの怪しい奴等見つけて見張ってたからユウマも尾行してるじゃん？ 面白そうだからユウマの後つけてた」

なるほど。事情は分かった。だが

「ならお前最初からみてたんじゃねえかー！！ さっさと助けやがれ！！」

「いやー、あのまま見てればユウマの魔導具拝めるかなと。それにあのタイミングで出ればカッコいいじゃねーか！」

それが本音か！　こいつはホントにどうしようもねえ。

優真とレンは盛大なため息をつきながら、ガハハと笑っているジュードをジト目で眺めていた。

第四話 導力（後書き）

いやー一気に四話はさすがに疲れますね。でもやっぱりファンタジ
ーは書いて楽しいッス！次回をお楽しみに！

第五話 隠密部隊結成

シンと静まり返っている王座の間。王座にはいくつもの死線を潜り抜けた屈強な身体を持つ初老の男が、重々しい顔つきで座っている。

その隣に座っているのは長い銀髪でいくつものカールを作り、目にはもう四十近くなるとは思えないほどの美貌を持っている女性が、物憂げな表情をしていた。

そんな重苦しい雰囲気の中、一人の女性が呼び出された。

女性は赤く染まった髪を一つに結い上げ、切れ長の目は理知的な雰囲気を醸し出していた。

「エアよ。わしは今とても嘆いている。旧知の友を討たなければならない事に」

「心中、お察し申し上げます」

「わしは、もうこの悲しき戦争を終わりにしようと思う」

「と、申しますと……？」

赤髪の女性 エアは伏せていた頭を上げ、王を見据える。

王はもはや旧友を討つ事に躊躇いを感じていない、とエアの目には映った。

「リーザリス魔法騎士隊隊長エア・ローゼンクロイツに命じる。二週間以内に隠密部隊を結成し、敵国リングサークの王を討て。選出方法は任せる」

「ハッ！」

エアはすぐさま立ち上がり、王座の間から出ようと歩き出した。

「エア」

それまで沈黙していた王妃がエアを呼び止めた。

「必ず、生きて戻るのです。誰も死なせてはなりません」

戦争でだれも死なせないなどとエアは、もちろん王妃も出来ない事だと理解しているようだったが

「はい、必ず」

確固たる意思を持つてそう答えた。殺す覚悟は出来ないが、死なせない覚悟なら既に出来ている。

甘い考えだ、とエアは自覚しているがそれでも貫くと決意した。それは自分の息子にも言い聞かせている。

「さて、二週間かぁ……」

部屋から出た途端碎けた口調になったエア。こちらが素なのだ。今までののは形式ばっていて肩が凝る。

「とりあえず家帰ろ」

家にいるだろうバカ息子とそのお隣のいじると可愛い幼なじみを思い浮かべながらエアは帰路に着いた。

優真がこの世界に来て数日が経った。日に日に魔力を制御出来るようになり、長時間魔導具を出現させられるようになったが、二つ目の魔導具はいまだに成功しない。

さらには国家間の緊張状態も高くなり、気軽に他の国なんかに行くわけがない。

「はあ……愛華も優音も無事だといいいけど」

優真は大通りの真ん中で空を仰ぎながら呟いた。

只今優真、食材の買い物中。既に日課になりつつある。

料理作んねえならせめて買いに行け、と不満も募るのだが、何してるか知らんがジュードはちよくちよく出掛けるし、レンは余計な物まで買ってきてしまう。よく今まで生活出来たな、とまで思った。

「ちよつと、その君」

「んが？」

唐突に全身鎧の騎士な感じの男に話しかけられた。なんだか妙な威圧感がある。

「この辺りで銀髪銀眼の少女を見掛けなかったか？」

「銀髪銀眼？ さあ、見てないツスけど、なんかあったんスか？」

なにやら事件の匂いがプンプンしている。優真は野次馬根性丸出しで騎士に聞いてみたが

「いや、見ていないならいい。すまなかった」

騎士は質問には答えず、すぐに立ち去ってしまった。……面白くない。

「はて？　そういえば最近どっかで銀髪銀眼を見た気が……」
「ユウマ様！」

どこだったか、と思い出そうとしている最中、また突然声をかけられた。

振り向くとそこには頭の先から足先まで全身真っ黒なローブを着込んだ人物がいた。

え、誰ー？　とか不審に思っていると

「私です。ユウマ様」

フードを少し上げて顔を出すと、数日前に悪漢達から助けた銀髪美少女のリルだった。

「あ、リルだったのか。一瞬誰かと思った。前も思っただけでなんでそんな格好してるんだ？」

優真がそう聞いてみると、一身上の都合で、と何やら複雑な表情をしていた。

ん？　銀髪銀眼……。さっき騎士がそんな女の子を探してるって言ってたな……。
いやでもまさか、こんな礼儀正しくて育ちの良さそうな娘が犯罪なんて……。

「な、なありル。さっき騎士に話しかけられて、銀髪銀眼の女の子

探してるって言ってたんだけど……リルの事じゃないよな？」

リルは目をパチパチさせて小首を傾げた。

「さあ、どうでしょう……。でも銀髪銀眼の女の子は他にもたくさんいますから人違いではないでしょうか？」

「そ、そうなのか……？ まあ確かにそうかもしれないけど」

あまりこの国の事を知らない優真はそれで納得してしまった。
まあいいか、と深く考えないのは昔からの事だ。

「でも今戦争中だろ？ こんなのに町出歩いていていいのかな？」

今は戦争中だと忘れてしまうほどのこの町は平和だ。だが、時折外へ出ていってしまう騎士団を見掛けると、どうしても今は戦争中なのだと思ってしまう。

「大丈夫ですよ。国民の皆さんに出来る事はいつも通りの生活を送る事です。そしてその生活を守る為に騎士の人達も頑張っています」

リルは町の外に向かって歩いていく騎士団の人達を見つめていた。
その目は悲痛の色に染まっている。

「誰か知ってる人でもいるのか？」

「あ、いえ、そういうわけではないのですけど……」

そう言うものの、リルは浮かない顔のままだ。

優真は何とか出来ないものか、と辺りを見回して 魔法屋を見つけた。

「あ、リル。今時間あるか？」
「え、あ、はい。大丈夫です」
「じゃあ、そこ入ってみよう」

優真は魔法屋を指差した。あそこは確か喫茶店もやってたはず。幸いにもレンから小遣いももらっている。（優真はいらないと言ったのだが、持ってた方がいいとの事）

リルは少々迷っていたようだが、わかりましたと頷いてくれた。カランコロン、という魔法屋独特のドアベルを鳴らしながら、いらっしやいませーと微妙にやる気のない声が掛けられた。

戦争中だから客が少ない。そのせいでソフィアも仕事に身が入らないのだろう。

だが、知り合いである優真が入ってくると、いい暇潰しが来たって感じの満面の笑みで近づいてきた。

近づいてきたというより飛び付いてきた。

「ユ・ウ・マ・くん！！」
「ぐえっ！？」

ソフィアのタックルが優真の鳩尾にヒット。なんだか最近タックルされる事が多い気がする。

ぐおお、と苦しんでいる優真に気づかず、ソフィアは痛む腹に頬擦りしてきた。

「ユウマ君、会いたかった、寂しかった」
「そ、そそ、ソフィアさん！？ 何してんですかあなた！！？」

しまった！ 入るとこ間違えた！ ソフィアさんがいじりキャラなのすっかり忘れてた！！

ソフィアは確実に優真がパニクるのを楽しんでいる。そして何故か隣のリルの視線がだんだん険しく

「ユウマ様。その美しい方が恋人だったのですね。昼間からそんな激しい抱擁されると目のやり場に困ります」

「違う！ それは誤解だリル！！ これは畏だ！！」

「そうなの。もう会ったその日からユウマ君から激しく求められて……」

ソフィアは頬に手を当てながら悩ましげに、そして艶っぽくに頬を朱に染めている。

「そんな……ユウマ様不潔です！！」

「違うんだあああ！！！！」

優真の悲痛な叫びが魔法屋にこだました。

「でも本当にユウマ君が来てくれてよかったわ」

「……俺は全くよくありません」

優真を思ふ存分いじり倒して満足したのか、ソフィアは陽気に笑

っている。 リルの誤解もなんとか解けたようだが、まだ微妙に疑いの目を向けられている。

「本当にソフィア様はユウマ様の恋人ではないのですか？」

「違う違う。この人は俺の魔導具精製の儀をしてくれた人で、魔法学園の教師」

これこれー、とソフィアは免許証っぽい物をヒラヒラさせている。よく見たらリーザリス魔法学園教員ソフィア・グレイスと書かれている。身分証明書のようなものだ。

「……わかりました」

リルはなんだかホッと安心したような顔をしていた。
だが、優真は気づかず、ソフィアはジュードのような不敵な笑みを浮かべている。

「てか、いい加減席に案内して欲しいんですけど」

「あらあら、ごめんなさい。好きな席にどうぞ」

ソフィアはそう言ってカウンターのの方に引っ込んでしまった。案内すらないとは……。

ソフィアの適当さに呆れながら優真とリルは奥の席に着いた。

「はあ、単なる気晴らしになるかと思って入ってみたのに、余計疲れただけな気がする」

リルはそんな事ありません、と苦笑している。いや、疲れた原因の六割はあなたの勘違いなんですけど。

「そついえば、ユウマ様はどうして町に？」

「ん、夕飯の材料調達」

優真がそう言うと、何故か目をパチパチさせて驚かれた。

「……ユウマ様が、お料理をなさっているのですか？」

「いやー、話せば長くなるんだけど」

「ユウマ君のお料理、私食べてみたいわ」

水を持ってやって来たソフィアが話に割り込んできた。

「ソフィアさん……仕事なくていいんですか？」

「あら、してるわよ。お客様の話に加わるのも立派なお仕事」

得意気に言うソフィアに、それは絶対違うと優真は思った。

ソフィアは今度はリルに視線を移すと、あれ？と首をかしげた。

「ねえ、あなた……リルちゃんだっけ。どこかで会った事なかったかしら？」

「え！？」

ドキリ、と擬音語が出そうくらいリルは驚いたようだ。

「あれ？知り合いだったん？」

でもさっきリルは知らなかったみたいだけど……」

「はい。さっきも言いましたように、他人の空似はよくある事です」

リルは何故かこういう場合になると、刺々しい口調になる。何かあったんだろうか。

「うーん、そうかしら……。あ、はいはい！」

ソフィアは若干疑問に思っていたようだが、他の客に呼ばれて優真達の席から離れていった。

「話を戻しますと、ユウマ様は何故お料理を？　ご両親はどうしたのですか？」

無理矢理話を逸らした感があるが、触れられたくない話題なら無理にする必要もない。

さて、どうやって説明しようか。とりあえず俺が異世界から来たって事は言わないでおこう。

そう決定付けて、優真は話を始めた。

優真が他の国から来て、ジャングルで魔物に襲われてジュードに助けられた事。

離ればなれになってしまった幼なじみと妹を探している事。

その為に今魔法を学んで、その代償として三食作っている事。

戦争が終わり次第すぐ旅に出るつもりだという事。

リルはずっと感心したようにふんふん頷いていた。だが、戦争の単語が出てくると顔つきが真剣なものに変わっていった。

「そう、だったのですか……。幼なじみの方と妹さんを……」

「まあ戦争が終わらなきゃどうにもなんねえんだけど」

「　　いいえ」

リルは刺すような鋭い声で優真の言葉を否定した。優真は驚いて目の前の銀髪の少女を見る。

そこにいたのは、今まで優真が見ていた普通の少女ではなく、凛々しく力強い、畏怖すら感じてしまうほどの雰囲気を持った少女だった。

「戦争は、必ず止めてみせます。これ以上悲しむ人を私は見たくありません」

「リル……」

リルはいつたい何者なんだろう。単なるいいとこのお嬢様っただけじゃなさそうだ。

と、そんな時カランコロンと店の扉が開かれる音がした。

「いらっしやいま、あらジュード君」

「ソフィア先生、久しぶりッス。相変わらずお綺麗で」

どうやらジュードが来たらしい。入り口の方に目を向けると、ちよつと目があった。

「なんだよユウマ。どこで油売ってんのかと思ったら女の子とデートですか。とても羨ましいですね」

「いや、まあ、すまん……」

実際買い物サボってリルと喫茶店入ったのは事実なので素直に謝る優真。

ジュードはリルに目を向けると少しばかり驚いたようだった。

「ユウマと茶してたのリールンだったのか。また妙な格好してるなあ」

「リールン？」

なんだそれは、と優真は疑問の視線を投げ掛ける。

「あだ名だ」

「変なあだ名だな、おい」

優真はそう感じたがリルはそうでもなかったようで、リールンリルンと嬉しそうに何度も呟いていた。

「それよりもジュード。何しに来たんだ？」

「おお、そうだった。ユウマ、すぐ家に帰ってきてくれ」

「は？　なんでだ？」

とにかくさつさと来い、とジュードは優真を無理矢理連れ出そうとする。

「おい、ちょっと！　分かった！　分かったから！　じゃあリル、また今度な」

「はい。また会える事を楽しみにしています」

リルは優雅にとっても魅力的な笑顔で優真を見送ってくれた。

結局リルが何者なのか聞けなかった。まあリルが何者だろうが別に関係ないが……。

優真はジュードに首根っこを捕まれながら、魔法屋を後にした。

優真とジュードは魔法屋から全力ダッシュしてきた為、家まで一
分程度で着けた。

「はあ、はあ……、別に、走る必要、なかったんじゃないか……？」
「んー、確かに」

優真は滅茶苦茶息切れているのに、ジュードは全く息を乱して
いない。

「ただ体力バカなんだこいつは……」。

「で、結局何があるんだ？」

「あー、実は俺の母上が来てる」

「ジュードの？」

そう話ながら居間に入ると、楽しそうに話をしているレンとジュードと同じような赤い髪を持つ女性がいた。

「あ、ユウマさん。お帰りなさい」

「ああ、ただいま。えっとこの人がジュードの？」

「母です」

赤い髪の女性がそう答えると、ゆっくりと立ち上がった。

「初めまして。ジュードの母のエア・ローゼンクロイツです。よろしくね、ユウマ君」

その若々しい容姿も相まってなんだか姉御肌的な人である。

優真は親しみやすく優しい人、という印象を持った。

だが、やはりこの人もジュードの母であるという事を、この後す

ぐに思い知らされる事になる。

「なになにユウマ君。こっちに来て数日で銀髪美少女落としちゃったんだって？ やるじゃない、このプレイボーイ」

「んなつ！？ おいジュード……」

優真はギロリと恨みがましい視線をジュードに向けると、ジュードはふふんと鼻を鳴らした。この野郎……。

「エアさん、ユウマさんにも話があるんですけどよね？」

優真とジュードの間でバチバチと火花が散っているのに焦ったのか、レンが慌ててエアに話を振った。

「そうそう、でもその前にユウマ君の魔導具見せてくれない？」

「俺の？ まあいいですけど……」

優真は言われた通りに、右手に意識を集中させ魔導具を出現させた。

「ふーん、ホントに『白光』なんだ。混じりつけなしの属性、導力『封印』か……」

ふむふむと優真の刀型の魔導具を観察しながらよく分からない単語が出てきている。

いったい何が知りたいのだろうか。

「ねえユウマ君。君は幼なじみと妹を探してるんだよね。私に協力してくれたら手伝ってあげてもいいよ？」

「協力？」

エアはニヤリと、やはりジュードの親だと感じる笑みを浮かべている。

後ろでレンのやっぱり……、という呟きが聞こえた。

「戦争終結の為の隠密部隊のメンバーになって欲しいの」

………は？

「な、何故に？ ていうかエアさんは何者？」

「ユウマさん。エアさんは『八賢者』と呼ばれる人達の中の一人なんですよ」

混乱する優真に、レンは一つずつ丁寧に説明してくれた。

八賢者とは、今からおよそ二十年前。ゼノン帝国と呼ばれる国を筆頭にした同盟国と、当時は国家間の仲も良好だったリーザリスとリングサーク神王国を含めた連合国との世界を二分にするほどの戦争が起こった。

事の発端はゼノン帝国の突然の侵略行為。

その不意打ちとも言える敵の攻撃もあるが、圧倒的な戦力と国土力を誇る同盟国側が終盤まで有利に事を進めた。

だが、連合国側が後はもう降伏か死のどちらかしかないというところで最後の切り札である『八賢者』と呼ばれる八人の魔導士を戦場に投入した。

そして、わずか一ヶ月後。戦争は終結した。連合国側の勝利という結末で。

レンは教科書を読み終わるとサツと背に隠した。とても無駄な行為だ。

「ま、うちの母上はそういう経歴があるから今は城で騎士隊長やってるんだわ。で、王様に隠密部隊作れて言われたからメンバー集めてんだってさ。俺もさつき聞いた」

「なるほど。だけど、俺魔法学び始めたばかりだし、そんな大役勤まるとは思えねえんだけど……」

優真は自信なさげに眉を潜めるが、エアはそんな事ないと首を振った。

「光、それも原初の色の『白光』は私も八賢者の一人だけしか見た

事ない。問答無用で魔法を打ち消されるのは敵にとってはかなりの脅威になるのよ」

「……………」

優真は迷っていた。愛華と優音を探すにはなりふり構ってられないが、戦争に行くという事は人を殺すかもしれないという事。人を殺す覚悟など、優真は持ち合わせていなかった。

「ユウマ。何も人を殺せって言われてるわけじゃないんだ。隠密部隊だから敵のお偉いさんを拘束なり何なりすりゃいいだけだ。特にユウマはその魔導具があれば簡単だ」

優真が黙って考えたまましていると、ジュードがポンツと優真の肩を叩いてそう言った。

そうか。確かにそうだな。ジュードもたまにはいい事を言う。

「わかりました、エアさん。俺、行きます」

「そっか、よかった。出発は二週間後だから、それまでにユウマ君は『黒闇』の魔導具を手に入れる事」

「うっ……………」

そこまで知ってるのか。ジュードはいつたいどこまで喋ったのか……………。

ふと気づいた。そういえば俺以外のメンバーは？

優真がエアにそう聞いてみると

「隠密部隊は全部で三人。最後の一人がユウマ君なんだ」

「俺で最後？　じゃあ残りの二人は……………」

優真の背後でわざとらしく咳払いが聞こえた。

ゆっくり振り返ると、見慣れた二人が

「俺とれっちゃんに決まってるだろうが」

「後二週間、一緒に頑張りましょうね！」

ジュードは得意気に、レンは気持ちのいい笑みを浮かべていた。

第五話 隠密部隊結成（後書き）

ちわっす！順調に更新できてますかね？ハピマは消そうかと思ったのですが、元ネタは置いといた方がいいと思いあのまま放置する事にしました。駄文ですが、ハピマに出てくるキャラがマジハに結構出てくるので読んでみるとおっ、と思うかもしれません。

第六話 姫になった日（前書き）

少々更新が遅れてきてしまったのは容赦してください。さて、視点が変わりますぞ。

第六話 姫になった日

リーザリスから遙か東に進んだ場所にリングサーク神王国があった。

神王の座に就く者は代々神と敬れる実力を持った者が王になる。遙か昔から王族の血を引く者は協力的な魔力を持っている。

現神王、ライル・ナレ・リングサークもその一人である。

リングサーク城の王の間にいるのは初老の男性。長い金髪と髭は自分的には気に入っているのだが、王妃のクレアには微妙です、と言われた。

現在はリーザリスとの戦争の状況に頭を悩まされているのだが、もう一つだけ王の悩みがある。

それは王妃の事である。いや、王妃自身ではなくある少女の事なのだが。

王妃いわく、自室にいたら突然上から落ちてきたのだという。密室でそれはありえないだろうし、もしかしたら賊の類いかもしれないのでただちに追放を命じた。

だが、言葉も通じず、ただ震える少女を見て同情したのか王妃はそれはあんまりだと王に反発。

今その少女は王妃と女同士で話をする為、裸の付き合いで城にある温泉に入っている。

「全く、本当に刺客だったらどうするのだから……」

王はため息混じりにそう呟いた。近くにいた側近が苦笑している。一応監視の目は光らせているから大丈夫だとは思うが……。

王は少々王妃の勝手を許しすぎたか、と今までの甘い行いを反省したがもうどうしようもない。

王はまた深く深くため息をついた。

風呂から上がった王妃と少女は、王妃の自室で休んでいた。

王妃は風呂に入る前に少女に意志疎通の魔法を掛けて話せるようにしたが、少女の方は何が起こったのか分からない様子だった。

じつくりと少女と話をしていると、どうやら魔法を知らなかったらしい。

詳しく話を聞いてみると、チキユウという所から来たらしく、この国の名前も知らなかった。

信じがたいが、恐らくこの少女は異世界から来たのではないだろうか。

少女の名はユウネ。書店で本を開いたら光が発し突然ここに飛ばされたらしい。

「多分それは召喚術の類いではないかしら？」

「召喚術？」

「ええ、魔法の一種なの。普通はこの世界のどこかしらに生きている者を召喚するのだけど、ユウネの場合は術式が特殊だったのかもれないわね」

王妃は濡れているユウネの髪をすきながら魔法について説明した。

それはこの世界の成り立ちから始まり、今の現状。そして魔法を使うには魔導具が必要なのだという事も話した。

ユウネは魔法にとっても興味があるのか、しきりにふんふん頷いていた。

「それでユウネはこれからどうするの？」

ずっとこのままというわけにもいかないし、ましてや追い出すのも可哀想だ。

ユウネは少し考えてそうですねえ……、と呟いた。

「私の兄と姉もこっちに来ているかもしれないので、二人を探しに行けたらと思ってます」

「お兄様とお姉様も？ そうねえ、確かにすぐ探さなければいけないかもしれないかも……。全員同じ場所に召喚されたわけではないから危険な場所にいるかもしれないわね……」

王妃が少し声色を暗くすると、ユウネはバツと立ち上がった。

「私、今から探しに行ってきます！」

「無理よユウネ。女の子の一人旅は危険だし、それにもう日が暮れるわ」

巨体な窓から差し込む日の光は、鮮やかな赤い色に染まっていた。この地域一帯は夜になると魔物が出没する。ユウネが一步外に出ただけで一瞬でオダブツである。

それを聞いたユウネはガツクリと頂垂れた。後先の事は考えない、猪突猛進な少女だ。

王妃はなんだかユウネを放っては置けなくなってしまった。

「ねえ、ユウネ。あなたさえよければなのだけど、この城に住んで

みない？ お兄様とお姉様も私の方で探させるわ
「え？」

ポカンと口を開けて呆けているユウネに、王妃は苦笑した。

「なんだかあなたを見てると放って置けなくなっちゃったの。……
娘が出来たみたいで……」

「で、でも、クレアさん王妃様なんですよね？ それなら王様にも
言わなきゃ……。それに迷惑だし……」

ユウネのそんな言葉に王妃は強く首を横に振った。

「迷惑だなんて事はないわ！ それにあの人だって私には逆らえない
もの。大丈夫よ」

「……でも……いいんですか……？」

王妃はユウネの頭を優しく撫でてドンと来なさい、と王妃にある
まじき言葉遣いで答えた。

ボスツとユウネは王妃の胸の中に飛び込んだ。

「わたし……すっごく不安で……お兄ちゃんもお姉ちゃんもそばに
いなくて……寂しかったあ……」

「うん……」

王妃はユウネの背をさすりさすり、嗚咽を漏らすユウネをなだめ
る。

「わたしが……ちっちゃい頃お母さんも死んじゃって……なんだか
クレアさんがお母さんみたいで……すごく嬉しいです……」

王妃はその言葉に強く胸を打たれ、ユウネをギュッと抱き締めた。

「……じゃあこれからは私がユウネのお母さんかしら……？」

「……うん……お母さん……お母さん……」

ユウネは嬉しそうに何度もそう呟いていた。

まるで本当の親子のように抱き合う二人の姿は一枚の絵画のように美しかった。

次の日、優音は巨体ふかふかベッドの上で目が覚めた。

「ん……ううん……あれ？　ここどこ……？」

いつもの大量のぬいぐるみ達がどこにもない。

辺りを見回してみると巨体なベッドと巨体な机、巨体な…… e t
c。

「ああ、そっか。なんだかよく分からない内にファンタジーな世界に紛れ込んだんじゃないんだっけ」

昨日の出来事を思い出す。兄の優真が本を開けたら光が飛び出し、次の瞬間にはどこかの部屋のベッドの上に落ちたのだ。

「まさかそれがこの国の王妃様だったとは……」

ベッドの上で混乱しているとすぐに城の騎士が現れてどこかに連れていかれそうになった。

だが、王妃自信がそれを止め、話をしている内に何故か王妃と仲良くなってしまった。

「でも、お母さんか……」

王妃は優音にとっても優しかった。優音にとっての理想の母親像だった。

「はぁ……これからどうしよう……」

優真と愛華の搜索も王妃がやってくれる事になった。その間自分は何をしてようか……。

「せっかくだから魔法少女、マジカルユーネにでもなってみようかな」

面白半分で魔法を使ってみたいと思いながら、着替えようと部屋の衣装ダンスを開けて 固まった。

「嘘でしょ……」

優音は衣装ダンスにあった一番着やすい服を選んで、若干迷いながら王の間の扉を開けた。

今日は王様にも客人として謁見するように、と昨日王妃に言われたからだ。

「し、失礼します」

恐る恐る王の間へと入っていくと、玉座には厳格そうな王が、その隣には王妃がにこやかに座っている。

王妃は優音の姿を見るなり立ち上がった

「まあユウネ！　すごく可愛いわ！！」

今の優音はスカートにフリフリが着いた真っ赤なワンピース型のドレスを着込んでいた。

他のは妙に露出が多かったり、無茶苦茶ゴスロリっぽかったりして着たくはなかった。

「お、王妃様あ……もっと落ち着いた格好の服はないんですか？」
「ないわ」

優音の願いは二秒でバツサリ切られた。

隣で王は呆れたため息をついている。

「さて、ユウネと言ったな。そなたは異世界の者と聞いたが、真か？」

「あーはい。そうみたいですな」

自分でもいまだによく分かっていない。夢なら覚めて欲しいと切実に願う。

「そなたは、これから先もこの国で過ごすつもりなのか？」

「それは……分かりません。ひとまず兄と姉を見つけてからじゃないと」

「む、そうか……。ではそなたの兄と姉を見つけるまで……あー、わしらの……その、む」

「あなた、じれったいですよ」

王は王妃の威嚇するような視線で縮こまってしまった。
力関係逆じゃないのかな……？

「つまり、ユウネ。あなた、私達の娘になりなさい」

王妃の爆弾発言投下でフリーズする優音。

もう一度、整理してみよう。王様と王妃様の娘になる。この二人は一国の主。という事は私が二人の子供になると

「私がお姫様！！？」

「まあそうなるかしら」

そんな簡単に決めていいのか。どこの誰とも分からない少女を王族の養子にするなど……。

「ユウネ。養子じゃないわ。隠し子よ。そういう設定で通すから」

予想の斜め上に行く王妃の発言に優音はめまいがした。

「や、でも私、普通の女の子だし、お姫様なんて……」

優音が渋っていると、王はすまなそうな顔をした。

まだ何かあるのだろうか？

「違うのだ。そなたを利用するようで悪いのだが、わしらには子供がいない。いや、三人いたのだが二人は死に、一人は行方不明なのだ。それ故にわしの代は呪われているとも言われている。

世論が悪評のままでは政権交代も時間の問題だ。だからそなたを我が子にし、この国に貢献してくればこの国は変わっていかなくて済む」

王いわく、リングサーク神王国の貴族達は戦争賛成派と反対派に二分されている。

今行っているリーザリスとの戦争は、両者に戦争を決意させる理由が出来てしまい、王自身騎士団を動かさないわけにはいかなかった。

王は何度か和平の使者をリーザリスに送ろうとしたのだが、門前払い、もしくは武力で追い返されるような事態を引き起こし、それによって戦争賛成派を益々刺激する事になってしまった。

今は王が抑止力になってはいるが、このまま放っておけば王は変えられ、やがて戦争賛成派により全面戦争が引き起こされるという。そうなる前に優音には国民の戦争意識を、和平が成立するまで和らげて欲しいと王は言った。

「無理にとは言わないが、受けてくれるのであれば反賛成派の家臣達もとやかく言わないだろう。だがそういった理由がなければそなたを我が子として迎える事は難しい」

簡単に言えば戦争を止める手伝いをすれば衣食住は保証するといふ事らしい。

やっぱり世の中ギブアンドテイクなんだ、と優音は思った。

「分かりました。そんな大役私に勤まるか分かりませんが、精一杯頑張ります！ 王様！ 王妃様！」

「違うわユウネ。私達の娘になるんだったらお父様とお母様でしょ？ ねえ、ライル様？」

「う、うむ……」

「あらライル様。娘が出来たのは初めてだから照れているのですか？」

ニヤリとほくそ笑みながら王妃は王をいじり始めた。

これは面白そう、と優音も戦線に加わった。

「え、そうなんですか？ うわぁ可愛い お父様」

「うぐ……まるでクレアが二人に増えたようだ……」

王はもはや王妃には逆らおうとはせず、ガツクリとうなだれるだけだった。 王の威厳、まるでなし。

顔に似合わず、王はどうやら恐妻家のようにだった。

「もう、別に大丈夫だって言ったのに」

「そういうわけにはいきません。ユウネ様に何かあったら困ります」

優音を戒めるように長い緑の髪を一つに結んでいる少女が言った。正式な発表は明日から、という事でその前に町を出歩いてみる事にした優音。ちなみにドレスではなく元々着ていた制服を着ている。王女にはまだなっていないが、王が念のためという事で優音にこの少女　ベルブランカを付き人兼護衛に付けた。

ベルブランカ・レヴィ。いつもは城のメイドをしているが、実は影から王や王妃を外敵から守る『影からの守人』の名を冠する魔導士。

『影からの守人』はその存在自体を外部に知られてはならない。敵に気付かれる前に殲滅する。ベルブランカはそういった役割を担っている。

だが優音が初めてベルブランカに会った時の第一印象はちっちゃだった。

ベルブランカの身長はそれほど高くない優音よりも低く、大きな目も相まってかなり幼く見える。

だがベルブランカ。こう見えても十八歳。超童顔である。

ここまで可愛い容姿だと守る、というより守られる方だろうと優音は思った。

「うゝん……」

「どうかしましたか？」

「ベルさあ、もつとにこやかに出来ないの？」

その可愛らしい容姿に似合わずベルブランカはニコリともしない。性格も真面目、冷ややか、愛想なし、カタブツのカルテット。

これはどうにかならんものか、と優音は考えたわけだが

「私の仕事は優音様をお守りする事です。仕事ににこやかさは必要ありません」

「うわあかったいねえ。こんなに可愛いのに」

ツンツングリグリ、と指でベルブランカの頬をいじくる優音。

ベルブランカは払いもせずされるがままになっている。

そんなリアクションをされて、優音はムツとなった。さすがの優音でもノーリアクションなベルブランカに絡む気は起きない。

「……もういいや。さて、何しようかな」

「……ユウネ様はこの国で何をなさるおつもりなのですか？」

上京してきたおのぼりさんのように、あっちを見たりこっちを見たりしている優音に、ベルブランカは相変わらずの無表情で言った。

「んー、そーだなー、私が突然お姫様になって戦争はいけませんって言うても、この国の人達はきっと受け入れてくれないと思うのね。だからまずは人の役に立とうと思ってるの」

一応色々と考えてはいるのだが、こうパツとした案が思い付かない。

とにかくこの国の人達を反戦争意識へと導かなければいけない。

ではどうすればいいのか。

とりあえず地道にボランティア活動的な事をして戦争反対を呼び掛けていこうかと優音は思っている。

優音の考えを聞いてベルブラン力はちょっと目を見開いた。

「ちゃんと考えているんですね」

「うわ何その反応！ 超失礼！ 私だって今できる精一杯の事をしようと思ってるんだから」

優音はジト目になって唇を尖らせる。

ふと、少し先の建物に人だかりができています。

「ねえベル。あれ何かな？」

「さあ何でしょう……。確かあそこは ってユウネ様！」

優音はベルブラン力の話の聞かずに走り出していた。昔から気になったら即行動な優音だった。

人だかりを掻き分けて前に出ると、鎧で武装した人達が建物を取り囲んでいる。

「これは銀行強盗ですね」

いつの間にか優音の隣にベルブラン力が来ていた。

確かに鎧の人達をよく見ていると何やらピリピリした雰囲気である。

「恐らく人質がいるのでしょう。魔法警備隊の方々も迂濶に動けないようです」

「えっ！？ 人質！？ じゃあ助けなきゃ！」

急いで銀行に向かって駆け出そうとする優音の肩をベルブランカはガシツとつかんで止めた。

「危険です。ここは魔法警備隊に任せる方が得策です」

「でもそんな事言ってる間に人質になってる人に何かあったら」

優音がそう言いながらベルブランカの拘束を解こうとしたその時

バリイン！！　と銀行の窓が粉々に割れ、周りが喧騒に包まれる。

ベルブランカの意識が一瞬だけそちらに向いた隙に優音はベルブランカの手を振り払い、銀行の正面ではなく裏道に向かって走り出した。

「ユウネ様！　くっ、こんなに言う事を聞かない主は初めてです！」

ベルブランカは悪態をつきながら優音の後を追いかけた。

スタツと優音は窓から誰もいない通路へ飛び降りた。
さすがに正面突破は無謀なので裏から銀行に入れないかと考え、

案の定裏道には窓があり、鍵も開いていたのですんなり銀行に侵入出来た。

まず考えるべきはどうやって人質を助けるか。だが人質が何人いるのかも分かっていない。

「人質の数くらいは知っておくべきだったかな」

とりあえず奥へ進んでみる。するとロビーのような部屋が見えてきて、動き回っている犯人らしき男二人と縛られている人達が五人いた。

男二人は見たところ手ぶら。これなら何とかなるかもしれない。どうやって男一人にするか考えていると、イラついた男の声が聞こえてきた。

「ちっ、馬の用意はまだ出来ねえのかよ！」

「落ち着け。約束の時間にはまだ早い」

どうやら片方は短気で、もう片方はなだめ役のようだ。典型的な凸凹コンビである。

ふと、人質の中で震えている五歳くらいの少女と目が合った。しいー、と指を口に当ててしゃべらないでサインをする。少女はコクコクと怖がりながらも頷いてくれた。

人質の数は見たところ五人。短気な男は窓の外を見ていて人質から離れているが、もう一人が見張っている。

「さて、どうしよう……」

よくよく考えたら何の策もなしに飛び込んだのは無謀だったかもしれない。だが、どうしてもそのまま放っておく事が出来なかった。ふと、ここにはいない兄の優真と（正確には違うが）姉の愛華の

事を思った。

（お兄ちゃんとお姉ちゃんだったらどうするかな……）

優真と愛華がもし自分の立場だったら……。優真だったら犯人達をまず捕まえる事を考えるだろうし、愛華だったら性格から言ってベルブランカの言うとおり警備隊の人達に任せるだろう。

なら自分は……？

「おい、俺ちよつとトイレ行ってくるわ」

優音は内心来た、と思った。これから優音が取る行動は、やはり兄妹だからだろうか犯人の殲滅だった。

どうにか隙ができるまで優音は体を潜めて様子を窺っていたのだ。

（え〜つと、武器になるもの……）

キョロキョロ周りを見回して見ると、掃除用具入れがあった。中を見てみると、手ごろな長さのモップがあった。

チラリと人質の方を見てみると、寡黙な男は外をずっと見ている。

（よし！）

優音はダツと駆け出した。足音で男が振り返った瞬間には、もう既に優音はモップを振りかざしていた。

「でえええええい！！！」

ブオン！！！！とモップを振り下ろした次の瞬間

「え？」

気が付いたら優音は床に組み伏されていた。

第七話 兄妹

いつの間にか倒れ、動けなくなった優音を、短気な男が引っ張り上げた。

「はっ、どんなネズミかと思ったただのガキかよ。よかったな、マルサ。俺のおかげで助かって」

「ふん、お前の助けがなくても俺一人で平気だったんだがな、レイン」

どうして……、と優音は口を動かそうとしたが、体がしびれていて上手く動かせない。

そんな様子を見たレインと呼ばれた男はニヤリと薄汚い笑みを浮かべた。

「はなから誰かに見られてたのは感じてたんだよ。そこでちよーつと隙を見せたら案の定。人質を解放するためにマルサに襲いかかったから後ろから魔法をズドン、ってわけだ」

「ま……ほう……」

……そうだ。忘れてた。魔法があるファンタジーな世界だったんだ。

優音はもっとその辺を考えて動くべきだったと後悔したが、もう遅い。

レインは優音の両手をロープで縛り付け、人質の方に放り投げた。

「あだっ!？」

もっと丁重に扱えー、とか思ったが、言うだけ無駄なので口を尖

らせるだけにしておいた。

「お姉ちゃん……大丈夫……？」

隣に座っている女の子が心配そうに声をかけてきた。見ると先ほど目が合った女の子である。

「大丈夫大丈夫。ごめんね、助けられなくて……」

優音は申し訳なさそうに謝るが、女の子はふるふると首を横に振った。

と、突然レインの怒鳴り声が響いた。

「……んだよ、まだ馬車の用意は出来てねえのかよ！」

「恐らく時間稼ぎか何かだろう。そろそろ催促した方が得策か……」
「へっ、それなら人質の一人でもやっちまった方が早い」

人質にとっては身の毛もよだつ提案だった。

レインはそう言っと、先程優音と目が合った女の子を無理矢理担ぎ上げた。

「や、やだあ！！ ママあ！ ママあ助けて！！！！」

「や、やめてください！！ 娘は、娘だけはどうか！！」

「うるせえ！！ てめえはすっこんでやがれ！！！！」

レインはそう言って女の子を外へ連れ出そうと、歩き出し

「待つて」

気がついたら体が動いていた。優音はよろけながらもレインの前に立ちふさがる。

「……やるなら、私にして。だからその子は離して」
「んだあ、てめえ。そんなに死にてえのか。あ？」

内心超ビビりまくりだが、小さな女の子をそのまま見過ごすわけにはいかない。

正直そう言った方がいいが、何も改善策は考えていない。
どうしようどうしようどうしよう、と顔は澄ましているが頭はパニック状態。

だが、そんな事はお構い無しにレインは女の子を離すと、今度は優音の腕をつかんだ。

「はっ、いいだろう。こつちとしちゃ、警備隊の奴等に催促出来りやそれでいい。『来たれ』」

レインはそう唱えると、手の中に電気をほとばしらせながら短剣を出現させた。

優音は始めて見る魔法に目を見開いた。だが、すぐにそれが自分に向けられると思わずひっ、と声を上げた。

「てめえに恨みはないが、まあせいぜい自分の運のなさを呪うんだな」

優音は短剣が振り上げられるのをただ無感動に眺めているだけだった。

なんだか自分が殺されようとされてるなんて全く実感が湧かないふと、自分が死んだらどうなるんだろうと考えた。

できたばかりの父と母。まだ知り合ったばかりのベルブランカ。それに離ればなれになってしまった兄と姉。

そう考えたらなんだか無性に悲しくなってきた。今までの十七年

いったいなんだったんだろう。

「……ごめんなさい、お兄ちゃん、愛華お姉ちゃん……。先立つ妹をお許しくだ」

「何を言ってるんですかあなたは」
「へ？」

そんな声がして目を開けてみると、相変わらずの無表情なメイド姿の少女　ベルブランカが隣に立っていた。

「ベル！！」
「な、なんだお前！？　いつの間に……。おいマルサ！！　てめえ何して　ま、マルサ！？」

レインが振り向いた先には、ポツンと石像が立っていた。いや、ただの石像ではない。驚愕の表情を浮かべているマルサである。ベルブランカが現れて突然マルサは石像に変わっていた。

「私の属性は『白土』導力は『石化』です。死にゆく恐怖に怯えながら今までの愚行を後悔するがいいです」

口調は変わらないが、静かな怒気が優音にも伝わってくる。小さな少女とは思えないほどの巨大な威圧感を感じる。

ベルブランカの両指には白い鉄の爪、そしてそれを守るかのように白い土が手首まで覆っている。

「てめえみてえなチビガキに何ができる！！！」

レインは優音を突飛ばし、短剣を一直線に突いてきた。だが、ベルブランカは動かない。

危ない！ と優音は目を覆ったが、ブスリ、プシューみたいな音は聞こえてこない。

恐る恐る手をどけてベルブラン力を見てみると

「が……あ……あぐ……あ……」

「我が主を殺そうとした事、死ぬほど後悔してください」

レインの胸に五本の斬撃跡が残されていた。不思議と出血はしておらず、代わりに切り口からじわじわと石に変わっていく。やがてレインの全身が石に変わる頃にはすでに人質の拘束は解かれていた。

人質が解放された事で一挙に魔法警備隊がなだれ込んでくる。

優音はそんな様子を見て安心したのか、床にペタツと座り込んでしまった。

「あ、あはは、今頃になって怖くなってきちゃった……」

「はあ、全く無謀過ぎます。死に急ぐような真似もして。いいですか。あなたはこの国を担う姫君となる身。少しは自覚してください」

ベルブラン力の畳み掛けるお説教。だが優音は全く聞いていない。と、そんな時、人質になっていた女の子が優音に近づいてきた。

「お姉ちゃん、助けてくれてありがとう。これ、お礼」

女の子が手を開くと、あめ玉が一つ乗っかっていた。

優音はうーん、と困ったように苦笑した。

「でも、助けたのはこっちのおっかないお姉ちゃんだよ？ 私は結局何も出来なかったし」

ベルブランカはおつかないという部分に眉をピクリとさせて反応した。

女の子は違うよ、とふるふる首を振った。

「お姉ちゃんが私の代わりになってくれたんだもん。だから、ありがとあのあめ」

「……そっか。じゃあありがたく」

優音はひょいとあめ玉を口に入れた。それを見た女の子は満足げに笑うと走って母親の元に戻っていった。

「……私のした事、無駄じゃなかったんだ」

「そうですね。あの女の子にはユウネ様のお気持ちがちゃんと伝わったみたいです」

優音はなんだか暖かい気持ちに包まれながら、親子の様子を眺めていた。

「あゝ、づがれだゝ」

魔法警備隊の事情聴取と犯人逮捕協力で感謝とかされていたらあつという間に日が落ちてしまっていた。城に戻ると王と王妃には

無茶苦茶心配されたが、優音に怪我がない事を知ると、もう危ない事はしないと約束させられた。

とりあえず今は一目散にベッドに戻り、体力回復中。

「明日は国中に私の事を紹介、お偉いさん達とのお食事会、あとなんかあったっけ……？」

ただの観光のつもりだったのに妙な事に巻き込まれたせいで疲れて頭が働かない。

うつらうつらと眠りそうになっていると、コンコンとドアがノックされた。

「……はいはい」

「お休み中のところ申し訳ありませんユウネ様。ベルブランカです」

ベルブランカは恭しく一礼して部屋の中に入ってきた。

優音は大きなあくびをしながら起き上がってベッドに腰かける。

「今日はお疲れ様でした、ユウネ様」

「ホントだよ、全くけしからんねあの二人は」

「巻き込まれに行ったのはユウネ様ですが」

「うつ……」

優音は痛いところを突かれて言葉に詰まる。

ベルブランカはふう、とため息をついた。

「今後は気をつけてください。それともう一つ。今からユウネ様に会わせたい人がいます」

「え、もう今日は休ませて欲しいんだけど……」

優音はぶーぶーと文句を言うが、ベルブランカの冷たい視線で黙らされた。

これではどちらが主人かわかったものじゃない。

「今は王の間にいますので、すぐに行きましょう」

「はいはい、わかりました……。で、その人はどういう人なの？」

疲れなど忘れて、もうその人物に興味を向けている。優音はピョンとベッドから飛んで、部屋から出た。

「私の兄なのですが、明日から私と共にユウネ様の護衛の任に就きます」

「へえ、ベルにもお兄ちゃんがいるんだ。なんだか親近感湧くな。どんな人なの？」

「……会えばわかります」

ずっと無表情なベルブランカが初めて顔をしかめた。

家族の事を話すのは恥ずかしいのかな。気持ちはわからなくもないけど。

そんな話を話していると、王の間に着いていた。わくわくしながら扉を開くと、ライル王とベルブランカと同じ緑の髪 of 青年がいた。

「失礼します、ライル王。ユウネ様をお連れしました」

「失礼しまーす！」

「おお、来たか。二人とも。紹介しよう、ベルブランカから話しは聞いていると思うが、明日からユウネの護衛の任に就くアレン・レビイだ」

アレンと呼ばれた青年はどんな女性でも魅了してしまうかのような魅力的な笑顔を優音に向けた。

恋愛沙汰には疎い優音でもドキツとしてしまった。

歳は優音よりも一つ二つ上くらいだろうか。ベルブランカの兄と
いう事は二十歳前後だろう。

「お初にお目にかかります、ユウネ様。アレン・レビィと申します。
アレンとお呼びください」

アレンは片膝をついて優音の手を取ると、その手の甲に口づけを
した。

「¥ & a m p ; @ * # % \$! ! ? 」

そういう事に全く免疫がない優音は一瞬で顔を真っ赤にし、ズザ
ザツと後ろに五メートルほど後ずさった。

き、きききききスされたああああ!!!?

「はあ、兄さん。ユウネ様にあまり過激なスキンシップは控えてく
ださい」

「これくらいは普通だと思っただけだな。何だったらベルにもして
みる？」

「結構です!」

顔をしかめ、本気で嫌そうにするベルブランカを見て、アレンは
クククと愉快そうに笑う。

そんな兄妹の掛け合いを見て少し冷静さを取り戻したのか、優音
は顔を赤くしたまま戻ってきた。

「少々出過ぎた真似を致しました。申し訳ありません」
「あーいや、それはいいんだけど……」

優音はキスされたところをスリスリしながらそう言うが、まだ顔は赤いまだ。

アレンはなかなか気さくな人のようだ。キザっぱいが。

「明日からアレンとベルブランカはユウネの警護に当たる。何かわからない事があつたら二人に聞くがよい」

「あ、はい、お父様。あ、そうだ」

「ん？ なんだ？」

王は優音の言葉で上げかけた腰を再び下ろした。

「えーっと、私魔法を学びたいんです」

第七話 兄妹（後書き）

だいたいの人がオチは分かってた気がする（笑）次で、優音編は終了になります。

第八話 運命のカウントダウン

ダアン！！　ダアン！！！！

と、何かが爆発する音が城にある魔法訓練場に響き渡る。

音の発生源は優音の持つ大型の二丁の赤い銃。普通の少女が持つにはあまりにも不釣り合いな物である。

優音はアレンに向かって発砲したが、すでにそこにアレンの姿はない。慌てて辺りを見回すが、突然こつんと後頭部を小突かれた。

「うなっ！？」

「これで五回目です。戦場だったらとつくに死んでますよ？」

「うゝ、アレンが速すぎるんだって」

「そうですよ、兄さん。大人気ないです」

離れて様子を見ていたベルブランカも優音と一緒にアレンを非難する。

アレンはちつつ、と人差し指を左右に振った。

「僕がいちいち手取り足取り教えていたら伸びるものも伸びなくなります。こういうのは実践で学び取ってもらわないといけません。それに、ユウネ様は口で説明するより、体を動かして教えた方が早いと思います」

「う……、会って間もないのに随分わかりで……」

とてもわかりやすい説明をされて言葉に詰まる優音。全くもってアレンの言う通りである。

「ですが、わざわざユウネ様が魔法を学ばなくても私達がユウネ様の事はお守りしますのに……」

ベルブランカが不服そうにそう告げる。

優音が王に魔法を学びたいと言ったのは一昨日の事。王と王妃は多少渋っていたが、アレンとベルブランカが付きっ切りという事で納得した。そして今日からアレンとベルブランカによる魔法の訓練が始まった。

「うっん、最低限自分の身は自分で守りたいし、また前みたいな事もあると魔法が使えないとかえって危険だしね」

「あの時の事みたいにはもうさせません」

例の強盗事件でベルブランカは深く反省したようだ。国の姫たる優音を殺される一歩手前までにさせてしまった。あれから、ベルブランカは優音の傍をひと時も離れようとしなかった。

「それにしても、昨日は随分すんなり私が姫になるって事が通ったね。もう少し騒ぎになると思ってたんだけど」

昨日は優音が王と王妃の隠し子だと公表する日だったのだが、いざそうになると、予想していた非難や暴動などはほとんど起きなかった。

それどころか意外と国民の受けが良かったほどだ。

「まあ、ユウネ様が姫になると聞いた時から僕や他の人達も動いてましたし、今言った強盗事件の解決にユウネ様が関わっていたという噂が立っていたのも利点でしたしね」

「ふっん、じゃあこれからもつと国の人達の為に働けばいいのかな？」

「……私は、あまり表立って行動するべきではないと思います」

ベルブランカは無表情は変わらないものの、若干視線を落として不安そうに呟いた。

「昨日の公表で、戦争賛成派はユウネ様を危険視した可能性があります。最悪の場合命の危険があるかもしれませんし……」

「だ〜いじょうぶだって!!」

優音は心配なし、とベルブランカの背中をバシバシと叩いた。意外と痛かったのかベルブランカは顔をしかめた。

「そんな事のないように魔法の練習してるんだし、アレンもベルもついていてくれるんだから!! ね？」

「はい」

優音の言葉に、アレンも心配なしと笑顔を見せる。ベルブランカは一度大きく深呼吸をして顔を上げた。

「申し訳ありません。弱音を吐きました。忘れてください」

「うん、それでこそベルだね! いいよその女の子らしくない無表情。最高だね」

「ユウネ様……、それは全くほめていませんね……」

ベルブランカは少し目を細めてジト目で優音を睨んだ。

相変わらずほぼ無表情。だが、少しだけベルブランカの表情の変化がわかってきた。

ちよっとだけベルと仲良くなれたかな? と思う優音だった。

「なんだとっ！！！」

王の間でライル王の怒号が響いた。いつもの穏やかな表情とは打って変わって今は怒りを露にしている。

王の視線の先には頭を垂れる数人の貴族達。誰もが名のある家の者ばかりである。

その中の一人が顔を上げて今言った通りの言葉をもう一度繰り返す。

「ですから、敵国リーゼリスの姫君、リーレイス・グレス・リーゼリス姫の誘拐に失敗致しました。実行したこちらの手の者は全て回収しましたが、近々リーゼリスの使者が来る可能性がございます。

最悪、そのまま宣戦布告される可能性も……」

「そんな事を聞いているのではない！！ 何故わしに黙って誘拐など企てた！！！」

「お言葉ですがライル王」

さらにもう一人、顔を上げた。

「今の状態では他の国との貿易もままなりません。選択肢は勝ってリーゼリスを服従させるか、負けてリングサークが滅びるか、二つに一つです。今更偽りの姫を立たせたところで、何の役にも立ちません」

今思えば奇妙だった。優音がこの国の姫君になるという知らせを

戦争賛成派も受けたはずなのに、全く反論がなかった。

考え直したのか、と思うのは樂觀視しすぎだが、優音が姫になって戦争反対を訴えていけばそれなりに全面戦争の抑止力となると思っていた。

だが、真実はそうではなかった。関係なかったのだ。優音が姫になろうがなるまいが。全面戦争のきっかけはすでに作られていたのだから。

ぎり、と王は奥歯をかみ締めた。王であるのに国を動かせない。ただの人形でしかない名ばかりの王。

「……もう、後戻りは出来ないのか……？」

「王、ご決断を」

王の目の前がだんだんと真っ暗になっていく。

リングサークとリーゼリスの全面戦争が、始まる。

その頃、優音達三人は今日は体を動かす特訓はこれまでにして、次は魔法の知識を頭に入れる勉強を開始した。

この世界の歴史、魔法とは何か、そして魔導具。ちなみに優音が先ほど使っていた二丁の銃は優音の魔導具である。

アレンとベルブランカの懇切丁寧な説明にも関わらず、終わった

頃には歴史の部分が頭から消えていた。

「最後に魔導具の力である導力ですが、ユウネ様の属性は『紅風』、導力は『熱導』ですから、まずはこれを使いこなす事からですね」

「そのこつふう、とかねつどうつてどういう力なの？」

「属性については他の属性との相性などに関係して、導力については魔法を使うための土台ということでしょうか」

アレンいわく、優音の導力は熱を移動させる事が出来るらしい。全く意味がわからない。

「そうですねえ、例えばユウネ様の場合ですと周りの熱を弾に蓄積させて、熱弾として使用するとかですかねえ」

「その熱弾を受けた部分は血液が膨張して破裂します」

無表情でベルブランカがそう言うものだから、ゾツとしてしまった。

こ、怖すぎる……。熱導……。

「ベル、ユウネ様が怖がつてるよ。大丈夫です、上手く制御出来れば導力の使用不使用は自由になりますよ」

「そ、そうなんだ……」

むやみやたらに銃をぶつ放すのはやめよう、と深く心に刻む優音だった。

と、そんな時、魔法練習場の扉が開かれた。目を向けると、何やら神妙な面持ちの王と王妃がこっちに向かってきている。

「お、王！？ 王妃様も、いったいどうされたのですか！？ わざわざこんな場所に足をお運びにならずとも……」

アレンは突然の来訪者に驚くも、すぐに二人の元へと駆け寄り膝をついた。優音とベルブランカも三人の元へ急ぐ。

「よい。たまには体を動かさなければなまってしまふ。そんな事よりもユウネ。そなたに謝らなければならない事がある」
「何ですか？」

王と王妃が自ら出向くとはよっぽどの事なのだろうか。
だが、優音はその内容よりも二人の表情が暗いところが気になった。

「以前、わしはそなたに戦争の抑止力になって欲しいと頼んだが……すまぬ。もうそれも意味を成さなくなった」

「え……？ どういう、事です……？」

「戦争賛成派の人間が秘密理にリーザリスの姫君を誘拐しようとしたらしい。どうやら失敗したようだが。それがきっかけで、近いうちに全面戦争が起こるかもしれん」

王は自嘲気味に笑った。家臣の勝手な動きを止められなかった自分を滑稽に思っているのだろうか。

「ユウネがこの国の姫になった事で、もしかしたら危険が及ぶかもしれない。……すまない、こんな事なら姫になどしなければ……」
「そんな事言っちゃ嫌です！」

優音は悲痛な声をあげて王に詰め寄った。

「私は二人の子供になれて本当によかった。新しくお父さんとお母さんができて嬉しかった。私には小さい時からお父さんとお母さんの思い出がないから、これからたくさん作っていきこうって思ってたんだよ？」

だから、娘にしなきゃよかったなんて悲しい事、言わないでください……」

「ユウネ……」

スツと、優音は後ろから王妃に抱きすくめられた。耳元で王妃のすすり泣く声が聞こえてきた。

「……ごめんなさいね、ユウネ。あなたの言う通り……。私達もユウネとの思い出、たくさん作っていききたいわ……」

「お母様……」

優音は王妃の手に自分の手を重ねて、嬉しそうにコクリと頷いた。話の区切りがついたところで、アレンは再び膝をついた。

「ライル王、こうなっちゃってしまっただ致し方ありません。我々は全力を以て戦争に勝つしかありません。」

「……そうだな。ここまで来たらわしも覚悟を決めよう。だが」

王は体を絡めながらきちゃっきゃっやっている王妃と優音を見た。

「クレアとユウネは戦争が終わるまで身を潜めていて欲しい。二人には危険を被って欲しくない」

王は心配してそう言ったようだが、王妃と優音は不服だったのかジト目で王を睨んだ。

「ライル様、それは了承致しかねます。私はこの国の王妃となった日からあなたと一心同体。あなたを残して逃げるなんてできません」
「私も逃げません。例え戦争が始まって諦めずに停戦を訴えていきたいです。それに自分の身ぐらい守れるようになるために魔法を学んでいるんです。心配には及びません」

普通の十七の少女なら怖がってすぐに逃げ出してしまうだろう。だが、何故か優音の中では逃げるという選択肢は浮かばなかった。王は二人の意志が簡単には折れないと気づいたのか、諦めのようなため息をついた。

「はあ、わかったわかった。二人の意志を尊重しよう。だが、危険と感じたらすぐにでも逃げてもらう」

王は意外とすぐに折れてくれたが、優音は危険を感じても逃げる事はしないだろうと思った。

最後の最後まで諦めないつもりだ。

「それじゃあ、アレン、ベル。魔法練習しよっ！」

「ええ」

「はい」

優音は気合十分といった感じでまたアレンとベルの二人と修行を開始した。

王と王妃はそれを見て満足げに頷くと、全面戦争の準備を進めるべく、王の間へと戻っていった。

こうしてリーザリスとリングサーク、そして優真と優音の運命の変わり目は刻一刻と迫ってくる。

全面戦争開始まで、残り三週間。

第八話 運命のカウントダウン（後書き）

優音編は無事終了。次回からは、言わずもがな、三人目ですたい！

第九話 友達

ゆっくり目を開くと、そこはどこかの部屋だった。どうやら布団に寝かされているようだ。

「痛っ!？」

愛華は起き上がろうとするが、気づかないうちに痛めたのか背中
に激痛が走った。

起きるのは諦めて部屋の中を見回してみる。

とても静かな部屋。木の匂いが漂う山小屋のような家だ。車の音
や、人の話し声すら聞こえない。耳を澄ますと優しい風の吹く音が
聞こえてくるのみである。

「えっと……確か私、優君と優音ちゃんと一緒に本屋にいたんだよ
ね……」

本が何故か光った事は覚えているのだが、そこからの記憶が全く
ない。

周りには誰もいない。優真も優音も。いつも二人と一緒にいたせ
いか、とても心細くなってしまった。この家のどこかにいるのだろ
うか。

そんな時、誰かの足音が聞こえてきた。それはだんだんとこの部
屋に近づいてきている。

やがて部屋のドアが開かれ、その隙間からヒョイと顔を出したの
は金髪の少女だった。

「あ、起きた？」

少女は朗らかに笑いながらベッドの横にやってきた。

少女の容姿は同性の愛華から見てもとても美しい。ストレートの金髪は肩で切り揃えられていて活発な印象を受ける。

だが一挙一動は優雅で、どこことなく気品が漂っているようにも感じる。

「あなた、村の近くの森の中で倒れてたんだよ？ 背中怪我してるようだったから急いで帰って手当てしたけど、まだ痛い？」

「え、あ、はい……」

愛華が戸惑いながらそう言うと、少女はちよつとごめんねー、と愛華をうつ伏せにした。

「い、痛い痛い痛い痛い！！！！？」

「はいはいすぐ終わりますからねー」

歯医者で駄々をこねる子供のように声を上げる愛華だったが、少女は全く容赦がない。

愛華を無理矢理うつ伏せにすると少女は愛華の背中に手を当てた。

「『青く青く澄み渡る海の申し子ウンディーネよ。御身の力で彼の者の傷を癒せ』」

少女の手が青く輝くと、背中中の激痛がすうつと引いていった。

愛華が驚いて言葉も出なくなっていると、少女はこれでよし、と言って手を引つ込めた。

「え？ え！？ すごい！ ぜんぜん痛くなくなった！」

「そりゃそうよ。あたし、水の魔法の達人だもん」

とてもファンタジーな単語が出たが、愛華の耳には入っていなかった。

「あ、そうそう。まだ自己紹介してなかったわね。あたしはリースミス。リースミス・ベルティオー。リースって呼んでね。あと、別に敬語とかはいらないわよ。堅苦しいのは苦手だからね」

容姿はまるでお姫様のようなのに、その碎けた話し方とのギャップが激しくて愛華は苦笑した。どこか性格が優音に似ている気がする。

「私は鳴海愛華。あ、名前が愛華だよ」

「へ、変な名前だけど、うん。アイカね。よろしく」

そんなのほんとした自己紹介よりも愛華にはもっと気になる事があった。

「ねえ、リースちゃん。私の他に、あと二人……男の子と女の子がいなかった？」

やはり心配するのは、愛華の大切な少年とその妹の安否だった。無事ならばそれに越した事はない。でももし怪我なんかしてたらどうしよう、と愛華は不安になってしまった。

だが、愛華のその予想はどちらも外れる事になった。

「いえ、あなた一人だけだったわ。もしかして連れがいたの？」

愛華はその問いには答えられなかった。

優真と優音が近くにいない。ただそれだけで、こんなにも不安で寂しくなる。かたかたと愛華の肩が震えだす。

「どうしたの？ 寒いの？」

違う。寒くはない。そう思っているのに上手く口が回らない。
隣に大好きな人達の笑顔がない。

不安。焦燥。絶望。

いくつもの負の感情が愛華の中で渦巻いている。

だが

「あ……」

ふわり、と包み込まれるようにリースに抱きしめられる。

「大丈夫よ、きっと。アイカの大切な人達だもの」

どこにも根拠のない言葉。しかし、何故だかリースの言葉にはそう
思わせるだけの何かがあった。

まるで母に抱きしめられているような感覚で、だんだんと愛華の
震えが収まっていく。

愛華は、それから震えが止まってもその心地よさに身を委ねてい
た。

「もう大丈夫？」

「うん。ありがとう、リースちゃん」

リースに抱きしめられて大分落ち着いたのか、愛華の心に余裕が生まれた。

そして改めて部屋の周りをきょろきょろと見回してみる。

「あの、リースちゃん。ここって、どこなの？」
「ん？ あたしの家」

ガクツとうなだれそうになるのを何とか堪える愛華。
そんな事はわかってるよ、と愛華は内心思った。

「あ、あのね？ そうじゃなくて……」
「あ、ああ！ そういう事ね！ ここはマラハ村っていう大陸の最南端の村。あまり裕福な村じゃないけど、畑を耕したり、作物を育てたりしてすごく平和な村なのよ。でね、この村で一番おいしい食べ物は何てったって……」
「リースちゃん！ ちょっとストップストップ！」

ほっといたらいつまでも村のいい所を語りそうなので愛華は慌てて止めに入った。

リースがこの村を好きなのはもう痛いほどに十分わかった。だが、聞きたいのはそこじゃない。

「そこじゃなくて……ん、何て言ったらいいんだろう。ここって日本じゃないよね？」

「んー？ ニホンって何？」

やはり、さつきから感じていた違和感はこれだ。

どう見ても外国人の容姿をしているリースに日本語が通じていたり、聞いた事もない地名が出てきたり、ここが日本　　というか、地球でもなくて、小説なんかで出てくる別の世界なら説明がつく。

だが、あまりにも非現実的な事にそれを認められなかった。

そして、それは次のリースの言葉で決定的になる。

「もしかしてこの世界の事を言ってるの？　まさかね。それくらい誰でも知ってるものね」

「ん……参考までにこの世界の名前は？」

「え？　グリーンベウムだけど……。まさかと思うけど、アイカってこの世界の人じゃない？」

「うん……多分だけど」

思った通り、ここは別世界。よもや本当にそんな世界が存在するなんて、と愛華は頭が痛くなってきた。

リースは驚きで目を見開いている。

驚嘆。驚愕。まさにそんな感じの表情だ。

そしてそのリースの口から出てきた言葉は

「すっごーい！　ほんとに異世界なんてあったんだあ。へえー、母さんが言った事本当だったんだ」

そう言ってまじまじと愛華を上から下へ、下から上へと観察し出した。

「ふうん、特にあたし達と変わったところはないんだあ」

そして視線が愛華のある一部分で止まった。さらに両手を突き出してそれを触り始めた。

「あつ、ち、ちょっと、リースちゃん！ ひゃんっ！」

「むむ。あたしより遥かにでっかい。ここに決定的な違い発見」

リースは愛華のそれ 胸を両手でにぎにぎと揉みしだいた。
リースの手の中で形が変わる毎に愛華の艶かしい声が響く。

「んっ、ちょっと、リースちゃん……やめてってば！」

愛華はリースの両手を渾身の力で振りほどいて、リースから距離を取った。

両手で胸を隠して顔を赤くし、睨む愛華。

「うう……セクハラだよ……優君にだってまだ触られた事ないのに……」

愛華はさり気大胆発言している事に気づいていない。もちろんリースが聞き逃すはずもない。

「あはは。ごめんごめん、つい。で、その人誰？ アイカの好きな人？」

にやにやと意地の悪い笑みを浮かべている。リースも年頃の少女なのだから恋愛沙汰に興味があるのは当然といえば当然である。

愛華は自分が言った不用意な発言にさらに顔を赤くした。

口は災いの元。全くその通りだ。誰が言い出したのか、昔の人は偉大である。

「ほれほれ、さっさと吐いちゃった方が楽になるわよ」

そう言ってリースは両手をにぎにぎして愛華に迫ってくる。

愛華はおびえる小動物のように、リースの魔の手から逃れようと後退る。

これ以上されたらお嫁に行けなくなっちゃうよ。だ、誰か助けてえ。

いよいよ涙目になってしまった愛華を見て、さすがにやりすぎたかと思ったようでリースは焦った。

「あ、あはは。冗談だよ。そんな目で見ないで。ちょっとした、お・ちゃ・めだって」

この意地悪い性格と大雑把な性格。まるで優真と優音を足して二で割ったような少女だ。

はあ、と愛華がため息をついたところでリースがようやく真面目な顔になって本題に入った。

「で、愛華はこれからどうするつもりなの？ 元の世界に帰る方法を探す？ あ、その前にさっき言ってた男の子と女の子を捜すのかしら」

「うん……、取り敢えず二人を探しながら元の世界に帰る方法を探してみる。二人もこっちに来てるかどうかわからないけど、やっぱり心配だから」

訳のわからない場所に飛ばされて嘆くよりも、二人を心配する愛華。

愛華がそう言ったきり、リースは何かを考えるかのように黙りこくってしまった。

日はどうやらまだ昇りきっていないようだ。このままリースに迷惑を掛けるのは忍びない。出来るだけ早くこの村を出て行こう。

そう思いながら愛華は立ち上がった。ずっと寝たきりだったから背中が痛い。だが歩けないほどではない。

「お世話になりました、リースちゃん。助けてくれてありがとう。元気でね」

愛華のその言葉に、ぱつと弾かれたようにリースは顔を上げた。

「待て待て！ 何を勝手に自己完結して去ろうとしてんの。あのねえ、知らないと思うけど、村から一步外に出れば魔物がうようよしてんのよ？ そんなのに襲われでもしたら人を探すどころじゃないわ。それに、いったい村を出てどこに行こうとしてるわけ？」

うつ、と言葉に詰まる愛華。言われてみれば考えていなかった。地図も食料も旅をした経験もない愛華がどうやって元の世界に帰る方法と二人を探そうというのだろうか。

一度こうだと決めたらとことん一直線という兄妹のストッパーである愛華にしては珍しい。それだけ焦っているという事だろう。俯いて黙ってしまった愛華を見て、リースは呆れてため息をついた。

「ねえ、アイカ」

顔を伏せたままの愛華に向かってリースは言った。

「村を出るんだったら案内役は必要よねえ。それと用心棒みたいなもの」

愛華は戸惑いながらも肯定した。確かにそんな人がいれば愛華一人きりよりはよっぽど安全である。

「ちようどね？ いるのよ。そんな事をしてくれる人が」
「そ、そうなんだ」

リースの言わんとしている事はわかる。その人を愛華の旅の供にしようと言っただろう。

だが、心苦しい。自分には何も礼をする事は出来ないし、見知らぬ人と寝食を共にするのは、人見知りの愛華にとってはとても我慢ならない状況だ。

しかし、愛華の心配は次のリースの言葉で吹き飛んだ。

「アイカの目の前に」
「えっ？」

リースは愛華の目をまっすぐに見据えながら言った。
何を言っているのだろうかこの少女は。この村を自慢するほど大好きなのに、自ら村を出るというのか。それも昨日会ったばかりの赤の他人の為に。

なんで、そこまでして……。

リースは困惑している愛華に気持ちのいい笑顔を見せた。

「なんでって顔してる。そりゃあ、あたしも村を無理には出たくないよ。でもね、困ってる友達に全力で助けるものでしょう？」

「友達……？ 私が？」

「うん。まだ会ってからそう時間は経ってないけど、あたし達は友達。……駄目？」

リースの金色の瞳に不安の色が見え隠れしている。笑顔を見せてはいるが、否定されるのが怖いのだろう。不安は消せないようだ。
そんなリースの心情を察して、愛華も笑顔を返した。

「ううん。私もリースちゃんみたいな子が友達になってくれてすごくうれしい。でも、その気持ちはうれしいけど、せつかくできた友達を危険な目に合わせたくはないよ」

「その辺は大丈夫。あたしはこの村一番の魔導士なんだから！」

リースはそう言ってゆつくりと右手を広げた。その薬指には青い綺麗な指輪がはめられている。

「『来たれ』」

リースの短い呟きの後、指輪が呼応するかのように青い輝きを放ち、一瞬にしてその手の中に青い薄手の長剣が現れた。所々に銀の装飾が施されており、両刃の刀身には見た事もない文字が刻まれていた。

「綺麗……」

愛華は魔法を目の前で使われた事よりも、その剣に心奪われていた。

まさに圧巻の一言だった。それは最早、剣というより一つの芸術品である。

剣の事をほめられたリースは照れくさそうにはにかんだ笑みを見せた。

「ありがと。これはね、母さんの剣をモチーフに作ってみたんだ。中々気に入ってるから武器はほとんどこれしか使った事がないのよ」

ひゅんっ、という音を残し剣はリースの手の中から消えてしまった。

「自分で作ったの？」

「うん。魔法で、だけどね」

「魔法……」

やはり異世界に魔法は付き物なんだろうか。にわかには信じ難いが目の前でその現象を見てしまったら信じるしかない。

「で、どうする？ 大人しくあたしを連れて行くか、あたしが無理矢理連れて行くか」

それって結局同じことなんじゃ……。

リースの強引さに苦笑いを浮かべる愛華。だが、そんな思いがすごく嬉しかった。

「でもいいの？ どのくらい掛かるかわからないんだよ？ そんな旅なんか……」

「いいって言うてんでしょ。それについてだから寄って行きたい所もあるし。気にしない気にしない」

そう言ってリースはポンポンと頭を撫でてくる。そんなリースの優しさに涙が込み上げてきてしまった。

「……ありがとう……リースちゃん……」

それから、リースは愛華が落ち着くまで愛華の頭を撫で続けていた。

第九話 友達（後書き）

いよいよリースが出てきましたね。ハピマの再登場キャラはリースが最後ッス。あとは三人の観点から書いていきます。

第十話 四つの魔法技術

マラハ村の近くにある、精霊が住まうと言われている森を抜けるには馬を走らせて一日。人間の徒歩で行けば三日は掛かってしまう。

だが、そんな事は気にもしないで荷物を背負った二人の少女

愛華とリースがマラハ村を出て森に入ってから早二日が経っていた。現時点での二人の目的は、情報収集だった。取り敢えず、マラハ村から一番近い商業の町レイドに向かっている。

レイドはマラハ村から北東の地点にあり、森を抜けるのが一番の近道だった。

「さてと、ちょっと休憩しましょうか」

森を半分くらい進んだ所でリースは後ろにいる愛華に声を掛けた。

「はあ、はあ、う、うん……」

愛華は息も絶え絶えにそう答えた。無理もない。少し前までは普通の女子高生だった愛華が、整備されていない獣道を歩いて平気なわけがない。

ふらふらとおぼつかない足取りでリースに追いつくと、愛華はその場にへたり込んでしまった。

「大丈夫？ 愛華」

「う、うん……何とか……」

リースは背負っているリュックサックを下ろして愛華の顔を心配そうに覗き込む。美しい金髪がゆら揺れている。この華奢な体のどこにそんな体力があるのか、リースは汗も掻いていない。

「ごめんね。村に馬があればとくにレイドについてるのに」
「うっん。私なら大丈夫だから。危険な目にも遭ってないし」

愛華は村から一步外に出れば魔物がうようよしていると聞いていたのに、今の今までそんな類のものには遭遇していなかった。運が
いいのだろうか。

「そりゃそうよ。精霊魔法使ってるんだもの」
「精霊魔法って？」

「魔法にはね、四つの種類があるの。詠唱魔法、精霊魔法、方陣魔法、召喚魔法の四つ。私達が魔物に遭わないのもその一つの精霊魔法のおかげ。精霊魔法は近くににいる精霊に呼びかけて力を貸してもらう魔法なのよ。今は森の精霊に協力してもらって魔物を近づかせない結界を張ってもらっているの」
「へえ、そうなんだ」

愛華は自分の周りを見回してみる。だが、特にそのようなものは見つけれなかった。
そんな事していると、リースが目には見えないわよ、と笑いながら言ってきた。

「ねえ、後三つの魔法ってどんな魔法なの？」

愛華が興味津々といった感じでそう聞いた。そうね、とリースは考える。そして、何かを思いついたように顔を上げた。

「見てもらった方が早いかな。じゃあ、ちょっと見ててね」

リースはそう言って、目を閉じて呪文を呟き始めた。

「『全てを押し流す水の奔流よ。我が下に集え』」

そう言い終えてリースは右手の指を上突き出す。すると、指から一筋の水が飛び出し、頭上にあつた木の枝をボキッと折った。ふう、とリースは一息ついて落ちてきた枝をキャッチした。

「わぁ……」

「今のが詠唱魔法ね。言霊によつて魔力を導きマナと合わせて、自分のイメージ通りに魔法を発現させるのよ。それで次はこれ」

今度は、リースは今の枝を使い、地面に何かを描き始めた。円を描き、文字を書く。そうやって完成した陣に向かってリースは手をかざした。

「『水蛇』」

リースがそう言うと、陣がうつすらと輝きその中から水の蛇が現れた。

水の蛇は陣の上で這い回ったり、愛華の方を向いて下を出したりして愛華をびびらせた後、リースが手を下ろすと同時に陣と蛇も消え去った。

「……リースちゃん」

爬虫類やら虫やらが嫌いな愛華はリースを恨めしそうに睨みつけた。

「あはは、ちょっとしたジョークジョーク。それで今のが方陣魔法。地面や紙に魔方陣を書いて、魔法を発現させるの。空中にも文字が

浮かび上がる形で書けるんだけど、それはめっちゃ疲れるからあたしはあんまり使わないかな」

それで最後に、と言いながらリースは今使った木の棒を地面に突き刺し、再び詠唱を始めた。

「『我、森に敬意を払う者。願わくは、その身を現さん事を』」

リースの詠唱が終わると、突き刺した木の棒を包み込むように光が現れた。

その光はだんだんと形を成していき、身の丈十センチ程の小さな少女が現れた。

少女の背中には羽が生えており、リースが手を差し出すとその上に座った。

その姿はまるで

「妖精……」

「そ。この森の精霊。何かの花の妖精かな。精霊は目には見えないんだけど、召喚魔法で呼び出せばこうして見る事が出来るのよ。あたしの属性は『青水^{せいすい}』だから水の魔法しか使えないんだけど、召喚魔法は属性関係無しに色んな属性の精霊なんかを呼び出せるんだけど……」

「わぁ……、妖精さんだ……」

「まるで聞いてないわね……」

やれやれ、と呆れたため息をつくりース。愛華は漫画や小説の中でしか知らなかった妖精を間近で見て感動していた。

そんな愛華にリースは手に乗った精霊を差し出し、愛華は慌てて手を出した。妖精はしばらく愛華の顔を見上げていたが、やがて安心したようにその手に飛び移った。

「花の妖精は心の綺麗な人にしか近づかないのよね。その点、アイカは大丈夫そう。ちゃんと妖精が心を開いてる」

妖精はうれしそうに手から離れ、愛華の周りをグルグル飛び回っている。どうやら愛華にすっかり懐いたようだ。

「でも精霊魔法と召喚魔法って似てるよね」

「そうね。この二つの魔法の違いは精霊の協力が間接的か直接的かって違いだけね」

愛華は妖精を肩に乗せたまま頭の上にハテナを浮かべている。どういう事かあまりよくわかっていない。

「そうねえ、精霊魔法の代表的な使い方は精霊の憑依かな。精霊を自分の体に降ろして身体能力を向上させるの。召喚魔法は精霊を実体化させて一つの個として協力してもらうかって感じね」

「あ、じゃあリースちゃんに言葉が通じてるのも何かの魔法なの？」
「まあ、そうね。アイカの話聞いた限りだと、アイカは召喚魔法の類でこの世界に來たんだと思うのよね。召喚魔法には元々相手の言葉がわかるように意思疎通の魔法が掛かってるし」

ならば誰が、何のために愛華をこの世界に召喚したのか。今はまだわからない事だらけである。今考えても仕方ない事だが。

だが、そんな説明を聞いていたからかなんだか自分も魔法を使ってみたくなってきた。

「んふふ、アイカも魔法、使って見たいんじゃないの？」

そんな気持ち顔に出てたのか、ズバリとリースが言い当ててき

た。

「でも、私魔法なんて使えないし……、よくわからないけど、そういうのって生まれ持ったものとかじゃないのかな？」

「うん、違うわ。この世界では誰でも使えるようになるわ。才能に左右される事はあるにはあるけど。ま、物は試してね。レイドでアイカも魔法使えるようにしちゃおう」

なんだかさらっとすごい事を言われた。魔法というのは火を出したり水を操ったり危ないものが多い印象があるが、リースが召喚したような妖精を出せるようになるなら使って見たい。気が付いたら愛華はうん、と頷いていた。

愛華の返事に満足したリースは、よしと言って立ち上がった。

「休憩終わり。さあ、レイドに向かうわよ、アイカ」

「うん。じゃあ、妖精さん。元気だね」

愛華がそう言つと、妖精はニコリと笑顔を見せて飛び去っていった。

「レイドまで後少しよ。頑張ろう」

「うん」

愛華とリースは再び歩き始めた。

目指すは商業の町レイド。最初の目的地はもうすぐそこだった。

精霊の森を抜け出て歩く事半日。ようやく目的地が見えてきた。商業の町レイド。そこは世界でも五本の指に入るほど商業が盛んに行われている町であった。

愛華とリースがレイドに辿り着く頃にはもう夕日が沈みかけていて、取り敢えず情報収集は明日からにしようという事になった。

「すごいね、色んなお店がたくさんあるよ」

愛華はキョロキョロと周りを見回しながら歩いている。日が沈みかけているというのに町にはいまだたくさんの店が開かれていた。

この世界に来て初めてまともな町に来たという事もあり、愛華は都会に初めて出てきた田舎者のようにはしゃいでいた。歩き通した疲れなどどこかに吹っ飛んだようだった。

「アイカ、そういうのは明日にして今日はもう宿取ろう。あたし疲れちゃった……」

そんな愛華に対してリースは疲れていた。最早足取りはゾンビのようである。

「あ、うん、そうだね。宿ってどこにあるんだろう？」

「うーんと……。あ、あれだ」

リースは指を差す。そこには看板を掲げている建物があり、多く

の人が出入りしていた。

二人がその中に入っていくと、カウンターの向こうに従業員と思しき男がノートに何かを書いていた。

「すいませーん。二人泊まりたいんですけど」

リースが手続きをしている間、愛華はカウンターの横にある通路を覗き込んだ。

そこにはたくさんの人が酒や料理を食っていて、まるで祭りのような騒ぎだった。どうやらこの宿は酒場も兼ねているらしい。

「お待たせ。あら、酒場？」

宿泊手続きを終えたリースが戻ってきて、愛華と同じように酒場を覗き込んだ。

「うん。そうみたいだね」

「ちょうどいいわ。ここで腹ごしらえも兼ねて、情報収集もしちゃいましょ」

リースは臆さず愛華の手を引いて酒場に入ってしまった。

外からではそうでもなかったが、中に入ると酒臭さやら汗臭さやらがむわつと鼻につく。リースは平然としていたが、愛華は一刻も早くここから抜け出したかった。

適当に空いている席に座り、給仕に何品か注文してリースはあ、と息をついた。

「やっと休めるわね。明日からは馬借りでもっと楽できるから安心してね、アイカ」

「……うん、ごめんね」

謝る愛華に、リースはコツンと愛華の頭を軽く殴った。

「謝るの禁止ー。あたしが勝手に首突っ込んだんだから気にしないでって言うてるでしょー。前も言ったけど、あたしにとっては友達を助けるのは当たり前なんだからね」

「……だけど、お金だってリースちゃんに全部払わせてるのに、私何にもお返しできないし……」

ますます塞ぎ込む愛華に、リースは盛大なため息をついた。

「……あのね、アイカ。あたし昔に、男の子二人と女の子一人とある約束をしたの。一人はお調子者で、もう一人は……うん、まあなんて言うかあたしの許婚なんだけど……って、その話は置いておいて。あともう一人はその許嫁の妹ね」

愛華はその許婚にひどく興味を持ったが、まずはリースの話を聞く事にした。

「その約束っていうのがね、友達に命を賭けて助ける、って子供ながらにそんな約束をしたの。経緯とかは忘れちゃったけど、その約束だけは覚えてるんだあ。あたしは、その約束をずっと貫こうって思ってる。だから友達になってくれたアイカを、命を賭けて助けるって決めたんだ」

「リースちゃん……」

照れくさそうに　だが絶対にという意味を瞳に宿しながらリースは言った。

愛華はまた感動して泣きそうになってしまった。なんだかこの世界に来てから涙腺が緩んでる気がするなあ、と愛華は思った。

そんな時、給仕が料理を運んできた。よほど空腹だったのか、いつも食事前にする祈りもそこに、リースはすごい勢いで料理を掻き込み始めた。

帰る前に、絶対リースちゃんに恩返ししよう。

料理をのどに詰まらせ苦しむリースに、苦笑して水を差し出しながら、愛華はそう思っていた。

第十一話 リースの幼なじみ

「それでリースちゃん。許婚って？」

「う……やっぱそこに行くんだ」

料理もあらかた食べ終わった頃、愛華はさっきから気になって仕方ない事をリースに聞いた。リースは照れて頬を掻いている。

「うんとね、あたしのお母さんとその許婚 アレンっていうんだけどね、でアレンのお母さんが昔一緒に働いていた時があって、それで仲良くなっただって。それでね、あたしが小さい頃お母さん同士が酒盛りしてた夜、その時にあたしのお母さんが酔って勝手に決めちゃったんだ」

「へえ。でも、勝手に決められたって割にはまんざらでもなさそうだけど」

愛華がそう言うと、リースはうつ、と声を詰まらせて顔を赤らめた。

「……そりゃあ、許婚になる前から……あたしはアレンが好き……だったし……」

だんだんと声が小さくなっていつて最後の方はよく聞こえなかったが、なんとなく何を言っているかはわかった。

リースちゃんもちゃんと女の子してるんだあ……。

と、愛華はひどく共感した。

しかし、リースは恥ずかしさのあまり暴走していく。

「……許婚は……むしろうれしかったっていうか……好都合ってい

うか……もうっ！ 恥ずかしいなあ！」

朱に染まった頬に手を当てて、もう一方の手はバンバンとテーブルを叩いている。その度に空の皿が激しく揺れ、コップがひっくり返り残っていた中身をぶちまける。

さすがに危険を感じた愛華は慌てて声を掛けた。

「り、リースちゃん！ 落ち着いて落ち着いて！」

三度目の声掛けでようやくリースは止まってくれた。

「ま、まあ、そんなわけよ。じゃ、次はアイカの話を」

リースの言葉はそこで止まった。テーブルの上に大きな影が落とされている。

愛華はその影の下を辿った。だんだんと視線が上に上がっていく。そこには、酒に酔った大柄な男がニヤニヤ意地汚い笑みを浮かべて立っていた。

「おう、嬢ちゃん達。随分と賑やかじゃねえか。俺も混ぜてくんねえかな」

愛華は部屋に戻ろう、と小声で囁くがリースは気づかなかつたのか先程とは一転し、リースは鋭利な雰囲気ですぐに男の言葉を鼻で笑った。

「お生憎ね。あたし達はつまらない男には興味ないの。何を当たってくれないかしら」

男はその気の強い言葉にヒュウ、と口笛を吹き冷やかした。まだまだあきらめるつもりはないらしい。

「まあそう硬い事言いなさんなつて。見たところ女の子の二人旅なんだろう？ 何なら俺が同行してやってもいいんだぜ？」

そう言つて男がリースに手を伸ばした。

「ふんっ」

バシン、とリースは男の手を払う。さすがにカチンと来たのか、男は両手をテーブルの上に叩きつけた。

「……おい、くそアマ。あんま調子に乗つてつと痛い目見ることになるぜ。こんな風になあつ！」

男は拳を振り上げる。危ない！ と愛華は思わず目をつぶつてしまった。次の瞬間、愛華の耳に入ってくる壮大な転倒音。

「リースちゃん！」

愛華ははっ、と目を見開き立ち上がった。だが、愛華の目に飛び込んできたのは想像していたリースの姿ではなかった。代わりに床にひれ伏しているのはリースを殴ろうとした男の姿。

「り、リースちゃん？ 大丈夫なの？」

愛華は心配してリースの傍に駆け寄つた。そんな愛華に平気平気、とリースは手をひらひらさせる。

「この男のパンチおっそいからさ、軽くないなしてやったら派手にす

ところんじやった」

「こ、このガキが……」

怒り心頭といった様子で起き上がってくる男。リースは挑発的な目で男を見据えた。

「あらやる気？ 女の子にかわされるへなちよこパンチの持ち主じやあ一生賭けても当たらないわよ」

その言葉に呼応するかのように遠巻きに見ていた他の客の野次が飛ぶ。

いいぞ嬢ちゃん！ そんな野郎ぶっ飛ばしちまえ！

いい歳した男がやられっぱなしになってんじゃねえよ！ ねじ伏せちまえ！

一瞬にして酒場内が騒然と沸きあがり、賭けさえも出てくる始末。愛華はおろおろしてリースを見つめていたが、リースは大丈夫、下がってて、と声を掛けた。愛華はしぶしぶながらも数歩後ろに下がる。

他の客がテーブルを下げたのだろうか、リースと男がいる場所にはまるでリングのような空間が出来上がっていた。

「へっ、この俺を怒らせたからにはただで帰れるとおもっんじゃえぞ」

「うわあ、明らかに三流悪役のセリフね、それ」

そんなリースの一言で酒場内がどっと沸きあがる。ますます男の顔が怒りに染まった。

「ぶっ殺す！ 『来たれ』！！」

男がそう唱えると、その手の中に穂が三叉になったトライデントと呼ばれる槍型の魔導具が握られていた。どうやらこの男、魔法が扱えるらしい。酒場内が騒めき始める。

だが、魔法が使えるようが使えまいが関係ない、とでも言うようにリースは表情一つ変えていない。

そんな態度も気に触ったのか、男は腕を引き、リースに向かって思いきり槍の一撃を放った。

明らかに殺意の籠った一撃。もし当れば即死は免れないだろう。

三叉に分かれた槍に貫かれているリースの姿が愛華の頭によぎった。しかし

「おっそ〜い」

貫かれる、と野次馬全員が思った瞬間リースの姿が忽然と消えた。男は突然の出来事に目を見開く。

遠巻きに見ている野次馬には見えるであろう。消えた次の瞬間には、男の背後で青い装飾が施された巨大なハンマーを振り上げているリースの姿が。

「えい」

そんな躊躇もへつたくれもない言葉と共に巨大なハンマーは振り下ろされた。

酒場内に響き渡ったのは雷が落ちたような轟音。野次馬はあっけにと取られてシーンと静まり返っている。

「よいしょつと」

リースが重たそうにハンマーを退けると、そこには白目をむきながら男が失神していた。

静かだった野次馬達がハツと我に返って歓声が上がる。

すげえぜ嬢ちゃん！ 最強だ！

小さいのにたいしたもんだ！

リースはそんな言葉を受け、ハンマーを消し、手を振りながら答えている。

愛華は心配そうな顔をして近づいていった。

「大丈夫？ どこも怪我不い？」

「大丈夫だってば。アイカは心配性なんだから」

リースは笑いながらそう言ったが、腕に軽い切り傷を負っている。愛華は目ざとくそれを見つけた。

「怪我してるじゃない、もう。ちょっと待って、確か薬が……」

愛華はマラハ村から持ってきた傷薬を取り出しリースに塗ろうとしたが、リースはまた大丈夫だって、と言いながら傷口を手で押さえた。

「こんなのすぐ治るから。見てて」

リースが数秒傷口を押さえていた手を離すと、多少の血は残っていたものの、既に傷は塞がっていた。その人間離れた治癒能力を見て愛華は驚きで目を見開いていた。

「これはね、あたしの導力『治癒』。簡単な怪我くらいならすぐに治るわ」

「……何だかこっちの世界に来てから驚かされる事ばかりだよ……」

「さてと、今日はもう休もう。久しぶりに戦ったら疲れちゃった」

そう言った瞬間、リースは人目もはばからず大きなあくびをする。愛華もそろそろ休みたいと思っていたので賛成した。

そして、二人は先程の野次馬達に見送られながら酒場を後にした。

愛華とリースが借りた部屋には二つのベッドとトイレと洗面所があった。愛華の世界での風呂や冷蔵庫はない。リースが言うには、この部屋はまだいい方で、ひどい部屋にはトイレや洗面所がないらしい。

一応この世界でも湯船に浸かるという概念はあるのだが、湯の沸かし方がどうやら違うらしい。科学の発展していないこの世界では当然湯沸かし器なんて物がなく、湯を沸かすには魔法を使うというのだ。

二人が借りた部屋は風呂場がないので、仕方なく洗面所でリースが召喚魔法で炎の精霊を呼び出し、湯を沸かした。二人は濡れタオルで体を拭き、頭を軽く洗う程度にしておいた。その時にリースが悪乗りして愛華の胸を揉んだりしたのはまた別の話。

「ねえ、リースちゃん」

「ん？ 何かしら？」

愛華は備え付けられたベッドに腰掛けながら、濡れた髪をタオルで拭いているリースに尋ねた。ああ、とリースはわかったように言う。

「もしかして、その服きつい？ 特に胸が」

愛華は今、パジャマ代わりにリースの服を着ている。愛華が着ていた服は洗濯し、部屋に干されているので着れない。という事でリースの服を着ているのは当然といえば当然なのだが、いかんせん、リースの服では出るとこ出ている愛華には少々きつそうだ。

だが、愛華は顔を赤くして首を横に振った。どうやらそういう事ではないらしい。

「違うよお。いや違うはないんだけど、私が聞きたかったのはさっき持ってたあのトンカチって前に見せてくれた綺麗な剣じゃなかったみたいけど」

「ああ、正確にはあの剣もハンマーも魔導具じゃないのよ。あ、魔導具っていうのは魔法を使う為の道具の事ね。で、あたしの魔導具はこの指輪」

リースは右手の薬指にはまっている青い指輪を見せた。ランプの光に反射してキラリと光っている。

「これはあたしが思い描いた武器に形を与えてくれる魔導具なの。普通は一つの武器の形にしたりするんだけど、あたしは多種多様の使い方をしたいからこういう力にしてみたんだ。後ね、あたしの場合は特に魔力が多いみたいで常に魔導具が具現化した状態なのよね。まあ、指輪だから気になんないけど」

「へえ、そうなんだあ……」

愛華はまじまじとその指輪を見て感心したようにそう言った。

「だからかな、あの三人あたしには結局勝つ事出来なかったけど」

そう言ってリースは楽しげに笑った。その表情は過去を懐かしんでいるようだった。

「幼馴染達の事？」

「そうね。十二歳まで一緒にいたんだけど、あいつらホントに魔法ヘタクソだったんだよねえ……」

リースのそんな表情を見ながら愛華は、先程から気になっている事を尋ねた。

「ねえ、どうして離れ離れになっちゃったの？」

「うんと、確か母さんの仕事の都合。あたしのお母さんがある国の宝を守る用心棒みたいな事をしてたらしいんだ。それである日泥棒が来て、その宝を盗む時に魔法使って逃げちゃったんだって。それからあたしは親戚がいるマラハ村に預けられて、母さんはその泥棒を追い続けてるらしいんだけど……」

「だけど？」

「盗む時に使った魔法が召喚魔法と方陣魔法を合わせた“複合術式”で、聞いた事も見た事もない呪文と魔方阵だったんだって。で、もしかしたら異世界にでも逃げたんじゃないかって、時々帰ってきたお母さんがぼやいてた」

その話を聞いた瞬間、愛華はふとある事に気がついた。

「もしかしたら、それを使えば元の世界に帰れるかもしれない……」

愛華の呟きに、リースは無理ね、と首を横に振った。

「どうして？」

「確証があるわけじゃないし、それに異世界がアイカの世界だけとは限らないと思うわよ？」

至極尤もである。正論を叩きつけられた愛華ははあ、とため息をついた。世の中そんな簡単にはいかないという事か。

「ま、地道に探せばいいじゃないの。見つかるまでこの世界を楽しみなって。あたしも付き合うしね」

「うん。ありがとう、リースちゃん」

「さてと、もう寝ましよう。明日はアイカの魔導具作りに行つてから情報収集よ」

リースはランプの光を消し、ベッドの中に潜り込んだ。愛華も同じようにベッドの中に潜り込んだ。

久しぶりのベッドの感触に、愛華の意識はすぐに溶けていった。

次の日。早朝から部屋を出た二人は朝食を食べる為に再び酒場に来ていた。二人以外には数人の客がいるだけだ。昨日の活気立っていた雰囲気はまるで嘘のように静かである。

「うーん、朝は静かでいいねえ」

「そうだね。賑やかなのは嫌いじゃないけど、私こういうのも好き」

二人はそんな会話を交わしながらメニューに目を通していた。そんな時である。隣の席から一組の男女の話が聞こえてきた。

「そつえば旅の商人から聞いた話なんだけどな。何でも、次の満月の日に北のリーザリスとリングサークが戦争をおっ始めるんだと」

リースの動きが止まった。目を見開いてその男女の会話に耳を傾けている。

愛華はそんなリースを不思議そうに見つめている。

「ええ？　じゃあ、ここも危ないんじゃないの？」

「いや、ここからは結構距離があるし、戦争には巻き込まれないらしいぜ」

リースはメニューを置いて立ち上がる。そして、その男女の席に向かって歩いていった。

「り、リースちゃん？　どうしたの？」

愛華も慌ててリースの後を追いかける。リースは男女の席に着くと思いきり両手をテーブルの上に叩きつけた。男女は突然の事に驚き、訝しげにリースを見た。

「ねえ。その話本当？ リーザリスとリングサークが戦争するって」
「あ、ああ。本当だよ。商人がリングサークで仕入れた武器を売ってた時に兵士から聞いたんだってさ」
「そんな……」

ふらふらとその場に座り込んでしまうリース。愛華はその男女に詫びを入れると、リースを支えて席に戻った。

常に元気だったリースの様子がおかしい。それだけで愛華は不穏な空気を感じていた。

「いったいどうしたの？」

リースを椅子に座らせ、愛華は優しく声を掛け、リースの顔を覗き込んだ。重々しくリースは口を開いた。

「……あたしに三人の幼なじみがいるって事は話したわよね」

「うん」

「今聞いた、リーザリスっていう国とリングサークっていう国に三人が住んでるんだ」

「え？」

まさかその幼馴染同士で争うという事なのだろう
いや、しかしかし

「その三人って同じ所に住んでるんじゃないの？」

「ううん。昨日話した泥棒の事件はね、あたしの母さんとアレンとアレンの妹のお母さん、それともう一人のお父さんが当事者なんだ。母さん達三人は今も泥棒を追い続けてる。それで、そのもう一人もあたしと同じような理由でリーザリスに移住したの」

リースは力なく頭を下げた。愛華は慰めたくとも、どうすればいいのかわからない。

「リースちゃん……」

愛華はそう声を掛ける事しか出来なかった。
だが

「ごめん。アイカ」

リースはそう言って勢いよく立ち上がった。愛華は唐突な展開について行けていない。

「あたし、行かなきゃ!」

「まさか戦争止めに行くの? 無茶だよ! 一人の力じゃどうにも出来ないよ!」

愛華は必死にリースを引き止めた。だが、リースは愛華の言葉を聞いていない。

「約束したのに、一緒に行けなくなっちゃった。

ホントにごめん。もしよかったら、アイカはここで待ってて。出来るだけ早く帰ってくるから。その時、まだアイカがここにいてくれるんだったら、今度はちゃんと一緒に行こうね」

「駄目! 駄目だよ! 友達をそんな所に一人で行かせられない!」

愛華は両手を広げてリースの行く手を阻む。リースは辛そうに顔を歪めた。

「お願いだから、行かせて。あたしはあの三人を止めなきゃなら
ないの」

「絶対駄目！　もしどうしても行くって言っただったら……」

愛華はリースの目をまっすぐに見据えた。

「私も一緒に行く！」

「っ！」

愛華がそう言い放った瞬間、リースは驚き、愕然とした。

「……そう言ってくれて、ホントにうれしい。でも、危険よ？　戦
地に行くんだから命の危険が常に伴うのよ？」

リースは搾り出すかのような声で愛華に言った。　本当のところ、
愛華は怖いと思っていた。ただの少女である愛華が戦場に行っても
リースの手伝いをするどころか、足手まといになってしまっだろう。
たとえ魔導具を作っても一朝一夕で強くなれはしないし、そんな時
間もない。

しかし、それでもリースを一人だけで行かせる事なんて、愛華に
は出来なかった。右も左もわからないこの世界で、リースはすごく
親切にしてくれて、一緒に旅をすると言ってくれたのだ。

これは、愛華にとってそんなリースへの恩返しでもある。尤も、
恩がなくとも愛華は友達の為なら一肌も二肌も脱ぐ性格なのだが。

「……怖いけど、大丈夫。一生懸命がんばるから」

リースは愛華の決意に満ちた眼差しを見た。駄目だと言ってもつ
いてくるという目だ。

リースは諦めたようにため息をつき、そして笑顔を見せた。

「よし、わかった。一緒に行こう。愛華はあたしが絶対を守る!」

そして、二人の少女は駆け出した。戦争を止める為 延いては
幼馴染の為。

「あ、そうだ。あの、どうもありがとうござい あれ?」

愛華は情報を教えてくれた男女に礼を言おうとしたが、既に二人
の姿はなかった。

「アイカ! 早く行くよ!」

愛華は不振に思いながらもリースの後を追いかけた。

第十二話 謎、もう一人の自分

商業都市レイドから数百キロ離れたキグ草原という場所に愛華とリースはいた。

愛華は猛烈に走る馬の上に跨り、その馬の手綱を握っているリースの腰にしがみついている。

向かう先はリースの許婚がいるというリングサーク神王国。レイドから一週間ほど馬を走らせた場所にリングサークはあった。

レイドで馬を借り、走らせてから三日目。まだまだ時間が掛かりそうな距離に、リースは焦っていた。

やがて馬の体力に限界が来たのか、だんだんとスピードが落ちていくがリースは気づいていないようだ。

「り、リースちゃん！ ちょっと、ちょっと待って！」

「なに！？ アイカ！」

風を切る音に邪魔されながらリースは大声で聞き返した。

「馬が疲れてるよ！ そろそろ休憩にしなきゃ！」

「何ですって！ この馬！ もっと根性見せなさいよ！ じゃなきゃ馬刺しにして食ってやるわよ！」

リースは焦りすぎて物騒な事を言い始めている。心なしか馬のスピードが上がったように感じた。

だが、さすがに走れなくなったら困るので愛華は慌ててリースを止めた。

「焦っちゃ駄目だよ、リースちゃん！ 落ち着いて！ とにかく今は馬を休ませてあげよう？」

「でも……」

「焦りは禁物。リースちゃんも少しは休まなきゃ、ね？」

愛華の言葉にリースはしぶしぶ頷いて、馬のスピードをゆっくりと下げていく。

近くにあつた泉で馬を止め、愛華達も馬から降りた。

「はぁ……」

水辺に座つてため息をつくリース。その隣に愛華が座り、心配そうにリースの顔を覗きこんだ。

「大丈夫？ リースちゃん」

「うん、まあね……」

と、言いながら全く大丈夫そうではない。

「ああもう！」

リースはイラついたように美しい金髪を掻き乱し、手足を投げ出して寝転がった。

「どうしてこんな事になっちゃったのかなぁ……」

「……どうするつもりなんだろうね、リースちゃんの幼馴染達」

リースの問いには答えず、逆にそんな事を言う愛華。リースは真剣な表情で呟いた。

「……きっと戦うんだろうなぁ、あの二人。それが男だ、とか何とか言つて。バツカみたい」

リースの呟きは空に消えていく。愛華は何も答える事が出来ない自分を齒がゆく思った。

もし、優真と優音がいつもの喧嘩ではなく、殺し合いをしようとしているなら自分はどうするのだろう、と愛華は考えた。

きっと、リースちゃんみたいに無我夢中で止めるだろうなあ。

愛華は水面に移る自分の顔を見ながら、やりきれない思いを感じていた。

そんな時である。

「ほう、もうこんな場所にまで来ていたか」

「え？」

声のした方を振り向くと、そこには漆黒のローブに身を包んだ人物が立っていた。

声と背丈からして男らしいが、フードを目深に被っているのによくわからない。

「誰よ、あんた？」

素早く立ち上がったリースは愛華を背に隠し、警戒しながら男を睨みつける。

リースちゃん……震えてる……？

リースは昨日見せた勇猛な姿ではなく、目の前の人物に対し怯えているようだった。

「一目見て、私とお前の力の差を悟ったか。中々優秀なようだ。さて、死にたくなければ、その娘を引き渡してもらおうか」

男は突然愛華を指差し、そんな事を言い出した。訝しく思いなが

らリースは小声で愛華に訊ねる。

「……愛華、この男と知り合い？」

「そんなわけではないよ。この世界でリースちゃん以外に知り合いなんているわけない」

「だよねえ。 その変な人。アイカはあんたなんて知らないって言ってるわよ」

リースは男にそう言い放つが、男はふつ、と一笑するだけだった。そんな態度が癪に障ったのか、リースは青い長剣を出現させ、臨戦態勢を取った。

「やる気か？ 私とお前とでは勝負にはならないぞ」

「言つとくけどねえ、あたしはそう簡単にはやられないわよ！ あたしはあの 」

「知っている。八賢者の一人、メイリン・ベルティオーの娘、リースミリス・ベルティオーだろう？ だから何だと言うのだ。お前の実力は母の足元にも及ばない」

その言葉でいよいよリースがキレて、男に向かって駆け出した。

「やってみなくちゃ、わからないでしょうが！」

リースは長剣を振り上げ、男に切り掛かる。

しかし、男は軽く体をずらしただけでリースの斬撃を避けた。後を追いつ、逆袈裟に切り上げるがまた避けられる。

切る、避ける、突く。だがかわされる。何度も同じ事を繰り返すがそれでもリースの攻撃は当らない。

埒が明かないと感じたのか、リースは男と一旦距離を置くと呪文の詠唱を始めた。

「『集え、流水よ。我が敵を穿つ槍となれ』！」

リースの詠唱で泉の水が槍の形を成し、無数の槍が男に向かって放たれた。

だが

「『光あれ』」

水の槍は男を貫く前に蒸発して消えてしまった。

いつの間にか、男の手には黒い短杖が握られている。恐らく何らかの魔法で相殺させたのだろう。

「ならこれはどうかしら！」

リースは既に次の攻撃態勢に入っていた。

後ろにある泉に手を浸からせ詠唱を始める。

「『水の精霊神の眷族である泉の精霊よ。我が力を糧とし、その身を現し給え』」

長い詠唱を終えると、その泉から巨大な水しぶきが高く舞い上がった。

水しぶきの中から出てきたのは美しい女性。だが、人間のそれとは全く違う。青い髪、青い肌、全身の全てが水で出来ている精霊がそこにはいた。

その精霊は妖美に微笑みながら、リースの後ろに降り立った。

「召喚魔法か。果たしてどれほど役に立つのか……」

「黙って受けてみなさい！ 『放て』！」

リースの命令で精霊は両手の指先を男に向ける。そして、そこから超高密度の水弾が連続で放たれた。

あまりの激しさに土埃を巻き上げ、男の姿が目視出来なくなる。きりのいいところでリースは水弾を止めさせ、土埃が晴れるのを待った。

だんだんと土埃が晴れていき、そこにいたのは

「うそ……」

リースの全力の攻撃を受けたにも関わらず、全くの無傷で男は立っていた。

「ふむ、こんなものか。次はこちらからいくぞ」

男は地面に手を置き、詠唱を始めた。

「『来たれ、大地の精霊。敵を葬る気高き戦士よ』」

男の呪文でリースの周りの地面から土で出来た甲冑が現れた。その数五体。どうやら男は、自分は高みの見物を決め込むようだ。

「なめるんじゃないわよ！ 『迎え撃て』！」

リースは精霊に命令し、自らも甲冑を迎撃しようと立ち向かう。切り、払い、突く。甲冑が追いきれない速さでリースは立ち回っていた。

だが、先の魔法で魔力を消耗していた為か、徐々に押され始めてしまう。

「ああ、もう！　なんて硬いのかしら！」

甲冑が硬すぎてあまり致命打にならない。やがて、一体の甲冑の拳が精霊を捉え、弾けるように消し去られてしまった。状況は一对五。明らかに勝ち目はない。

「逃げて！　リースちゃん！」

それまで不安そうに見つめていた愛華だったが、我慢出来なくなったのか涙ながらにそう叫んだ。だが、それでもリースは止まらない。

「ぐっ！」

リースの顔が苦痛に歪む。甲冑の拳が、リースの腹を捉えていた。

「リースちゃん！」

「……平気だって。頑丈だけが、あたしの取り柄なものね」

ふらふらと甲冑達に向かっていくリース。それでも男は容赦しなかった。

「殺れ」

無常な男の声が、愛華の耳に届いた。弾かれたようにリースを見ると、周りを甲冑達に囲まれていた。

「だめ……」

愛華はゆっくりと一步を踏み出した。

「やめて……」

甲冑達の振り上げる拳がやけに遅く見えた。

「リースちゃん……」

ニヤリと、邪悪な笑みを浮かべている男の顔が目に入る。そして、甲冑達の拳が振り下ろされた。

「やめてええええええええええ！」

愛華の聲に答えるかのように甲冑達の動きは止まった。いや、止めさせられた。突然足元から発生した氷によつて。

その氷は瞬く間に甲冑達の全身を覆い尽くすと、やがて亀裂が入り粉々に砕け散った。

「すばらしい……」

男は誰に言うわけでもなくそう呟いた。

辺りは一瞬にして氷の世界に変貌を遂げていた。大地も、泉も、
 空気でさえも。そして、その中心にあるのは愛華。

⌋
⋮
⌋

愛華は虚ろな目でリースを見つけると、安心したように笑顔を見せ、そのままバタリと倒れてしまった。

「アイカ！」

リースは痛む足を引きずりながら、愛華に近づきその体を抱き起こした。

「アイカ……」

「あ、リースちゃん……。大丈夫だった？」

「バカ。こっちのセリフだって」

「うん……。ごめんね……」

そこでリースはハツとして、辺りを見回した。

「いない……？」

いつの間にか男は消えていた。突然の出来事に驚いて逃げたのだろうか。

「とにかく、一番近い村まで行かなきゃ。リングサークに行くのはそれからよ」

リースは泉の近くでうろついていた馬を捕まえ、自分と愛華を乗せて走り出させた。

気がつくと、愛華は暗闇の世界にいた。なんとなくこれが夢だとわかる。明晰夢というやつだろうか。

それにしても何もない。どこまでも暗闇が続く世界。何故こんな夢を、と思った時後ろから声がかかった。

「アイカ」

「!？」

愛華が驚いて振り向くとそこには

自分がいた。全く同じ顔。なのに纏っている雰囲気はぜんぜん違う。

「こうして夢の中で会うのは初めてじゃの」

容姿は全く同じなのにしゃべり方やしぐさがどこか古臭い。

「あなたは……？」

「そなた達と似て非なる存在、とでも言っておこうか。そなたは気づいていないだろうが、私とそなたは昔から共にいる」

突然そんな事言われても、と愛華は困り顔になった。だが、半分夢だと思つて割り切っている。

「ふふ、今は私の存在を夢だと思つていい。だが、この先そなたには過酷な運命が待っている。これだけは覚えていて欲しい。私とそなたは共にいる」

「私とあなたは共にいる……」

「そうじゃ。そなたの願いが私に届いた時、私はそなたの思いに答

えよう」

何の事を言っているのかさっぱりわからない。そんな時、夢の中の意識が曖昧になってきた。夢から覚めようとしているようだ。

「あと、これだけは言っておこう。そなたの探し人はそなたの向かう先にいる」

その言葉を聞いた次の瞬間には、愛華の意識は完全に闇に吞まれていた。

「ん……」

「あ、アイカ！ 大丈夫！？」

ゆっくり目を開けると、目の前に心配そうなリースの顔があった。起き上がって周囲を見回すと、どこかの部屋のようだ。

ここはどこ、と聞こうとしたが、突然ガバツとリースに抱きつかれた。

「よかったあ〜〜！！ アイカ、丸一日眠りっぱなしなんだもん」

「え？ そんなに寝てたの？」

窓の外を見てみると日が高く昇っている。どうやら昼過ぎくらい
のようだ。

「そういえばリースちゃん。ここはどこ？」

「あ、ここはね、マーレっていう町の宿屋。レイドとリングサーク
の真ん中辺りかな」

そう説明するとリースはまた心配そうな顔で愛華を見つめてきた。

「ねえアイカ。ホントに大丈夫？ あんなに強力な魔法使ったから
倒れちゃったんじゃないの？」

リースは何故かそんな事を言ってきた。愛華自身魔法を使った覚
えはない。というか、使えない。

「え？ 魔法？ 私そんなの使ってないし、使えないよ」

「えーうそお。あの時、あたしがさすがにヤバい！ って時にアイ
カが魔法で助けてくれたんだよ。こう氷がそこら中にドババツと」

リースの説明は抽象的過ぎていまいちよくわからない。

とにかく、リースが言うには謎の黒服男を追っ払ったのは愛華だ
ったと言う。

「私が、魔法を……」

と言われても、以前リースが言っていた魔法を使うには魔導具と
いう物が必要らしいし、愛華はそんなのは持っていない。

「まあいいや。助かったのは事実だし、二人とも無事だったんだし」
それで済ませてしまいうリスはけっこうアバウトである。ふと、
愛華はさっきまで見ていた夢を思い出した。

私はそなたと共にいる

リスを助けたのは自分の中にあるもう一つの存在だったのだろうか。

そんな事をぼんやり考えていると、リスはよし、と立ち上がった。

「アイカ、あたしもうちよい情報集めてくるね。アイカはゆっくり休んでて」

「え、私ならすぐ行けるよ。急ぐんじゃないの？」

「ううん、リーザリスとリングサークの戦争はもう少し先みたいなのよ。だからそれまでにどうやって止めるか考えてみる。
それとついでにアイカの魔導具もここで作っちゃおう」

それは嬉しいが、そんな事をしている余裕があるのだろうか。
そんな不安が顔に出たのかリスは大丈夫大丈夫と笑って見せた。

「それじゃ、また後でね」

ボタン、とリスが扉を閉めて足音が遠ざかっていく。

部屋の中は静かである。何の雑音も聞こえない。

そんな中で愛華は先ほどの夢を思い出していた。

妙に現実感があつた夢。夢だけど夢じゃない。自分の中にもう一つの存在。不思議ともしそんな人格があっても怖くはない。

リスが危なくなつた時、愛華が助けたとリスは言っていたが、正直覚えていない。

無我夢中で、ただ助けたくて。気がついたら叫んでいて、次の瞬

間には意識が途切れかけていた。

「リースちゃんを助けてくれたのは、あなたなの……？」

そう自分の中にいるもう一つの存在に話しかける。だが、返事は返ってこなかった。

「では、準備はよろしいですか？」

「はい、お願いします」

愛華がそう答えると、黒いマントを羽織った魔導士は詠唱を始めた。

愛華が目覚めた次の日。魔導具を作るため、愛華とリースは町の魔法屋に足を運んでいた。

リースの集めてきた情報によると、全面戦争はあと二週間後。満月の日らしい。

それまでにする事は、リーザリスかリングサークに行き出来れば戦争を止めさせ、最低でもリースの幼なじみが戦い合うのを止める事である。

ならば一日でも早く行かなければならないのだが、愛華が護身程

度に魔法を使えばいいとリースは考え、今は魔法屋に立ち寄っている。

「わわ！？ 足元が光った！」

愛華の足元に描かれている魔方陣が光り輝き、そこから八つの光が現れた。

その中の一つ、蒼い光が愛華の前にふよふよと漂ってきた。

「アイカ、それに手をかざしてみて」

「え、こ、こう？」

言われた通り手をかざしてみると、光が手を介して愛華の体の中に吸い込まれていった。

その光が体の中に入った瞬間、不思議な感覚が愛華を襲った。まるで広大な海の中をさ迷っているかのような。だが心地よい安らぎを感じる。

「儀式終了です。あなたは『蒼水』の属性みたいです」

「やった！ 色は違うけど、アイカと同じ水の属性だわ！」

「そう……すい？」

なんだかよくわからない属性だ。リースからは一般常識として歴史やら魔法やらの事は聞いていたが。

リースは『青水』で愛華は『蒼水』。同じ水系統だが色が違うようだ。

水の属性は主に回復に特化している。元々戦いに肯定的ではない愛華は水でよかったと安堵した。

「それじゃアイカ。宿屋に戻る。これから数日は魔法の練習よ」

「うん」

愛華は自分の中にある属性の不思議な感覚を感じながら、リースと宿屋に戻っていた。

全面戦争開始まで、残り二週間。優真、優音、愛華。それぞれの歯車が徐々に噛み合っていく

第十二話 謎、もう一人の自分（後書き）

さて、愛華編も終了しました。次回は優真に戻り、いよいよリングサーク潜入編。お楽しみに！

第十三話 リングサークへ

「んじゃ、そろそろ行くか」

「ああ」

朝。日が昇る頃。澄みきった空気がとても心地よい。

これから戦地に赴くとは思えないような気持ちのいい朝だ。

全面戦争が開始されるまで一週間を切り、魔法の修行を終えた優真、ジュード、レンの三人。

もはや一刻の猶予もない。エアはあんなでも騎士隊隊長なので隠密行動には参加しない。

優真にとっては戦争よりも愛華と優音を探す方が大事なのだが、これが上手く行けばエアがこの国の王に掛け合って二人の搜索に協力してくれると言う。

だからこんな事はさっさと終わりにしたい。

「それにしても、リル、見送りには来るって言ってただけだな」

優真の魔法修行中、ちよくちよくリルが手伝いに来てくれていた。相変わらずリルの素性は知れないが、何か訳があるのだろうと思っっている。

そんな事を言うと、心配するな、とジュードが優真の肩に手を置いた。

「嫌でも会う事になるさ。さ、まずは城に行くぞ」

ジュードがビシッとここからでもよく見える城を指差した。

この国リーザリスは城を中心に三重の円にして成り立っている。

住居はそれぞれ身分によって分けられる。城に最も近い円は上流階

級、最も遠い外側は下流階級、ここはいわゆる貧民街というやつだ。そしてその間にある円が中流階級である。

ジュードの家は上流階級と中流階級の間にあり、ギリギリ上流階級と呼べなくもないかもしれないような気がする。

そしてこれからその上流階級の住居を通って城に向かうのだが

「なあ、なんで城に向かうんだったっけ？」

「ユウマさん、出発前に精霊の恩恵が得られるというお祈りをしに行くんですよ」

レンにそう言われてそういえばそうだったけな、と思い出した。

リーザリスは昔から戦場に赴く戦士の為にある儀式が行われている。それを行うとレンが言った通り精霊の恩恵が得られるのだそうだ。

形式的には戦地に向かう戦士が精霊の前で何やら言って祈るだけらしい。しかし、その精霊は本物ではなく、この国の姫が代わりという話だ。

ジュードいわく、この国伝統の精霊魔法らしいが、それほど効果はないという。どちらかというと、儀式よりもこの国の姫を見るほうが大事なのだと力説していた。その後、レンにぶっ飛ばされていたが。

「ま、ちゃっちゃと済ませようや。あんまし時間もないからな」

「ダメだよ、ジュン君。お祈りはちゃんと受けなきゃ。効果は一応あるんだから」

レンが一応なんて言うとは、やはりあまり期待は出来ないのかもしれない。

そんな話を話している内に、上流階級の住居を抜けていたようだ。既に城は目と鼻の先である。

城の周りは防衛の為か堀になっている。城に入るには上流階級の住居の東西南北にそれぞれある橋を渡らなければならない。

ジュードの家は東にあるので一番近い東の橋から入る。

近くで城を見るとより一層高く見える。雲を突き抜けられるのではないかというくらいに。

橋を渡りきると門番らしき騎士が二人直立不動で立っていた。

「はいはい、これ許可証ね。はいはいどうも」

ジュードは許可証をヒラヒラさせながら城の中へと入っていつてしまった。

というか、騎士はジュードの許可証を一瞥するだけだった。もうちょっと入念にチェックとかしないのだろうか。

「ユウマさん、どうしました？ 行きますよ」

「あ、ああ。悪い」

先に行ったレンに促され、優真は小走りで二人の後を追いかけた。

見掛けもでかけりや中も広い。

城に入った優真の最初に感じた感想だった。

まっすぐ進んでいるだけでもう五分は経つ。一度曲がったら確実に迷う。そんな妙な自信があった。

「ここだ」

ジュードが指差したのは三メートルはあるかと思われる巨大な扉。どうやら着いたようだ。

「よし、ユウマ。中に入ったらとりあえず膝ついて頭だけ下げてな。そしたら向こうが勝手にやってくれるから」

「ああ、わかった」

王様とか偉い人にあつても何を話せばいいかわからない。まあ適当に聞き流せばいいだろう。

「あと、姫さん見ても驚かねえようにな」

「驚く？ そんなに綺麗なお姫様なのか？」

「あーまあそうだけどそうじゃないと言うか……」

なにやらジュードの歯切れが悪い。心配しなくともジュードではないのだから綺麗な人見て飛び付いたりなどしない。

そんな失礼な事を考えていたが、ジュードはまあ入りゃわかるとだけ言つて扉をノックした。

「失礼します。ジュード・ローゼンクロイツです。レン・グラッド、キリタニユウマの二名を連れて参りました」

「入りなさい」

扉の向こうから男の声が聞こえてきた。恐らくは王なのだろう。優真は少しばかり緊張してきた。

巨大な扉を開いて中に入っていくと、銀髪の男性が王座に座っていた。

男性は四角い眼鏡をかけ、その奥にある眼は見られているだけで萎縮しそうになるくらい鋭い。

だが、優真には最近王と同じような銀髪をどこかで見た事があるような気がしていた。

「三人とも。よく来てくれた。そして隠密部隊への加入、感謝する」

そう言って王は深々と頭を垂れた。王に頭を下げられるとは、なんだか妙に恐縮してしまう。

王族というのはやたら尊大で嫌な連中という印象だったが、この王はずいぶんと腰が低い。というより、頭を下げるべき相手とそうでない相手を分けていると言っべきか。

王は頭を上げると切れ長の目を優真に向けてきた。

「そなたとは初めて会うのか。言うまでもないが、この国を治めているレータ・グレス・リーザリスだ。話はエアから聞いている。一般人のそなたを巻き込んでしまつてすまなかつた」

「い、いえ、そんな事ないですけど……、でもこれが無事に終わつたら」

「わかつている。そなたの人探しに全面的に協力しよう」

それを聞いてホツと息をつく優真。エアの性格が性格なだけに言い忘れてたんじゃないかと疑っていた。

「さて、あまり時間もない。これよりそなた達は儀式を受け、すぐ

にリングサークに向かってもらう事になる」

「はい」

ジュードが膝をついたまま三人を代表して答えた。そこにはいつものおちやらけたジュードはいない。

「リングサーク城侵入後はジュードの判断に任せる。あらゆる策を以て確実に戦争を阻止せよ」

「はい」

「よし、では儀式を始めよう。リーレイス」

王は王の間のもう一つの扉に声をかけた。恐らく儀式での精霊役の姫だろう。

「失礼します」

想像していたよりも綺麗で透き通った声

「ん？」

というか、王の銀髪と同じくごく最近どこかで聞いたような……。

下に向けている視線を少しずつその姫の方に向けていくと

「……？ りっ」

そこには優真のよく知るリルがきらびやかなドレスに身を包まれて立っていた。

「『 我は願う。この者に加護があらん事を』」

レンの体が薄く輝き、やがて消えた。儀式が終わったようだ。儀式はそれぞれ一人ずつ行う。既にジュードは終わり、残るは優真のみ。

そして、リル リーレイス姫が跪いている優真の前に来た。

「……では、始めます。『水に属する全ての精霊よ。我は水の精霊の長たるウンディーネなり』」

いつものリルではない。今はリーレイス姫としてここにいるからだろうか。

ジュードが言っていた言葉の意味がようやくわかった。レンも知っていたのなら教えてくれればよかったのに。

そんな事を考えながらも儀式は続く。

「『我が力を糧に、この者の体を守り、心を癒し、生きてこの地へ生還させよ』」

この儀式の言葉を聞くのは三度目。だが、リーレイス姫の声はどこか悲しげだった。

「『我は願う。この者に加護があらん事を』」

儀式は終わった。特にどこも変わったところはない。ジュードの言った通りだった。

優真がゆつくりと顔を上げてリーレイス姫を顔を見た。

リーレイス姫は優真と目が合った瞬間だけふつ、と優しい表情になった。この時だけは、優真の知っているリルだ。

だが、次の瞬間には不安そうに顔を伏せた。

「……絶対に、帰ってきてください」

リーレイス姫は優真にだけ聞こえるように、そう言った。

優真はリーレイス姫に何か言葉を返そうとしたが、リーレイス姫は背を向けて王の隣へ戻ってしまった。

「それでは王、行つて参ります」

「ああ、必ず生きて戻りなさい」

ジュードは王に一礼すると部屋の扉に向かって歩き出した。レンもその後続く。

優真はまだリーレイス姫に聞きたい事があったのだが、話しかける事はしなかった。

リルには無事に帰ってきたらそれから聞けばいい。

そう思いながら優真は扉を開けて王の間を出た。

城を出てからというものの、優真は終始無言だった。

ジュードはそんな事はお構い無しに口笛なんか吹いている。レンは優真とジュードの顔を行ったり来たりしながらおろおろしている。

「さーて、これから馬に乗ってここを出るわけだが、その前に作戦を」

「待て」

優真はドスの効いた声でジュード言葉を遮った。さすがにこの話題はスルー出来ない。

「なんでリルがこの国の王女だって教えてくれなかった？」

「あ、あのですね！ 私もジュン君も意地悪で教えなかったんじゃない、リレーイス様に頼まれたんです！」

優真が少し怒り気味なのに焦ったのか、レンが慌てて説明し出した。

「リレーイス様はユウマさんの事を友達だと思ってるんです。リレーイス様は自分が王女だと知られると、友達でいられなくなる事が怖かったんです」

確かに普通の一般人なら王女を前にするだけで萎縮してしまうか

もしれない。だが優真は普通の一般人ではない。

「……俺はリルが何者だろうが、友達だと思ってる」

「なら、帰ったらそれを言っちゃんな。きつとリールン喜ぶから」

「っーか、お前は王女に対してそんなフレンドリーでいいのか？」

ジュードはリルとあの路地裏で初めて会った時から無遠慮だった気がする。

だが、ジュードはいいのいいの、とヘラヘラ笑うだけだった。

「とまあ、話しも一段落したところで、作戦を説明するぞ」

ジュードはふふふ、と何やら怪しげな笑みを浮かべている。
またろくでもない事を考えているに違いない。

「作戦名！！　あなたのお国を没落させちゃう作戦！！！」

……………。

「で、レン。あっちに着いたら俺はどうすればいい？」

「そうですね。ユウマさんは『封印』の導力を使って敵の魔法を無力化する事に集中してください。その隙に私が」

「ああん、放置プレイはやめてー！！！！　しかもそこに俺が入ってないのがさらに悲しすぎるー！！！！」

先に歩き出した優真とレンを、ジュードは半泣きになりながら追いかけてきた。

王に謁見していた時のジュードと目の前の半ベそかいているバカが同一人物だと思えない。

「で、俺はレンの言った通りにすればいいのか？」

曲がりなりにもジュードがリーダーだという事には変わりない。
一応ジュードの意見も聞いておいた方がいいと優真は判断した。

「残念。そんなに楽は出来ないな。ユウマもきっちり戦ってもら
ぞ」

楽をしようとは思ってなかったが、ジュードとレンに任せていれ
ば大丈夫だと思っていた。だが、どうやら簡単に事は進められな
らしい。

「リングサークには八賢者の子が二人もいる。アレン・レビィとベ
ルブランカ・レビィ。どちらも強い。俺が二人を足止め出来りゃい
いんだが、そうもいかねえだろうな」

いつも自信過剰なジュードが足止めすら出来ないと言い切るとは、
よほど厄介な相手なのだろう。

「なら、三人でその二人を倒すのか？」

「いや、俺がアレン、れっちゃんがベルの相手をする。ユウマはリ
ングサークの王を捕まえてくれ」

「俺一人でか!？」

魔法を学び始めてまだ一ヶ月も経っていないそんな大役が勤まる
のだろうか。

相手が王なら恐らく魔法も一級品。優真の『封印』がどんな魔法
も打ち消すとはいえ、策を講じられれば通用しないだろう。

「まあ危なくなったら、『黒闇』使え」

「『黒闇』か……」

『黒闇』。優真のもう一つの属性。あの異様な力は、出来ればあまり使いたくはない。

『白光』と『黒闇』。この二つの属性を使いこなせば、八賢者すらも越えるとエアは言っていた。

別に最強になるつもりはないが、身を守るためには使いこなすしかない。

「ねえ、ジュン君。本当にいいの？」

それまでずっと黙っていたレンが、突然口を開いた。

「リングサークにいる八賢者の子って、ジュン君の幼なじみなんでしょう？」

「なっ！？　おい、初耳だぞ！」

優真は驚いてジュードに詰め寄るが、ジュードは涼しい顔でそうだな、と言っただけだった。

「お前は幼なじみと殺し合いすんのかよー!!」

「殺されるつもりはないし、何より殺すつもりでいかないとこっちがやられる。れっちゃんも、そういうつもりで戦わないと勝てないぞ」

「うん……」

そう言うものの、レンはあまり気が進まなそうだ。

ジュードの考えが優真には理解できなかった。旧友と戦おうとしているのにどうしてそんな冷静でいられるのか。

「ユウマが気にする事じゃない。俺はリングサークと戦争すると決

まった頃から覚悟してた。多分、あいつらもだろう」

「ジュード……」

その時のジュードは、無表情なのにどこか悲しそうだった。覚悟していたと言っても割り切れない部分もあるのだろう。戦争はどこの世界でも無情だ。

そんな話をしている内に、貧民街を抜けていたようだ。朝も早いせいか、貧民街の通りには誰もいなかった。

貧民街の終わりの所に見上げるほどの門がそびえ立っていた。この門がリーザリスを守る壁という事らしい。

「おー、これがリーザリスの外かー」

目の前に広がる広大な草原。所々に生えている草が風に揺れている。

草原の向こうには森が見える。恐らく最初に優真がいた森だろう。元いた世界では地平線なんて見られなかった。優真は初めて見る地平線にちよつと感動していた。

「そつえばユウマさん。外に出るのは初めてでしたね」

「ああ。ずっと魔法の修行だったし、外に出る用事もなかったしなあれ？ ジュードは？」

「今、向こうの馬小屋に馬を取りに行ってます」

レンの指の先には、馬小屋らしき建物からちやうどジュードが馬を三匹引き連れて出てくるところだった。

「はいはい、二人とも、乗って乗って」

「うん」

「……」

レンは乗り慣れているのかスルツと簡単に乗ってしまった。
優真は馬の体に手を当てて思った。

馬に乗った事ねえ！

「情けないな、ユウマよ」

「あはは……」

ジュードはやれやれ、と手を広げ、レンは苦笑している。

「仕方ねえじゃん！ 馬なんて乗った事ねえんだよ！！」

優真はなんだか恥ずかしくなってきたて叫んだ。

結局優真はジュードの後ろに乗ってリングサークへと向かったのだった。

第十四話 侵入の前に侵入

闇。漆黒の暗闇の中、蠢く人物が二人。その二人がいる空間だけ空気が異様に澱んでいる。

二人はそれぞれ漆黒の闇と同じ色のローブを着込み、顔はわからない。背格好から恐らく男。

二人の内一人は細身の剣を床に刺し、その床には紫に輝く魔方陣が展開されている。

「準備は、整った」

剣を床に突き刺している男が喜びを噛み締めながら呟いた。

「……いよいよやるのか？」

もう一人の男が人間とは思えないほど低く、おぞましい声で、歓喜に打ち震えている男に問うた。

その問いで剣を持った男はピタツと動きを止め、もう一人の男の方に振り向いた。

「ああ」

ニヤリ、とフードの中から大きく口元が歪むのがかいま見えた。

男は剣を抜き、それと同時に魔方陣を消し去ると、闇の中に向かって歩き出した。

「後は、時が来るのを待つだけだ」

男はそれだけ言い残し、闇の中に消えていった。

三日三晩、馬を走らせ優真達はようやくリングサークが見えてきた。

さすがに神王国と呼ばれるだけあって遠目から見てもかなり大きい。

ジュードの話によると、リングサーク王の住む城は国の中央にあるらしい。

最短ルートでも半日はかかってしまうほど距離がある。

「じゃあどう行くんだ？ 普通に歩いていくのか？」

「いや、街中には馬車があるからそれに乗っていく。……だがその前に問題がある」

何だ？ と優真が聞くと、ジュードはクルリと振り向いた。

「城に侵入するより前に、街に侵入しなきゃならん」

ズルツと優真は落馬しそうになったが、ギリギリのところで踏ん張った。

「アホか！　なんでそんな初歩的なところで躓かなきゃならんのだ！
！」

「いやー、ハッハッハ。めんごめんご」

ジュードが舌を出して可愛らしく謝っても全く可愛くない。むしろキモい。

後ろからレンの呆れたため息が聞こえてきた。

「じゃあこうなったら街の壁破壊してでも……」

「無理ですよ、ユウマさん。街の壁には防御結界が張り巡らされていて、物理的な攻撃も魔法も効果がありません。それにそんな事したら城の騎士隊がすぐに飛んできますよ」

ならどうやって中に入ればいいのか。普通に行ったら中に入れてもらえるのだろうか。

「今は戦争中だからなー。身分証明がなきゃ無理だろうし　あ、あれ使おう」

ジュードがキョロキョロ辺りを見回していいのがあった、と指を差した。

その先には藁を大量に積み込んだ牛車がゆっくり走っている。

「まさか……あれに乗るのか？」

「うい」

「ジューン君……藁まみれになるんだけど……」

「我慢」

「……」

「……狭い」

「ぐほっ！？ ユウマ今蹴ったぞ！」

「きゃっ！？ ちょっとジユン君どこ触ってんの！！」

人の良さそうな牛車の持ち主である老人に頼み込んで、藁の中に入れたはいいのだが、暗いわ狭いわ苦しいわで最悪な状況だった。ジュードが優真とレンに起こられている時、牛車の揺れが止まった。

「また大量の藁だな。牧場というのはこれほど必要なのか？」

「へえ、それが先方の依頼でして」

ふむ、と呟きながら牛車の周りを歩く音が聞こえてくる。

突然ズボッ、という音と、それと同時にレンがひっ、と声を上げた。

「問題はなさそうだな。通っていいぞ」

「へえ、どうも」

そんな声が聞こえてきて再び牛車が揺れ出した。

「……うう」

「？ レン、どうかしたか？」

呻き声を上げたレンを心配して優真は声をかけるが、返事は返ってこなかった。

「説明しよう。門番が突然手を突っ込んできてれっちゃんのしごはっ!？」

ジュードが唐突に解説しようとしていたが、ゴスツという音と共に遮られた。

ゴスツ、バキッ、ドゴツ!!

「痛い！ 痛い!! け、蹴らないで!! れっちゃん冗談! 冗談だか らっ!？」

チーンという男にとってはとても痛い音が優真の耳に届いた。その後、牛車から降りるまでジュードは股間を押さえて蹲っていた。

その頃、成り行きだがリングサークの王女となってしまうた優音は、自分の部屋のベッドでゴロゴロしていた。

「うん」

全面戦争開始まで、残りわずか。元々戦争の抑止力のために王女になったわけだが、今となっては何の意味もない。

身に付けた魔法も、今では自衛くらいは出来るようになっていて。その魔法で役に立てる事はないかと考えても、残念ながら思い付かない。前線に参加……は絶対に王が反対するし、何より戦争が終わるまで城から出してもらえない。ぶっちゃけて言うとなんて屈辱なんだ。

「あゝ、暇暇暇」

そう言っても返ってくるのは静寂のみ。優音はガバツと起き上がった。

「……ベルのところに」

ベルなら相手してくれるかなーとか思い、優音はベルブランカの私室へ向かった。

アレンとベルブランカは城住まいだ。元々住んでいた家はあるのだが、二人の両親は仕事でこの国にはいないので、家に二人きりになってしまふ。それを不憫に思ったのか、王妃が城の部屋を貸し与え、使わせている。

ベルブランカの部屋は優音の部屋から一分ほどで行けてしまふ。だから優音は毎度毎度ベルブランカの部屋に転がり込んでいる。

「ベルー！！ あっそびつましょー！！！！」

優音がいつものようにベルブランカの私室に来るなり叫びながら勢いよく飛び込んだ。

だが、ベルブランカの返事はなく、部屋の中には誰もいない。

「むー。どこ行っただー？」

ベルブランカが他に行きそうな場所は……。

「アレンのどこかな？」

アレンの部屋はこの部屋の隣にある。優音は、ベルブランカの部屋を出て、アレンの部屋の前に来ると、丁寧にノックした。

以前突撃したら城のメイドと、何やらくんずほぐれつしている最中だった。その頃からアレンはあまり優音を部屋に入れたがらない。アレンが実はプレイボーイだと知った日であった。

そんな事はさておき、部屋の中からどうぞ、という声が聞こえてきた。

「失礼しまゝす……」

少しドアを開けて中の様子を確認しながら恐る恐る入る。どうぞと言われた時点で大丈夫なのだが、一応である。

「ユウネ様。どうかありませんでしたか？」

やはりここにいたベルブランカが、拳動不審な優音を見てそう尋ねてきた。

「あ、ベル。いやあ、前にアレンの部屋来たらさ、メイドさんといチャイチャ」

「ゆ、ユウネ様っ！？ それは秘密にとっ！！」

「あ……」

そういえばベルブランカにだけは絶対に言うな、と何度も念を押されていたのを思い出した。だが、時すでに遅し。

「……兄さん……？」

「あ、いや、違うんだ！ 何と言うか、魔が差したと言うか！」

「あなたは許嫁がいるのになんで浮気ばかりするのですかっ！？

私がどれだけリース姉さんに愚痴られてると思ってるんですか！？」

普段ほとんど感情を表に現さないベルブランカが烈火の如く怒っている。

それにも驚きだが、実はアレンに許嫁がいたというのにも驚きだった。

「あー、アレンに許嫁なんていたんだね」

ベルブランカのお説教が一通り終わったところで優音はすかさずベルブランカの気を逸らさせた。

なんだかベルブランカに怒られて魂抜けたような顔をしているアレンに罪悪感を感じなくもない。

「はい。リースミス・ベルティオーと言いまして、とても魅力的な方です。私達の幼なじみでもあるんですよ」

ベルブランカは嬉しそうにそのリースミスという人物を語っている。

無表情なベルブランカが顔を綻ばせている。それだけ慕っているのだろう。

だが、アレンは苦虫を噛み潰したような顔をしている。そんなに許婚が嫌なのだろうか。

「アレン、もしかして許婚が嫌いなのか？」

「……いえ、嫌いではないんです。家事は出来ますし、容姿はまるで一国の姫のように綺麗な人物なんです」

「なら完璧じゃん」

それでいて許婚に不満もなく、むしろ好意的ならば何を拒む事があるのだろうか。

優音は不思議に思っていると、アレンは突然立ち止まった。危うくぶつかりそうになってしまった。

「でも！」

そう叫びながら、アレンはくるっと優音に振り向いた。その目はくわっと見開かれ、血走っている。

優音はひっ、と小さく悲鳴を上げ少しのけぞった。

「その性格が問題なんです！　口よりも先に手が出る、足が出る！　ほめれば照れ隠しに殴られる、けなせばもっと激しく殴られる！　あんなバイオレンスな嫁は願ひ下げです」
「で、でも、女の子だから殴られてもそんなに痛くはないじゃない？」

優音がそう言うと、アレンはガクツとうなだれてしまった。

「……それが、そいつも八賢者の娘でして、一撃一撃が気絶しそうなくらい強烈なんです。一度怒らせれば、最終的には魔法が出てきて死ぬ一步手前までボコボコにされます」

アレンはその許婚を怒らせてしまった事があるのか、ぶるっと身を震わせた。

優音は苦笑するしかなかった。

「……それで、僕に何かご用だったのではないですか？」

アレンの許嫁について話し込んでいたら、すっかり話が逸れていった。

特にこれといった用事はない。だがバカ正直に暇だから遊びに来

ましたと言ったら、ベルブランカに怒られるのは目に見えている。

「う、あ、えーっと……、そうそう、この国のために私が何か出来る事ない？」

嘘ではない。この国の役に立てる事があれば積極的にしていこうとは常々思っている。

だが、アレンもベルブランカも優音にやらせる事は特になかったらしく、必死に考えているようだ。

「んー、ユウネ様が出来る事ですか……。国民の反戦争意識を高めさせる事しか思い付きま」

ピクン、と突然アレンとベルブランカは顔を上げ、言葉が途中で切られた。

「……兄さん。この魔力は……」

「うん。やっぱり、あいつが来たね。今日の深夜には来るかもしれない」

兄妹で頷き合っているが、優音は置いてきぼりにされている。

「え？ あいつって？ 夜来るって？ いったい何の事？」

「ユウネ様。恐らく、本日深夜にリーザリスの手の者が来ます。目的は、我が国の要人の拉致か殺害でしょう」

「ら、拉致とか殺害って……それってヤバいんじゃないの？」

唐突にそんな説明されてもあまり着いて行けてないが、非常事態である事はわかった。

「敵は僕とベルで撃退します。ユウネ様は王や王妃様に付いていてあげてください」

本当は王や王妃と共にどこかへ逃げるか隠れるかするのが最良なのだが、三人ともそれを良しとはしないだろう。ならば一つの所にいてくれた方が守りやすい。

「うん、わかった。でもアレンとベルは大丈夫？ 怪我とかしない？」

「僕もベルも大丈夫です。こう見えても八賢者の子ですから」

「ユウネ様はご自分の身の安全だけを心配してください。ユウネ様に仇なす敵は私が一人残らず殲滅させます」

「……うん、頑張つてね二人とも。私、お父様達の所に行ってくるね」

優音は心配そうに何度も振り返りながらアレンの部屋を出ていった。

「兄さん……。相手はあのジュード兄さんですよ？ ……本気で戦うのですか？」

「……それが戦争だからね。それにジュードは手加減して倒せる相手じゃないし」

やれやれ、とため息をつきながら手をヒラヒラさせるアレン。そんなアレンとは対照的に、ベルブランカはあまり納得していないようだ。

戦いは今夜。リーザリスとリングサークの運命の分岐点が徐々に近づいてきていた。

第十五話 敵としての再会

時刻は昼前。リングサークの宿屋で、優真は体を休めていた。城に侵入するのは今夜。リーザリス軍を迎え撃つために、リングサーク軍が出払っている今がチャンスらしい。

鋭気を養ったための宿屋。ジュードはリラックスしているようだが、レンは落ち着きなくうろろし、優真も少し緊張していた。

「……ちよつと外の空気吸ってくる」

何だか落ち着かなくなってきた、ガタツと優真は席を立った。部屋を出て、受付のカウンターを横切り外に出る。やはりリングサークもリーザリスと同じように閑散としている。

「はあ、戦争か……」

戦争なんて自分には関係ないものだと思っていた。まさか異世界に飛ばされて巻き込まれるなんて誰が想像できようか。

「俺……生きて帰れるかな……」

「大丈夫ですよ」

「のわあっ!？」

突然隣から声が聞こえてきて、驚いてのけぞってしまった。いつの間にかレンが笑顔で隣に立っていた。

「……レン。心臓に悪すぎるぞ」

「えへ、ごめんなさい」

レンは笑いながらペロツと舌を出した。そんな笑顔を見たら、どんなにいたずらでも許してしまえそうだ。

「ユウマさんは、絶対に帰れます。心配しなくても大丈夫ですよ」
「……そう、だな。うん。まずは目の前の事を片付けないとな」

レンに言われると、なんだか本当に大丈夫な気がしてきた。まずは戦争を終わらせ、愛華と優音を見つける。色々考えるのはその後だ。

気が軽くなった優真は、レンと一緒にリングサークの街を見てまわった。

その頃、リングサークを真っ直ぐ目指していた愛華とリースは、盗賊の一団と対峙していた。

「へっへっへ、嬢ちゃん達、ちょっと俺らと遊んでいかねえか？」

実はこれと似たようなやり取りが今までに数回あった。

「はあー、これでいったい何回目よ」
「リースちゃん、三回目だよ」

うんざりしたように呟くリースに、愛華は律儀に答える。最初は盗賊に怯えていた愛華も、さすがに慣れていた。

「おいおい、何無視してんだよ。ちよつとこつちに
「触るんじゃないわよ！！ この三流悪党！！！」

盗賊の一人がリースの肩に触れようとした瞬間、気づいた時にはその男は吹っ飛ばされていた。

力の差は歴然。冷静に考えれば逃げるのが最良だ。だが、盗賊団は頭に血が上って臨戦態勢を取ってしまった。

「っ！？ てめえっ！！ ぶっ殺すぞっ！！！！」
「……最近こっぴうのが多い気がするわ」

怒りに顔を赤くして、盗賊の集団が愛華とリースに向かってくる。数は全部で十人。リースにとっては問題ない数だろう。

「まったく、こっちは急いでるっていうのに！」

リースは青く輝く双剣を出現させ、盗賊の集団を迎え撃つ。愛華は少し後ろに下がってリースを見守っている。

「あー、遅い遅い遅い遅い！！！」
「ぐっ！？」
「ぎゃあっ！！！」

リースは双剣をしなやかに滑らせ、舞うようにして敵を切り裂いていく。

やはりリースは強い。大人数の男達がまるで歯が立たない。

「くっ……なら！」

盗賊の一人が目標をリースから、後ろで様子を窺っている愛華に変更した。

「ひっ！？ り、リースちゃん！！」

「アイカ！！ っく！？」

リースは急いで愛華の元へ向かおうとするが、その隙を突いて盗賊達が攻撃を仕掛けてくる。

その間にも盗賊の一人が愛華に迫る。

「死ねえっ！！」

「アイカっ！！ 頑張って！！！」

愛華は恐怖心を必死に抑えながら、手の平に力を込めた。
男の持っている斧が、容赦なく愛華に振り下ろされる。

「き、『来たれ』！！」

その言葉に答えるかのように愛華の右手が蒼く輝き出し、その色と同じ短杖が現れた。

男の振るう斧が愛華の肩口から切り裂かれ、命に関わる致命傷を負った かに見えた。

「な、なにっ！？ ぎゃあああああ！！！！」

男が驚いているその隙に、リースが背後から蹴りで吹っ飛ばした。気づけば盗賊団は全て地にひれ伏している。全員気絶しているようだ。

「やったね、アイカ」

「う、うん。上手くいってよかった……」

大怪我を負ったはずの愛華だったが、その体には傷一つない。

「一瞬ヒヤツとしたけど、何もなくて安心したわ。『蒼水』が身を守る導力で助かったわね」

愛華の持つ属性、『蒼水』の導力は『纏水^{てんすい}』。その能力は使い手が対象とする物体に水を纏わせる力。この導力で愛華は男の斧に水を纏わせ、殺傷能力を無力化させたのだった。

「さて、さっさと行きましょ。これから急げば夜にはリングサークに着くはずよ」

「うん、そうだね」

リースは近くでうろうろしていた馬を連れ戻し、愛華を後ろに乗せて走り出した。

「よし、ユウマ、れっちゃん。準備はいいか？」

「ああ、いつでも行ける」
「私も大丈夫だよ」

リングサークに夜が来ていた。時刻は日が沈んでから数時間。もう少しすれば日が変わる。

宿屋で休んでいた優真達はいよいよ城に向かって出発しようとしていた。

三人はそれぞれ漆黒のローブを羽織っている。このローブは魔法に耐性があり、多少なら魔法の効果を軽減出来るらしい。リーザリス王からの餞別、とジュードに渡された。

「出発する前に作戦をもう一度説明しとくぞ」

ジュードはいつになくシリアスな顔つきで説明し出した。

作戦は以前ジュードが言った通り。ジュードとレンが八賢者の子二人を相手にしている間に、優真が王を捕まえるというもの。

この作戦、上手く行くかは優真次第という事になる。

「あ、それともう一つ、気になる情報がある。少し前に、リングサーク王に隠し子がいたらしい」

「は？ それとこの作戦に何の関係があるんだ？」

「まあ聞け。その隠し子がこの国の新しい王女になったらいいんだと。だから、その王女を人質にでもなんでもすれば以外と簡単に落ちるんじゃないかなーと」

完璧に悪役である。優真は呆れたようにため息をついた。

優真は元より、誰かを殺したり人質にしたりするつもりはなかないというか、出来ない。出来る限り話し合いで解決出来ればと思っている。

「とりあえずジュードの戯れ言は置いて、そろそろ出発しないか？」

「そうですね。ちょっとジュン君、そんなところでいじけてないで早く行くよ」

「ぐすん……何？ この扱い……俺がリーダーなのに……」

ジュードは部屋の隅っこでの字を書いていた。リーダーだと言うならそれにふさわしい言動をして欲しいものである。

「行こう。こんな事、さつさと終わらせてやる」

優真はぐつと拳を握りしめ、部屋を出ていった。

カアン！！ カアン！！ カアン！！

けたたましい鐘の音がリングサーク城内に響き渡る。

アレンの言った通り、優音は王と王妃と共に、王の間にいた。

結局賊が城内に侵入し、アレンが予想した通りになってしまった。

「……アレンとベルは大丈夫でしょうか……？」

「大丈夫よ。二人は絶対に負けやしないわ」

「そうだな。曲がりなりにもあの二人は八賢者であり、この国の団

長を勤めるシェリアの息子と娘だからな」

王妃は優しく優音の頭を撫で、王はそう言って励ましてくれた。
今王が言ったシェリアとは、アレンとベルブランカの母親である。
名をシェリア・レビイという。

話に聞いた事はあったが、優音はまだそのシェリアには会った事はなかった。

なんでも、昔リングサークにあった国宝が、シェリアを含む三人の八賢者が守護していたにも関わらず、何者かに奪われその人物を探し出すために今は世界中を旅しているらしい。

なので実質リングサークの騎士団は、その息子であり、副団長でもあるアレンという事になる。 ボタン！ と、突然ノックもせずに、一人の兵士が飛び込んできた。

「報告します！ 敵はやはりリーザリスの手の者でした！ ただいまエントランスホールにて兵と交戦中です」

「そうか……。敵の数は？」

王がそう尋ねると、兵士は言いくそうに口を開いた。

「そ、それが……、三名です」

「三名だと？ たったそれだけで、しかも正面から？ わしもなめられたものだ」

「それがそうでもないですよ」

開きっぱなしの扉からそう言って入ってきたのはアレンだった。
アレンは王の前で一礼だけした。兵士もアレンが来た事で自分の持ち場へ戻っていった。

「今回の侵入者は、僕と同じ八賢者の子です。ジュード・ローゼン

クロイツ。奴が相手では、今城に残っている兵士では時間稼ぎにもならないでしょう」

その時、城全体を揺らすかのような爆発音が鳴り響いた。

「きゃっ！？ なになに！？」

「……恐らく、下の階の兵士達は全滅したでしょうね」

顔色一つ崩さずにそう言うアレンに苛立ったのか、王は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「ならばアレン。お前は行かないのか？ 相手がそれほどの手練れならばお前が行かなくてどうする」

「ご心配なく、すでにベルが向かっております」

「ベルが？」

驚いたようにそう聞いたのは優音だった。今までの話から察するに、敵はアレン達と同等以上の存在。

そんな相手にベルブランカー一人で行くなんて自殺行為である。

「大丈夫です、ユウネ様。僕もすぐに向かいますから」

心配ないという風にアレンは優音に笑顔を向けるが、それでも不安は尽きなかった。

二人にもしもの事があつたらと思うと、堪えられない。自分に出来る事としたら、応援するくらいしかない。

「……頑張つて、ね……？」

「はい」

優音のそんな言葉を背に、アレンは戦場へと歩いていった。

時は少し遡り、リングサーク城門前。

優真達三人は、物陰から様子を窺っていた。

門番は二人。それぞれ左右に一人ずつ。だが、門番が問題ではない。固く閉ざされた扉をどう開くかが問題なのである。

「どうやって入る？」

「そうですねえ……周りにから扉を乗り越えられれば楽なんですけど……」

どう見ても堀の高さは十メートルは越えている。あれを乗り越えるのは不可能というものだろう。

「おい、隊長。どうすんだ？」

「あゝ？ たいちよく？ そんなもんあってないようなものでしょ？」

ジュードはヤンキー座りをしながらやさぐれている。先程の一件をまだ根に持っているのだろうか。

「レン、フォローフォロー」

「え？ 私がですか！？」

ジュードをこのままにしておくとか作戦に支障をきたすかもしれない。こういう時は幼なじみに任せるのが一番いい。

だが、任された当の本人はどうすればいいのかわからずおろおろしている。

「……ジュード。この作戦が無事終了したらレンからご褒美がもらえるらしいぞ」

「ゆ、ユウマさん！！ な、なんですか！？ それは！？」

「……ほほう」

やさぐれていたジュードの目がキラリと光った気がした。確実にくだらない事を言う前フリだ。

「それはアレか！ あゝんな事やこゝんな事やそゝんな事までやつちやっついていいという事が！！」

「ちよつとジユン君！ 私に何する気！？」

「ハッハー！ そつと決まれば俄然やる気出てきたぜー！！」

もはやレンの言葉はジュードにはとどかない。なんとも乗せられやすいバカである。

「それで、どうやって中に入るんだ？」

「決まっているだろう？ 正面突破だ！！！！」

「は！？」

一瞬、ジュードが何を言ってるのかわからなくなった。だが、空

中で指をしなやかに滑らせ、そこに手をかざして魔方陣が浮き出たところでさすがに理解した。

「ちよっ、まっ!!」

「焦がし貫け!! 『怒れる雷帝の槍』!!!」

魔方陣は一瞬にして巨大化し眩い光を放つと、そこから紫色の雷の槍が構成され 消えた。

数舜後、城門の方から爆発音が聞こえ、門は粉々に破壊されていた。門番も巻き込まれたのか、地面に倒れて伸びている。

「なんちゅう無茶苦茶な……」

これでは敵が来ましたよ、と言っているようなものだ。優真が頭を抱えるも、ジュードは特に気にしていないようだ。レンはジュードの無茶に慣れているのか、はたまた呆れているだけなのかはあ、とため息をつくだけだった。

そんな時、けたたましい鐘の音が城中に響き渡り始めた。もう後には戻れない。

「さて、行くか」

ジュードの緊張感のない言葉とは対称的に、優真とレンは重々しく頷き、三人は歩き出した。

城の中に入ると、目の前に巨大なエントランスが広がっていた。天井にはシャンデリア。数十枚ある窓は一つ一つ違う絵が描かれている。階段も多数あり、ここからでも二階に行けるようだった。

「……なあジュード」

それほど巨大なエントランスであるからもちろん扉もたくさんある。

その複数ある扉からリングサークの兵士が次々に出てきている。

「お前、今は騎士団が出払ってるから敵は少人数だって言っただよな」

「ああ、言ったな」

一階には劔や槍などを持った兵士、二階には弓兵、それらの背後にいるのは杖を構えた魔導士。

その数、およそ百。

「これのどこが少数だっ！！」

「えへ」

「えへ、じゃねええええええ！！！」

初っぱなから大ピンチ。優真は頭を抱えなくなった。だが、レンは特に動じた様子はなく、ジュードの背中をパンと叩いた。

「もう、ふざけてないでちゃんとしてよ」

「悪い悪い。ユウマ、今のは冗談だ」

「え？」

「弓隊、構え！！」

そんなやり取りをしている間に、敵は臨戦態勢に入っていた。問答も何もなく排除するつもりらしい。

「お、おい。どうすんだ？」

残念ながら優真の魔法は一对多数には不向きだ。一斉に襲いかかれたら一貫の終わりである。

となると頼みの綱はジュードとレンになってくる。

「ユウマは後ろに下がれ。弓の方はれっちゃんに任せる。それ以外は俺がやる」

「うん、わかった。『来たれ』」

レンは手に魔力を集中すると、緑の風がレンの手にまとわりついてきた。

その手を一振りすると、風が四散し、代わりにレンの身の丈もある杖が出現していた。レンの『緑風』りよくふう属性の魔導具である。

「『風よ集え。荒れ狂え』」

兵を統率している兵長らしき人物が腕を上げると同時にレンは魔導具を掲げた。

「放て！」

兵長の合図で弓兵達は一斉に矢を放った。矢はまるで雨のように優真達に降り注ぐ。

「ユウマさん動かないでくださいね。『大気に吹き荒ぶは神の息吹』……!」

優真達の上空で緑の風が吹き荒れ、大量の矢が細切れにされた。大量の矢は三人が立っている場所を残し、周りの床に突き刺さっている。

矢の雨が止んだ瞬間飛び出す影が一つ。ジュードである。

「『来たれ』!!」

ジュードは両手を頭上に掲げる。その手の中で蒼い炎が燃え盛り始め、その炎はだんだんと形を成していく。

それは大剣。体が隠れるほど巨大な剣。ジュードのもう一つの魔導具である。属性は『蒼炎^{そうえん}』。

「だらつしゃああああ!!!!」

ジュードがその魔導具を敵に向かって思いきり叩きつけた。

ドゴオオン!!!!

耳をつんざくほどの破壊音と倒壊音。そして土煙。いくつかその煙の中から床の破片が飛んできたが、レンが風で軌道を変えたので何ともない。

「終わったよ〜ん」

煙の中からジュードがへらへら笑いながら歩いてきた。

土煙が少しずつ晴れていくと、ジュードが魔導具を叩きつけた場所
はクレーターのようへこみ、その影響で階段はほとんどが崩れ、
兵士、弓兵、魔導士全てが倒れていた。

「……」

優真は声が出なかった。強い。強すぎる。圧巻の一言である。
ジュードがとてつもなく強いという事は知っていたが、レンも引
けを取らない。

「よし、急ぐか。あの二人が来ちまう前にここから離れるぞ」

「あの二人って、ジュードの昔の幼なじみってやつか？」

「ああ。二人の中でもベルは律儀だからな。もう来てるかも」

「ご期待通り、もういますよ」

そんな声が聞こえてきて、ハッと二階を見ると緑の髪を結ったメ
イド服の少女がこちらを見下ろしていた。

第十六話 レンvsベルブランカ

ベルブランカ・レビィ。八賢者の子で、ジュードの昔の幼なじみ。容姿はとても可愛らしいが、それよりも優真の印象に残ったのは殺気が宿ったその目。それだけが外見と不釣り合いだった。

そんな相手にもジュードは気安く声をかけた。

「よっ、ベル。久しぶりだな。ずいぶん可愛くなったな」

可愛くなった、の部分でレンの目がピクツと動いたのを優真は見ただが、指摘などはしない。怖いから。

「五年ぶりくらいでしょうか。ジュード兄さんもお久しぶりです。

ジュード兄さんは……あまり変わっていないようですが」

「ふふん、俺は永遠に少年のままだからな」

端から見ると世間話をしているようにしか見えないが、二人の間の空気はどこか冷めている。

「物は相談なんだが、そこを通してくれないか？」

「駄目ですね。私は未熟ながらも王族を守りし『影からの守人』。

この国に害をもたらす人物をおいそれと通すわけにはいきません」

「そっか……残念だ」

その呟きを合図に、ジュードの手にある魔導具が、ボウツと蒼く燃え盛り始めた。

「……『来たれ』」

それを見たベルブランカも、両手に白い鉄の爪のような魔導具を出現させた。

昔の幼なじみと戦い合う事になってしまった今、二人は何を思うのだろうか。

ジュードはすつと目を閉じ、息を大きく吐いた。
そして何かを覚悟したようにカツと目を見開き、素早く魔方陣を描いていった。

「燃え散れ。『炎蛇の牙』」

魔方陣から蒼い炎に包まれた大蛇が現れ、真っ直ぐベルブランカに向かって牙を向いた。

ベルブランカも応戦して呪文を唱え始める。

「『大地の精霊よ。強固なその力を以て我を守れ』！！」

炎の大蛇が襲い掛かる瞬間、ベルブランカの目の前の足場から土の壁が盛り上がり、大蛇の攻撃から身を守った。

「『爆ぜよ』！！」

炎の大蛇の牙が土の壁に阻まれた瞬間大蛇が爆発を起こし、辺りは爆煙に包まれた。

「うわっ！ げほっげほっ って、おわっ！？」

優真が煙を思いきり吸い込んでしまい咳き込んでいると、突然誰かに腕を引かれた。

「今のうちに行くぞ」

ジュードは優真を煙の中から連れだし、一階の通路の奥へと走る。だが、そこにいるのは優真とジュードだけ。レンの姿はなかった。

「おいちよつと待て！ レンがまだ来てねえぞ！！」

「言つたろ。ベルの相手はれっちゃんがやるつて。何も言わなくてもれっちゃんには伝わってるぞ」

「だけどそのベルつてやつ強いんだろ？ だったらレンを一人にはさせられないだろ！」

優真はジュードの手を振りほどいて来た道を引き返そうとした。

「待て」

「ぐえっ」

だが、ジュードは優真の首根っこをつかんでストップをかける。

「げほっげほつ 何しやがる！」

「お前が行ったところで何ができる。あの場はれっちゃんに任せるのが最良なんだよ」

それでも全然納得できない。そもそもレンの性格でこんな危険な事に参加していたのが釈然としない。付き合いは短いがレンが争いが嫌いだという事は理解しているつもりだ。

「心配するな。れっちゃんはつええよ。お前はお前ができる事をすればいい」

ジュードは、レンは大丈夫だと確信しているようだった。それだ

けレンの事を信頼しているという事なのだろうか。

「……ああ、わかったよ」

ジュードの言葉に渋々頷く優真。今しなきゃいけないのは戦争を止める事だ。

「レン……無事でいろよ……」

優真は一度だけ後ろを振り返り、ジュードと共に奥へと走っていった。

「……小癪です。 ケホッ」

大量の煙が徐々に晴れていくと、そこには不機嫌なベルブランカと申し訳なさそうなレンがいた。

「いつもいつもいつもいつも……！ 昔からあの人は人の神経逆撫でするような事ばかり」

「あはは……それがジユン君の趣味みたいなものですから……」

まるでもう一人の自分をみているかのようで、なんだか同情しているレン。

「あなたは……レンさんですね。ジュード兄さんの手紙に書いてありました。とても可愛らしい方だと」

「え、か、可愛いだなんて……ジユン君ったら」

照れてはいるが満更でもなさそうなレン。だがジュードがタダでそんな事を書くわけがない。

「あと、イジると面白くて、本人も素でボケる事もあって、見ていてとても飽きないとも」

「……」

人をいい気分にさせておいて一気に突き落とす。ジュードの常套手段である。

レンは額に青筋を浮かべ、帰ったらお仕置きだね……、と呟いていた。

「積もる話はたくさんありますが、この状況ではそんな事出来ません。私の前に立つ以上、あなたは敵です。」

このまま帰るのなら私は追いません。出来る事なら、あなたとは戦いたくないです。……どうか、帰ってはもらえませんか？」

それはベルブランカの偽りない本心。戦わずして大切な人を守れるのならこれ以上の事はない。

だが、レンは首を横に振って魔導具をギュッと握りしめた。

「戦いたくないのは私も同じです。昔のジュン君の事とか聞いてみたいし、ベルさんとは友達になりたい。でも、私も退けない理由があるんです。戦う理由があるんです。だから、今私がしなきゃいけないのは」

レンはビツとベルブランカに魔導具を向けた。そのレンの意思に呼応するかのように魔導具は緑に輝き、風が吹き始める。

「あなたを倒す事！」

そしてレンは歌うように詠唱を始めた。いつも以上に思いを込めて。

「『世にたゆたう優しき風よ。我が敵を切り刻む激しき刃となれ』
！！！」

突如としてレンの周りに激しい風が吹き荒れ、それらの風は刃となり壁や床を切りつけながらベルブランカに襲いかかった。ベルブランカは二階から飛び降りる事で風をかわし、着地と同時にレンに向かって走り出した。その両手に輝くのは鋭い鉤爪。

「っ！？ 『全てを吹きとばすは竜巻。それから生まれた小さき子は無邪気に遊ぶ』」

今度は無数の小さな竜巻がレンの周りから現れた。それらの小さな竜巻はレンの合図でベルブランカを襲う。

「ふっ！！」

ベルブランカは時には止まり、時には戻り、まるで踊るように竜巻をいなしていく。

遂には全ての竜巻が消え、ベルブランカの行く手を阻むものはもはやない。

レンは焦りながらも、もう一度詠唱を始めようと魔導具を構えた。

「た、『大気に流れる』」

「無駄です」

ベルブランカは一気にレンとの間合いを詰め、魔導具を横に薙いだ。

「ひゃっ!？」

幸か不幸か、レンはベルブランカから離れようとした瞬間足が滑り、ベルブランカの攻撃は髪の毛数本を掠めるだけだった。

だが掠めた髪の毛は一瞬で石と化し、カラアンと音を立てて床に落ちた。

「くっ……」

慌ててレンは立ち上がろうとするが、ヒュッと魔導具を首元に突きつけられた。

「詰みです。以外とあっけなかったですね。ジュード兄さんの認めた人だからどんな人だと思ったのですが……」

ベルブランカは無表情にそう言い放った。

この強さは流石としか言いようがない。遠距離で攻撃するレンを相手に体術のみで戦い、無駄な動きなく接近する。やはり八賢者の

子だからか。

「事が終わるまで石像になっていただきます。命に別状はないので安心してください」

ためらいなく魔導具を振り上げるベルブランカ。レンはそれを見て、少し口元を吊り上げた。

「私だって、タダじゃ負けないもん。『発動』」

降り下ろされた魔導具がピタッと止まった。ベルブランカの顔が驚きに染まる。

「いったい……何を……」

レンはパンパンと埃を叩きながら立ち上がり、ベルブランカの足を覗きこんだ。

ベルブランカの足元にはレンの魔法でついた傷。その中に手のひらサイズの箱が埋まっていた。

「これですよ」

レンはその箱を手に取り、ベルブランカに見せる。その箱はバチバチと電気を発していた。

「媒介……魔法……ですか……」

媒介魔法とは、四つの魔法技術のどれにも属さない、新たな魔法技術として研究されているものである。

物に魔力を込め、発動者のタイミングで魔法が発動する。発動さ

せるキーさえ知っていれば、基本的には誰でも発動出来る。それが媒介魔法。

レンが持っている箱にはジュードの魔力が込められている。効果は一定の時間、範囲内にいる人物を麻痺させる。

「油断……しました……。……いつたい……いつ、仕掛けて……。」「魔法ですよ」

レンはベルブランカに背を向け、歩き出した。

「まず最初の魔法で床に傷をつけて、次の竜巻の魔法を目眩ましと媒介の設置に使いました」

クルツとレンは振り返り、魔導具を再びベルブランカに向ける。

「これで最後です。『気まぐれなる風の女神の吐息は一切の事象をも吹き飛ばす。一吹き目は優しき風。二吹き目は励ます風。三吹き目は激しき風。それらの風は止まる事を知らない』」

魔導具の前に、風が渦巻く圧縮された空間が現れた。それは次第に大きくなり、レンの身長の数倍ほどにも膨れ上がった。

「『大気よ、風を閉じ込めよ。風よ、大気を撃ち破れ。相反する二つの力を以て我が敵を穿て』……!」

圧縮された空間が一瞬で小さくなり消え去った。だが次の瞬間、その空間から閉じ込められた風が暴れだした。

風は一直線にベルブランカに向かい、壁を破壊し地をえぐり、凄まじい力の固まりがベルブランカに襲いかかる。

「くっ」

風は容赦なくベルブラン力を飲み込んだ。

ドゴオン！！！！ という轟音が耳に届き、優真とジュードは足を止めた。

「この音って……もしかしてレンか？」

「そうみたいだな。頑張ってたんな、れっちゃんも」

成長した妹を嬉しく思う兄のように笑みを浮かべるジュード。
そんなジュードとは逆に、優真は心配でなかった。

「……早く行こう」

こんな事、さっさと終わりにしたい。そんな思いで優真は先に進もうとした。

「待て」

そんな優真をジュードは手で制した。そしてその手に『紫雷』の

魔導具を出現させる。

「おい、どうした？」

「おいでなすったぞ」

廊下の先には暗闇が広がっている。その中からコツコツ、という足音が聞こえてきた。

「久しぶりだな。アレン」

ジュードは暗闇に向かってそう言った。暗闇の中から現れたのは緑髪の青年。先程の妹とは対象的に、この青年は柔和な笑みを浮かべている。

「久しぶりだね。ジュード。元気だったかい？」

「ああ。健康そのものだ。……お前がそこにいるって事は王の間はすぐそこか」

喋りながらジュードは後ろ手で、優真にだけ見えるように手招きした。

「隠しても無駄だね。そうだ。王の間はここを真っ直ぐ行けばある。だけど君達はそこまでたどり着く事は出来ない」

優真はアレンに気づかれないように自然に少しだけ体を寄せた。

「……俺が攻撃したら走れ。後は頼む」

「……わかった」

ジュードは左手を前に構えた。アレンはそんなジュードを見るな

りため息をついた。

「……やはり戦わなければいけないのかな？」

「それが戦争だ。ここで勝つか、負けるかで国の将来が決まる」

「そう……だね……。こうして親友と刃を交えるのは本当に心が痛むよ」

アレンは憂いを帯びた顔で言った。そう言っただけで油断させるという魂胆はなさそうだ。

「アレン。悪いが時間があんまないんでね。さっさと始めさせてもらうぞ」

「ああ、わかった。彼はどうするんだ？」

アレンが初めて優真に視線を投げた。戦意はやはり感じられない。この青年ならば話し合いで解決出来るのではないだろうか。

「アレン、聞いてくれ。俺達は出来る事ならあんたと戦いたくない。どうにかして血が流れない方法で戦争を止められないのか？」

「君は、理想論者だな。僕だってそうしたいのは山々だ。だけど、もう戦争は目前まで迫っている。両者どちらかの王が倒れる以外に戦争を止める方法は ない」

アレンは優真を鋭く睨む。ゾクッと戦慄が走った。震え上がるような殺気が優真を包み込む。

「『来たれ』」

アレンの手に黒い風を纏った弓が現れた。アレンは弓を引き絞り、二人に向かって放った。

矢はない。だが、ヒュンといった音のみが優真の耳元を掠めていった。

「んにやる！ 『荒ぶる雷神の槌』！！」

見えない矢に合わせて、ジュードは魔方陣を描き、アレンの頭上に手をかざした。

すると雷の球体が現れ、ジュードがその手を振り下ろすと同時に球体も落下した。

凄まじい衝撃に床は沈み、土煙が中に舞い、辺りは見えなくなった。

「今だ！ 行け、ユウマ！！」

「おう！」

土煙に紛れ、優真は全速力で真っ直ぐ走り出した。どこからアレンの攻撃が来るかわからない。かといって足を止めるわけにもいかなかった。

土煙の中から出ると、辺りにアレンの姿はない。王の間はもう目と鼻の先だ。

「あれか！」

少しだけ走った先には重厚な扉が一つ。明らかに他のそれとは違う。

優真はそんな重厚な扉に手を掛けた。

「 行こう」

優真は自分自身にそう言い、気を引き締め扉を開け放った。

第十六話 レンvsベルブランカ（後書き）

いやー、申し訳ないッス。少々遅くなってしまいました。次は出来るだけ早くするよう善処します。

第十七話　それぞれの戦う理由

ジュードは縦横無尽に駆ける。地を、壁を、まるで重力を感じさせない動きで。

ジュードが駆け抜けた後にはアレンの風の矢の跡があった。アレンの矢の連射でジュードは一向に近づけない。だが、その代わり矢はジュードを捉えきれていない。このままでは埒が空かない。そんな状況を先に崩したのはジュードだった。

「うらあっ!!」

ジュードは壁を蹴り、空中で回転しながら紫雷の魔導具を投げつけた。

「『我が長矢に、黒き風を。撃ち抜け黒風矢』!!!!」

ジュードの雷槍とアレンの風矢がぶつかり合う。雷は地を焦がし、風は壁を切り裂く。

「おぐっ!?!」

「くっ!?!」

その凄まじい技と技のぶつかり合いは、二人にも被害を及ぼした。激しい雷と風に二人とも吹き飛ばされるが、着地すると同時にお互い駆け出す。

「行くぞ。『雷走』」

ジュードは一瞬で魔方阵を描き、魔法を発動させると足に雷が纏

わり始めた。すると、ジュードの姿が消えた。

「ぐっ!？」

突如としてアレンの目の前にジュードが現れ、魔導具を振り抜いた。

すんでのところでアレンは魔導具でこの一撃を防ぐが、あまりの衝撃に吹き飛ばされてしまった。

だが、アレンは空中で体勢を立て直し、詠唱を始める。

「『大気に流れる激しき突風よ。我が敵を吹き飛ばせ』!!」

発動されたのは敵を吹き飛ばす魔法。ジュードは避けきれず、真後ろに吹き飛ばされてしまった。

ジュードは戦いの中で崩れた瓦礫の山に突っ込み、アレンも同様に勢いを殺しきれず瓦礫の山に突っ込んだ。

「いってて……このやろ……」

「痛う……」

二人とも多少の傷はあるものの、致命傷には至っていない。

「あー、ずいぶん腕上げたなアレン。カウンターで魔法使ってくるとは思ってなかった」

「ジュードこそ、雷走は格段に速くなっているし、魔導具の衝撃もハンパじゃなかったよ」

こんな状況でも笑い合える二人。まるで戦いを楽しんでいるかのよう。

うしっ、とジュードは勢いをつけて立ち上がり、アレンもゆっく

りと立ち上がった。

「だけどまだまだ本気じゃないよな。アレン、詠唱魔法より召喚魔法の方が得意じゃねえか」

「ジュードだって、まだ魔導具一つしか使ってないじゃないか。お互い様だよ」

「そうだな。んじゃま、そろそろ本気で行くかね。『来たれ』」

ジュードは紫雷の魔導具とは別にもう一つの蒼炎の魔導具を出現させた。

右手に槍を、左手に大剣を。これがジュードの最強の戦闘スタイルである。

「『刮目せよ。天空に舞うその姿を。暴風のように激しきその力を。彼の者が過ぎ去りし道には優しき風が吹く。姿を見せよ、ペガサス』
！！！」

その詠唱が終わると、アレンの隣の空間が歪み出し、その歪みから美しい白馬が姿を現した。

だが、ただの白馬ではない。羽　その白馬には天使を思わせるかのような白い羽が生えていた。

「ジュード、準備と覚悟はいいかい？」

「ふん、準備は万端。覚悟は当の昔に出来ている」

ジュードは周囲に雷と炎を走らせ、アレンはペガサスに跨がった。

「さあ、第二ラウンドの始まりだ！！！！」

城の各地から聞こえる爆発音や地震に、優音は不安を隠せないでいた。

王は玉座に目を瞑り静かに座っていて、王妃はその隣で胸の前で手を組み祈り続けている。

「はあ……アレンもベルも大丈夫かな……」

優音がため息混じりにそう呟くと、王はゆっくりと目を開いた。

「……来たか」

「え？」

何が、と優音は聞き返そうとしたが、王の間の扉がギィッと開き出した。

「ユウネ、こちらに。玉座の裏に隠れていなさい」

王妃は少々焦ったように優音を呼ぶ。そんな王妃の様子に、敵が来たんだ、と優音は理解した。

優音が玉座の裏に隠れたと同時に、敵が王の間に入ってきた。

こちらからは姿は見えない。だが、足音から敵は一人のようだ。

「……貴様一人か。確か情報だと三人だと聞いたはずだが」

王の聞いた事のない低く恐ろしい声。そんな王の後ろ姿を、優音は玉座越しにじっと見つめていた。

「俺の仲間は今、戦っています。俺は、あなたにお願いがあつて来ました」

「え……この声……」

この声、優音には聞き覚えがあつた。それは唯一の肉親である兄の声に似ていた。

そつと玉座の裏から覗き込んで見るが、相手は黒いローブにフードを目深に被っていて顔がわからない。

「大人しく投降して欲しいんです。早く戦争を終わりにしたいんです」

「愚問だな。今まで散つていった兵士達のためにも投降など出来るはずがない」

王の言葉に、フードの男はやっぱりか……、と呟き顔を上げた。その拍子にフードも脱げた。

「だったら俺は無理矢理にでも連れて」

男は王を見て驚いたように言葉を止めた。正確には王の後ろを見て。

「お兄、ちゃん……？」

男の顔を見た優音は、呆然としながら立ち上がっていた。

「はあ、はあ……」

自分が覚えている中でも上位の魔法を放ったレンは、膝に手を置いて息を整えていた。

「……ふう。全力でやっちゃったけど無事かなあ……」

ジュードからは全力でやらないと勝てないとまで言われたからしてみたものの、こう煙が巻き上がっていると相手が無事かどうかもわからない。

そして、だんだんと煙が晴れていきそこには

「うそ……」

岩のドームのような壁がベルブランカを守るように現れていた。そして、その壁にだんだんとヒビが入っていき、一瞬にして崩れて

いった。

「私の『絶対なる石王の盾』が一撃で破られるとは……。どうやらあなたの力を見誤っていたようです」

「そんな……ジュン君の魔力を詰めた媒介魔法が効かないなんて……」

ベルブランカはこめかみに指を当てて憂鬱そうにしている。

「昔、ジュード兄さんに実験と称して色々されたんです。皮肉にもその経験で耐性ができて、ギリギリ抜け出し魔法を使えました」

今の魔法で仕留められなかったのは痛手だった。レンには、もはやこの状況を打開する手立てがない。

万事休す。まさにその通りだった。

「さて、急がなければユウネ様の身が危ないかもしれませんし、本気で行かせてもらいます」

「ユウネ、様……？」

どこかでその名を聞いた事があるような気がする。だが、ベルブランカはそんな小さな疑問を考えている暇を与えさせてくれなかった。

「『大地の精霊よ。その地を踏み荒らし、揺れ動かせ』」

城のエントランスホール全体が横に激しく揺れた。

その詠唱魔法は地属性の魔法としては下級に当たる。だが、ベルブランカの魔力、今のレンの体力ではレンを跪かせるには十分だった。

「 覚悟してください」

立てなくなっているレンに向かって地を滑るようにベルブラン力が接近してくる。

鉄爪型の魔導具を下段に構え、レンを切り裂くべく振り上げられた。

「くっ きゃああああ!!?」

咄嗟に魔導具を出してその爪撃を受け止めるも、勢いを受け止めきれずに転がってしまった。

「うう……」

いつの間にか揺れは収まっている。だが、転がった時に頭をぶつけたのか目の焦点が合わない。

ゆつくりと、ベルブラン力の歩み寄る足音が聞こえてくる。

「大人しくしてください。狙いがずれると痛いかもしれません」

「……出来ません。私は……あなたを行かせるわけには……いかな
い……」

レンはふらふらになりながらも立ち上がり、焦点の合っていない目でベルブラン力を睨みつけた。

「……あなたは、なぜそこまで頑張るのですか？ まだ20にも満たない歳なのでしょう?」

「それは、ベルさんも同じだと思います」

「私は生まれた時から八賢者の子として育てられてきました。戦う

事しか知りません。

ですが、あなたは普通の家庭に生まれ、普通に生活してきたのでしょうか。こんな命のやり取りが行われる戦地で戦うべきではないと思います」

レンは深く深呼吸し、一度頭の中をスッキリさせた。そして真っ直ぐベルブラン力を見据える。

「私には人生の目標というものがありませんでした。お父さん達は私が小さい頃から医者として活躍してて、私もそんな誰かを救う医者になりたいと思っていました」

でも、とレンは付け加えた。その表情は暗く、憂いでいる。レンにとってその頃の記憶はあまり思い出したくないのだ。

「色々あって、私は挫折して……。そんな時、ジュン君に出会ったんです」

憂い顔から、今度は優しく柔和な笑みを浮かべた。コロコロとよく表情が変わる人だとベルブラン力は思った。

「最初は自由奔放に、勝手気儘に生きてるジュン君が嫌いだったんです。多分眩しくて、羨ましかったんだと思います。でも、ある時聞いたんです。あなたは、夢はあるのですか、って」

ジュードの尊大な性格からして、世界征服とかいうふざけたような答えが返ってくるものだと思っていた。

だが、その答えは案外まともになって返ってきた。

『俺の夢？ そうだなあ……。俺にとって大切な人と一緒にいつま

でも面白おかしく過ごしていけたらいいかな』

それは、夢とも夢じゃないとも取れる小さな目標。だが、夢を諦めたレンにとっては衝撃だった。そんな夢の形もあるのかと。

『れっちゃんもさ。夢諦めんのはまだ早かったんじゃないか？もしその夢をもう追えないって言うなら、夢を見つけるのが夢っていうのもいいと思うぞ』

それからレンは変わった。いや、レンのしている世界が変わった。それまでの色褪せた現実が一気に明るく華やかになった。

レンは気づいたのだ。世界にはこんなにも夢が溢れているという事に。

「そんな素晴らしい事に気づかせてくれたジュン君の為に、そして私の夢を見つける為に、私はここで立ち止まるわけにはいかない！！」

それがレンの戦う理由。ジュードの役に立つ為、自分の夢を見つける為、レンは戦う。

再びレンは魔導具を構える。体の内にある魔力を次に放つ魔法にありったけ注ぎ込む。これが最後の魔法。

「……あなたの決意はよくわかりました。私もその決意に応えて、全力で迎え撃ちます」

ベルブランカは右手の鉄爪型魔導具を背に隠すように振り上げる。その魔導具に白い魔力が溢れていく。

ベルブランカ自身、実戦でここまで追い詰められるのは初めてだった。それも一般人相手に。それだけレンが自分達の力と匹敵す

るほどに強いという事だ。

だからといって負ける気はない。守るべき人がいるから、優音を守ると決めたから。

そうして二人は全ての魔力を練り出し、魔法を発現させる為に詠唱を開始する。レンは夢を見出だす為に、ベルブランカは主を守る為に。

「『風よ。嵐よ。敵を切り裂く刃となって吹き荒れよ』」

「『土よ。大地よ。敵を圧死させる衝撃となりて我が手に集え』」

レンの長杖型魔導具の先を中心として台風のような激しい風が発生し、服をはためかせている。レンはそれでも動じる事なく、目を閉じ集中している。

対して、ベルブランカの後ろ手に構えた鉄爪型魔導具は白く輝いている。その高密度の魔力の力場の影響で、ベルブランカの足元の床はひび割れ、壁や天井にも亀裂が走った。

「『吹き抜けろ、疾風の覇者』！！』」

「『駆け抜けろ、大地の嘆き』！！』」

レンは凝縮させた魔力を一気に解放し、ベルブランカは魔力を溜めた魔導具を振り抜いた。

大嵐と地を駆ける衝撃。

巨大な風と土の力が衝突した。

第十八話　もう一つの属性

愛華とリースを乗せた馬は猛然と走る。

時刻は既に日を跨いだ深夜。急がなければならない。

何故か、リングサークが近づくにつれて愛華の中で嫌な予感が膨れ上がっていった。

まるで心を侵食するかのような、そんな不安を感じていた。

リースも何か感じるどころがあるらしく、口数はめっきり減り、今は二人とも無言だ。

「見えてきた。もう少しよ」

その言葉でリースの肩越しに前を見た。確かに城のようなものが愛華の目にも見える。

だが

「　　っ！？　燃えてる！！？」

城が、リングサーク城が暗やみの中で赤く、燃え上がっていた。

「何が……どうなって……」

いつも気丈なリースでさえもショックを受けている。

嫌な予感はこちらを意味していたのだろうか。だが、とにかく今しなければならぬのはリースの幼なじみの安否確認。

「アイカ、急ぐわよ。しっかり捕まってて」
「うん」

リースは瞬時に頭を切り替えて馬を走らせた。
リングサークとの距離が縮まるにつれ、煙の臭いが風に乗って鼻に付く。

やがて町の入り口にまで辿り着いたが、門は開いたままだった。
こんな状況だからだろうか。

民家や店を次々に通り過ぎていく。町の人々も異常事態に気付いたのか、真夜中だというのに外に出てきていた。

そんな人々をリースは巧みな馬術で避けながら城へと急ぐ。リングサーク城は時間と共に刻一刻と悪い方へ向かっていた。

「ひどい……」

無意識にそんな言葉が愛華の口から漏れていた。

いたる場所から火災が発生し、外壁も崩れていつてしまう。もはやそれは城だったものでしかない。

「この魔力の残り香……あいつね……」

「あいつ？」

「ジュードよ、ジュード。あたしの幼なじみの。中で暴れてるみたい」

「え!？」

それはリースの危惧していた事が現実となってしまったという事なのだろうか。ならば尚更急いで止めなければならない。

「アイカ……出来るならここで待ってて欲しい」

「やだ」

「んだけど、ってまだ最後まで言っていないし」

即答する愛華にリースは苦笑した。普段はぼけっとしているのに

こういう時だけ頑固である。

ここまで来たのに今さら待っているなんて選択肢は愛華の中にはなかった。

「私も手伝うって言ったでしょ？」

「ま、言うと思ったけどね。でも、城はもしかしたらもう何時間も持たないかもしれないから、危なくなったらすぐ逃げるわよ。いい？」

「うん、リースちゃんも一緒にね」

そこだけは譲れない。それにリースだけではなく、リースの幼なじみも一緒に。

「それに……」

「ん？」

「あ、ううん。なんでもない。行こ」

リースを促し、愛華は城に向かって走りだした。
あの夢で会った、もう一人の愛華の言葉。

『そなたの探し人はそなたの向かう先にいる』

いる気がするのだ。この城に。優真と優音が。
それを確かめる為に、愛華は城の扉を開け放った。

扉を開け放ったその先に、二人がいた。この作戦の目的となる『王、もしくはそれに関係する重要人物の拘束と連行』の為、優真が捕まえないなら、リングサーク王と王妃。

その二人が、玉座に座って驚愕の表情を浮かべている。その視線の先は王妃の玉座の後ろ。そこには枯葉色の髪を片方に結った一人の少女がいる。

「……………なんで……………お前がここに……………」

本来そこにいるはずのない人物。一瞬、優真は今の場所も使命も何もかも忘れた。

「優音……………」

霧谷優音。優真の妹。あの時、優真と共にこの世界に飛ばされた中の一人。

「な、なんでお兄ちゃんが……………」

「それはこっちのセリフだ！ やっぱお前もこっちに來てたんだなよかったーお前が無事で……………」

「……………それ以上近づくな……………」

優真が優音に駆け寄ろうとした瞬間、リングサーク王がそう言い放った。

「お前がユウネの探していた兄だとしても、敵である事には変わらない……………」

「そんな……お父様！」

お父様？ と優真は眉をひそめたが今は考えるのをやめる。

「お前はユウネがここにいと知っても、やるべき事は変わらないの
だろう」

確かに、今優真がしなければいけないのは

「あんたを連れていく」

「お兄ちゃん！？」

優真が白光の魔導具を出現させると、優音は悲痛な声で叫んだ。
それが戦争。もう止まる事はできないのだ。

優真は魔導具を深く構え走り出す。距離は五メートルほど。一瞬
で詰められる。

白光の導力『封印』発動。魔導具に触れた魔法を全て打ち消す。

（こいつでリングサーク王を斬れば……！）

『封印』で相手の魔力を封じ込める。この攻撃を受けた者はしばらくの間魔法の使用が不可能になる。

リングサーク王が魔導具らしき杖を構えるのが見えた。

「魔法ごと打ち抜く！」

優真は深く構えた魔導具をリングサーク王に向かって思い切り突き出

「やめて！！ お兄ちゃん！！！！」

その言葉と同時に優音は優真とリングサーク王の間に割り込み、赤い装飾が施された銃を優真に向けてきた。

「くっ」

咄嗟に腕を引き、後ろに跳ねて優音と距離を取った。
優音の顔は悲しみに歪み、今にも涙しそうなほどだ。

「そこをどけ優音。戦争をおわらせる為にはその人を連れてかなきゃならねえんだ」

「ユウネ。ここは危険だ。下がっていなさい」

前と後ろ、両方にそう言われても優音は強く首を振るだけ。両手を上げて引こうとしない。

「なんで……お父様とお兄ちゃんが戦わなきゃならないの？ ……
そんなの……やだよ……」

優音の目から涙がこぼれ落ちる。だが、それでも優音の目は真っすぐ優真を見据えている。

「……」

思えば昔から優音の涙には弱かった。小さい頃に両親を亡くし、それでも優音の笑顔を無くしまいと頑張ってきた。

甘えん坊、泣き虫、わがまま。それでもたった一人の大切な妹。こんなアクシデントで泣き虫に拍車がかかってしまったようだ。だが、それでも。捜し求めていた妹が立ち塞がっても、果たさなければならぬ使命がある。

今も戦っている仲間の為にも、心配しているであろうお姫様の為にも。

「そこをどけ優音。その人を連れて行って、お前もこっちに来い。一緒に愛華を探そう」

「やだよ！ お兄ちゃんのバカ！ わからず屋！」

わからず屋なのはどっちだ、と言い返しそうになったがそこは我慢。このまま言い争いになっても不毛なだけだ。ならばどうするべきか。それはもう優真の中では決まっている。

「無理矢理にでも連れていく！」

優真が再び魔導具を深く構えるのを見ると、優音も銃型の魔導具を優真に向ける。

出来る事なら優音と戦いたくはない。だが、言葉だけでは何も解決しないのはアレンとリングサーク王の時でもう理解している。ならば戦うしかない。結果的に優音を取り戻せるならそれも仕方ない。

優真は魔導具を握り締めて一步を踏み出す。

「ユウネ……」

「お母様、お父様も手を出さないでください。お兄ちゃんは私が止めます」

優音の目にはもう涙はない。代わりに強い光が灯っている。優真も優音も、互いに引けない。譲れないものがあるから。

今ここに、史上最大の兄妹喧嘩が始まった。

愛華とリースがエントランスホールに入ると、そこには酷い光景が広がっていた。

壁や天井は崩れ、そこら中に切り裂いたかのような傷があった。

そして床には倒れて怪我をしている兵士達がひれ伏している。

愛華は慌ててその中の一人に駆け寄ろうとしたが、リースに手で制された。

「大丈夫よ。みんな怪我してるけど、致命傷じゃなさそう。気が付けば自分で歩けるわ。それよりも……」

リースはもう一度この惨状を見回す。そしてやっぱり、と呟いた。

「やっぱり？」

「ここでジュードとベルがやり合ったみたい。もうここにいないところを見ると、みんな先に行ったみたいね」

やはり遅かった。その二人がぶつかればどちらかはただではすまないだろう。だが、ここにいないという事は怪我はしていないのか、それとも無理をして跡を追ったのか。

「……違うわね。ベルの魔力の残り香の方が強い。それと知らない魔力の残り香。じゃあジュードとベルが戦ったわけじゃないのかしら？」

確証はないけど、ジュードは仲間をこの場に任せて先に進んだってそこかしらね」

すらすらと魔力の残り香というものだけで予想をたてていくリース。だが、それはあくまでも推論の域を出ない。確固たる証拠が必要だ。

「先を急ぎましょ。手遅れになる前に」

その手遅れになった状態を愛華は考えたくなかった。そんな考えを頭から追い出すかのように愛華は先を急いだ。

優真は銃の照準が合わないよう素早く動き、柱の影に身を隠した。

その後を追うようにして発砲音、数瞬後には壁や床に弾が弾かれ

る音が聞こえた。

「おまつ！ 止めるとか言っというて殺す気か！？」

「大丈夫。私の力じゃ人を殺す事は出来ないから。その分むっちゃ痛いけど」

その背に重大な責任を背負っているというのに、二人は気負ってはいない。むしろ楽しみに遊んでいるようにも見て取れる。

だが、リングサーク王と王妃はそんな風には捉えられなかったらしい。優真が優音の兄である事も含めて何とも複雑な表情で見つめている。

そんな時、優真が隠れている柱へ放たれていた銃弾の嵐が収まった。

（チャンス！）

優真は魔導具を構えて飛び出した。

優音の銃弾の嵐が収まった要因として考えられるのは三つ。魔力が切れたか、温存か、それとも接近戦に持ち込むか。

一つ目はさすがに優音でもバ力ではないからないだろう。三つ目のは銃に詳しい優音ならば恐らく選ばない。となると残るのは、魔力の温存。

横目で優音を見ると、魔導具を構えていた。だが、狙いは大きくずれていた。

ズドン、という爆発音。着弾点はさっきまで優真が隠れていた柱。

その隙に優真は優音へと迫る。

「どこ狙ってたんだよ」

「ふふん、お兄ちゃん。そんなに油断していると怪我しちゃうよ」

そんな優音を訝しげに思うが、優真は構わず接近する。

次の瞬間、優真の背後から地響きのような音が迫ってきていた。

優真は危険を感じて咄嗟に横に体を投げ出す。

そして、今まで優真がいた場所に柱が倒れ、優真の心臓が止まりそうになった。

「あぶな！！ お前やっぱ俺殺す気だろっ！！！」

「大丈夫だつて。お兄ちゃんなら避けるって信じてたし、怪我しても治してくれる人いるから」

「そつという問題じゃねえ！！！」

倒れてきた柱の根元を見ると赤く発熱して溶けている。

単なる銃弾で柱が溶ける話なんて聞いた事がない。ならばこの現象は優音の導力であるという事が。

「私の属性は『紅風』、導力は『熱導』。ま、簡単に言えば熱を操る力つてとこかな」

使いようによっては危険な力だ。死にはしないだろうが、痛みと火傷は確実。

だが優音は本気だ。死ぬような事はないからこそ、優音は積極的に使ってくる。それに優音は銃を使った訓練を祖父から叩き込まれている。今思えば、祖父は法律をぶつちぎりで破っていたように思える。

「つたく、じいちゃんもなんで優音に銃の扱い方なんて教えるかな」

それにハマっていた優音も優音だが。当時はもっと女の子らしい趣味を見つければいいのに、とか思ったりもした。

それがこんや厄介な事になるなんて思いもしなかったが。

「おかげで俺も本気でやんなきゃなくなっただじゃん」

たからこそ手加減はできない。極力優音を傷付ける事はない『白光』の魔導具で戦いたかったが仕方ない。

優真は『白光』の魔導具を消し、自分の中にあるもう一つの属性の感覚をつかみ取った。

「気を付けろよ。こいつはマジで危険だからな」

優真の右手が黒い闇に覆われた。その闇は形を変えていき、やがて刀の形態を取った。

現れたのは漆黒の刀。刃先から柄に至るまで、『白光』の魔導具とは全てが逆の黒い刀。

もう一つの属性に、優音達も驚きを隠せないでいる。

優真は魔導具を一振りさせる。たったそれだけの動作で空気が切り裂かれた。

「俺のもう一つの魔導具。属性『黒闇』。導力は『侵食』」

第十九話 均衡する力と力（前書き）

更新がけっこう遅れてしまいましたが、二話同時投稿です。さて、
兄妹喧嘩の行く末やいかに……！

第十九話 均衡する力と力

先に進んで行くにつれて部屋や廊下の状態が酷くなっていく。火はもう消えたようだが、もう城はほぼ半壊状態。

だが、城に入った時から聞こえていた破壊音や爆発音は先程から遠くなっていた。

「上に強い魔力、少し先にそこその魔力を感じるわ。多分上にアレンとジュードがいるわね」

「そうなんだ……。じゃあ先に上に行けばいいの？」

リースは走りながらどうするか考えている。幼なじみ同士の戦いを止めるか、王を助けるか。

効率を考えれば別々に行動したほうがいい。だが、それだと愛華が危険な目にあってしまう。

「私なら大丈夫だよ」

「アイカ……」

「早く止めたいんでしょう？ 行ってきた。私は王さまの様子見てくるから」

「~~~~~!!」

リースは何とも言えない表情で声にならない声を上げた。

リースの中で葛藤しているようだ。効率か、安全か。考えている時間はない。

「……わかった。止めてくる。でも!! でも絶対危ない事しちゃだよ。すぐに行くからちゃんと待ってて」

「うん、わかった」

愛華のその言葉を聞くと、リースは今までの倍以上の速さで駆けていった。

遠くからちゃんと待ってなさいよ、という叫びがエコーがかかって聞こえてきた。

そんなリースに苦笑する愛華。様子を見るとは言っただ事は本当だが、愛華はそろともう一つ気になる事があった。

『そなたの探し人はそなたの向かう先にいる』

「……よし、行こう」

愛華は駆け出した。王の間へ。そこに優真と優音がいる気がして。

優真は倒れてくる柱を横風ぎに斬る。柱はまるで紙を切るかのようについてたやすく二つに分かれた。

優真の持つもう一つの属性。『黒闇』、その導力は

「『侵食』。全ての物理を切り裂く」

ジュードとの訓練の中で得た力は危険極まりない力だった。一歩間違えば、人間など簡単に殺せてしまう。

「なんとという力、なんとという才能……。『白光』と『黒闇』の二つを持っているなど八賢者の中にも存在しないというのに……」

優音の後ろでリングサーク王が驚愕の声を上げた。それでも優音は戦う事を諦めてはいない。

「そんな事は関係ないですお父様。お兄ちゃんが何をしようとしても絶対止めますから」

優音が銃口を優真に向ける。するとその銃口が赤く輝いた。

「お兄ちゃんが隠し玉を持ってたみたいに、私だっと思っておきがあるんだから！」

優真に向けられた二つの銃口が更に赤く輝く。そしてそこに優音の魔力が集約されていく。その濃密な魔力はやがて視認できるほどに高まり、赤い風でできた球体の形を取った。

「『ぐれんふうが紅蓮風雅』……！！」

優音が魔導具のトリガーを引いた。

銃の爆発音が辺りに響く。赤い風の球体が優真に向かって放たれた。

「ぐっ……」

優真の額から汗がしたたり落ちた。赤い風の球体が迫るにつれて周りの景色が霞む。

灼熱の風が優真の頬を焼く。流石に直撃すれば怪我では済まないかもしれない。

だが

「やらせねえ！」

優真は黒闇の魔導具を消し、白光の魔導具を出現させた。

そして赤い風の球体を斬る。導力『封印』によって赤い風の球体は空中に四散した。

（よし、今のうちに反撃を！）

優真は白光の魔導具を消し、再び黒闇の魔導具を出現させ構え走りだした。

だが、爆発音が二つ鳴り響く。数瞬後、左肩と右足に鋭い痛みが走った。

「がつ！？ くっ……」

優真は肩膝をついて優音を見据えた。優音の二つの魔導具から発砲炎が昇っている。

「痛って……くそ、まさかとおきを囿にするなんて……」

血は出ていないが、腕と足が痺れている。あまり力が入らない。

「頭を使わなきゃダメだよお兄ちゃん。まだまだ行くよ」

優真の腕と足の痺れを好奇と見た優音は受け身から一転、優真に向かつて駆け出した。

「にやろつ、なめんなよ。接近戦は俺の領域だ」

優真も応戦する為に魔導具を右手に構える。足の痺れで回避は期待できない。優音の攻撃はなんとかして受け止める。

「『紅蓮』」

優音は走りながら再び魔導具に魔力を込め始めた。それを見た優真は二度黒闇の魔導具を消し、また白光の魔導具を出現させる。

「なぐんちゃって」

「なっ!?!」

優音は急に魔力の溜めを止め、足元の石を蹴った。

「うぐっ……」

導力『封印』では物理である石は無効化できない。優真は対抗手段のないまま腹に受けた。

その様を見て優音はニヤリと意地の悪い笑みを浮かべた。

「弱点発見。見たところ兄ちゃん、属性の両立はできないみたいだし、属性の入れ替えの間に数秒のラグがあるみたいだね」

「……」

とうとうバレた。ジュードにもそれは指摘された点だ。優真は黒闇属性の魔導具を得る事に力を注いでいたから、その弱点の補強が

できなかったのだ。

最強の力を持つ魔法初心者。故に脆い。弱点がはつきりと浮き彫りになってしまう。

「それが……どうした！」

弱点がバレたからといって怯む優真ではない。むしろ開き直る。

優真は痛みを我慢して走りだした。手には白光属性の魔導具。

「わっ!？」

まさか突っ込んで来るとは思っていなかった優音は魔導具を乱射する。

優真は最小限の動きで弾の雨を避け、避けきれないのは腕で受け止める。

「ずりゃあ!!」

優音が間合いに入ったところで思い切り魔導具を振るう。

「つとと!!」

流石に優真の妹だけあって反射神経はいい。紙一重で斬撃をかわされた。

かわし様に優音は魔導具のトリガーを引く。優真も負けじと魔導具を振るい、運良く弾は魔導具に当たり打ち消された。

「まだまだあ!!」

優真は更に追っては斬る、弾を弾く、もしくはかわす。優音も斬

撃を避ける、避け様に魔導具を撃つ。

どちらの攻撃も当たらない。流石に兄妹だからか、いい意味でも悪い意味でも息が合っている。

このままでは埒が開かないと感じた二人は一度大きく距離を取った。

「はは……」

「……？」

いきなり笑いだした優真を不審に優音は見つめる。

「面白れえな、優音。確か昔、こんな感じでじいちゃんに試合させられたっけな」

「うん、あったね。私女の子なのにお兄ちゃん容赦なかったもん。防具付けてなかったら危なかったよ」

「ばかやろ。お前だって逃げ回りながらエアガン連発してきたじゃねえか。そのくせ俺が疲れた頃に近づいて殴る蹴るわ」

「人聞き悪いよ。作戦と言つてよ」

和気あいあいと今の状況を忘れて昔話に花を咲かせる優真と優音。だが二人は理解している。この勝負は次の一手で決まるという事を。

「あの時はどっちも倒れて勝ち負けは決まらなかったが」

「うん。今度は負けないよ」

「それは俺のセリフだ」

それ以降、二人は全く動かなくなった。飛び出すタイミングを窺っているのだ。

優音の背後に控えているリングサーク王と王妃はもはや何も言わ

ない。

動かないでいたのはそれから数秒か、数分か、気分的には数時間も待っていた気がする。

だがその均衡は突然崩れ、二人は全く同時に走りだした。

「でりやあああああ！！！」

「やあああああ！！！」

優真と優音はまるで自らを鼓舞するかの様に、叱咤するかの様に魔導具に全魔力を込める。

優真は全ての魔法を打ち消す導力『封印』に、優音は灼熱の風で敵を焼き尽くす『紅蓮風雅』に。

そして二つの力はぶつかった。どんな魔法も優真の導力の前では無意味かと思われた。しかし

「ぐっ……打ち消し、きれない！！？」

赤い風の球体は優真の魔導具に触れても消えていない。むしろ押し返している。

そもそも優真の属性は最強であるが故にその魔力の消費量も膨大である。既に優真の魔力が尽きかけているのだ。

だが、それは優音も同じ。優音は魔導具を消し、地面にへたりこんだ。

「はあ、はあ……。さ、流石にもう無理……」

優音にもほとんど魔力は残っていない。つまりはこれが最後の攻防。優真が打ち消せば優真の勝ち、それができなければ負けとなる。

「ぐ……くう……！！！」

（負けられない……）

ここで負けたら今まで世話になったジュード、レン、エアに顔向けできない。

勝っても負けても、リーザリスとリングサーク、どちらかの環境は必ず変わる。それは必然。

だが、絶対にリーザリスへ帰る。無事に帰ると約束した。リルとリルの為に。そう優真が強く思い始めた時、白光の魔導具に小さな光が灯った。

徐々に それはほんの微々たるものだが、それでも白光の魔導具が灼熱の風の球体を押し返し始めた。

「こんなところで、負けてたまるかあああああ！！！！！」

優真の思いに呼応するかのように、魔導具は強く輝きを放つ。

そして斬った。優真の思いを乗せた渾身の一撃。灼熱の風の球体は真つ二つに切り裂かれ、打ち消された。

第二十話 再会

優音の最後の攻撃を打ち消した優真。その手にはまだ白光の魔導具が存在している。

「はぁ……はぁ……」

だがもはや魔力はほとんどない。今の攻撃で魔導具の維持さえも難しくなっている。

まだ魔力は少しだけ残っている。これで次に『封印』で優音を斬れば……。

「これで 終わりだ!!!」

床に座りこんでいり優音に向かって優真は魔導具を振り下ろす。視界の隅でリングサーク王が立ち上がるのが見えたがもう遅い。既に間に合わない。

だが、その時だった。

「やめなさああああああい!!!!!!」

突然、優真の頭上から滝のような豪水が落ちてきた。当然その被害は優音にも降り掛かる。

優真の魔導具は今の衝撃で消え去った。リングサーク王と王妃も何が起きたのかさっぱり理解できていない。

「優君!!! 優音ちゃん!!!」

その声は二人を叱りつけるような厳しい声色だった。そして二人にとっては懐かしく、捜し求めていた声。

二人が振り向いたその先には、この世界で見た事がなかった黒髪の少女。

「愛華！……！」

「愛華お姉ちゃん！……！」

蒼い魔導具を持った少女　愛華は、再び優真と優音に会えた喜びの表情ではなく、鬼のような形相でゆっくりと歩いてきている。

だが、そんな事には気づかないまま水浸しの優真と優音は、今の状況を忘れて愛華に駆け寄った。

「愛華！　無事だったのか。どうやってここに？」

「お姉ちゃんもこっちに來てたんだ。それって魔導具だね。お姉ちゃんも作ったんだね」

「……そんな事より……二人とも……」

流石にそんな愛華の様子で、優真と優音は気付いた。愛華が怒っているという事に。

昔から二人の兄妹喧嘩を止めたり制裁を下していたのは愛華だった。故に本能が危険を感じている。

「お、おい、愛華……？」

「お、お姉ちゃん！　お、落ち着いて！」

「……二人とも……昔から喧嘩はダメって言ってたよね……」

怒りに打ち震える愛華。うつすらと愛華の体から蒼い魔力が漏れだしていくのが見える。

既に優真と優音は地べたに正座して愛華を見上げている。

「ち、違った愛華！　これは何というか意見の食い違いというか……」
「そ、そうだよお姉ちゃん！　これは成り行きというか不運な偶然
というか……」

流石兄妹、苦し紛れな言い訳も同じようなものになっている。だが、それは昔からなので愛華に通用するわけがない。

むしろ愛華の怒りのボルテージがどんどん上がっていき

「口答えしない……！」

「はいっ……！」

愛華の一喝で二人の背筋がぴーンと伸びた。

「昔からあれほど仲良くしなさいって言ってるでしょう！　もう二人とも子供じゃないんだからわかるでしょう！　だいたい優君も優音ちゃんも」

それから愛華のお説教は優真と優音が音を上げて土下座するまで十分間続いた。

「えーっと、まあとにかくだ」

一通り愛華に絞られた優真はコホンと咳払いをして、愛華と優音の頭に手を置いた。

「二人とも、無事でよかった……」

優真は心の底からそう言った。三人ともまともな再会ではなかったが、今は落ち着いて再会できた喜びを分かち合う。

「うん、ホントに。私はお母様達に会えたから運がよかったよ」

「そうね。外に召喚されてたらかなり危険なものね」

優音の言葉に王妃が同意する。今はとにかく優真も愛華も交えて一時休戦としている。というよりも、もはや優真には戦えるだけの体力も魔力もない。

「でも、これからどうなるんだろうな。愛華と優音にも会えたし、リーザリスに従う必要はなくなったんだが、世話になった恩は返したい。要は戦争を止めりゃいいんだが、どうすりゃいいんだろ……」
「止める必要はもうないだろう」

玉座で疲れ切ったようにリングサーク王は言い放った。

「今や城がこのような状態になってしまい、我が軍の士気は相当に落ちてしまっているだろう。まだ開戦はしていないとはいえ、もは

や雌雄は決している。そもそも勝ち目は薄かった。あちらには八賢者の一人、エア・ローゼンクロイツがいる。こちらには八賢者の子が二人いるとはいえ、まだまだ未熟。我が国には戦争を行うだけの戦力が足らな過ぎる」

王の話によると、全面戦争のきっかけを作ったのはリングサークの戦争賛成派勢力だという。その勢力がリーザリスの王女であるリルを狙ってきたのが発端らしい。

「なるほど。あの時リルを襲ってきた奴らはリングサークの兵士だったってわけか。それがきっかけで……」

「じゃあ、リングサークには戦う意志がないってリーザリスの王様に言ってみたらどう？」

愛華がそう優真に提案を出してきた。どうやら両国の橋渡し役をしろとの事らしい。確かに上手くして優真やジュードがリーザリス王に口添えすれば、例えリングサークが敗戦したとしても不当な扱いなどはされないかもしれない。

「まあ元からそうするつもりだったし、さっき優音にも言った通りこっちの王様も悪い人じゃない。すぐにはいかないかもしれないけど、また元に戻ると思うぞ」

「でも……それってどうなんだろう……？」

「ん？ どうしたの愛華お姉ちゃん？」

今までの話を聞いていて、愛華が疑問の声を上げた。

「元々勝ち目が薄いのに戦争をけしかけるような事するかなあ……？」

「いや、勝ち目がないからリル　こっちの王女を誘拐しようとし

「たんだろ？」

「でも……なんか出来すぎてるというか……引っ掛かるような気がして……」

愛華はこの戦争の裏の部分が気になっているようだ。だが、今はそこを考えていても仕方がない。

とにかく今はジュードとアレンの戦いを止めて、今後の事を話し合わなければならない。

「よし、少し回復した。ジュードとレンを連れてくる。優音もついてきてくれ」

「うん。あ、でもベルって下にいるのかな？」

「え、下には誰も」

「私ならここにいます」

愛華の言葉を遮って入り口の方から声が聞こえてきた。

そこには緑の髪の少女とその少女に青の髪の少女が気を失いながら肩で担がれている。

「レン！！」

「ベル！！」

優真と優音はその二人にすぐさま駆け寄った。緑の髪の少女ベルは優真に青の髪の少女レンを渡し、ベル自身もふらついている。

「おい、レン！ 大丈夫か！？」

「心配ありません。気を失っているだけですし、怪我もありません」

とりあえずレンを壁に寄り掛からせ座らせ、顔色を見定める。少

しだけ疲れが見て取れるくらいであとは問題ない。

「よかった……」

「優君、その子は？」

優真の後ろから愛華が顔をのぞかせた。

「ああ、レンっていうんだ。俺がこっちの世界に来て世話になった人だよ。きっと愛華と優音も仲良くなれると思うぞ」

「うん、そうだいいな……」

そう言う愛華はなんだか複雑そうな表情をしている。期待と嫉妬が五分五分といった心境だろうか。

そんな事には気づかず優真はレンの頭に手を置き、労るようにゆっくりと撫でた。

「頑張ったんだな、レン。今はゆっくり休んでくれ」

一方、そのやり取りを見ていたベルブランカも疲労はあるようで壁にもたれ掛かっていた。それを心配そうに優音は声をかけた。

「大丈夫、ベル？」

「……はい。流石、ジュード兄さんのお気に入りなだけあります。力はほぼ互角。最後は気力で勝ったようなものです。その後、あの方を医務室まで連れていき、ここまで参りました。そんな事よりもユウネ様。お怪我はありませんか？」

「うん、私は大丈夫だよ。魔力はほとんどないけど」

「くっ……、申し訳ございませんユウネ様。私が迅速に勝利していればユウネ様を危険な目には遭わせませんでしたのに……」

ベルブランカは悔しそうに目を固く閉じ、顔をうつむかせる。

「だ、大丈夫だよ！ 相手はお兄ちゃんだったし、そんなに危険な目には…… ちよつとは遭ったかもしれないけど、私もお兄ちゃんも怪我とかは全然ないから！」

兄、という単語を聞いたベルブラン力は視線を地面から優真の方へと向けた。

「……あの方が離ればなれになっていた御兄妹の方ですか。あの方の隣にいる女性は？」

「あの人は愛華お姉ちゃん。私とお兄ちゃんが戦ってる時に急に現われたの。そういえばどうやってここに来たのか聞いてなかったなあ」

「……ユウネ様の探し人が同じ場所で同じ時に現われた……？ それも二人も……」

異世界から来たにも関わらず今日という日に同時に現れた。それは果たして偶然か、それとも……。

ベルブラン力は疲れた頭で考えるも、今は上手く回らない。だが、優真が優音に声をかけた事でベルブラン力の思考は中断した。

「よし、じゃあ優音。行こう。色々と積もる話はあるかもしれないが、今は他にやるべき事がある」
「うん」

優真の所へ行った優音と入れ違いに、今度は愛華がベルブラン力の元に来た。

「……何か、御用ですか？」

優音の姉のような存在、と聞かされていてもどうしても警戒心を強めて対応してしまうベルブランカ。

だが、愛華はそんな事を気にしたようではなかった。

「あなたが、リースちゃんの言ってた幼なじみさんだね。確か名前
は、ベルブランカさん？」

「リース……？ まさかリース姉さん！？ リース姉さんもここへ
来ているのですか！？」

「うん、それも含めて 優君！ 優音ちゃん！ ちょっと待って
！」

愛華は王の間を出ようとしていた二人を呼び戻した。優真と優音
は怪訝そうな表情をして戻ってきた。

「どうした愛華？ けっこうこっちは急いでるんだが……」
「えっと、今戦ってる人達は多分優君達がいかなくても」

と、その時。突然優真達の頭上の天井がガラガラと音を立て
て崩れ落ちてきた。

第二十一話 朱に染まる書状

突然、優真達の頭上の天井がガラガラと音を立てて崩れ落ちてきた。

「愛華！」

「ユウネ様！」

咄嗟に行動できたのは奇跡としか言い様がない。優真は愛華を、ベルブランカは優音を抱き抱えて横に飛んだ。

瓦礫は優真達が今までいた場所に積み重なっている。そして、いきなり天井が崩れ落ちてきた原因が土埃が晴れるにつれて見えてきた。

「はあー、はあー……」

「ぐっ……」

それは二人の人影。赤髪の少年と緑髪の少年である。赤髪の少年は両手に大剣と槍の魔導具を持ち、緑髪の少年は翼が生えた白馬に跨り、黒い弓の魔導具を構えている。

だが、魔導具も白馬も既に消えかけており、二人とも全身傷だらけで満身創痍である。

「ジュード！」

「アレン！」

赤髪の少年 ジュードと緑髪の少年 アレンは横目でちらりと優真と優音を見た。

「……ユウマか……。じゃあ下は王の間だったのか……」

「……申し訳ありません、ユウネ様。この男を黙らせるのに少女騒がしくなるかもしれません」

「抜かせ。俺はまだまだやれるぜ」

その言葉を証明するかのようにジュードの魔導具が強く輝きを放ち、蒼い炎が燃え盛り、紫の雷がほとばしる。

アレンの魔導具も黒い輝きが増し、白馬は翼をはためかし、その翼から自身の色とは対照的に黒い風が巻き起こった。

「お、おい！ 今はそんな事やってる場合じゃねえんだよ！」

「そうだよアレン！ 止めようよ！」

優真と優音がそう叫んでも二人は全く聞く耳持たず。というか、極度の疲労と興奮状態で届いていない。

「ずりゃあああああ！！！」

「うおおおおおお！！！」

二人は互いに向かって魔導具を構えた。それだけの事なのに叩きつけられる魔力の余波は凄まじい。

だが、愛華は周りの心配をよそにジュードとアレンの頭上に空いた穴に視線を向けていた。

愛華は感じていた。上から強い怒気を含んだ巨大なプレッシャーが近づいてきているのを。

そして

「やめなさい！！！！ バカどもおおおおおお！！！！！！」

ジュードとアレンの脳天に巨大なハンマーが落ちてきた。それを

操っているのは金髪の少女。

後にジュードとアレンは語る。なんだか妙な川を二人で競って泳いでいた、と。

金髪の少女がハンマーを持ち上げると、ジュードとアレンの無残な姿が残されていた。時々ピクツと痙攣している。

「リースちゃん！」

「アイカ！ よかった！ 上手くいったみたいね！」

金髪の少女 リースはガバツと愛華に抱きついてきた。

『……………』

一度に色々な事が起きたのでその二人以外は全く展開についていけない。

その均衡を破ったのは、困惑したままの優真だった。

「えーっと、愛華。その人は……………？」

「あ、ごめんね。この人は……………」

「リースミリス・ベルティオー。リースって呼んでね。そこに転がってるバカ二人とベルの幼なじみ。色々あってアイカとリングサークに来たのよ」

愛華の言葉を遮って勝手に自己紹介を始めるリース。さらには優真を見つけるとニヤリと笑みをこぼした。

「ねえねえ、あの人がアイカの言ってたユウ君？ ちゃんと再会のキスはした〜？」

「はあ！？」

「ええ！？」

優真は一瞬で理解した。この女、ジュードやエアと同じ性質だ、と。

優真はため息をつき、愛華は手をブンブン振ってリースの言葉は否定している。

そんな時、優音が何か思い出したように手をポンと叩いた。

「あ、そっか。ベルが言ってた許婚ってリースさんの事だったんだ」
「あ」

と、漏らしたのはベルブランカ。見ると、言っちゃったよこの人的な表情をしている。

そんなベルブランカの視線の先には頬を真っ赤に染めたリースが

「や、やだもう！ アレンったらそんな事まで話したの？ もう恥ずかしいなあ！」

バキッ！ ドコッ！ ガスッ！

王の間に痛々しい音が響き渡る。リースが足で踏みつけている音だ。その足元には痛みで目を覚ましたアレン。だが、今度はその痛みで半ば気絶している。

「がっ！？ ぐっ！？ ぎゃあ！？ あ……」

アレン、再び気絶。

「そういえば……」

以前、アレンが許婚の事を言っていたのを優音は思い出した。

『その性格が問題なんです！ 口よりも先に手が出る、足が出る！ ほめれば照れ隠しに殴られる、けなせばもっと激しく殴られる！ あんなバイオレンスな嫁は願い下げです』

なんだか凄く納得してしまった。優音、優真、愛華、ベルブラン力は集って遠巻きにリースとアレンを眺めていた。

「ツンデレなんだ」

と、優音。

「ツンデレです」

と、ベルブランカ。

「ツンデレだね」

と、愛華。

「ツンデレだな」

と、優真。

「……そ、そんな言葉で……か、片付けないで……くださ……」

アレンはそれだけ言い返すと三度バタツと倒れた。そして四人でアレンに向かって合掌。

アレンが目を覚めたのはそれから五分後の事だった。

リングサークで優真、優音、愛華が再会を果たした時、すでに朝日が昇る時間帯になろうとしていた。

それは同時に、リーザリス、リングサーク、両国の全面戦争が開始される合図でもある。

リーザリス軍の先頭には八賢者の一人、エア・ローゼンクロイツが普段の陽気な雰囲気とは対照的に、口をつぐみ、射ぬくような視線でリングサーク軍を眺めている。

そして本来ならリングサーク軍を率いているのは八賢者の一人であるシェリア・レヴィイのはずであった。それで対等。確実とはいかないまでも、エアの抑止力として重要な役割を担っていた。

だが、シェリアは現在別任務に就いており行方不明。リングサーク騎士団は王を守る最後の砦であるため、アレン含め最前線には出てこない。

よって、今のリングサークの戦力では万に一つも勝てる可能性はない。

「……不毛ね。出来る事なら戦いたくはないのだけど」

エアは誰に言うまでもなくそう呟いた。近くにいた部下が反応し

たがなんでもない、と手で制する。

「それにしても……」

何か、嫌な予感がする。漠然とした不安。それは、八賢者として戦ってきた魔導士としての直感。

この戦争の裏には何かある。だがそれが何かはわからない。

「……さて、行きましようか」

そしてエアは歩きだした。そろそろ太陽が昇る時間である。今は、この戦争に勝つしかない。

「にやるほどにやるほど、俺達が寝てる間にそんな事が」

「まさかユウネ様達だけではなく、僕達まで再会するとは……」

ジュードとアレンが目覚めた後、優真達は今までの経路を話し合った。

アレンはリースを見るなり逃げ出そうと試みたが、がっちり腕を組まれて半ば魂が抜けている。

「俺達がまた会えたのはいいけどさ、そしたら今後はどうするんだ？」

優真が優音と愛華と再会できた時点で、もはやリーザリスの王に従わなくてもいいような気はしている。

だが一度引き受けた事だし、それに何より

（リルのあんな顔見ちまったしな……）

リーザリスの兵士が出撃する時、リルは悲しそうに見送っていた。そして戦争を止めたいと願う思い。叶えてやりたい。優真はそう思っている。

「俺達のやるべき事は最初から決まっている」

ジュードは優真の問いに答えるようにリングサーク王を前に見据えた。

という事は、やはりそういう事なのだろう。アレンも臨戦態勢を取っている。

しかし、ジュードは頭を下げた床に膝をついた。

「戦争は、どうしても止めなきゃならない。だから兵を引き上げさせてくれ」

「ジュード……」

今まで決して話し合いでは解決しようとしなかったジュードが頭を下げている。

そんなジュードを見てアレンもベルブランカもリースも驚いたような表情をしていた。だが、レンだけは笑顔でジュードを眺めている。

「陛下も争いは望んでいない。リングサークとは友好関係を築きたいと陛下はお考えだ」

「俺達リーザリスの王女とも友達ですから、リルにも口添えしてもらえばきっと大丈夫です」

ジュードを援護するかのようによ優真もリングサーク王を説得にかかる。優真の言う通り、リルに話を通せばきっと協力してくれるだろう。

アレンとベルブランカはもう何も言わずにリングサーク王の言葉を待っている。優音も事の成り行きを見守っていた。

「わしは……今まで散っていた命ために負けるわけにはいかない……」

「お父様!？」

「ライル王!」

リングサーク王の先ほどと変わらない言葉に優音とアレンも異義を唱えようとした。

だが、王の表情を見て二人は言葉を飲み込む。次の瞬間にはリングサーク王の顔は憑き物が落ちたように晴れ渡っていた。

「頼みがある。わしはどうなっても構わない。だから国民には今まで通りの暮らしを送らせてやって欲しい。それと、今まで散っていた命のために墓標を建ててやってくれ」

「そのように、陛下には伝えておこう」

「そうか……なら、もうわしには争う理由はない……」

それはつまり、戦争終結を意味している言葉だった。
全てが終わったわけではないが、優真の中では大きな使命を成し遂げた事で、どっと出た達成感で力が抜けていった。
そんな優真の背中をポン、とレンが叩いた。

「やりましたね、ユウマさん。きっとリーレース様もお喜びになりますよ」

「ああ、そうだな」

「そなた、ユウマと言ったな」

突然、リングサーク王が優真に話し掛けてきた。

「あ、はい。優音の兄です。なんだか優音が世話になったみたいで」「いや、そんな事はない。ユウネはリングサークの王女として立派に働いてくれた」

「ええ、ユウネのおかげで私も毎日が楽しかったわ」

いつもだらしのない優音を見ている優真としては、王女として働いている優音を全く想像できない。むしろ問題起こしてたんじゃないかと心配になる。

「わしが就けてしまった肩書きのせいでしばらく不自由になるかもしれないが、我慢して欲しい」

「俺は優音が危険な目に遭わなければ構いません」

「ライル王、そろそろ……」

アレンがリングサーク王にそう促し、リングサーク王はそうだな、と呟いた。

「紙とペンを持ってきてくれ。リーザリスに書状を書こう」

「はい、ただいま」

アレンがそう答え、懷から紙とペンを出した。

リングサーク王の書状をリーザリスに持っていけば、晴れて優真達の任務は終了となる。

「これでようやく元の世界に戻る方法を探せるな」

ここまで来るのに随分と回り道してしまった気がする。優真はしみじみそう思った。

そんな事を考えている内に、リングサーク王は書状を書き終えていた。

「できたぞ、ユウマ。持っていくがいい」

「はい」

優真がリングサーク王の書状を受け取ろうとした。そして、その声は唐突に優真の耳に届いた。

「悪いけど、そんな事はさせません」

ズツ、という音と共にリングサーク王の胸を剣先が貫き、その書状は朱に染まった。

第二十二話 真実

目の前で起こった突然の出来事に、誰もが全く反応できなかった。まるで時が止まったかのように。

だが現実はそのではない。王の胸から突き出ている剣を伝っておびただしいほどの血が流れ落ちた。

「……………」
「ふん」

そして、何のためらいもなく剣は引き抜かれた。それに伴いリングサーク王の出血の量が増大する。

ゆっくりと崩れ落ちていくリングサーク王。その事実をいち早く受け止めたのは優音だった。

「い、いやあああああ！！！！ お父様あああああ！！！！！！」

優音の悲鳴にアレンとベルブランカは素早く反応し、次の瞬間にはリングサーク王を突き刺した人物に飛び掛かっていた。

「貴様あ！！！！ よくもおお！！！！！！」

「絶対に許しませんっ！！！！！！」

二人の手にはすでに魔導具が出現されている。アレンは風を纏った弓で直接叩きつけ、ベルブランカは鉄爪での切り裂く一撃。

標的は一人。漆黒のローブにフードを目深に被り、手にはリングサーク王を突き刺した細身の剣が握られている。だが、その剣で二人の攻撃を防ごうともしておらず、避けようともしていない。

「……ぬるいな」

バシィッ、と音を立てて二人の攻撃は弾かれた。しかし、フードの人物は一步も動いていない。優真には何が起ったのかさっぱりわからなかった。

「風の結界か……。厄介だな」

隣でジュードが忌々しげに舌打ちをする。その両手にはすでに魔導具が出現している。

「お父様ああ！！ お父様ああああ！！！！」
「っ！？ 優音！ 待て！！」

フードの人物の足元に倒れているリングサーク王に向かって優音が駆け付けようとするのを、優真は何とか止めた。

「いやあっ！！ 離してっ！！！！」
「落ち着け！！ 危険だつての！！ ジュード！」
「任せろ。『雷走』」

ジュードは空中に素早く魔方陣を描くと、ジュードの両足に電気が走る。そして、瞬時にリングサーク王の所に移動し、リングサーク王を抱えてまた一瞬の内に戻ってきた。

「リリース。治療を頼む」
「わかったわ。王妃様もこちらへ」
「え、ええ……」

目の前の惨状を見て王妃は茫然としていた。

リースはアレンとベルブランカが飛び掛かるのと同時に危険を感じ、王妃を離れさせていた。

「リースちゃん、私にも何かできる事ない？」

「そうね……、アイカは傷口を導力で止血して。後は私がやるわ」

それまで優真と一緒に優音をなだめていた愛華は、リースを手伝って治療を始める。その隣で優音も心配そうにリングサーク王を見つめている。

その一連の様子をフードの人物はただ何もせずに眺めているだけだった。

「……他愛ない。『天下無双の魔将』と呼ばれた魔導士でさえも不意打ちでこの様か」

「なんだよ……。なんなんだよお前っ!!」

突然現れ、リングサーク王を刺したフードの人物に、怒りを顕にし叫ぶ優真。

吹き飛ばされたアレンをジュードは蹴で起こし、レンはベルブランカを優しく助け起こす。

「私か？ 私は……」

フードの人物はゆっくりとフードを脱いだ。

その素顔を見たアレンとベルブランカは驚愕し、息を呑んだ。

「なっ!？」

「そんな……」

まず目についたのは漆黒のローブとは対照的な鮮やかな長い金髪。

そして、まがまがいまでのその魔力。それは目に見えるほど濃度が高く、色は黒、というよりも黒を何度も塗り潰したような黒い色だった。

「久しいな……アレン、ベルブランカ」

「ラークイス……王子……」

王子、というアレンの呟きに優真は眉をひそめた。聞いたところによると、リングサークには王子はすでに存在しないはず。

その疑問に答えたのは、ラークイス王子という名に反応したレンだった。

「もしかして……、ラークイス王子って、リングサーク第三王子のラークイス王子!？」

「第三王子って、リーザリス訪問中に行方不明になったっていうあれか？」

「はい。戦争のきっかけを作ってしまった事件です。リーザリス側が誘拐したという噂が流れていたのですが」

「ラークイス!……!」

レンの言葉を遮って、王妃がその王子の名を叫ぶ。名を呼ばれた王子　ラークイスは大げさに手を胸に当て頭を下げた。

「お久しぶりです、母上。お元気そうで何より」

「そんな事はどうでもよいのです!　ラークイス、貴方何故ライル様を……、実の父をつ……!」

「目障りだったからですよ」

王妃の悲痛な叫びをラークイスは無感情に一蹴する。

誰もが予想だにしなかったその答えに、その場にいる全員が絶句

した。

「…目障り……？」

そんな中で優音はぼそりと呟いた。だが、その呟きは誰の耳にも届く事はなかった。

「父上が悪いのですよ。兄上達が亡くなり、王位を継げるのは私人となってしまうたのに、いつまでも王の座を明け渡さないから」
「そんな……それだけの事で……」

愛華の悲しげな呟きを、ラークイスは一笑に伏した。
そして両手を高く掲げ、悦楽を感じているかのような表情で天を見上げた。

「だが、そんな事はもはやどうでもよい事。私はこの戦乱の世を終わらせる術を見つけたのだから。それさえ手に入れば、一国の王などという小さな器ではなく、世界の王として唯一無二の存在になれるのだ！」

「世界の王だと？」

いきなり何を言いだすのか、と優真は吐き捨てた。未だラークイスの目的がはつきりつかめない。

不気味な男である。

まがましい魔力の渦巻きはより強くなってラークイスの体を覆っている。

「ふふふ、では話してやろう。『氷姫の涙』という魔石は知っているか？」

「『氷姫の涙』？」

魔石、と言うからには予想するに、魔力を持った石といったところか。

ジュードに聞いてみるとやはりその認識で合っているようだ。

「魔力が込められた石、というのは世界には数多く存在する。だが、その『氷姫の涙』は氷の精霊神、『セラシス』の力そのものが込められているという伝説がある」

「ま、待つてください！ その伝説は僕も聞いた事がありますが、それはあくまでも伝説。真実ではない。それに『氷姫の涙』はリングサークの国宝でしたが、昔賊に盗まれたと」

「それって、リースちゃんが前言ってた……」

驚きを隠せないアレンの言葉で、愛華は止血に集中しながらリースが以前話してくれた事を思い出していた。

その国宝を盗んだ賊を捕まえる為にリースの母が探しているとの事だった。

「そうね。話には聞いていた事あったけど、そんな力を持った魔石なら納得いくわね」

リースはリングサーク王に治癒魔法を施しながら言う。

何が、と愛華が聞く前にラークイスは笑みを深くした。

「レイザード・ローゼンクロイツ、シェリア・レヴィイ、メイリーン・ベルティオー。八賢者が三人がかりで搜索しているにも関わらず、賊も『氷姫の涙』も見つかっていない」

「そんな魔石だからおじ様達、八賢者の三人が……」

納得したようなレンの呟きが優真の耳に届いた。おじ様、とレン

が言うのだからジュードの父親だろう。残る二人はアレンとリースの母親という事が。

「だが、見つからないのも当然。盗んだのは行方不明扱いになっていた者だし、『氷姫の涙』はそもそもこの世界にはすでになかったのだから」

「なに？」

言われた言葉を瞬時に理解できずにそう聞き返す優真を、ラークイスは見下すように鼻で笑った。

「まだわからぬか？ 異界の者よ」

「なっ！？」

異界の者。それはこの世界の人間ではないという事。

この男はそれを知っている。優真がこの世界の住人ではないという事に。

「お前……どうしてそれを……。まさかっ！？」

「ようやく気づいたか。そうだ。お前達三人をこの世界に召喚したのは 私だ」

夜が明け、太陽が昇り始めた頃、リーザリスの王女　リーレイスは自室のバルコニーに出てただ真っ直ぐと外を眺めていた。その瞳には動き始めた町の景観が映っているのではなく、それよりももっと外。リングサークがある方向だった。

「……始まってしまったのですね」

その眩きは誰に聞かせるわけでもなく、スツと朝の澄み切った空気の中に溶けていく。

そんな清々しい朝とは逆に、リーレイスの心には不安が積もっていた。

そういった不安を打ち消すかのようにリーレイスは胸の前で手を合わせ、祈りを始める。

優真達、隠密部隊がリーザリスを出発してから数日。もはやこの祈りはリーレイスの朝の日課となっていた。

「ユウマ様……」

幼い頃から王女として、いずれはこの国を背負う者として教育を受けてきたリーレイスには友人と呼べるような人はいなかった。リーレイスにとっては優真が初めての友人だと言える。

いくつかのパーティーなどで同年代の人達と会った事はあるが、その誰もが王女としてのリーレイスしか見ていなかった。

王女リーレイスではなく、ただ一人の女の子のリルとして見てく

れたのは優真だけだった。

「ユウマ様……私、ただ待つだけしかできないのですか……？」

大切な友人の為に何かしてあげたい。リーレイスは、帰ってきた優真の為に何ができるのか考え始めていた。

「お前が……！」

優真は怒りの籠もった目でラークイスを睨み付けた。この男が全ての元凶。優真や優音、愛華をこの世界に召喚し、三人の生活を狂わせた。

「なんでだ！　なんで俺達をつ……！」

「待てユウマ。　あんたに聞きたい事がある。さつき『氷姫の涙』を盗んだ賊は行方不明だと言ったな。なら、盗んだのはあんたなの

か？」

頭に血が上った優真を手で制し、ジュードの問うた。その問いにラークイスはそうだ、と頷いた。

その答えに王妃は手で顔を覆い、その場に泣き崩れた。実の息子がリングサーク王を刺し、国宝をも盗んだという事実にはショックを受けるのも無理はない。

ラークイスはそんな王妃を一瞥しただけで特に意に介していなかった。

「さすがは八賢者の純血種^{サブレット}。その様子では何故私が異界の者を召喚したのかも理解しているな」

「ふふん、まあな」

またいつものように調子に乗りそうなジュードを、レンはラークイス越しに睨んで威嚇している。

だが優真はそんな漫才にいちいちツッコむほど、今は余裕がなかった。

「おいジュード！ 知っているなら教えろ！」

「まあ落ち着け。さっきその王子が言ってたろ。『氷姫の涙』は自分が盗んだって。そしてその力で世界の王になるとも言っただけ」

「それと俺達と、どう関係があるんだよっ！？」

「王子は力を『見つけた』とは言ったが、『手に入れた』とは言っていない。なら、その力を手に入れる為にお前達が必要なんだろうよ」

そう説明されても全く理解できない。未だにその力を手に入れる事と、優真達がこの世界に召喚された事が繋がらない。そんな優真とジュードを見てラークイスは不適な笑みを零した。

「いい読みをしている。七十点だ、ジュード・ローゼンクロイツ」

そしてラークイスは語りだした。優真、優音、愛華がこの世界に
召喚された理由と戦争の裏に隠された真実の物語を。

第二十三話 発端

リングサーク第三王子、ラークイス・ナレ・リングサークは焦っていた。

リングサークの第一、第二王子が亡くなった事で、国中から王家は呪われている、国も滅びる運命等と噂されているからだ。

国民の王家への信頼は地に落ち、このままでは本当に国が滅んでしまう。

今こそ国民に王家の威厳を示す時であるとラークイスは考えた。
国民の信頼を取り戻し、国を存続させる為には

「他国を侵略するしかない」

ラークイスは国の為、国民の為に他国を侵略するしかないという旨をリングサーク王に進言しようと王の間へと向かっていた。

もしこの計画に反対されたとしたら仕方がない。自分が王位を継いだ時、この計画を再び推し進める事にしよう。

兄二人が亡くなった今、ラークイスが王位を継ぐのはそう遠くはないはず。

ラークイスはそんな事を考えながら王の間の扉に手を掛けた。

その時

「ラークイスの思想は危険だ。王位を継がせるわけにはいかない」

それは紛れもなくリングサーク王の声。ラークイスの手は止まり、聞き耳を立てた。

「この国をラークイスに任せてしまえばやがて滅亡へと向かう」

「しかし陛下。そうすると王位はどうするのですか？　いつまでも先伸ばしにするわけにもいかないでしょう」

流麗な女性の声が耳に届いた。リングサーク王国騎士団団長、シエリア・レヴィイである。

シエリアの進言にリングサーク王は心配ないというように首を振った。

「それはいずれ何とかしよう。今、この国に必要なのは民の信頼を取り戻す事にある」

ラークイスはそつと扉から手を離し、静かにその場から去った。

『この国をラークイスに任せてしまえばやがて滅亡へと向かう』

王の言葉が耳から離れない。王は最初から自分に国を任せる気などなかったのだ。

「ふ……」

喉の奥から笑いが込み上げてきた。国民の事を第一に考えてきた結果がこの様か。

ボタン、と扉を後ろ手に閉めた。いつの間にか自分の部屋に戻ってきたようだ。

部屋の中は暗い。まるで自分の心を映しているかのように。

「ふふふ……ふはははははー！！」

滑稽だった。悲しくなるほどに。

「……力が、あれば」

誰もが恐怖し、跪くしかできない。圧倒的な力。それさえあるならば、こんなに憂い、悲しむ事もない。

ラークイスの心は怒りと憎しみに満ちていた。

そして、聞こえた。

『力が……欲しいか……？』

突然に頭に響く声。それは現実に聞こえたのか、自分自身の妄想なのかは今のラークイスには判断できなかった。

だからこそ、心のままに答えた。

「……欲しい。誰にも負けず、誰にも屈せず、国を……いや、世界を掌握する力を！」

『ならば、与えてやろう』

次の瞬間、ラークイスの魔力が闇に塗り潰されていくのを感じた。そして、ラークイスの意識が暗転した。

神聖なる王城。

その巨大な城の複数ある内の一つの地下に続く螺旋階段を下ると、重厚な扉に守られた宝物庫がある。

本来ならばその扉を守護しているはずの魔導士三人がいるはずなのだが、今はどこにも見受けられず、その扉も開いている。

宝物庫の中でゆらゆらと複数あるろうそくの光を受けるのは、四人。

その内の三人は漆黒のローブを身に纏い、それぞれの武器を残る一人に向けている。

銀髪の青年は身の丈ほどの槍を、金髪の女性は青く透き通った剣を、その二人の後方には、黒髪の女性が漆黒の弓で禍々しい光を放つ矢を構えている。

三人に囲まれている形で武器を突きつけられている人物は、何年

も使い込まれているようなボロボロのローブを着込み、フードも目深に被っているので性別は特定できない。だが、背格好からして男であろう。

その男は大事そうに抱えている古い箱を、誰にも渡すまいと強く胸に抱いた。

「貴様、それを渡せ。それは貴様のような賊が手に入れていいものではない」

銀髪の青年が鋭い眼光で目の前の人物に言い放った。だが、男は何も答えずただじっとしている。

「……………」

銀髪の青年は訝しげに思いながらも、見下すかのような目で男を見据えた。

「それはこの世に出してはならない物だ。世界の秩序を守る為にそれはこの国が永遠に守らなければならない」

「そうです。今ならまだ命は助けてあげられます。ですから大人しくその宝をこちらに渡してください」

慈悲を与えるかのように優しい声でそう言ったのは黒髪の女性。元々、争い事を好まない性格なのかその瞳は悲しみに染まっている。だが、男から返ってきたのは無言だけだった。

「あー、はいはい。ここまで来たんだからそう言われて大人しくそれを渡すような輩じゃないわよね。
それじゃあ、痛い目見る覚悟も出来てるんでしょうね？」

ニヤリといたずらっぽい笑みを浮かべるのは金髪の女性。
それを見た黒髪の女性が待って、と声をかけて金髪の女性を制した。

「偶然だとしても、私達を正面から出し抜いたんだよ？　油断はないで」

そう。この男は恐らく盗人などではない。相当な力を持った魔導士であろう。

この世界には、最強と謳われる八人の魔導士集団が存在していた。八賢者　彼等はそう呼ばれている。

そしてこの場にいる三人　銀髪の青年と金髪の女性、黒髪の女性がその十賢者と呼ばれる魔導士であった。

そんな三人の魔導士を出し抜き、宝物庫の宝を奪っただけでも高位の魔導士である事が窺える。

「わかってるわよ。それじゃ、お休みなさい」

金髪の女性がそう言い終った瞬間には既に男の目の前に移動し、剣を振り上げていた。

剣を袈裟に切り下ろす。初撃で戦闘不能にさせるつもりだった。しかし

「えっ？」

金髪の女性の青い剣が振り下ろされようとした瞬間、突然剣の動きが止まった。

何か硬い壁に阻まれているようにその先へと進められない。

見たところ男は何も　いや、口が密かに動き、指先も何かを描くように動いている。

「まずい！ 『複合術式』だ！ 離れる！」

銀髪の青年が焦ったように叫んだ。

だが、遅かった。

男の指先は動きを止め、男の足元に黒い魔方陣が現れた。

男は口元をにやりと歪ませ笑みを見せる。

刹那、宝物庫は巨大な光に飲み込まれた。

「これが、始まりだ」

ラークイスは図々しくも玉座に座りながら話をしていた。だが、その話もまだ核心に触れていない。

「この国に伝わる詠唱魔法と方陣魔法による『転移魔法』の複合術式で、私は八賢者から逃れた」

だが、とそれまで余裕を見せていたラークイスが、悔しげに唇を噛んだ。

「『氷姫の涙』が私の魔力に干渉し、暴走してしまったのだ」
「暴走……？」

魔法の不発はまだ害はないが、魔法の暴走は下手をしたら使用者の死を招く。その魔法に消費する魔力が強ければ強いほどに致死率は上がる。

さらにラークイスは続ける。

「『転移魔法』は自らをAの地点で分解し、Bの地点で再構成する魔法だ。私自身は再構成に成功したが、『氷姫の涙』は分解されたまま別の地点に転移してしまった」

「！？ 待て！ って事はユウマ達がこの世界に召喚されたのは……」

「……まさか」

はっ、と一つの答えにたどり着いたジュードの言葉を聞き、リースはそう呟いて愛華を横目で見据えた。

リースの中で繋がってしまった。愛華と『氷姫の涙』が。数日前に見せた愛華の異常な魔力。あれは

「そうだ。その場所を見つけるのに数年掛かってしまった。『氷姫の涙』は再構成されず分解されたままある一人の人間に吸収された。それがお前だ」

ライクイスはゆっくりと手を上げていき、指を差した。
その指先は愛華を指していた。

第二十四話 魔族と契約した者

やっぱり、とリースは心の中で呟いた。愛華が以前見せた異常な魔力は、『氷姫の涙』によるものだった。

そんなリースと、半ば予想していたジュード以外の面々は驚愕の表情を浮かべていた。

「そんな……嘘だろ……。愛華は普通の女の子だろ！」

「そうだよ！ 小さい頃から一緒に過ごしてきたけどそんな力持っていないもん！」

愛華の事は誰よりも知っている優真と優音がラークイスの言葉を否定するために叫んだ。だが、当の愛華は思い当たる節があるのか俯いたまま何も言わない。

ラークイスは見下すかのように二人を見据え、闇が空間を塗りつぶすかのように、右手に細身の突剣型の魔導具を出現させた。

「……少々、話が過ぎたようだ。私の目的は『氷姫の涙』の奪還。本当はその娘だけをこの世界に召喚するはずだった。だが、やはり別世界からの召喚は相当に難しいのでな。個人を特定する事はせず、とにかくこちらの世界に召喚する事だけに絞り、魔法を行使させてもらった」

つまりは優魔と優音は巻き込まれたただだったと言う事か。だが、それでも愛華を一人この世界に来させるなんて事、二人にはできない。

さて、とラークイスは魔導具をゆっくりと突き出すように構えを取った。それを見てリースは愛華を背に隠し、治療を終えた王と王妃を入り口にまで下がらせた。

「そろそろ戦場の方もピークを迎える事だろう。私の魔力もいい具合に上がってきている」

「！？　そうか、そういう事だったのか！」

ばつ、とジュードは顔を上げしまった、という表情をした。

「お前、その禍々しい魔力。魔族と契約しやがったな？」

魔族。それは魔力を持った人に仇なす存在。古来より人と相容れず争い合ってきた。

この世界の三分の一は魔族の領域となっている。昔、魔族を排斥しようとする国や組織が存在していたが、魔族の中には人間と同等以上の武力や知力を持っているものもある。そんな魔族に阻まれて、今では魔族には無関心、無干渉が世界各国で暗黙のルールとなっている。

だが、その禁忌を破る人間も存在する。得てしてその人間は人生に絶望し、世界を呪い、力を望む。魔族はそういった悪意、絶望、憎悪、苦しみ等といった負の感情から生まれる魔力を好む。

精霊魔法を使用する際、精霊に与える魔力を正の魔力とするならば、魔族に与える魔力は負の魔力といったところだろうか。

魔族に負の魔力を与える事により、与えた人間は強大な力を得る。その力は黒き闇に属する。だが、優真の持つような『黒闇』ではなく、黒よりも黒く、闇よりも邪悪。

元々持つ魔力はその属性と交じり合い、導力すら失う事になる。

そして、契約した人間の負の感情だけではなく、周りの負の感情をも取り込んで力に変える。近くで戦争が起きているこの地では魔力が尽きる事はない。

つまり

「この戦争も、俺達がこの世界に召喚されたのも、全ては『氷姫の涙』を手に入れる為だった……」

優真の絶望した呟きに、ラークイスはニヤリと悪魔のような笑みを見せた。

「そんな……魔族の手に堕ちてしまったというのですか、ラークイス様!?」

「アレンよ、私は魔族に服従しているわけではない」「はっ、よく言っぜ。一度魔族と契約してしまえばもう普通の人間には戻れねえつてのに」

ジュードはアレンに優しく諭すラークイスの言葉を鼻で笑った。

人間が魔族と契約してしまえば強大な力を得る事ができる代わりに、人間は魔族に隷属しなければならない。

人間は自らの意志では逆らえず、契約した魔族の命令は絶対服従。最早自分の生を全うする事はできない。

「ふっ、世界を我が物にできるのであれば私の一生を賭けるくらい安いものだ」

その言葉を境にラークイスを取り巻く邪の魔力の流れが激しくなる。

ラークイスの元々の属性は風。その属性は邪の魔力により、『邪風』と呼ばれる。その悪しき風は暴風となり、部屋全体を駆け抜けた。

来る！ と優真が思った瞬間、ラークイスは動いた。いや、動いたと考えた時にはラークイスは優真の隣で、口元を耳に寄せてきた。

「故に、あの娘を貰い受ける」

「なっ！？」

速すぎる。ジュードやアレン、ベルブランカが意識を張り巡らせている中、誰もが動けず簡単に愛華に接近を許してしまった。

だが、リースだけはラークイスの速さに反応し、青い美麗な剣型魔導具を出現させ、ラークイスの突剣を受け止めていた。そしてジュード達に向け怒号。

「この、役立たずども！！ 昔っから弱いままなんだから！！ それでも八賢者の子供！？」

「面目ねえ。アレン、やるぞ！ ユウマ！ 隙を突いて『白光』で封印するか、『黒闇』で一思いに殺せ！！！」

「なっ！？ おいジュード！！！」

ジュードは優真の制止の声も聞かず、両手に大剣と槍の魔導具を出現させる。アレンもそれに続き召喚したペガサスに跨り、弓型の魔導具を構え飛んだ。

優真は悩んだ。『白光』で魔力を封印するのはともかく、『黒闇』で殺すのは躊躇われる。だが、やらなければ愛華が

「がっ！！？」

「うぐっ……」

優真が悩んでいる間にジュードとアレンが吹き飛ばされた。リースはラークイスの風を上手くいなし、魔導具を剣、槍、矛、色々な形に変化させ、互角に渡り合っていた。ギロリ、とリースは横目で役立たず男二人を睨んだ。

「アナタ、確かユウマって言ったわね！？」

リースは魔導具を弓型に変え、矢でラークイスを牽制しつつそう言った。

「あ、ああ」

「アイ力を……守って！」

たったそれだけの言葉にリースの思いが全て詰まっているように感じた。ならば、優真もわかった、と頷く事しかできない。

「愛華、こつちだ！」

「優君……、私の、私のせいで……」

愛華は目に涙を溜めて優真を見上げた。ラークイスから真実を聞かされ、召喚された原因が自分が原因だと知ったからだろ。愛華は自分を責めていた。

「ばか、お前のせいなんかじゃねえよ。俺も、優音もそんな事思っていない」

「そうだよ、愛華お姉ちゃん。むしろ良かったよ。愛華お姉ちゃんを一人にしないで」

「優君……、優音ちゃん……」

いつもはしっかりしているのに、時々こつという泣き虫が出てくる。優真はよしよし、と頭を撫でた。

だが、三人はリースの叫び声によって現実を引き戻された。

「きゃあああああ！……！」

「リースちゃん！？」

吹き飛ばされたリースは壁に激突。その衝撃で少し吐血するが魔

導具を杖代わりにして今にも倒れそうになりながらも立ち上がった。まだ、その目は戦意を失っていない。

リースが善戦したにも関わらず、ラークイスには傷一つ付いていない。まっすぐ、ゆっくりと愛華に向かって歩いてきている。

突然、その足元から地面が隆起し、ラークイスを包み込んだ。そしてその上から緑の風が刃となってその塊ごと切り刻む。

「兄さん、何を寝ているのですか？ 情けない」

「ジューン君も、そんなだとまたエアさんになじられるよ？」

冷たい声と呆れた声を出したのはベルブランカとレンだった。二人は休まず土と風の魔法をラークイスに浴びせ続けている。ジュードとアレンは気まずそうに立ち上がった。

「ああ、れっちゃん。気が付いたのか……。くっそ、男なのに情けねえ。れっちゃん達にいい格好させちまうとは……」

「全くだね。このままでは男の沽券に関わるよ」

くだらなすぎ……。という声がリースからしたが二人は無視した。そしてそのまま切り刻まれた岩の残骸に向かって、ジュードは魔法陣を展開、アレンは詠唱を始めた。

『怒れる雷帝の槍』

『流麗なる黒き風よ。集いて集いて敵を切り刻め』

ジュードの魔法陣からは雷を纏った槍、アレンの周りには黒い風が巻き起こり始めた。

「ベルさん！ 『重複魔法』使った事ありますか？」

「あ、はい。経験はありますが、兄さんとか合わせた事があるかもしれませんけど……」

「大丈夫です。私の導力は『風読』ですから！」

それを聞いたベルブラン力はなるほど、と頷き詠唱を開始する。それに合わせてレンも詠唱を始めた。

『重複魔法』とは属性の違う魔法同士を組み合わせにより強力にし放つ魔法である。基本的に二人で息を合わせ、共に詠唱の言葉を一字一句間違わずに発しないと発動できない。それほどまでに高度な魔法だ。

だが、レンの導力『風読』は、言わば『重複魔法』の為の導力だ。その効果は自分と対象の息を合わせ、互いの考えがわかるという力を持つ。故に、この導力を持つ者は誰であろうと『重複魔法』を使用できる。

『大地を駆け抜ける烈風よ。我等の下へ集え。全てを切り裂く烈風は大地を砕き、合わさり、我等が敵を圧死させる竜巻となる』

ジュードとアレンの魔法に合わせ、ベルブランカとレンも『重複魔法』を放った。

ラークイスが埋もれているであろう残骸の周りに、『重複魔法』による巨大な岩が包み込むように四つ隆起し、その岩を後から発生した竜巻が切り刻み、岩のつぶてが風に乗った。

竜巻による風の刃と、岩のつぶてによる攻撃が残骸ごとラークイスを襲う。

さらにジュードの雷の槍とアレンの黒き風のかまいたちもそこに加わった。

激しい爆発音と風の轟音が王の間を駆け抜けた。ラークイスの生死は土煙により確認できない。

「やったか……？」

優真の眩きには、ジュード達は首を縦には振らなかった。

正直、これほどの魔法を受ければ生きてはいないだろう。実力者四人による一斉攻撃。その余波で壁は崩れ、外の景色が見えるほど。徐々に晴れていく土煙。そしてそこには魔法による大穴だけが存在しているだけだった。

「勝った……？」

「っ！？ 違う！ アイカ、逃げ」

「ぐあっ！？」

「きゃあっ！？」

リースがそう叫んで愛華に駆け寄ろうとしたが遅かった。愛華の近くにいた優真と優音は突然の衝撃に不意を突かれふっ飛ばされた。

「ユウマさん！」

「ユウネ様！」

一番近くにいたレンとベルブランカが二人を助け起こす。少し背中が痛むが動けない事はない。優真は顔を上げるとそこには全くの無傷のラークイスと、ラークイスに捕まっている愛華がいた。

「や、嫌！ 離して！！」

「愛華！！ この野郎！！！！」

優真は怒りを顔にして走りだす。だが、ラークイスが手をかざしただけで風が巻き起こり、優真は再び吹き飛ばされた。

「お兄ちゃん！？」

「だ、大丈夫」

転んだ時に口の中を切ったのか少し血の味がする。ぺっ、と唾を吐くとそれは赤く染まっていた。

「今度はこちらの番だな」

そしてラークイスの詠唱が始まる。

『我が身に巣くう魔の者よ。汝の吐息で我等が敵を切り刻み』

その響きは華麗にして流麗。その力は残酷にして残虐。

『この地を紅く染め上げよ』

それはレンの魔法とは全く違う竜巻の魔法。風の色はどす黒く、無差別に辺りを破壊し尽くす。

そして、優真達はその無慈悲な力の奔流にただ巻き込まれていくだけだった。

第二十五話 魔導具の次なる進化

「ぐっ
」

優真はゆっくりと目を覚ました。目の前には一面に薄暗い青空。俺はいつたい……、と考えた後全てを思い出し、ばっ、と勢いよく起き上がった。

「なんだ……これ……？」

辺りは切り刻まれた柱や壁の瓦礫。既に天井は存在していなかった。そして、近くには倒れている仲間達。

「おい、起きろ優音！」

「う、ううん……」

見たところ大きな傷もない。優真はほっと安堵した。優音は目を開くと、目を擦りながら起き上がる。

「んあー……お兄ちゃん、おはよー……」

「ばっか、寝惚けてる場合じゃねえぞ。現状を理解しやがれ」

んー、と優音は辺りを見回す。右に瓦礫、左に瓦礫。時々アレン。

「って、アレン！？」

倒れているアレンを見つけてようやく現状把握したようだ。優音はアレンを抱き起こした。

「アレン！ アレンってば！ 起きてよ！」
「ん……」

優音に呼び掛けられてようやくアレンは目を覚ました。だが、寝惚けているのかとんでもない事を言い放った。

「ああ……ミリー、昨日は随分と激しかったね」
「はあっ？」

優音が眉をひそめて軽蔑するかのような視線でアレンを睨んだ。だが、それ以上にその言葉に反応した人物が一人、優真の背後で殺気を放っている。
突然現れた巨大な、そして恐怖を感じる気配に優真はビクツ、となってしまった。

「ア〜レ〜ン〜？」
「……………」

アレンは優真の背後を見、そして優音の顔を見上げた。優音は目を逸らした。一瞬で自分が危険な状態である事を理解した。
そこから導き出される答えは……？

「……………これは死ぬかな……？」
「自業自得でしょ」

そう死刑を宣告したのは優音、死刑執行人は リース。

「ユウマ、ジュード達お願い。アレン、覚悟はいいわね？」

リースは優真の隣へジュードを足で転がし、まるでゴミのよう

扱われるジュードをクッション代わりに、両脇に抱えていたレンとベルブランカをその上に置いた。

その衝撃でぐえ、と蛙が潰れたような声を上げていたが、それが女の子二人だからかスケベな笑みを浮かべていた。

よく見たらそーっとジュードの手がレンとベルブランカに向かっている。どうやら起きているようだ。

だが、そんなスケベな気配に気付いたのかレンとベルブランカは同時に起き上がり、半ば条件反射の如くジュードを足蹴にしていた。その向こうではリースがアレンを往復ビンタを浴びせていた。

「ぎゃあ！ ごめんなさい！ うごっ！ ほ、ほんの出来心ぬがっ！ たったんでぶほっ！」

「ぶぶぶぶぶ！！ ち、違っんだリース！ は、話をぐほっ！ 聞いてくぜへっ！！？」

いつの間にか優音が隣でそんな光景を呆れたように眺めている。

容赦なく制裁を下されているバカとアホ（ジュードとアレン）。なんというか、救いようがない。

「つと、こんな事やってる場合じゃない。愛華！ どこだ！」

意識が飛ぶ前はラークイスに捕まっていたはずだ。ラークイスは愛華の中にあるという魔石が目的だから、危険な目には遭っていないとは思っが……。

「やはり、全員生きていたか」

頭上からの声。見上げれば小脇に気絶した愛華を抱え、両隣には風で浮かせたリングサーク王と王妃が同じように気絶していた。

そして、ラークイスは風を解いて二人を落とす。自分の両親とは

思えないような酷い扱い方だ。

「お父様！ お母様！」

「ふん、感謝するんだな。母上が咄嗟に張った防御壁のお陰で貴様等の命が少しばかり伸びた」

ラークイスはゆっくりと降下し、不敵な笑みを見せた。その笑みは狂気に歪んでいて最早人間のものではない。

「……許せない」

優音はポツリと呟く。両手に魔導具を出現させ、顔を俯かせたままゆつくりと立ち上がった。

「自分の親を……こんな風にするなんて……」

優音は許せなかった。幼い頃に両親を亡くし、周りから同情や憐れみの視線で見られて過ごしてきた。

その分優真や愛華に甘えたり、頼りつきりになっていたけど、それでも親が欲しかった。

優音にとって親とは、無償の愛をくれる絶対の存在。そんな親を傷付けるラークイスはどうしても許せない。

「もう泣いたって許さない！！ 『紅蓮風雅』！！！」

優音の魔導具を中心に紅い風が巻き起こり始めた。その風は魔導具の先に収縮されていき、紅い風の球体を形成、そしてそれを放った。

だがラークイスはそんな優音を一笑に伏し、軽く突剣を一振り。『紅蓮風雅』はいともたやすく切り裂かれ、打ち消された。

「ああああああああああっ！！！！！！」

それでも優音は諦めない。まるで狂人と化したように叫び、ラークイスに突っ込んでいく。

優音の周りには灼熱の風が吹き荒れ、空気を焼き尽くしていく。その中から優音は魔導具を構え、風弾を乱発していた。

「まずいつ！ ユウネ様の魔力が暴走しかけてる！ 止めないとっ！ ベル！！」

「わかっています！！」

優音を止める為にベルブランカは魔導具を出現させるが、ジュードが待て、と手で制した。

「何故ですかジュード兄さん！？ このままではユウネ様がご自身の魔力で取り返しのつかない事に」

「よく見てみる。暴走しかけちゃいるが、あの子は自分の魔力をちゃんと掌握している」

ジュードの言葉は優音の魔導具の発砲音に遮られた。優音の放つ灼熱の風弾はラークイスの風と対等に渡り合っている。

「どうして優音にこんな力が……？ 俺と戦ってる時はこんなに強くなかったのに」

「お前、修行してる時に俺が言っただろ？ 魔法は思いの強さに比例する。今、ユウマの妹は王と王妃を傷付けられた事に対しての怒りだけで戦ってる。その強さはハンパねえんだろっよ」

だが、その状態は不安定なものである。怒りは思考を停止させる。

せつかく少しばかり回復した魔力も、風弾の乱発でかなり消耗しているようだった。

「ふん、暴走状態でもその程度か。つまらぬ。つまらぬな、異界の者よ」

優音が互角の力を見せてもラークイスは全く動揺しない。そして突剣を優音に向けると、荒れ狂う漆黒の風の刃が優音に襲い掛かった。

優音は『紅蓮風雅』を放ち、漆黒の風の刃にぶつける。漆黒の風と紅蓮の風はその場に留まり、お互いを喰い合っている。だが、徐々に『紅蓮風雅』は激しさを削られ亀裂が走る。

「全く、お前ら兄妹には驚かされる。暴走状態の魔力を掌握するなんて、並みの才能の魔導士ならそのまま自爆する。暴走時の魔力は常時の二倍にも三倍にも膨れ上がる。それを扱える事が意味する事は」

ジュードの口の端がニヤリと釣り上がった時、『紅蓮風雅』の全体に亀裂が走り砕け散った。それと同時に優音は魔導具を黒き風の刃に向けるが、その魔導具が突然ぐにやりと歪む。

「魔導具の次なる進化だ」

リングサーク神王国より遙か東。ギアナ荒野と呼ばれる山々に囲まれた一面の更地にリーザリス軍とリングサーク軍は戦闘を行っていた。ギアナ荒野の広大な大地は今や両軍の兵士や死体で埋め尽くされている。だが、圧倒的な兵数を持つリングサーク軍は、それよりも兵数が少ないはずのリーザリス軍に苦戦を強いられていた。

その中でも最も戦果を上げているのは八賢者の一人であるエア・ローゼンクロイツ。エアは右手に細身で両刃の剣型魔導具、左手で方陣魔法を描きながら戦っていた。

だが、エアはまだ一人も殺していない。戦闘では魔導具の腹で敵を叩くようにし、魔法は気絶する程度の魔力しか込めていない。それが可能なのもエアの抜きん出た実力のお陰である。全面戦争の最中、加減して戦うなど八賢者か、それ相応の実力を持った者か、それともただの無謀な馬鹿でしかありえないだろう。

（さっさとこの戦争終わらせて、バカ息子達を助けに行かないと）

エアはそんな事を考えながらまた一人、魔導具の柄で敵の腹を突き気絶させた。流石にエアが八賢者である事は知られているのか、エアを囲むようにリングサーク兵は警戒している。

それはエアにとって不都合。さっさと襲い掛かってきてくれた方が手早く済む。来ないのならば、とエアは自分から敵陣に突っ込んでいく。

魔導具を叩きつけるように振るい、ジュードと同じ属性『紫雷』

の魔法で敵をなぎ倒していく。

だが、倒しても倒しても敵は減らない。前も後ろも、右も左も、時々上からも敵が来たりする。むしろさっきよりも増えているような気さえしてきた。

「あゝめんどくさいでも本気出せない」

殺しはしない。そう誓ったからこそ本気ではできない。エアが本気でやればそれこそ皆殺しになってしまう。そしてまた目の前の敵一団を魔法で弾き飛ばす。

しかしながらエアは知らない。この戦いが長引けば長引くほど、それによって生まれる負の感情がラークイスへの魔力となっている事に。

そして、そんなエアと戦闘自体を岩山の影から眺めている影が一つ。長身で全身は黒いローブ姿。目深に被っているフードの下から垣間見える口元は、悪魔のような笑みで歪んでいていた。

「いいぞ……もっと殺し合え、もっと憎み合え。さすれば我が望みが叶うのも早まるというもの。しかし……」

黒いローブの人物はエアに目を向ける。今まさにリングサークの兵士達を魔法で十人ほど倒しているところだった。

「奴は、少々目障りだな……」

戦いを長引かせる為にはお互いの戦力を同等にしなければならぬ。エアの存在は両軍のバランスを大きく崩していた。

「我自ら出向くでしょう」

ローブの人物はぶつぶつと言葉を呟き始め、指も同時に動かしている。詠唱魔法と方陣魔法の『複合術式』である。『『複合術式』が完成した瞬間、フードの人物の姿が掻き消えた。

そんな時、敵をバツバツと薙ぎ倒していたエアの前に突然空間が歪み、魔導士のような人物がその中から現れた。

突然現れた魔導士を訝しげに眺めるが、エアはリングサークの魔導士だと断定。他の敵と同じように軽くあしらってやろうと、魔導具を叩きつけるが

「おっ？」

エアの鋭い一撃は魔導士がいつの間にか出していた短杖に阻まれた。それを見たエアは楽しげに頬を緩ませ一度距離を取る。

魔導士なのに接近戦を苦にしないあの動き。エアの一撃を片手で軽々と防ぐあの力。久々にやりがいのある敵が出てきた、とエアは当初の目的を忘れて舌なめずりした。

第二十六話 諦めない

優真は驚愕に目を見開き、優音の持つ魔導具に身を向けた。優音は二丁の紅い短銃ではなく、スナイパーライフルのような紅い長銃を手にしていた。

一瞬前までラークイスの放った黒き風が、優音に襲い掛かっていた。だが突然優音の持つ魔導具に変化が起こり、長銃の形を取っていた。

その魔導具を構え、トリガーを引いた瞬間、今までとは比べ物にならないほどの烈風が放たれ、その余波に優真は吹き飛ばされそうになっていた。

『フォース・リベレーション：メタモルフォーゼ』

優音の呟いたその言葉に、ジュードはやはりな、と不敵な笑みを見せた。

「フォース・リベレーション？……あれは、魔導具なのか？」

「ああ。あれは魔導具の進化形態だ。暴走時の魔力は普段ね十倍以上に膨れ上がる。一般的にはその魔力に体がついていけず自壊するが、稀にその魔力を自分の意志で操れる者がいる。爆発的に膨れ上がった魔力は魔導具を更なる進化へと導く。それが『フォース・リベレーション』」

優音の強さは常軌を逸していた。ジュード、レン、アレン、ベルブランカの四人が束になっても適わなかったラークイス相手に、まともにやり合っている。

ラークイスの目的は愛華の中にあるという『氷姫の涙』の奪還の

はずだが、今は優音との戦いを楽しんでいる。

「いいぞ。その調子だ。もっと私を楽しませろ！」

ラークイスは狂ったように笑うと黒き風の斬撃を飛ばしてきた。

優音はその斬撃を走りながら避け、その合間を縫って長銃型魔導具で灼熱の風弾を放った。だが、灼熱の風弾は簡単に斬られて消滅してしまう。

そんな二人の戦いを見て優真は自分の力のなさを齒痒く感じていた。

優音が必死に戦っているのに俺は一体何をしているのか。ただぼーっと眺めているだけより、優音に加勢したい。例え力にならなくても盾くらいにはなつてやれる。

よしつ、と優真は強く自分の両頬を叩いた。そして多少回復した魔力で『白光』の魔導具を出現させる。

しかし、やる気になった優真の肩をジュードは待て待て、と掴んで止めた。

「んだよジュード！ 早く優音を助けなきゃやられちゃうぞ！」

「もう少しだけ待て。お前はこっちの切り札だ。まだ魔力を温存しとけ。それに、今のままじゃ奴の魔力は尽きる事はない。だからもう少しだけ待てばきつと……」

そんな話を話しているうちに次第に優音が劣勢に陥ってきた。灼熱の風弾の威力は低下し、優音の表情も苦痛に歪み始めた。

「くう……くああ……い、痛い……頭が……うう……」

優音の魔導具が消え去り、優音は頭を抱えて膝を突いてしまった。そんな優音を、ラークイスは興が削がれたというように見下してい

る。

「ユウネ様！」

「行きます兄さん！ 援護を！」

優音を助ける為にアレンとベルブランカは再び魔導具を出現させる。ベルブランカは駆け出し、アレンは弓を引き絞り狙いを定めた。それを見たジュードはちっ、と忌々しそくに舌打ちをすると両手に魔導具を出した。

「間に合わないか……。リース、お前はあの子を。れっちゃんはアレンと援護を」

「了解っ！」

「うん！」

「おいジュード！」

「ユウマ！ 俺達がなんとか隙を作る！ いいか？ お前は切り札なんだ。無茶はするなよ」

ジュードは炎をたぎらせ、雷を迸らせる。リースもジュードに続き双剣の魔導具を作り出した。

「隙を作るって言ったって……」

戦況はやはり芳しくない。ジュードとベルブランカは共に連携しながら接近戦に持ち込んでいるが、軽くないなされている。アレンとレンも弓と魔法で援護はしているが、ラークイスの張る風の結界の前に大して役に立ってはいない。

その圧倒的不利な状況の中、隙などは存在しない。どうすれば……、と優真は考えを巡らせているとリースが優音を担いで優真の傍に座らせた。

「優音！ 大丈夫か！？」

「うっ、くっ…… あんまり、大きい声出さないで……」

「大丈夫。すぐ楽になるわ」

リースは優音の頭に手を乗せると、その手が青く輝きだした。すると、優音の苦悶に満ちた表情がだんだんと穏やかなものに変わっていく。

「ユウマ」

唐突に、リースは優真の名前を呼んだ。

「アイカね。あたしと旅してる間、よくあなた達の話をしてたわ。

『私がいないと、あの二人は駄目なんだ』って。アイカにとってあなた達がとても大事なんだって事はすごく伝わってきたの。あなた達にとってもそうなんでしょ？ だから、ね」

リースはそこで言葉を区切るとすっ、と顔を伏せた。そして数秒後顔を上げると、血が滲みそうなほど齒を食い縛っていた。

悔しい。助けたい。言葉にせずとも痛いほどにそんな思いが伝わってきた。

「あたしにとって生まれて初めてできた友達なの。お願い…… アイカを助けて……。あたし達じゃあいつに齒が立たない。もうユウマの『白光』しか手はないの」

リースの心からの願い。会って間もないが、なんとなくリースの人となりがわかった気がする。

ここまで愛華を連れてきてくれたのもリースなのだろう。ならば離ればなれになった愛華とまた会えたのもリースのお陰。男として

は、ここは引き下がるわけにはいかない。

「ああ、任せてくれ」

隙を作るとジュードは言っていたが、それさえも望めそうにない。何か策があつたようだが、気にしても仕方がない。

とにかく一太刀。『白光』の導力でラークイスの魔力を断ち切る事だけを考えよう。優真は右手に『白光』の魔導具を出現させ、優音とリースに背を向けた。

既にジュード達は満身創痍。最早魔導具を維持させる事だけに精一杯のようだ。

「お兄ちゃん……頑張つて……」

「おうよ」

優真は優音の言葉を背に、ジュード達の元へ駆け出した。

ザシュツ、とエアはまた召喚された土くれの鎧を切り伏せた。残り二体。大した脅威ではない。

エアは鎧の剣撃をバックステップで躲すと、片手で素早く魔方陣を描いた。

『猛る双頭の雷竜』

エアが手を翳して展開された魔方陣から雷撃が二つ迸った。それはまるで竜のように空に昇り雲に隠れ、より巨大により激しく、土くれの鎧に降り貫いた。

二体の鎧は一瞬で灰と化し、優しく吹いた風に吹き飛ばされていた。

「あら、土の召喚魔法もこの程度？　がっかりさせないでよ」

「ふむ、やはり八賢者か。ベルティオーの娘は齒が立たなかったというのに」

「ベルティオー？　ああ、あのじゃじゃ馬の娘さんのミリミリちゃん」

ミリミリちゃんというのはリースの事である。リースミスだからミリミリちゃん。ジュードの変なあだなをつける癖はエアの遺伝かもしれない。

それはともかく

「なんであんたがミリミリちゃん知ってんのよ？　まさか……」

リースがリングサーク側についているとしたら。リースの実力は八賢者に最も近いと言われている。少なくとも隠密部隊は全滅だろう。

だが腑に落ちない。ならば何故リースと目の前の魔導士が戦ったのか。どちらもリングサーク側なら争う必要はなかったはず……。

「あゝあゝ……！ ……めんどくさい」

元々考える作業は向いていないエア。わからない事を考えても、わからない事はわからないのだ。ならば目の前の魔導士をぶちのめして聞き出せばいい。

仮にリースがリングサーク側だったとしても、ジュード達が殺される事はないだろう。昔何度か会ったただだがそういう子だった気がする。

「というわけで、あんたをボコボコにして聞き出すという結論に至ったから覚悟して」

「ふっ、果たしてそう簡単にいくかな……」

「？」

魔導士が不敵に笑い、短杖を天に翳した。その短杖から漆黒の光を放つ魔方阵が展開。魔方阵は空に昇り、ギアナ荒野を覆い尽くすほどに巨大な形に変化した。

『刮目せよ、邪鬼の力。恐れひれ伏せ、死霊の悪夢で。目覚めよ、死の淵から蘇りし戦士達よ』

魔方阵からいくつもの光の筋が伸び始めた。それらは既に死兵と化している兵士の体に纏わりついた。

その光の筋に引かれるようにゆっくりと立ち上がり、各々の魔導具を取った。だが、その目には生気が宿っておらず、動きもぎこちないものだった。

戦いを繰り広げている両軍の兵士は事の異常さに気付き、戦いの手を止める。

そして殺戮が始まった。

操られた死兵は生きている者を無差別に殺し始め、新たに殺された者も魔方阵から伸びる筋によってまた新たな操られし死兵が生まれる。

死から逃れる為に反撃する者、逃げ出す者が多くいるが、死兵は倒しても倒しても起き上がり、また数が多すぎる為に逃げる事も不可能だった。

その阿鼻叫喚の地獄絵図にエアは驚愕に目を見開き、その後キツと魔導士を睨んだ。

「……まさか死霊魔術？　この魔法……あんだ、魔族ね」
「その通りだ」

スツ、と魔導士はフードを取る。その眼は赤く、牙と耳は鋭く尖っている。肌は黒く毛に覆われていて、その姿は悪魔を連想させる。

「我が名はガルヴァス。『龍鬼』のガルヴァスだ。我が使命の為にその命、貰い受ける」

「『龍鬼』か……、上等。掛かってきなよ！」

オオオオオオオオオオ！！！！

エアのその言葉を皮きりに、数百の操られた死兵が一斉に襲い掛かる。

ぐつと魔導具を握り締め、より一層紫に美しく輝かせ、エアは飛び出した。

ラークイスはベルブランカの爪撃を軽く躲し、その腕を取ってジュードに投げつけた。

「どわっ！？」

「っ！？」

ジュードはなんとか受け止めるも、勢い余って地面に背中を打ち付けた。体勢を崩した二人にラークイスが迫るが、アレンの矢とレンの魔法でその足を止める。

「でやああああ！！！」

その隙について優真が『白光』の魔導具による剣撃を繰り出していく。それすらもラークイスは難なく躲すが、ベルブランカの時ほど余裕がない。やはり『封印』の導力を警戒しているからか。

剣撃の隙間を縫って突剣の鋭い突きが優真の顔面めがけて襲い掛かるが、修行で鍛えられた反射神経のお陰で恐々としながらもなんとか避けられた。

「ジューン君！ 今の内に体勢を整え……て……」

レンの言葉はそこで途切れた。レンの視線の先、そこにはジュードとベルブランカが二人。ベルブランカが背中を預け、ジュードは抱き抱えるような体勢になっている。

問題なのはジュードの両手。その手はベルブランカの、ほとんど凹凸のない胸とも言えなくもないような場所に触れていた。

「……ジュード兄さん。言い残した事はないですか？」

「……ええっ！？ これ胸！？ 昔と全く変わってないじゃん！！」「っー！！？ ……そうですか。それが最後の言葉ですか」

ドスの効いた声色にジュードは焦って弁解しようとしたが遅かった。

「ふんっ」

「ぐほっ！？」

ドゴッ、と腹に肘打ち。ジュードの体がくの字に曲がった刹那、ヒュン、と今までジュードの首があった場所に風の刃が通過した。

「……れっちゃん？ それは流石に洒落になってないんじゃないかな？」

「……」

レンは何も言わず、くるっとジュードに背を向けた。ジュードは後々訪れるであろう惨劇に恐怖した。

そんな場違いのやり取りを聞きながら、優真は人知れずため息をついた。

「仲間割れか？ 随分と余裕なのだな」

「うるせえ。場を和ませる為の漫才だ」

「そんなものではありません」

横から鉄爪による袈裟切りが放たれたが、風の結界によりその軌道が大きくずれる。ベルブランカは小さく舌打ちすると、両手で素早く魔方阵を描き、両手を地に着けた。

『尊大なる地帝の決起』

ラークイスの足元から先が鋭利な岩が次々に隆起する。ラークイスは大きくバックステップしながらその岩を躲していく。

「ユウネ様のお兄様」

「優真でいい」

「ではユウマ様。私がラークイス様……、の動きを死んでも止めます。その隙についてください」

優真はベルブランカに一瞬迷いが生じたのが気になった。

「今更だが、いいのか？ 元、王子だったんだろ？」

「……構いません。この国に反旗を翻したのですから、最早王子でもなんでもありません。それに私は今はユウネ様に仕える身。ユウネ様に危害を加える者は絶対に許しません」

もちろん兄さんも、とベルブランカは付け加える。それが命じられたからなのか、それとも自分の意志なのか。どちらにせよ優音を大切に思ってくれている事が嬉しかった。

「　　いい心掛けだ。だが、戦闘中の無駄話は死に直結するぞ」
「え？」

突然、キインという刃と刃が攻めぎあう音がした後、優真の目の前からベルブランカが掻き消えた。
代わりに優真の目に入っただのは突剣を振り抜いたラークイスだった。

「ベル！？」

十メートルほど離れた場所の瓦礫の中にベルブランカは埋もれていた。咄嗟に防いだお陰か致命傷にはなっていないようだが、気絶しているのかピクリとも動かない。

「くっ！　よくもベルをつ！！」

ベルブランカがやられた事に激昂したアレンは風の矢を乱射しながら飛び出した。アレンは既に冷静さを欠いている。多数の矢は避ける迄もなく、ラークイスには当たらなかった。

「アレン止まれ！！　突っ込むな！！！！」

ジュードの叫びはアレンに届かなかった。ラークイスは身を深く沈めアレンの懐に入る。そして逆袈裟に突剣を切り上げアレンの弓を弾き飛ばし、スッとアレンの腹に掌を手を伸ばした。

『冷酷なる死の凶風』

ゼロ距離で放たれる方陣魔法にアレンは為す術もなく吹き飛ばされた。

「くっ　ぐああああ！！！！！！」

黒い突風は瓦礫に激突するまでアレンの腹に留まり続けた。風の刃でアレンの体はズタズタに切られ、血を吐き、アレンは意識を失った。

「まったく、バカアレン！！　リース！　行けそうか？」

「ごめん。まだ回復してない」

「ちっ、仕方ないか。れっちゃん！　俺と『重複魔法』やるぞ！！」
「うん！」

仲間達二人がやられ、いよいよ焦ってきたジュードは、レンと共に詠唱を始める。

『風は天空へと昇り、全てを焦がす雷を招き入れる。風よ、雷よ、我等が元へ集え。風は我等が敵を切り裂く剣となり、雷は我等が敵を焦がし貫く槍となる。疾風迅雷よ、万象の一切を焦がし切り裂け』

二人が同時に翳した掌の先に風が吹き荒れ、雷の槍が形成された。雷槍に風が纏わり、地面を抉りながら魔法は放たれた。

紛れもなく二人の最高の魔法。優真はこれに答えてやらなければならない。優真は魔導具を握り締め、駆け出すタイミングを図る。
しかし

「甘いな」

ラークイスは腰を深く落とし、突剣を引き寄せ『重複魔法』が直前にまで迫った時一気に突き出した。

『風突』

突剣に溜めていた漆黒の風が全て放出され、漆黒の風の突きとして放たれた。突きは『重複魔法』を中心に裂き、威力は全く衰えずにジュードとレンに襲い掛かった。

「ぐっ、ガアアアア！！！」

「きゃああああ！！！！」

黒い風の突きは襲い掛かる寸前で拡散。全方位から風の突きが二人を切り刻み、全身から血を流して倒れた。

一瞬の内に実力者四人が地に伏せられた。起き上がる気配はない。

「こ、こんな事って……」

素人目に見てもわかる。明らかに先程よりも強くなっている。今までラークイスの漆黒の魔力の気配は衰える事はなかったが、その魔力が更に膨れ上がっている。戦場で何かがあった、と考えるべきであろう。

それはつまり、優真達が勝てる可能性はほぼ皆無だということと同義である。

「残るは貴様一人だ。異界の者よ」

「くっ……」

優真は全身に絶望が満ちていくのを感じた。優真がうなだれ、諦めかけたその時、リースが叫んだ。

「諦めるんじゃないわよ！　今アナタが諦めたらアイカとユウネは

どうなるのよ!？」

優真は優音を見、そして愛華を見た。優音はリースの隣で不安そうに優真を見つめていて、愛華はラーケイスの後ろに横たえていた。優真はぐつと魔導具を握り締め、思う。こんなわけのわからない世界に来させられて巻き込まれて、挙げ句こんな状況。冗談じゃない。

出来る事なら逃げ出したい。ずっと戦いが怖くて怖くて仕方なかった。だけどそれも

愛華と優音を助ける為。

なんだかここまで周りに言われるがまま流されて流されて辿り着いてしまった気がする。だがここからは自分自身で決めて歩いていく。

「……そうだな。もう流される状況じゃねえし、決めなきゃいけないんだよな」

考えるまでもない。答えは始めから決まっていた。そして、優真の意志に呼応するかのように左手に持つ魔導具も白く輝き、右手には黒い輝きが溢れだした。

次の瞬間には優真の手には二つの刀型魔導具が握られていた。右手に『黒闇』、左手には『白光』。

「愛華も優音も仲間達も、みんなまとめて助ける!!!」

力が溢れていた。体に魔力が満ち満ちてくる。そして声が聞こえた。

頑張ってください、と。

第二十七話 魔法をありがとう（前書き）

ここまで読んでくださった方々。ありがとうございます。この話で第一部完でございます。楽しく読んでいただければ幸いです。

第二十七話 魔法をありがとう

リーザリス城内に設置されている教会がある。十数人は座れる長椅子が三十以上はあり、正面には巨大な銀の十字架があり、その周りには人の頭くらいの大きさの玉が八つ散りばめられている。

十字架は人を表し、八つの玉は魔法の属性を表している。この十字架は古来よりの信仰対象として祭られていた。

その十字架を見上げながら一人の少女が祈りを捧げている。この国の王女、リーレイス姫である。

リーレイス姫が優真の為に出来る事、それは祈りを捧げる事だった。

「神よ、精霊よ、どうか私の願いをお聞きください」

リーレイス姫は両手を胸の前で組み、跪いている。耳に痛いくらいの静寂の中、リーレイス姫はもう二時間以上祈り続けこの言葉を繰り返している。

「私の初めてできた友人を、ユウマ様を、どうかお守りください」

その言葉はとても重い。その言葉の中にリーレイス姫の全てが詰まっているようで。

想いは力、願いは魔法を創りだす。故に、それぞれの属性を司る玉の中で白と黒、光と闇の玉が、リーレイス姫の真摯な想いに答えるように輝いたのもまた魔法と言える。

その輝きは光となり、次の瞬間には消え去ってしまっていた。

「今の光は……」

突然の出来事にしばし放心したリーレイス姫だったが、すぐに精霊が自分の願いを聞いてくれたのだと気付いた。

きつと大丈夫。皆無事に帰ってくる。自然とそう思えた。

「頑張ってください」

リーレイス姫は少しの安心と共にまた祈りを再開する。三人が帰ってくるまで祈り続ける。それしか自分には出来ないのだから。

エアの落雷の魔法が降り注ぐ。周りにいた死兵達は一度は倒れて息絶えたかのように見えたが、再び何事もなかったように立ち上がりエアに襲い掛かってきた。

「つく！ これじゃキリがない！」

何度倒しても向かってくる相手にどうやって戦えばいいのか、エアはわからなかった。相手は既に死んでいるが、それでも全力は出したくない。

ふと、不覚にも背後に気配がした。エアは振り向きざまに剣を振るうが

「た……すけ……て……。隊……長……」
「っ!？」

エアの剣撃が止まる。その隙をつかれ槍の一閃がエアに放たれた。なんとかその一撃を剣で防ぐが、勢いを殺し切れず足が地面を削った。

「駄目……殺せない……!」

エアの膝が折れ、魔導具も消え去った。そんなエアを取り囲むように死兵達は見下ろし、その中からガルヴアスが不適な笑みを見せながら歩み出てきた。

「八賢者の一人、『神速の紫電姫』と呼ばれたエア・ローゼンクロイツも人の子。例え死んでいても、部下には刃を向けられないという事か」

「こんなの……卑怯よ!」

「卑怯? 何が卑怯なものか。それよりも感謝してほしいものだな。死んだ者に再び会わせ、そしてその者の手で死ねる事を」

ガルヴアスはスツと腕を上げる。死んでもなお意識はあるのか、部下達は涙を流しながらガルヴアスのそれに伴い各々の魔導具を振り上げた。

逃げようにも囲まれて動けないし、既に終わりのない戦いの連続

で体力も相当削られている。

「でも、だからって……」

このままむざむざ死ねはしない。一度死んだ部下をもう一度自分の手で殺す事なんて出来ればたくない。

迷っている間にもどんどん死兵は増えていく。そして、死兵となった者は涙を流し助けを求めている。

そんな時、エアの最も近くにいる死兵は言った。

「……隊……長。お願い……しま……殺して……くだ……い……」

それはエアの部隊の一人だった。その者は助け、ではなく死を望んでいた。

エアの迷いは、その一言で断ち切られた。

負けられない。ここで死んだら、今まで散っていった仲間達があまりにも報われない。

そして

「ゴメン」

剣の一閃。だが実際には神速の五連閃。一瞬にして部下の死兵は首と両手両足が胴から離れる事となった。

「ふん、さすが八賢者。躊躇いも容赦もない」

「……………許さない」

エアの体から微弱な電気が迸る。それは次第に数を増し、大きくなり、強大な雷撃となって死兵をいくらか焦がした。

「あんた絶対許さない！！！！！」

『神速の紫電姫』が動き出した。

声が、聞こえた。暖かく、優しい声。その声に力をもらったように、優真の体に魔力が満ち満ちていた。

優真の両手には二本の刀型魔導具が握られている。右手に『黒闇』、左手に『白光』。八属性中最も形成維持が難しいと言われている光と闇の属性を、優真は同時に出現させていた。

「精製の難しい光と闇を同時に出現させたのは見事だが、それだけでは私には通用しない」

確かに優真の力は強力だが、当たらなければ意味はない。今は魔導具の安定化ではなく、優音のように力の昇華が必要だ。

だが何故だか負ける気はしない。リルから力をもらった。一人ではない。

優真の頭の中である理論と構造が浮かび上がってきた。それは優真の初めての魔法。優真の諦めない心が魔法を生み出した。

『漆黑なる闇の調べ：這咎^{はいとが}』

優真は『黒闇』の魔導具を逆手に持ちかえ、勢い良く振り抜き地を切り裂いた。すると黒い斬撃自体が地を這い、ラークイスに向かって走り出した。

「ほう」

ラークイスは感心したように呟き、余裕を持って空中へ飛んだ。地を這う斬撃は目標を失い、後ろにあった柱の残骸を真つ二つに切り裂いた。

優真は空中にいるラークイスに向かって今度は『白光』の魔導具を振り上げた。

『煌めく封印の光：浄飛^{じょうひ}』

全ての魔を打ち消す白い斬撃が、優真の振り下ろした魔導具から放たれた。

即座にラークイスは同じように風の斬撃を放つが、優真の白い斬撃に触れた瞬間打ち消された。

「くっ!？」

白い斬撃はそのままラークイスを襲うが、紙一重で躲された。だが全ては避けきれず、ラークイスの魔導具が白い斬撃に触れた。その瞬間魔導具はその姿を消してしまった。

「くっそ、惜しいな」

「……何故、諦めない」

倒しても倒しても立ち上がってくる優真を、ラークイスは嫌悪の眼差しで問うた。優真は言う。

「そんなの、愛華や優音を、仲間達を助ける為に決まってるだろうが」

「解せん。確かに貴様等をここへ導いたのは私だ。だが、何故他人の為に命を張れる。そうまでしてこの娘が大切か？」

ラークイスはゆっくりと降下し、気絶している愛華の隣に降り立った。

優真にとって愛華は大切だ。命をかけられるくらいに。それは優音にも言える事だった。

愛華は助けてくれた。優真と優音を。この世に二人だけとなった兄妹を、家族のように接してくれた。愛華を危険な目に遭わせる奴を許しはしない。

「大切だ。俺と優音にとってかけがえのない存在なんだ。だから返してもらうぞ。どんな手を使っても」

優真の更なる強い思いに同調し、二つの魔導具の輝きが一層強くなる。

黒い輝きと白い輝きは朝日を浴びて、ただただ美しかった。

「……いいだろう。貴様の思いに敬意を払い、全力で迎え撃つてやるっ」

ラークイスの体からどす黒い魔力が一気に噴出し、圧倒的な存在

感がこの場を支配した。

それでも優真は負けない。負けられない。自分達の居場所を作ってくれた愛華を、絶対に助けだす。

『煌めく封印の光：浄飛』

『白光』の魔導具から放たれる白き斬撃。まずはラークイスを愛華から引き離さなければならぬ。ラークイスは飛翔しこれを回避。更に自らの周りに拳ほどの大きさの風を六つ渦巻かせた。

『六連風槍』

風は六つの槍となり、優真を串刺しにしようと襲い掛かった。一つ一つ打ち消すのは流石に困難。そう感じた優真は『白光』の魔導具を地面に突き刺した。

『煌めく封印の光：無全^{むぜん}』

優真の周囲全体に半円形の白いドームが出現。風の槍はそのドームに触れた瞬間跡形もなく消え去った。

優真の魔法、『煌めく封印の光』は導力の力が及ぶ範囲の改変。これによりイメージ次第ではいくつもの効果を得る事が出来る。そして、もう一つの魔法。『漆黑なる闇の調べ』も同様である。常に『無全』を発動していれば魔法も魔導具も通さないのだが、それが出来ない決定的な欠点がある。それは

「はあはあ……、きつつ……」

「やはり光は魔力の消費が激しいようだ。もう何度もそれを使う事は出来まい」

それはジュードにも指摘された点。光と闇は、その強大な力を得る代わりに莫大な魔力を使う。導力維持を考えると光と闇の魔法、それぞれあと一度が限界だろう。優真は片膝をつき、悔しげにラークイスを睨み付ける。

「っ！？ 助けなきゃ！」

下手に手を出したら優真の邪魔になる。そう感じていた優音だったが、もう我慢出来なくなり勢い良く立ち上がった。

「待ちなさい！ アナタまだ回復してないでしょ。そんな状態で行ったって何も変わらないわよ！」

「でも！ このままじゃお兄ちゃんが……」

そう優音とリースが口論している間にもラークイスは魔導具を出現させていた。

「次で終わりだな。貴様等にはなかなか楽しませてもらった。黄泉の国で我が覇道をとくと眺めるがいい。心配せずとも『氷姫の涙』を取り出した後はこの娘も送ってやろう」

「くっそ……」

ラークイスは突剣をヒュツと振り上げ、再び拳ほどの大きさの風を六つ、優真の周囲に出現させた。そしてそれは槍の形を取り、全方位から優真に狙いを定めた。

「お兄ちゃ」

「さらばだ。異界の者よ」

優音は咄嗟に魔導具を出そうとするが間に合わない。ラークイスは躊躇いなく突剣を振り下ろした。

その姿はまるで修羅の如く。

一足で死兵の前に行き、一撃で敵の四肢を奪う。華麗に、踊るように無駄な動きなく、だが容赦はしない。

次々に襲い来る死兵に的を絞らせない。死兵が魔導具を振り上げた瞬間には既にそこにエアの姿はなく、その死兵は崩れ落ちる事になる。

まさに『神速の紫電姫』の名にふさわしい強さ。その圧倒的速さで、気づけば死兵の数は七割減る事になっていた。

それでもガルヴァスの余裕は崩れない。まだ何か奥の手でもあるのだろうか。

「やるな。 magari なりにも八賢……」

突然、ガルヴァスの様子が変わった。少し考えるように顔を伏せ、そして舌打ちをした。

「ラークイスめ。早々に始末すればいいものを。これだから人間は……」

エアはその名を聞いて眉をひそめた。ラークイスとは行方不明となったリングサークの王子の名だったはず。

この戦争、やはり裏で何か動いている。戦争に関係ないリースや行方不明だったはずのラークイス、そして目の前の魔物の存在。こんな状況になってしまつては最早戦争どころではない。いったいリングサークで何が起きているのか、それを早く確認しなければならぬ。

「少し、やる事ができた。悪いが早めに終わらせるぞ」
「奇遇ね。私も急がなきゃならないみたい」

エアがそう言い終えた瞬間その姿が掻き消え、気づけば剣の一撃が脳天に迫っていた。

ガルヴァスはこれを短杖で防ぎ弾き返す。そして残り少なくなつた死兵がエアを追撃。その隙にガルヴァスは詠唱を開始した。

『集え、我が魔力を糧とする死霊共よ』

その声に応じエアにバラバラにされた死兵の体から煙のようなものが立ち上ぼってきた。それは死兵の魂。リーザリス、リングサーク、両兵士の魂がガルヴァスの元に集まり始めた。

オオオオオオオオオオ。

身の毛もよだつような魂達の慟哭。最早救いを求めても、憎悪も感じられない。あるのは悲しみと苦しみだけ。

「何するか知らないけど、やらせない！！！」

エアは襲い来る死兵を一撃で細切れにし、死兵が崩れ落ちていく時にはもうガルヴアスの背後で剣を振り上げていた。

『哀れなる死霊共よ。死の恐怖を思い出せ。集いて集いてその恨み、我が敵に向けよ』

ガルヴアスは詠唱を続けながらヒラリとエアの剣撃を躲し魔法を完成させた。死兵の全ての魂が結合し現われたのは巨大な人の形をしたもの。だが全身の皮膚は剥がれ落ち、首から上は存在しておらず、とても元が人間だったとは理解しづらい。

「……あんだ、どこまで人を弄べば気が済むのよ」

ガルヴアスはくだらないと言わんばかりに鼻で笑いその巨人の肩に乗った。エアの怒りが魔力と直結し、バリツと音を立てて電気がエアの体を走る。

許せなかった。人間の魂を無理矢理集め、醜い姿に変容させた。人を人と思わぬ所業。人としても、八賢者としても許せるものではない。

「せめて一撃で。私の全力を以てあなた達の魂を天に還してあげる」
「無駄だ。これの力は両兵士の全ての魔力そのものだ。例え八賢者といえど、この巨大な力の前では耐え切れまい」

ゆっくりと剣を振り上げるエアに対し、ガルヴアスも巨人に腕を

上げさせた。

両者共感じている。これが最後の一撃となる事を。

「命を弄ぶあんたなんかには絶対に負けない！」

エアは最高の一撃を放つ為に魔力を溜め始める。許容範囲ギリギリの魔力を刃に集中。刃は電気を帯び、地を焦がした。

「これで最後だ！ エア・ローゼンクロイツ！！！」

巨人が天に上げていた拳が、速く、巨大な打撃としてエアに向かって落とされる。

対するエアも巨人の打撃に合わせるように剣を振り下ろした。

ぶつかり合う剣と拳。その際に生じた衝撃で砂ぼこりが舞い上がった。両者の力は拮抗している。だがわずかに巨人の方が上なのか、徐々に押し返され始めていた。

確かに全兵士の魔力が一つにされた巨人の力は凄まじい。八賢者である自分が苦戦するとは夢にも思わなかった。

「私が」

だからと言って負けてやる気はさらさらない。

押し返されていた動きが止まった。エアの剣から紫の輝きが強くなり、電気がより激しく暴れている。

「なっ！？」

「八賢者が八賢者である理由をあんたに教えてあげる！」

エアは剣を振り抜いた。巨人の拳は二つに裂け、振り抜き放たれた雷刃が巨人とガルヴァスの体を切り裂いた。

「絶対に負けないから八賢者なのよ」

「あ……りえ……ん……」

巨人がゆつくりと膝を付き倒れこみ、そして煙となって天に昇っていった。体を斜めに切り裂かれたガルヴアスも、エアの前に放り出された。

エアはしばし冷たくガルヴアスを見つめ、やがて魔導具を消した。エアの目はもう次に向けられている。

「ぐっ……ふふふ……」

放っておけばその内消滅するだろう。そう考えてその場を後にしようとしたが、突然笑いだしたガルヴアスに再び視線を向けた。

「……時代は、動き始めた。……『氷の精霊神』の魂を宿した娘が現れた事により……他の『龍鬼』……そしていずれは『死神』も動く……」

「『氷の精霊神』の魂を宿した娘？ あんた何を知ってるの？」

エアの問いにガルヴアスは答えない。凶悪な笑みを見せ、息を荒々しく吐いた。

「……魔族の時代が、暗黒の時代がやってくる……。せいぜい怯えて過ごすのだな……」

その言葉を最後に、ガルヴアスの体は霧状に変化し、やがて消えていった。

「……」

今は考える時ではない。一刻も早くリングサークに向かわなければ。

エアはくるりと踵を返してリングサークへと駆けていった。

いつまで経っても痛みは襲ってこなかった。優真は恐る恐る見回すと、六本の風の槍は突き刺す寸前で止まっていた。

「ぐ……ああ……がつ……!!」

何やらラークイスの様子がおかしい。胸を押さえてよろよろと後退していく。六本の風の槍も維持できなくなり消えていった。

「なんだ……?」

「はぁ……はぁ……くっ、まさかガルヴァスが死ぬとは……」

ラークイスの魔力が激しく乱れている。どす黒い魔力が先ほどとは比べ物にならないくらい弱くなっていた。

「ま、まだだ……私にはまだ『氷姫の涙』が……」

ラークイスは苦しげに愛華の元へ向かおうとするが、その前に優真が立ちふさがった。

ラークイスの身に何が起きていようと愛華を危険には晒さない。ラークイスは今までの余裕を失い、激しい怒りを顕にした。

「邪魔だ！」

急激に失われた魔力で風の刃を放つも、優真は簡単にこれを打ち消した。

いける。最早力の差などない。これならみんなを助けられる。

だがそれでも優真の魔力は限界に近い。後は最後まで気力の保った方が勝利する。

「なめるなあ!!」

ラークイスは突剣を構え駆け出した。優真もそれに応じ、二つの刀を構えて迎え撃つ。

ラークイスの突剣による突き。これを優真はギリギリで躲し、白い刀を逆袈裟に振るうがバックステップで避けられ、刀は空を切る事になった。

だが優真は空振りの勢いのまま体を回転。一步を踏み出すと同時に再び逆袈裟に白い刀の斬撃を見舞う。

「甘いつ！」

優真の斬撃よりも速くラークイスの手の平が優真の肩を掴んだ。掴まれた左肩に風を感じる。ヤバイ、と思った時には激痛と共に吹き飛ばされていた。

「ぐっ、ああああー!!」

激痛のあまり優真は蹲り恐る恐る左肩に手を這わす。穴が開いていた。

「くっ、ふっ……」

「はあはあ、『氷姫』の……力を……」

既にラークイスの目は優真に向いていない。ゆつくりと愛華に歩み寄っている。

まずい。このままでは愛華が……。走り出そうにも痛みで上手く立ち上がれない。

「く……そ……。て、めえ!! 愛華に指一本でも触ってみやがれ! ぜってえ許さねえぞ!!」

ラークイスがそんな制止を聞くはずもなく震える手が愛華に伸ばされた。

が、突然、その手が姿を消した。

「アイカには触れさせない」

青い剣を振り下ろしたリースの姿がそこにはあった。

「ぎ、がああああ！！！」

「あら意外。魔族に魂を売り渡した者でも血は赤いのね」

腕が切断された箇所から血がとめどなく溢れ出てきている。ラー
クイスは血走った目でギロリとリースを睨んだ。

『荒れ狂う風神の舞』

ラークイスは素早く左手で魔方阵を描き、無差別に周りを切り裂く風の塊を放った。

リースはすぐさま詠唱を開始。その瞳に愛華を守るという決意を宿して。

『偉大なる海の守り神よ。広大なる青海より引き連れし大水で敵を飲み込め』

地面から大量の水が発生。それは壁となり風の塊を包み込むが、それでも勢いは殺せず押し留める事しか出来なかった。

「ユウネ！　お願い！」

「了解！」

リースの隣で優音が長銃を構え、空気中のマナを魔導具に吸収。そして放った。

放たれた灼熱の風弾がラークイスの風の塊を水ごと貫いた瞬間爆発。リースと優音の力を以てしても相殺が限界だった。だが優真にとってはありがたい援護。

「リース、優音」

「最後はアナタがやるのよ、ユウマ」

「お兄ちゃん、ファイト！」

「貴様等……！」

何度も邪魔をされてはらわたが煮えくり返りそうになっているラークイス。だが愛華に触れようものなら何度だって阻止しよう。優真は痛む肩を歯をくいしばって我慢し、右手に黒い刀を構えた。

「……貴様等がそこまでその娘と一緒にいたいと言うならいいだろう。最早『氷姫の涙』などいらぬ！全員仲良く黄泉の国へと送ってやる――！」

いよいよラークイスの堪忍袋の緒が切れた。残された魔力を全て使いきるつもりだろう。ラークイスは左手で魔方陣を描きながらその上に詠唱を重ねる。

『風よ。大気よ。我が下に集いて嵐となれ。それは竜巻。黒き風は全てを切り刻む刃となり、黒き大気の中で渦を巻け。漆黒なる竜巻よ。個も全も切り刻み吹き飛ばせ』

ラークイスのかざした手の先で黒い小さな風が渦を巻き始める。それは次第に大きくなり、地を削り、雲を散らす巨大な竜巻となった。ラークイスの全てを注ぎ込んだ最後の魔法。これを打ち破らなければ優真の勝利はない。優真は激痛の走る左腕を上げ白い刀を地に突き刺し、右手に持つ黒い刀を天にかざした。

優真の背には愛華や優音。これまで一緒に戦ってくれた仲間達がいる。負けるわけにはいかない。全力を以て打ち勝つ！

『煌めく封印の光：封監^{ふうかん}』

白い刀がまばゆい光を発し、ゆっくりと向かってくる竜巻の下か

ら円柱状の光の空間が天に昇った。

光の空間に飲み込まれた魔法は消滅するはずだった。だが、竜巻は勢いを失わず動きを止めただけ。

「くっそ……魔力が足りねえ……」

優音と戦った時と同じ現象が起きていた。魔力の量が少なすぎてラークイスの魔法を打ち消しきれない。

さらには左肩の傷のせいで上手く魔導具に魔力が伝達出来ない。そしてピキツ、と光の空間に亀裂が走った。

「この、ままじゃ……」

左腕は震え、血を流しすぎて感覚すらなくなってきた。また光の空間に亀裂が走り、最早限界に近い。

もう駄目だ、そう思い始めたそんな時優真の背に声が掛けられた。

「今さら諦めんな。ここで負ける事は許されねえぞ」

「大丈夫ですよユウマさん。私達の魔力、ユウマさんにあげます」

その声は振り向かなくてもわかる。バカだが自分を導いてくれた声と、優しく励ましてくれた声。優真の中に力が沸き上がってくる。そして光の空間の亀裂がなくなっていた。

「君なら勝てるよ。思いを強くするんだ。魔法は思いの強さに比例するんだから」

「ユウマ様。ユウネ様を守ってください」

キザで女たらしだが頼りになる声、そして口数は少なく冷たいようにも取れるが、本当は慈愛に満ちた声。また魔力が上がり、二つ

もう限界とばかりに二つの魔導具を消し、体を地面に投げ出した。暗かった空が、もう青い。不自然に雲が二つに分かれていたが、今はもう何も見たくない。優真はすつと目を閉じるが、そんな事はさせないと言わんばかりにジュードが優真の腕を掴んで無理矢理立たせた。

「よくやったぜユウマ！！！！ お前すげーよ！！」

「ち、ちよつとジウン君！ ユウマさんがなんか死にそうになってるよ！」

優真の肩を抱いてくるくる回るジュード。それを懸命に止めさせようとするレン。そんなやり取りも何故だか懐かしく感じる。

「べえるう！！ 私強くなつたよー！ 褒めて褒めてー！！」

「それはいいですけどユウネ様。また無茶したのではないですか？ 今や一国の王女なのでから危険な事はお止めください。兄さんも何か言ってください」

「いやいや、もうそういうのは後でいいじゃないか。みんな疲れてるんだから」

ベルブランカの小言をアレンが宥め、ため息を口から逃がしてそれもそうですね、と珍しくアレンと意見が合ったベルブランカ。

それぞれの様子を見ながら愛華は立ち尽くしていた。この数日で優真と優音は居場所を作っている。そんな所に自分が入っていてもいいのだろうか。

そんな事を考えていた愛華の尻をパンとリースは叩いた。

「きゃっ！」

「何悩んでんのよ。さっさと行ってきなさい。他の奴等はあたしが引っ張ってってあげるから」

「……うん。ありがとう、リースちゃん」

リースは宣言通り優真と優音以外を二人と引き離した。何やら最後まで戦えなかった件について反省会をやらされている模様。

優真と優音は満面の笑みで駆け寄ってくる。愛華は嬉しさのあまり二人に飛び付こうとした。

そんな愛華の背後からラークイスが飛び出してきた。

優真は目を疑った。倒したはずのラークイスが愛華を襲おうとしている。

一体何故。そう考える前には二つの魔導具を出現させていた。優音も同じように既に二丁拳銃を構えている。

しかし遅い。その時にはもうラークイスの手が愛華に伸びていた。全てがスローモーションに見える。愛華がゆっくりと振り返り、ラークイスの手が愛華に触れ なかった。

「ゲゲルガルゲオオオ！！！」

ラークイスの手は凍りついていた。その氷は手から腕へと、腕から全身へと広がっていく。

『ふん。魂が肉体から離れ、それでも現世に留まるか。アイカに触れる事、それは恐れ多くも私に触れる事と同義だ。卑しき者よ』

「愛華……？」

姿や声は愛華だが、決定的に雰囲気が違う。愛華は腕を水平に薙ぐ。するとラークイスの体は氷に包まれ、そして碎け散った。

振り向いた愛華はまるで別人のようだった。妖美に微笑み、髪を掻き上げる仕草からしてまず愛華ではない。

「お前は誰だ！ 愛華はどうした！？」

『そんなに警戒せずともよい。アイカも無事だ。私は……そうだな。そなた達の言う氷姫と呼ばれる存在だろうか』

一連の騒動を見ていたジュード達は急いで駆け寄り、その名を聞いて驚愕する事になった。

「『氷姫』ってもしかして『氷の精霊神』の『セラシス』！？ うっそ、お伽話かと思ってたのに実在したの？」

「ああ……、この子の中にある力を指していたのかと思ったけど、違ったのか……」

目を見開いて驚くリリースにジュードも同じように相槌を打つ。『

氷姫』は優真と優音に向き直った。

『私がアイカの中に入ったのはアイカが赤子の頃でな。それ故にユ

ウマの事も、ユウネの事もよく知っている』

「そんな事はどうでもいい。だが、あんたが愛華の中にいる事で愛華に悪影響はあるのか？」

精霊の神である『氷姫』をあんた呼ばわりした事に優真と優音以外は驚いていたが、『氷姫』は特に気にしていないようだった。

それどころか『氷姫』は優真に対して申し訳なさそうに顔を伏せた。

『ない、という事はないだろう。精霊の始祖の力というのは世界を変えられるほどに強大だ。今回のようにその力を狙う輩がまた出てくるかもしれん』

「あなたの力だけを愛華お姉ちゃんの中から出して、また宝石に戻るとするのは出来ないのですか」

優音の問いに『氷姫』は無理だ、と首を振った。

『この世界からユウマ達の世界に渡る時に魔石は砕け、力も変質しアイカと同化してしまっている。力だけを取り出すというのは現状不可能だ』

その言葉を最後に辺りは沈黙に支配された。問題は山積みなのにまた厄介な問題が上乘せされた。これ以上どうしろというのか。

そんな重苦しい雰囲気を変えるように、ジュードは手を叩いた。

「はいはいはい。そんな後向きに考えんなよ。今はさ、みんな無事に生きてられる事を喜ぶとこだろう？」

「そ、そうだね！ ジュン君たまにはいい事言っね！」

「ふふん、俺様はいつもいい事しか言わん！ はははは！ ははは、はは……は……は……」

ジュードが無理矢理雰囲気を変えようと頑張るが、優真と優音だけがずーんという空気を背負っている。

ジュードはガシガシと頭を掻き、ポンポンと優真と優音の肩を叩いた。

「心配すんなよ。お前等のバックには俺様達がいるんだぜ。そうでなくともユウマはこの子を守るって誓ったんだろっが」

「……………ああ、そうだな」

ジュードに言われて思い出した。絶対に愛華を守ると。一番不安なのは愛華だ。それを安心させるのも優真の務め。

「よっし！ 元の世界に帰る方法も、力を取り出す方法も、全部調べてやる！ それで愛華も守る！」

優真の言葉でようやく皆に笑顔が戻る。それを見た『氷姫』も笑みを見せながら目を閉じた。すると雰囲気がいつもの愛華に戻り、柔らかい笑顔を見せていた。

やる事は山積みだが、今は皆で笑いあえる事を喜ぼう。
とにもかくにも

「んじゃま、リーザリスに帰るとしますか」

早く帰ってリルに無事を伝えたい。あと魔法をありがとうも。

優真は空を見上げてそう思った。

第一部 完

第二十七話 魔法をありがとう（後書き）

……書いた。書きましたよ第一部！疲れた！。一気に常時の三話分。いやーこの話全部携帯で書いたんですけど流石に指が痛い痛い。第二部は学園編です。こっちの方が自分としては書きやすいかな。では、また第二部でお会いしましょう。

閑話 帰郷

「本当に一緒に行かなくていいのか？」

「うん。これでもこの国の王女様だからね」

ラークイスとの激闘の後、一日休んでリングサークを発つ事にした優真達。

王や王妃はもっと滞在していけばいいとも言っていたが、早く帰って元気な姿を見せてやりたい人がいる。

だが、リーザリスに行くのは優真、愛華、ジュード、レン、四人だけである。昨日、エアもリングサークに到着したのだが、事の顛末をジュードとレンが説明すると、すぐにリーザリスへ出発してしまった。

エアが言うにはこの戦争は仕組まれたものであり、戦争は双方の本位ではないとし、友好条約を結ぶ事になるだろうとの事。国再建の人員もすぐに送られるという事だ。

それはともかく。

優真は当然優音も一緒にリーザリスに行くと思っていたのだが、優音はこれを拒否した。

自分は王女であり、めちやくちゃになってしまったリングサークを立て直したいと考えていたらしい。

当初は反対していた優真だったが、意外にも愛華が優音を援護。優真が根負けする形となった。

見送りは王と王妃、アレン、ベルブランカ、リース、そして優音である。

余談だが、リースはしばらくリングサークに居座るらしい。なんでもだらしなない許婚を鍛えなおすらしい。アレンは半泣きになっていた。

「そなたさえよければ、王子として迎え入れてもよいのだぞ」
「そうよ。そうすれば優音とも一緒にいられるのよ」

優真はリングサーク王の養子になる事を強く薦められていた。だが、今優真はリーザリスに身を置いている。世話になった人に恩を返さなくてはならない。

それに王子や王女をそんなポンポン迎え入れていいわけではないだろう。それこそ国民がついていけない。

「俺は遠慮します。リーザリスに待たせている人もいますし、王子って柄じゃないし」
「そうか……」

優真がやんわり断ると王はどこか淋しそうだった。王妃と優音に囲まれて女ばかりだからか、肩身が狭いのだろうか。

それでもちよくちよく顔を見せに來い、としつこく誘っていた。どうやら痛く優真を氣に入ったようだ。

「……まあ時々様子は見に來るから。ちゃんと王女として恥ずかしいようにしろよ。王様と王妃様、あとアレンやベルに迷惑掛けるなよ。あとは……」

「もういいよ！ 全くお兄ちゃん、ベルみたいに口うるさいんだから」

「……それはどういう意味ですか？」

自分としては口うるさいと思っていけないのか、ベルブランカはジト目で優音を睨んだ。

だが気持ちはわかる。優音は見ていて危なっかしいし、猪突猛進だ。誰かが見ててやらないといけない。それでも口うるさ

なくなってしまう。優真に至っては今までずっと一緒に暮らしていた大切な家族。心配で仕方ない。

「アレン、ベル。どうか優音をよろしく頼む」

「お任せを」

「ユウネ様は私が命に代えてもお守りいたします」

これで安心だろう。優音が何か失敗しても二人がフォローしてくれる。

別れが近づいてきているのを感じて、リースは泣きそうになりながら愛華に抱きついた。

「うう……アイカ……元気でね……。また少ししたら……遊びに行くからね……」

「……うん、リースちゃん。……短い間だったけど、いっぱい助けてくれてありがとう……」

この世界に召喚されてからすぐの愛華を、優真は知らない。きつと、ずっとリースが守ってくれていたのだろう。感謝してもしきれなかった。

「リース、愛華を守ってくれてありがとう」

「……当然！ だってアイカはあたしの親友だもの！ ね、アイカ」
「うん。私、初めて会ったのがリースちゃんで本当によかった」

リースは愛華の頭を一撫ですると、その手で優真の胸を軽く叩いた。

「次からはユウマがアイカを守るんだからね。アイカを泣かせたりしたら承知しないんだから」

「ああ。任せてくれ」

その答えに満足してリースは二人から離れる。ジュードがそろそろ行くぞ、と二人を促した。

「それじゃ、行くわ。みんな元気で」

「優音ちゃん、王女様頑張ってたね」

「愛華お姉ちゃんも、お兄ちゃんをよろしくね」

そして四人はリーザリスに向けて出発した。振り返れば皆がいつまでも見送っていてくれた。いた。

「さてと、帰ったらどうしようか」

ジュードが手綱を握る馬の上で、ゆらゆら揺れながら優真はばやいた。結局、戦争は同盟という形になりそうだし、当初の目的だっ

た愛華と優音の搜索も今ではもう意味はない。

やはり元の世界に帰る方法と愛華の中から『氷姫』の力と人格を取り出す方法を探すという事になるのだろうか。

「優君、そんなに焦る事はないよ。優音ちゃんもリングサークで探してみるって言ってたし」

愛華もレンの後ろで馬に揺られながら優真に笑顔を向ける。優真はじーっとその顔を見つめてみる。特に強がっているようではないみたいだ。

「愛華さあ、なんでそんなにポジティブなんだ？ 得体の知れない力が体ん中にあるってのに」

「んー、特に違和感はないし、それに私の中にいるセラシスさんって悪い人じゃない気がするの。なんだか守ってくれてる気がするんだよね」

「でもあんましそういう事は言い触らさない方がいいぜ」

突然横からジュードが入ってきた。ジュードにしては珍しく真面目な顔をしている。

「『氷姫』の力ってのは魔法の原初だ。それこそ国一つが動くほどの。正直、陛下に報告すべきか迷ってる」

確かにそれほどの力ならなにがなんでも手に入れたと思うかもしれない。それは、リーザリス王とて例外ではないだろう。印象としては国と民の為なら何でもするという感じだった。

ジュードは国に対してそれほど忠誠心は強くない。兵士なら必ずリーザリス王に報告して指示を仰ぐべきところだが、ジュードは第一に優真と愛華の事を考えていてくれる。ありがたい事だ。

「ありがとな、ジュード。愛華の事ちゃんと考えてくれて」
「ん、いやいや。ユウマだって、幼なじみと離れるのはやだろ？
俺もれっちゃんと離れるの嫌だし」

時が止まった。

……………その発言は半ば告白してないか？
と、優真はジュードの背中を凝視した。

「えっ……。ええええっ！！！？　じ、ジュン君それってどういう
」

「だってこんなにイジると面白いのってれっちゃんだけだし。見て
て全然飽きないからな」

果たしてこれはわざとなのか素なのか。どちらにしてもレンの逆
鱗に触れた。そういえば、とレンは思い出した。ベルブランカにも
同じ事を言われていた。

ずっとレンは馬をジュードの馬に近づけて、弓のように腕を引き
絞った。手の形は、グー。

「ふべらっ！！！！」

そしてへらへら笑っているジュードの横っ面に拳を叩き込んだ。
吹き飛ばされ落馬するジュード。レンはふん、とそっぽを向いて先
に行ってしまった。

とりあえず優真は手綱を握り、その場に留まる。ジュードは地面
に顔から突っ込みピクピク痙攣している。

そんなジュードを見下ろし、そして空を見上げながら優真はしみ
じみ言った。

「ああ、いつも通り、平和な日常に戻ってきたなあ……」

馬を走らせて早三日。優真達の疲労の具合はもう極限にまで達しようとしていた。だがそのかいあってか、昼前にはリーザリスが見えてくる所まで来ていた。

「お、もう少しだな。ジュード、あつちに着いたらどうするんだ？」
「とりあえず陛下に詳しい報告をする。それはまあ俺がやつから、ユウマは姫様と熱い抱擁でも交わしてきな」
「抱擁？」

なんだか愛華から低い声が出た。背後から聞こえてきた怒気を含んだ声にレンはビクツと震えた。

そんな事には気付かず優真は呆れた視線をジュードに向ける。

「あほか。リルがそんな事するはずないだろうが」

「わかんねえぞ、もしかしたら今回の功績でリールの夫に抜擢されるかもな」

「……夫」

「あ、あのアイカさん……？」

背中が寒いのは愛華がだんだん怒ってきているだけではない事にレンは気付いた。きつと『氷姫』の力が漏れている。だが怖すぎて宥める事も、振り向く事も出来ない。

「一応リルには会ってくるけどよ。こっちは疲れが限界なんだから、さっさと休ませてもらうよ。なあ愛華」

「え、あ、うん」

急に話を振られ愛華の意識が戻ってきた。そしてもう少しで背中が凍りそうだったレンは、徐々に戻りつつある暖かさに安堵の息をついた。

そんなこんなでようやくリーザリスの正門をぐり抜け、優真達はリーザリス最端の街である貧民街へとたどり着いた。

それは初めて見る光景だった。大勢の人々が行き交い、出店が多く並んでいる。リーザリスを出る時とは百八十度違っていた。

「……凄いな。この賑わい。少し前には人がいるかも疑わしかったのに」

「まあ戦時中だったしな。いつもはこんな感じなんだぞ」

「ここだといい物がけっこう安く手に入るんですよ。今度一緒に行きましょうねアイカさん」

「うん、そうだね」

この数日で愛華とレンは仲良くなれたようだ。二人とも買い物好

きだし趣味は合うだろう。

「そつだ、ジュード。愛華の住む所なんだが……」

「ああ心配すんな。部屋はまだ空きがあるし、気楽に四人暮らしといこうじゃないか」

ジュードはこれからの事についても考えていてくれた。ますますジュードには頭が上がらない。

だが、ジュードはニヤリとまた変な事を言い出す前の笑みを見せた。

「そ・れ・と・も、俺とれっちゃんは出てってあいぽんと同棲生活の方がいいんでないの？」

「あほか貴様は！」

くだらないとはわかっていてもツツコまずにはいられない。愛華はぼんっ、と音を立てて顔を真っ赤にしていた。ちなみにあいぽんというのは、ジュードの変なあだ名シリーズの一つである。

「冗談冗談、うへへへへへ」

「くっ……この野郎……」

そんな事をしている間に、優真達は城の前にまで歩いてきていた。相変わらず門番二人が直立不動でたたずんでいるが、ジュードの顔を一瞥しただけで後はすんなり通してくれた。やはり安全面に問題ありだ。

そんな事を考えながら優真は王の間への長い道程を歩いていった。

リーレイス姫はそわそわしていた。いち早く帰還したエアの話では三人とも無事に帰ってくるという事だった。

優真に会える。そう考えるだけで胸の鼓動は速くなり、王の間の入り口を何度も視線が行き来した。

そんなリーレイス姫を王妃であるテレイアは、その銀髪でいくつものカールを作った髪を揺らしながら優雅に微笑んでいた。

「あらあら、リーレイス。そんなに会いたいなら会いに行けばいいでしょう?」

「お、お母様! わ、私は別にそんな事……」

リーレイス姫は顔を赤らめ、テレイアの言葉を否定するように首と手を激しく振るう。テレイアはそんな娘のわかりやすいリアクションを見て、あらあらと手を頬に添えてまた微笑んでいた。

「ふむ、リーレイスももう十五。無理にフィアンセを決めようとは思っていないが、そろそろ決めてもいい頃だろう」

リーザリス王であるレータ・グレス・リーザリス、こちらは至って真面目である。自身がまだ若く、他国の援助を特に必要としていなかったののでリーレイス姫の夫は決めていなかった。

リーレイス姫が成人するまで後三年。それまでにゆっくり決めていこうとしていた。本人がその気で、そして相手が戦争終結に多大な貢献をした人物ならリーレイス姫の夫としてもふさわしい。

と、優真の預かり知らない所でジュードが言った冗談が現実になるうとしていた。

「フィアンセ……」

リーレイス姫はフィアンセという言葉に酔いしれていた。国の為に身を粉にして尽力する王の優真、そしてそんな国王を献身的に支える王妃リーレイス。……凄くいい。

リーレイス姫の妄想は加速していく。頬に手を当てて身悶えるリーレイス姫は、ぶっちゃけ気持ち悪い。

そんな痛い妄想をしていたリーレイス姫だが、王の間の扉がノックされた事で我に返った。

「失礼します。隠密部隊三名、ジュード・ローゼンクロイツ、レン・グラッド、キリタニ・ユウマ、無事リングサークより帰還致しました」

「入りなさい」

レータ王に促され優真とジュード、レンは王の間へと入っていく。愛華は後からレータ王に報告する為、扉の外で待機している。優真が王の間へと入った瞬間、何かが胸に飛び込んできた。それはリーレイス姫。

「おわっ!?! り、リル!?!? どうした!?!?」

「よく……よくご無事で……ユウマ様……」

優真を見た瞬間リーレイス姫の頭の中は真っ白になり、気が付いたら優真に向かって飛び込んでいた。

優真に言おうとしていた感謝の気持ちも、労いの言葉も、さっきまでの痛い妄想も全部吹っ飛んでいた。とにかく無事だった事に涙を流すリーレイス姫。

「……ありがとう、リル」

優真は慰めるようにリーレイス姫の頭をゆっくり撫でる。

優真は知っている。戦いの最中、リルがずっと祈っていてくれた事を。そのおかげで優真は今ここにいます。

「ウォッホン！……少々時と場合を考えてほしいものだな」

優真とリーレイス姫はバツと弾かれるように顔を上げ素早く離れた。二人共顔はりんごのように赤い。

「申し訳ありませんお父様！嬉しくなっちゃってしまいました……」

真っ赤になって俯くリーレイス姫にレータ王は苦笑し、テレイア王妃はニコニコ笑顔だった。

そしてレータ王は親の顔から威厳ある王の顔に変え、優真達に向き直った。

「この度のそなた等の働き、御苦労であった。まずは礼を言わせてもらおう」

「はっ、もったいなき御言葉」

「皆疲れているであろう。そう長く時間は取らせん。リングサークで起きた事は大まかな事はエアから聞いているが、ジュードよ。後

程詳細な報告をするように」

はっ、とジュードは肩膝をついたまま頭を下げる。何度見ても似合わねえ……、と優真は横目で眺めていた。

「して、ユウマよ。エアの話ではリングサークで探し人を見つけたようだが」

「え、あつ、はい！」

「陛下、その件につきましては私から」

いきなり話を振られた優真は返事だけをするが、横からジュードが助け船を出してきた。

「ユウマの妹、キリタニ・ユウネ 詳細は後程報告致しますが、現リングサーク王位継承者王女の地位にあります。そしてもう一人、こちらは私の友人がリングサークに連れてきていました。入ってきてくれ」

ジュードの呼び掛けで愛華は恐る恐る王の間へと入ってきた。全く愛華らしく気が弱そうに、だが優真の姿を見つけると安心したように優真の隣に並んだ。

そんな愛華を見てリーレイス姫は若干むっとしていた。

「そなた、名は？」

「あ……な、鳴海愛華です」

レータ王の射ぬくような視線に愛華は怯えたように優真の袖を掴んだ。優真は大丈夫、と小声で呟いた。

「つきましてはナルミ・アイカのリーザリス移住を認めていただき

たいと思います」

「ふむ、いいだろう。ナルミ・アイカの移住を認める」

優真と愛華の口から安堵の息が零れた。これで心置きなく元の世界へ帰る手がかりを探せる。

気が抜けたからか一気に疲れが襲ってきた。そろそろジュードの家に帰ろうかと思い、ジュードに帰っていいのか、と小声で呼び掛けた。

「陛下、報告は私が致しますのでこの三名には席を外してもらってもよろしいですか？」

「まあ待て。リーレイス、この者達に例のあれを」

「はい」

リーレイス姫はテレイア王妃から装飾が施された箱を受け取り、蓋を開いて優真に差し出した。中にはこの世界の文字が書かれた紙切れが四枚。

優真はその内の一枚を手にとった。愛華も箱を差し出されたので一枚を取る。二人ともこの世界の文字は理解出来ないので何が書いてあるのか分からない。だがレンが紙切れを取って読んだ瞬間、手がわなわなと震えだしていた。

「へ、へ、陛下！？ こんな大金受け取れません！」

どうやら紙は小切手のような物らしい。それもレンが驚愕する金額。優真と愛華にはさっぱり分からないが。

「そんな事はない。この戦争での最大の功労者はそなた達だ。本当は小切手ではなく、宝石のような宝や貴重な魔導書なども考えたのだが、ジュードが現金の方がよいと言っていたのでな」

「ジュン君！」
「~~~~~」

ジュードは明後日の方を見ながら口笛なんかを吹いている。
未だに金額がどれほどか分からないので優真は小声でジュードに聞いてみた。

「……なあ、そんなにたくさんあるのか？」
「あーっと、そうだな。城の兵士の基本給が三十万クローネ。んで、これに書いてあるのはその百倍」

という事は、四人いるからその四倍で……。

「一億二千万！？ そんなん個人に渡していいのか！！？」
「いいんじゃない？ こっちは命懸けだったんだし。それよりもほら、さつさと帰りな。小切手は街の役所に行けば換金してくれっから」
「それでしたら私がお見送り致します」

さすがに小切手をつつ返そうとしていたが、ジュードに背を押されるままに王の間から追い出されてしまった。愛華とレンも小切手をどうしようかとおろおろしていたが、結局見送るというリーレイス姫とともに部屋を出てきた。

「リル、こんなん貰っても困るんだが……」
「どうかお納め下さい、ユウマ様。それだけの事をあなた方はして下さったのですから」

扉を後ろ手に閉めながらリルは屈託のない笑みを見せた。それでもなんだか納得が出来ない。

だがこれ以上こちらが駄々をこねてもリルの考えは変わらないだ

ろうし、突っぱね過ぎても失礼かもしれない。そう思い渋々ながらも優真は小切手を受け取る事にした。

「ユウマ様達はこれから真っ直ぐお帰りに？」

「ああ、みんなかなり疲れてるし。積もる話はあるけど、また後日にしよう。その時にまた改めて愛華を紹介するから」

愛華は優真みたいにフレンドリーにした方がいいのか、それとも王女みただから礼儀正しくした方がいいのか迷ったが、とりあえず頭を下げてみた。

リーレイス姫も同じように一礼するが、一挙一動が美麗。なんだか色々負けてるなあ……、と愛華は思ってしまった。

「そうだ。ゴタゴタして言い忘れてた」

「はい？」

優真はリーレイス姫の頭に手を置き、ゆっくり優しく、感謝の気持ちとともに撫でた。

「魔法をありがとう。祈り、ちゃんと届いたよ」

それはリーザリスに帰ったら言おうと思っていた言葉。リーレイス姫の祈りのおかげで優真は今ここにいれる。

本当はもう少しまともな礼がしたいが、今はこれだけで勘弁して欲しい。リーレイス姫はぼかんとしていたがすぐに満面の笑みを見せ大きく頷いた。

そんな二人を見て膨れっ面で不機嫌になった愛華を、また背筋が凍るように感じたレンは慌ててフオローを入れていた。

「あの娘が、『氷姫』の魂と力を継ぐ者が……」
「はい」

優真達が出ていった後、レータ王はテレシア王妃も退出させ残ったジュードに呟いた。

やはり見抜かれている。無理もない。何の封印も施されていない状態ではあの凄まじい力は隠しきれない。やはり何かしらの対策を練らなければならない。

だがそれよりもこの事を王が知り、どう出るか知るのが先である。

「ふふ、『氷の精霊神』の力、か……。兵の半数近くを失った甲斐があったというものだ。のうジュード」
「はっ」

レータ王は今までのものとは違い、邪悪な笑みを見せた。それは王としてその最強最古の力を利用しようと考えているのか、それとも

別の何かか。

ジュードはレータ王のその底知れぬ野心に震えが走った。だが愛華を、いや人を戦争の道具とするなどいい気分ではない。

「陛下、私に考えが……」

レータ王が最悪の考えに辿り着く前に、ジュードは口を開いていた。

第二部 第一話 魔法学園入学（前書き）

お待たせいたしました。第二部の始まりです。この『学園編』はシリ阿斯は控えめっぽくなりそうです。

第二部 第一話 魔法学園入学

小鳥のさえずりが聞こえた。朝の眩しい光が優真の顔を照らしている。優真は寝呆け眼を擦りながらゆっくり起き上がった。

「……眩しい」

若干カーテンが開いている。どうやらその隙間から朝日がこぼれているようだ。ベッドから降り、優真はカーテンを勢い良く開いた。部屋一面が朝日で明るく、一日の始まりを示しているように光が広がっていった。

どうやら外は快晴。今日もいい天気。優真は窓を開け、朝の気持ちいい空気を肺いっぱい吸い込み深呼吸する。

優真の朝は深呼吸から始まる。それは元いた世界から変わらない優真の習慣。

「さて、朝飯作ってネボスケどもを起こすとしますか」

優真はあくびをしながら部屋の扉を開いた。今日からいよいよ学園がある。気合い入れていこう。

「学園？」

三日前。ジュードは買い物から帰ってきた優真と愛華に告げた。

「そーよん。結局陛下にあいぼんの事バレちゃって、力の抽出方法が見つかるまでは護衛を付けなくちゃいけなくなっちゃったんだよねえ」

「それと学園とどう関係があるの？」

愛華は生活必需品が入った袋をテーブルに置きながら子首を傾げた。

この数日で人見知りの愛華もずいぶんとジュードに慣れたようだ。ジュードの気さくな性格のおかげだろうか。

「護衛つっのが俺、出来ればユウマとれっちゃんもっていう話。まあユウマとれっちゃんは兵士ってわけでもないし、強制じゃねえよ」

強制じゃなくとも優真は愛華を守ると決めている。レータ王にはジュードが口添えしてくれたのだろう。愛華が利用されなければ何でもいい。

「まあ俺も一応学生なわけだし、護衛対象と離れるのもアレなわけだからユウマとあいぼんの入学許可証を申請してきたのよ」

ジュードは白い紙を二枚ひらひらさせている。というか、その学園は試験も何もなく申請しただけで入れるものなのだろうか……。

「なんだか果てしなく不安なんだが……」

「心配ねーって。陛下の推薦だから入学試験とかもねえし、金だつてたんまりあるだろ？ それに元の世界に帰る方法は陛下の方で探すって言ってたから当面の心配はなーっし！」

結局レータ王に優真と愛華が異世界人という事は話してしまったらしい。害がなければバラされても構いはしないが、あまり広めるものでもない。

「学園再開は三日後だし、明日は色々と必要な物揃えちまおうぜ」

そう言って屈託なく笑うジュード。学園を本当に楽しみにしているように見える。そんな笑顔を見ているとまあいいか、で納得してしまう優真であった。

リーザリスは魔法大国と呼ばれるほどに魔法が発展している国である。魔法の研究所はもちろんの事、魔法に関連した職業別組合であるギルド、国民の安全を守る魔法警備隊、城遣えの魔導士など、魔法に関連した職種は様々である。

それらの基盤には必ず魔法の教育機関が存在する。この国では一定の歳に達してから学園に通うというわけではなく、何年魔法学園に通ったか、を義務教育としている。義務教育の年数は六年。

リーザリスには魔法学園が三つ存在している。それぞれこの国を形作っている三つの円の中に一つずつ。

リーザリス城に最も近い国の中心の円にある魔法学園、聖テレィア魔法学園。ここはその名の通り、リーザリス王妃であるテレィアが建て、理事長を勤める学園である。王族や高位の貴族が通っている。ちなみにリーレイス姫もこの生徒である。

二つ目は中流階級、真ん中の円にある魔法学園。リーザリス魔法学園。この魔法学園はリーザリスで初めて建てられた学園であり、優秀な魔導士を多く排出している歴史がある。

三つ目は下流階級、いわゆる貧民街と呼ばれる最も外側の円にある魔法学園。魔法訓練学校。ここに通う生徒は義務教育ではない。深い知識を得る為ではなく、生きる為に魔法を学ぶ人が通う学園である。卒業後は城の兵士やギルドに入る人が大半である。

今回優真と愛華が入学するのは、ジュードとレンが通っているリーザリス魔法学園である。優真が初めて学園を見た感想は、リーザリス城と同じくデカい、だった。

校舎は二つ、どちらも四階建て。一つの校舎に三クラスずつ。この学園には学年が存在しない。六年の義務教育が完了すればもう登校しなくてもよく、一年に一度ある卒業式に出れば卒業である。

校舎は東館、西館に分かれ、それぞれの一階には食堂や図書館、保健室などといった学生に必要な場所はそろっている。

「ここまでで何か質問はありませんか？」

そんな説明を恰幅の良い温和そうな校長から受けた優真と愛華。目に入るもの全てが新鮮で、校長の名前など二人の頭の中からすっぽり抜け落ちてしまっていた。もちろん質問などはない。

「よろしい。お二人のクラスは東館の2　1です。外で待機している先生に案内させますので」

「はい」

「お二人に創世神と創造神の導きがあらん事を……」

校長は柔らかい笑みで優真と愛華を見送った。なんだかいい校長っぽいので安心した。

運命的というより作弄的なものを感じるが、優真と愛華はジュードとレンと同じクラスである。気楽なのは気楽だが、なんだか嫌な予感も感じていた。

「失礼しましどふっ!？」

そんな事を考えながら校長室を出ると、急に目の前が真っ暗になって息苦しくなった。何やら顔に柔らかいものが押しつけられている。

「ゆ、ゆゆゆゆ優君!!？」

隣からは戸惑いと怒りの声が愛華から発せられている。状況を把握しようとして顔を顔にやるが

「あんっ……。ユウマ君学園でそんなところかんじゃダメよ……」

どこかで聞いた事のある声。というかりーザリスでユウマに対して悪ふざけするのはジュードの他に一人しか覚えがない。

優真はようやく拘束から抜け出し息切れしながら叫んだ。

「はあはあ……、な、何やってんですかソフィアさん!!」

「だって久しぶりにユウマ君に会えると思ったたら体が痛いちゃって」

悩ましげに手を頬に添え、どこか色っぽい仕草を見せる金髪美女は、この学園の教師であり優真の魔導具を作った喫茶店のマスターでもあるソフィア・グレイス。

ソフィアの性格を知らない者が今の光景を見ればいらぬ誤解を与えてしまうだろう。

「う、疼いて!? 優君!! 私がない間にいったい何してたのっ!……!」

「ああやっぱり……」

前回のリルと同じような事になってしまった。しかも今回は愛華だからけっこう口うるさい。

優真は愛華を説得するのに十分以上 途中でソフィアが余計な事を言ってきたのもあるが かかってしまった。

「みんなおはよー。今日はまずこのクラスに入る事になった新入生を紹介するね」

ソフィアに促され教室に入る二人。クラスは約三十人ほど。その中にやけ顔のジュードと笑顔のレンもいる。

だが二人は、いや二人だけでなくクラス全員は疑問に思った。優真は疲れ果て、愛華はどこか不機嫌だった。そしてクラスを代表してジュードがソフィアに尋ねた。

「せんせー、新入生二人の顔が変なんスけど」

聞きようによってはかなり失礼な言葉だが、優真にはツッコむ気力もない。だがソフィアは気にしないで、と意味深に笑っただけだった。

「まあとりあえず、二人に自己紹介してもらいましょう。じゃあユウマ君から」

「あ、はい」

気を取り直して優真は咳払いを一つ。これから長年付き合っていくクラスメイトだ。何事も最初が肝心。ジュードがいる時点であり心配はいらない気がするが……。

「霧谷優真です。極東の小さな村から来ました。わからない事だらけなんで色々教えてくれるとありがたいです」

優真の自己紹介はつつがなく終わった。出身地の設定はジュードの案。極東の小さな村とでも言っておけば、調べる手段もないから好都合らしい。

次は愛華の番。優真はチラリと隣を盗み見る。愛華は人見知りで上がり症だから、と優真は親のような心境で心配していた。

「あ、あの……、鳴海愛華……です。……よろしくお願いします……」

案の定愛華は消え入りそうなか細い声で自己紹介を終えた。ギョツと愛華は無意識に優真の腕の裾をつかんでいた。そんなしんとした空気を打ち破るかのようにジュードがハイハイハイハイ、と手を上げた。またジュードの顔が異様にニヤついている。優真は嫌な予感がした。

「ズバリ！ 二人の関係は！？」

「ジューン君……」

知っているはずなのにわざと聞くジュード。レンは呆れて物も言えなくなっている。諦めずにどついて欲しかった。

ただの幼なじみだ、といつものように答えようとしたが、その言葉は最前列に座っていた赤い髪の少女に遮られた。

「先生。とりあえず新入生への質問は後ほどがよろしいかと」

透き通るような凜とした力強い声。だが決して煩くはなく、どこ

か心地よい。背まで届く髪は毛先にウェーブがかけられていてどことなくお嬢様のような雰囲気を感じられた。

「そうね、クーちゃん」

「クーちゃんは止めて下さい！」

凛々しくクールな少女かと思いきや激しくツツコミをソフィアに入れている。なんだか親近感が湧いてしまった。

ソフィアは教室内をぐるりと見回し、じゃあユウマ君はそっち、アイカちゃんはあっちね、と空いている席を指差した。幸か不幸か優真は窓際のジュードの後ろ、愛華は真ん中の列のレンの隣である。

「ふふん、よ・ろ・し・く」

「はあ……」

不適な笑みを見せるジュードに優真はため息で応える。優真の学園生活は波乱の予感を感じたまま始まった。

新参者への質問攻めはこの世界でも共通しているのか、休み時間になった途端優真と愛華の席には人だかりが出来ていた。

初めは当たり障りのない質問で答えやすいものだだったが、慣れてくるとジュードがしたような下世話な質問もされた。

その度にジュードはニヤニヤと笑みを浮かべている。優真は殴り飛ばしたい衝動に駆られるが、そんな事よりも気になる事があった。

「アイカさんは何か趣味とかあるの？」

「……あ……う……」

やはり愛華は緊張で上手く答えられないでいる。レンが必死になってフォローしているが、それでも質問は連続して飛んでくる。

仕方ない助けるか、と優真は立ち上がろうとしたが、視界の隅に鮮やかな赤い髪がよぎり、止めた。

「こらこら、そんなに矢継ぎ早に質問ばかりするからアイカさんが困ってるよ」

その人物は先ほど鋭いツツコミを入れた赤い髪の少女だった。彼女がこのクラスのリーダー的存在なのだろうか。

「ユウマ、いいんちよの事気になるのか？ 確かに美人だがいかんせん性格がきついからなあ……。ユウマに御し切れるかどうか」

「いや俺はんな事考えてるんじゃない」

「聞こえているぞ、ジュード」

いつの間にか当の本人が優真の隣に立っていた。何度見ても目を奪われる美麗な赤い髪に、今にも射ぬきそうな鋭い視線。なるほど、

ジュードの言う通り性格は穏やかではないらしい、というのが優真の印象だった。

「こりゃ失敬」

「全く……新生に余計なイメージを植え付けるんじゃない。すまない、見苦しいところをお見せした。改めて、私はこのクラスの学級委員長をしているクレハ・メイザースだ。よろしく、ユウマ君」

手を差し伸べた赤い髪の少女　クレハの雰囲気は優真が感じた印象を百八十度変えるものだった。どうやらクレハは誰にでも優しいのではなく、ジュードのようなお調子者に厳しいようだ。

優真もこちらこそよろしく、と握手に応じた。クレハの手はさらさらで綺麗な手　などではなく外見とは裏腹に手の平は豆だらけで所々皮も剥がれている。

優真にも経験がある。毎日竹刀で素振りをしていた時によくこうなっていた。これはそういう類の手だ。

強い。優真は直感的にそう感じた。クレハと見つめ合ったまま。

「……ユウマ、本気か？」

「あ？　あ、ああ悪い、クレハさん」

優真は急いでクレハから手を離す。若干クレハの顔が赤くなっているが、気にしないでくれ、と笑顔だった。

「それと私の事はクレハでいい。……委員長でも構わないが、役職名で呼ばれるのはあまり好きではない」

「わかった、クレハ。俺の事も優真でいいよ」

「ああ、そうさせてもらうよ」

クレハは微笑んで頷く。なんだか一挙一動がいちいちカッコいい。これほどいい意味で男らしい女の子も初めてだ、と優真は思った。

第二話 初授業

魔法学園での授業は新入生に合わせて行われるものではない。入学時期が遅ければ遅いほど、予備知識が無ければ無いほど授業にはついて行きづらくなってくる。

ならば何故このような形を取っているのか。それはこの国が魔法大国と呼ばれる事にも関係している。

リーザリスは学園が創られる遙か前より魔法分野が突出していた。魔法に秀でた者が多く存在していたからである。その魔導士達の子どもは個々の家庭で幼い頃からある程度の魔法の知識は備えている。そういった理由から、魔法学園での授業は基礎をすっ飛ばしている面がある。やらないわけではないのだが、どちらかというと応用に力が入っている。

そしてこの学園は実技を重んじている。そんなわけで優真達の記念すべき最初の授業は

「一対一のトーナメント……」

優真は学園の物理障壁魔法の掛けられた魔法訓練所で呆然としていた。

魔法学園というのだからもちろん魔法の理論や技術を学ぶのだろうと考えていたのだが、ものの見事にその考えは打ち砕かれた。

そんな優真にジュードはいつものごとくへらへら顔で近づいてきた。

「いやー、学園再開最初の授業が戦闘訓練でよかったわー。どうしたユウマ？ 変な顔して」

「なあ魔法の勉強は？」

「やるぞ。今から」

何を言ってるんだ、とても言いそうな顔でジュードは眉をひそめる。だが優真の考えていた事にたどり着いたようで、ああ！ と納得していた。

「もしかして先生の話をただ聞くだけの授業だと思ってたのか？

確かに大半はそんな感じの授業だけど、ここは週に二、三回。多くて毎日こうやって戦闘訓練の授業だぞ」

ジュードいわく、ここに入学してくる生徒は、魔法の理論や技術体系は実戦可能レベルにまで届いているらしい。それが魔法大国と呼ばれる由縁でもあるという事なのだが……。

だが優真と愛華の事情は特殊だ。実戦は経験しているから多少の魔法と導力は扱えるが、それはあくまでも身を守る為の中途半端な力ではない。理論や技術等という上にあるものではなく、それぞれの師　優真はジュードから、愛華はリースから教えられてただなんとなく使えているだけである。

とかそんな事を考えていると顔に出ていたのかジュード軽く肩を叩いた。

「心配いらねーって。お前は並みの魔導士より強い。……お前はこの国を救った影の功労者なんだからよ」

最後の言葉をジュードは声を潜めてそう言った。

優真、ジュード、レンが隠密部隊だった事は公にはされていない。学生という身分が関係しているのもあるが、愛華の『氷姫』の力に関する情報がどこから漏れるかわからないから、というレータ王の配慮である。

結局戦争の裏側は優真達には聞かされていない。始めにエアから

聞いた、戦争は何者かに仕組まれていたという事だけ。

ラークイスは戦争勃発の一旦を担っていたようだが、それはその何者かに利用されていただけという事だった。

利用していたのは誰だったのか、優真達の知らない所で何が起きていたのか、レータ王もエアも教えてはくれなかった。

「愛華と優音が見つかったのはラッキーだったけど、また新しい問題が出てきたのはなあ……」

「ま、いいじゃねえか。命の危険があるわけじゃなし、学生生活楽しみだよ」

ジュードはそう言って少年のような笑みを優真に向けた。時々、ジュードの明るさが羨ましく思う時があり、またその明るさに救われた時もあった。

ジュードを見ていると悩んでいる自分が馬鹿らしくなってくる。

優真はクスツ、と笑ってジュードの胸を拳で叩いた。

ふと、激しい怒気、いや殺気とも呼ぶべき気配がこちらに向けられている事に優真は気付いた。

金髪碧眼、優真と同じくらいの年齢だと思われる少年が優真とジュードを睨んでいた。体の線は細く、中性的な顔立ち。だが、長い前髪に見え隠れしている目はどす黒い炎を灯しているような印象を受けた。

そんな少年がゆつくりとこちらに歩み寄ってきた。ジュードはいつの間にか無表情になりその殺気を受け流すでもなく、やり返すでもなく、ただ黙って受け止めていた。

「ジュード・ローゼンクロイツ……」

「ラルフェか……、何か用か？」

「何か用か、だと……！ お前の母親のせいで、俺の父さんは……！」

ラルフェと呼ばれた少年は目を見開き齒を噛み締め、今にもジュードに襲い掛かりそうである。一方は全身で怒りを表し、一方は無表情。優真が口を挟める雰囲気ではなかった。

交錯する視線。数秒か数分か、どれくらい時間が経ったかわからないが、優真には永遠にも思えるほど長いものだった。

「三人とも何をしている。そろそろ試合が始まるぞ」

そんな息苦しい空気の中から優真を救ってくれたのは委員長のクレハだった。クレハは異様な雰囲気を感じ、何があつたのかと言葉にする前に、ラルフェが舌打ちをしてこの場を離れた。

それと同時に周りの空気が弛緩していく。優真はため息をつき、ジュードは頭をポリポリと掻いていた。

「いやはや、夜道には気を付けねえとな」

「ジュード。冗談を言っている場合ではない。……気持ちにはわかるが、あまり波風立てないほうがいい」

「へいへい、ご忠告ありがとさん」

ジュードの適当な物言いにクレハは嗜めようと腰に手を当てたが、すぐに思い直し視線を彷徨わせ、何も言わずにその場を去った。

ジュードとラルフェと呼ばれた少年との間に何があつたのか、それを聞いていいものかどうか優真は迷う。だが優真が何も言わずともジュードは口を開いた。

「……ラルフェの親父はな、城の騎士隊に所属してたんだ。あの戦争で軍隊、騎士隊を合わせた半数近くが戦死した。その中にラルフェの親父も入ってたんだよ」

「……」

「あの戦争でリーザリスの楽勝は明白だった。だが何故か部隊は半壊。全部隊を指揮していたのはうちの母だ。そんな結果になったのは指揮していた者に問題があったのではないか、つつうのが国民の間で噂になってる。ラルフェもそれを信じてるんだろ」

優真は何も言えなかった。優真にも両親はおらず、父親を亡くしたラルフェの気持ちもわからなくもない。怒りの矛先が直接的には関係のないエアやジュードに向けられるのもまた。

きつと、ラルフェも頭では理解しているのだろう。だが憎むべき対象がいなければ心が壊れてしまう。だからこそジュードも何も言わず、ただ受け止めている事しか出来なかった。

「ま、お前が気にする事じゃない。こればかりは時間が解決するのを待つしかない。ほれ、いいんちょがご立腹だ」

ジュードは自虐的な雰囲気から一転していつものへらへらした顔に戻っていた。ジュードの視線の先にはこちらを睨み付けているクレハの姿。

ただ優真の心には一抹の不安が残っていた。ラルフェのあの殺気。尋常ではなかった。ジュードの言うように時間が解決するのだろうか。優真はなんだか嫌な予感をひしひしと感じていた。

「じゃあ一回戦。みんなそれぞれの相手と戦ってね。それじゃ始めちゃって」

ソフィアのそんな言葉からトーナメントは始まった。優真の一回戦の相手は眼鏡を掛けた夕暮れ色の髪のごくごく普通の少年。名前は確か、トルア・レッティー。トルアはよろしく、と言いながら突撃銃型の魔導具を出現させた。

ルールは至ってシンプル。各々の魔導具を使って相手を降参させるか、もしくは魔導具を維持出来なくさせた時点で勝利となる。

だがあくまで授業なので死に至らしめる魔法は禁止。使おうとした瞬間ソフィアが強制的に止めるらしい。こういう風に止めるかは意味深に笑うだけで教えてくれなかった。

優真の『黒闇』の導力は危険過ぎる力である為、必然的に『白光』の魔導具のみで戦う事になる。

「ウオオオオオオオ!!!」

優真が『白光』の魔導具を出現させたと同時にトルアが雄叫びを上げながら突進してきた。速く、鋭く、迷いのない突き。きつこの世界に来る前の優真だったら意表を突かれてこの一撃で終わっていただろう。

だが、未熟ながらも命懸けの戦いを経験した優真に、あまりにもその攻撃は取るに足らないものだった。

優真は白い刀だけを中段に構えたまま体を横に滑らせる。するり

と、流れるように槍の一撃を躲した優真は魔導具ごとトルアの体を切った。

白い刀に触れた魔導具は『封印』の導力でその形を失う。一時的に魔力を封じられたトルアは魔導具を出せない事がわかると両手を上げた。それは降参の合図。

「あれ？」

なんだか勝手に体が動いたと思ったらいつの間にか勝っていた。手慣れた仕事を片手間ですべてしまった、そんな感じだ。

魔導具を消して振り向いた先には愛華、ジュード、レンが優真を待っていた。

「優君、やったね！」

「流石ですユウマさん。レッティー君はクラスでも強い部類に入りますよ」

「だから言っただろうよ。並みの魔導士じゃユウマには適わないって」

三者三様に優真を称賛してくる三人。だが優真はなんだか勝った感じがなくて全く喜んでいなかった。

それもそのはず。優真が初めて戦った相手はジュードであり、修行とはいえ死ぬほど鍛えられた。その後は優音との激闘、ラークイスとの死闘。優真にとって対魔導士戦は常に危険と隣り合わせだった。

それに比べて先の試合は所詮は授業。殺気も出さず、実力も学生レベルならばまず優真に勝つ事など出来ない。

「強いのだな、ユウマ君は」

生意気よっ！ とかオネエ言葉で気持ち悪くほざいているジュー

ドの相手をしていた優真に、クレハが優しく微笑みながら近づいてきた。

「そうでもないさ。この導力が反則なだけ」

「確かにその導力は強力だが、あの足捌き。ユウマ君は何か武道の心得でもあるのか？」

確かに優真はこの世界に来る前は祖父の刀集めの影響で剣道や剣術を学んでいた時期があり、高校でも剣道部に所属していた。だがあの一瞬の間にそれがわかるとは、やはり優真の思った通りクレハは只者ではないらしい。

「まあ、嗜む程度に。そう言うクレハだって相当強そうに見えるぞ」「ふふつ、そんな事はないよ。次の試合、楽しみにしているよ」

次の試合？ と、優真が聞き返す前にクレハは背を向けた。くいくいつと愛華に制服の袖を引っ張られて、愛華が指を差している方向を見ると、そこにはホワイトボードがあり次の対戦相手の名前があった。

「なるほど。次の試合、ね」

「気を付けるよ、ユウマ。なにせあいつはれっちゃんとタメ張れるくらいだからな」

レンと同等。それだけで実力の高さが窺える。久々に気持ちが高ぶってきた。

『クレハ・メイザース』

深紅の髪を持つ少女の名。それは優真の次の対戦相手の名前だった。

第三話 優真VSクレハ

一対一のトーナメントと言っても、あくまで授業であるから強力な魔法や導力は使うものではない。それこそジュードが本気でやれば被害は尋常ではない。ある程度は自分の力を制御するものである。優真もその一人。優真の『黒闇』の導力 『侵食』は地上に存在する全ての物理を切り裂くという半ば反則的な力は、下手をすれば人の首や腕は簡単に吹っ飛ぶ。

という事なので優真が戦う術は『白光』 導力『封印』の魔導具だけとなる。この導力も意外と厄介で、上手く加減をしなければ相手の魔力をどれほどの期間封じているのかわからなくなる。最小限に抑えて一日、最大は試してはいないが恐らく数ヶ月から数年くらいはいくんじゃないか、というのはジュードの見解。

だが、もしかしたら加減は出来ないかもしれない。そう思わせるほどの強敵。クレハ・メイザース。彼女は優真と対峙してから好戦的な笑みを零していた。

「ふふ、楽しみだよユウマ君。君の剣技がどれほどの物が見せてくれ」

「お手柔らかに」

とは言っても優真の『白光』の魔導具に触れた魔導具及び魔法は、優真の魔力の絶対値を越える魔力が込められた魔法以外は容赦なく消え去る。

クレハは剣技を見たいと言った。ならばきつと魔導具と魔導具の戦いを望んでいるはず。魔法は使ってこないだろう。だがクレハも優真の導力を知っているはず。どんな戦法で来るかわからない。まずは様子見からか。

優真は白い刀を正面に構え、試合開始の合図を待った。試合の審判は早々に二回戦目を終えたジュードが勤める。

「そんじゃあ、始め」

そんな試合開始の合図と共に先に動いたのはやはりクレハ。特に魔法を使う動作はない。その手には剣　太刀のようだが反りはなく、およそ三尺はある片刃の剣が握られていた。

「たああああ！！！」

腰を落とし、下段からの逆袈裟切り。だがそれほど速くはなく、目で動きを追う事は容易だった。

俺の見込み違いか？　と優真は思う。強いと感じたのは気のせいだったかもしれない。優真はその斬撃を白い刀で受け、魔導具を掻き消した隙を突いて反撃をしようとした。だが

「えっ？」

戦闘中に優真から間の抜けた声が飛び出た。クレハの魔導具が、消えない。

クレハはそんな優真の反応を楽しげに一瞥し、一度離れてから今度は上段から振り下ろしの一閃。優真は素早くこれに反応し、もう一度、更に魔力を込めてクレハの一撃を迎え撃った。

キィン、と刃と刃が互いを斬り合う音が鳴り響いた。

「またかよっ！」

「ふふ、混乱しているようだね。その様子だとジュードから私の導力の事は何も聞いていないのかな？」

クレハは優真と鏢迫り合いを演じながら、それでも優雅な物言いは崩さない。クレハは力強く剣を振るい優真はその勢いに負けて後ろによるめいた。

「私の属性は『紅光』、導力は『無効』。私に導力による干渉は出来ない」

「『無効』……なら魔導具はただの武器に成り下がるって事が……」

『紅光』 それは唯一『封印』の干渉を受けない導力。それだけでなく『白土』や『纏水』などの様々な導力は無に帰す事になる。クレハは横に剣を構え駆け出す。その動きは先ほどとは比べ物にならないくらい速い。優真がクレハの間合いに入った瞬間、体を真つ二つにされるかと感じるほどの鋭い横薙ぎ。

「ぬぐおっ！」

優真は白い刀でなんとか防ぐものの、その衝撃は凄まじく踏ん張らなければ魔導具が吹き飛ばされる。

明らかに今の攻撃をともに受けていれば致命傷だ。防ぐと確信しての一撃だろうか。ジュードもソフィアも止めなかった事からそうなのかもしれない。

優真の額から汗が一滴滴り落ちる。一瞬でも気を抜けば大怪我に繋がるかもしれない。優真は白い刀の絵を強く握り締めた。

優真は正面に、クレハは横に、それぞれ魔導具を構え、次の一手へのタイミングを計る。そして、同時に動き出す。

クレハの音速の薙払い。その速さは初撃とは雲泥の差がある。様子を見られていたのはこちらのようだ。

まともに受け止めれば反撃に移行しづらい。優真は体を即座に低

くし、クレハの薙払いを辛うじて躲す。そして一步を強く踏み出し、渾身の突きを繰り出した。

「ふっ！」

すかさずクレハは片手を魔導具から離し、体を横にして優真の突きを躲す。さらに躲した勢いに乗じてそのまま回転。裏拳を優真の横っ面に放った。

だが優真。躲されたと感じた瞬間には体を前に投げ出していた。後頭部が削られたかと思うほどの裏拳が通過していった。そして直ぐ様立ち上がり魔導具を構える。

「やはり私の思った通りだ。反射神経も危機回避能力も優れている。君は強い。だが、まだ本気を出していない。ジュードから聞いたが君はもう一つ属性を持っているのだろう？」
「……………」

優真は無言でジュードを睨む。ジュードは白々しくも目を背けて舌をんべつ、と出していた。

正直『黒闇』の属性は使いたくない。もしクレハの体に触れればそのまま切断してしまう恐れがあるし、死を招く危険もある。優真は困ったように苦笑いを浮かべていた。

「うーん、本気を出したいのは山々なんだが……………」

「ユウマ君、君と私がそれぞれ武器を持って相対している時点で君と私は敵同士だ。その敵を傷つける事を恐れているのでは守りたいものも守れない」

「クレハ……………」

「ま、いいんちよがそう言っただからやっちなえば？ 本気でヤバイと判断したら俺が力づくで止めてやるよ」

お前がバラさなきゃ使わなくてもよかったんだぞ的な視線をジュードに向けるがニヤリと笑うだけだった。優真はため息をつき、白い刀を左手に持つ。

「もうどうなつても知らねえからな！」

黒き闇が優真の右手に纏わりつき、闇は次第に形を為していく。それは一本の刀。優真の右手には漆黒に染まる刀が握られていた。黒い刀が闇色の輝きを放つ。それに伴い白い刀も純白の光を放ち始めた。

「美しいな……。これほどまで美しい闇もあつたのだな……」

クレハの瞳が一瞬だけ深い悲しみの色に染まったのを優真は見た。だが次の瞬間には剣を大きく振るい迎え撃つ態勢を取っていた。

優真は気を取り直し、光と闇の輝きを抑え、黒い刀を背に、白い刀を腰の鞘に納めるように構え駆け出した。

白い刀の下段からの逆袈裟切り。続いて上段からの黒い刀の振り下ろし。ただし使うのは刃の部分ではなく柄。

だがクレハは片手で剣を操り白い刀の斬撃を阻止。左手で優真の右手首を掴み、そのまま引つ張るように優真の攻撃を受け流した。

「のわっ!？」

優真は転がる様にして受け身を取りすぐに二本の刀を構える。だがすぐそこに居たはずのクレハの姿がない。

どこに、と視線だけを辺りに彷徨わせるがどこにも見つからない。だが突然、優真に影が差し込んできた。優真は考えるよりも先に頭

の上で二本の刀を交差させた。

ギイン、という刃同士が切り結び合った音が鳴り響く。それと同時に優真は蹴りを放つがクレハが素早くバックステップした事で空振りに終わった。授業とはいえ、ここまで防戦一方になるとさすがにイライラが蓄まってくる。もう止めだ、と優真は思った。全力で敵を討つ事だけを考えよう。いざとなったらジュードが止めてくれる。

優真は黒い刀を背に隠すように引き、そのまま地面に突き刺し一気に振り抜いた。

『漆黑なる闇の調べ：這咎』

地を這う『侵食』の斬撃がクレハを襲う。クレハは避けようとせず、ただ剣を腰の鞘に納めるようにし構えを取った。そして抜剣。

優真にはその太刀筋が全く見えなかった。クレハの腕が動いた次の瞬間には剣は振り抜かれた後であり、いつのまにか地を這う斬撃も消されていた。

「くそっ、これならどうだ!!」

優真は白い刀を天へと突き掲げた。白い刀は輝きを放ちクレハの上空全方位から、クレハを狙う槍のような光が現れた。

『煌めく封印の光：消閃』

ふむ、とクレハは呑気にその光の閃を眺めている。そしておもむろに剣を地に刺した。その行動に何の意味があるのか知らないが、全方位からの攻撃ならば防ぎきれまい、と優真は思う。

だが、一抹の不安は拭えない。王手のはずなのに勝てる気が全く

しない。そんな思いを打ち消すように優真は白い刀を振り下ろした。それと同時に次々とクレハに降り注ぐ白き閃光。辺りは光に包まれクレハの姿が視認出来なくなる。この中一つでも当たればクレハの魔力を封印出来る。

やがて収まる光の洪水。徐々に現われてくるクレハの姿。その姿は優真の攻撃を受ける前と何一つ変わっていない。手に握っている魔導具さえも。

『フォース・リベレーション：インテルド』

それは魔導具の更なる進化。クレハの周囲には円形の紅い結界が張られていた。優音のそれとは違う力。

優真は驚愕した。導力無効の導力。それは『侵食』も一撃の下に伏せられ、『封印』の全方位攻撃も無効化されてしまった。クレハの『無効』の導力さえも厄介なのに、『フォース・リベレーション』までも使えるという事実の前に優真の心は挫かけていた。

「私にここまでさせたのは君が初めてだよ」

「……それは光栄な事で」

最早優真はそう皮肉る事しか出来なかった。正直、打つ手がない。剣技も体術もクレハの方が一枚上手だ。

そもそも優真の剣の腕はそれほど良くはない。幼い頃、まだ祖父が存命だった時に一通り習っていただけである。祖父が亡くなってからは中学、高校で剣道部に入る余裕はなかった。それでも素振りや基本的な動きは毎朝の日課として行っていたから素人よりは腕が立つ。

だが所詮はその程度。恐らくだが優真以上にクレハは鍛練を積んでいるのであろう。そんなクレハに剣技だけで勝つなんて事は不可能に近い。

「だけど、やるしかねえよな」

今のままでは愛華の事を守るなんて出来やしない。この学園に入学したのは愛華を守る為だけではない。自身が強くなる為でもある。どんなに強い導力を持っていたとしても、それを扱えるほどの技術が必要だ。それはリングサークとの戦争でよくわかった。

守る為には力が必要なのだ。想いだけでは大切な人は守れない。だが、例えクレハとの力の差が大きくとも心までは諦めない。

「良い目をしているな。ならば私も全力で君と戦おう」

クレハは好戦的な笑みを浮かべ『フォース・リベレーション』を解く。そして剣を持つ手を後ろに流しながら優真へと走りだした。

優真は迎え撃つ為に『浄飛』と『這咎』を同時に放つ。導力が効かないのであればそれはただの飛ぶ斬撃と地を這う斬撃でしかないが、それだけでも牽制にはなる。

「ハッ！！」

クレハは音速の二連撃で『浄飛』と『這咎』を打ち落とす。だが足は止まった。そうなる事を予想していた優真は既に飛び出していた。

二つの刀による二つ同時の振り下ろし。だがそこはクレハ。多少無理矢理にでも剣を頭の上に構えさせ、優真の剣撃を受け止めた。せめて一撃。そう考えていた優真はクレハが斬撃を受け止めた瞬間に両手を刀から離し、クレハの懐に入り込んだ。

意表を突かれたクレハはすぐに離れようとするが時既に遅し。優真の嘗底がクレハの胸に突き刺さった。

「ぐっ……」

クレハは地を足で削り倒れはしなかったものの、胸を押さえて蹲った。ぐつと優真は小さくガツポーズ。ようやくあのクレハに一撃入れる事が出来た。

「いやーん、ユウマ君がいいんちよの胸触って喜んでー」

「なっ、あっ、わ、悪いクレハ！」

ジュードの茶々にツッコむより先に詫びを入れる優真。一撃入れるのに必死でそこまで気が回らなかった。今思えば確かに嘗底を放った瞬間、ふにと柔らかい感触が。優真は今更思い出し赤面。だが背後の方からなんだか殺気がひしひし伝わってきた。

「……優君セクハラ……」

振り向けば愛華が冷たい視線を放っていた。レンはそそくさと逃亡を計っていた。優真の額には後の事を考えて冷や汗が流れていた。

「気にするなユウマ君。戦場では男も女も関係ない」

そう言いながらもクレハの顔は赤い。優真は地に刺さった二本の刀を引き抜きながら罪悪感に苛まされた。

「では、仕切りなおしといこうか」

「ああ！」

「あのー、盛り上がつてるとこ悪いんだけど……」

そう控えめに言いながら横から出てきたのはソフィア。なんだか本当に気まずそうにしている。ジュードは周りを見回し何かに納得

すると優真とクレハの間辺りに進み出てきた。

「はい、終わり終わり」

「は？ 終わり？」

「な、何故だジュード！ 私もユウマ君もまだ戦えるぞ！」

「ごめんねえ、くーちゃん。もう時間なのよー。水を差すようで悪いんだけど授業だからねえ」

周りを見てみると他の生徒は既に試合を終えて優真とクレハを眺めている。言葉に出さずとも雰囲気でわかる。お前ら長えよ、と。そんな空気を感じ取ったのかクレハは一瞬たじろいだが咳払いを一つ。そして魔導具を消しソフィアに頭を下げた。

「すみません、少し取り乱してしまいました」

「いいのよ、トーナメントなんて一時間程度の授業で全部出来るなんて初めから思ってたしね」

ソフィアいわく、トーナメント自体現時点でのクラスの実力を見る為らしく、決勝まで行うつもりはなかったらしい。なら最初から言えよ、と優真は思ったがその不満を口に出しはしなかった。

クレハは次の授業の準備があるのか早々に踵を返す。前に優真に視線を投げ掛けた。クレハは何も言葉を発する事はなかったがその目は語っている。また戦おう、と。

その視線を受けた優真はゆっくりと頷き次こそは決着を、という意を込めて視線を投げ返すとクレハは校舎へと歩いていった。

「……強かったな」

「そりゃ強えよ。いいんちよの親は結構由緒正しき貴族だったらしいからな。小さい頃から英才教育受けてたらしいし。本来なら聖テレイアに通うはずだったみたいだし」

「それが何でここに？」

「さあ？ 色々噂が流れてるらしいが俺は興味なかったから知らね。そういうのはれっちゃん詳しいから後で聞いてみな」

ジュードの言い様は淡泊だった。本当に興味がないらしい。ジュードは自分の興味がある事についてはとことん首を突っ込みたがるが他の事に関しては無関心を貫いている。

あの時、森で優真が魔物に襲われていた時にジュードが関心を寄せていなかったら自分はここにはいなかったのではないだろうか。そう思うと今更ながらに少し怖い。

それはともかく。

クレハがこの学園を何故選んだのかは知りたかった。将来何がしたいかにも寄るが、選択肢は聖テレリアの方が多いと聞くし、他の貴族とのコネクションも得られるかもしれない。なのにここに来た理由とは……。

優真は小さくなっていくクレハの背を眺めながらそんな事を考えていた。

余談だが、その後愛華に女の子との接し方について厳しく、昼休みを丸々使って説教を受けたのは言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9402e/>

Magic Heart

2010年10月17日02時40分発行